連載専門誌

対人援助学マガジン

Vol. 7 No. 1

第25号

対人援助学会

NO. ２５　M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者＠短信	執筆者全員	005-014
知的障害者の労働現場	千葉　晃央	015-019
臨床社会学の方法	中村　正	020―029
ケアマネだからできること	木村　晃子	030-035
街場の就活論	団　遊	036-039
カウンセリングのお作法	中島　弘美	040-045
映画の中の子どもたち	川崎　二三彦	046-047
コミュニティと集団精神療法	藤　信子	048-050
蟷螂の斧 「次の一歩」	団　士郎	051-061
学校臨床の新展開	浦田　雅夫	062-064
学びの森の住人たち	北村　真也	065-068
幼稚園の現場から	鶴谷　主一	069-078
福祉系対人援助職養成の現場から	西川　友理	079-086
先人の知恵から	河岸　由里子	087-091
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	092-094
対人援助学＆心理学の縦横無尽	サトウタツヤ	095-106
日本のジェノグラム	早樫　一男	107-109
きもちは言葉をさがしている	水野　スウ	110-115
七日参り	竹中　尚文	116-120
ノーサイド　禍害と被害を超えた論理の構築	中村　周平	121-122
男は痛い！	國友　万裕	123-128
援助職のリカバリー	袴田　洋子	129-131
周旋家日記	乾　明紀	132-134
トランスジェンダーをいきる	牛若　孝治	135-137
役場の対人援助論	岡崎　正明	138-141
新版K式発達検査をめぐって	大谷　多加志	142-145
十代の母という生き方	大川　聡子	146-155
電脳援助	浅田　英輔	156-164
講演会＆ライブな日々	古川　秀明	165-169
養育里親～もうひとつの家族～	坂口　伊都	170-175
周辺からの記憶	村本　邦子	176-190
病児保育奮闘記	大石仁美	191-195

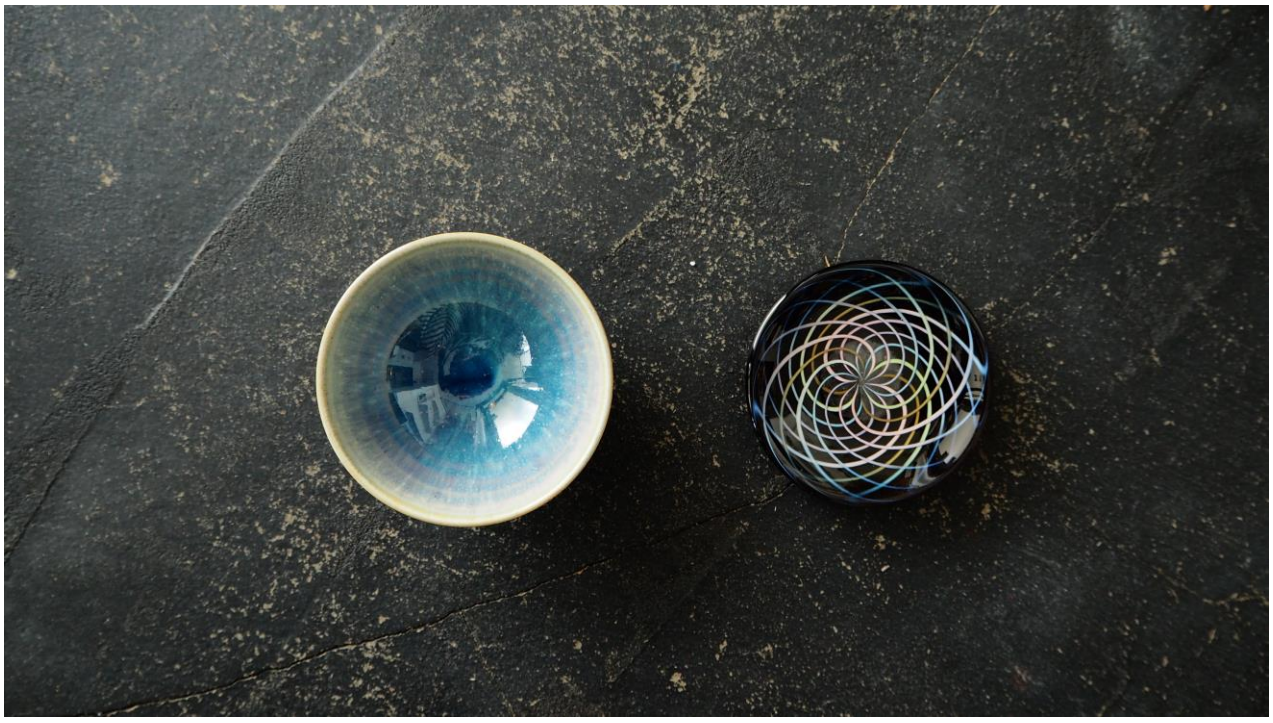
ラホヤ通信	高垣　愉佳	196-200
知的発達障害の家族の日々	大谷　多加志	201-202
対人支援点描	小林　茂	203-205
「あ！萌え」の構造：序論	齋藤　清二	206-212
海の向こうに出てみれば（4）	石田　佳子	213-216
清武システムズ	しすてむきよたけ	217-223
S. V. 羅針盤のない航海	川崎　二三彦	224-231
新連載　精神科医のおもうこと	松村　奈奈子	232-234
新連載　おくのほそみち	奥野　景子	235-238
新連載　心理臨床と多文化共生	ガヴィニオ重利子	239-242
新連載　今から、ここから	馬渡　徳子	243-246
東成区の昭和・思い出ほろほろメモ	柳　たかを	247-254
編集後記	編集長＆編集員	255-256

ハチドリの器　8

見野　大介

Mino Daisuke

上：蒼天釉抹茶碗
中：蒼天釉片口
下：見野大介 梶本直子
- 陶硝子展 -



第25号 執筆者@短信

松村奈奈子　新連載

仕事以外の文章を書くのは久しぶりです。緊張して書きました。初めての対人援助マガジンなので、少し自己紹介を。

医師になってずっと病院勤務でしたが結婚をきっかけにやめて、今は児童自立支援施設や支援学校、児童相談所などの嘱託医などをしています。

病院勤務時代はなかなか長期休暇もとれなかったのですが、時間ができたことで、旦那ともゆっくり旅にも出かける事ができるようになりました。最近は夫婦でポーランドにハマって年に1度訪れています。

さらにうずうずしていた好奇心が芽をだして、同じ好奇心の強い幼なじみとアラフィフ2人組で数年前から、軍艦島を訪れたり、ダイアログインザダーク（ネットですぐ検索できます。暗闇の中で不思議な体験）に参加したり、今週末もちょっとかわった美術館に行く予定などなど、好奇心を満たす日々でもあります。

マガジンでは仕事でのこれまでの体験を書いてみる予定ですが、本当は旅行記や不思議体験記なども書いてみたい気持ちがうずうずしてます。

ガヴィニオ重利子　新連載

はじめまして。京都出身で、現在はスイスに暮らす臨床心理士のガヴィニオ重利子（がびにお　えりこ）と申します。どうぞよろしくお願いします。生粋の関西人ながら結婚で姓を変え、少々読みにくい名前で生活するようになりました。

日本では、主にスクールカウンセラーやキンダーカウンセラーとして、学童期のお子さんとその親御さんとともに仕事をさせてもらっていました。こちらでも同じような仕事に就きたかったのですが、資格制度の違いなどにより心理援助職として施設などで仕事をすることは難しいことがわかり、今年2月から、それまで思いもしなかった個人開業という道を選び、日々奮闘しています。

「心理士」という10年以上親しんできたタイトルをこちらでは使わせてもらえず、現在は「カウンセラー」として州政府の開業許可を受け臨床活動をしています。たかがタイトルされどタイトルで、心理士と名乗れなくなることは、私にとって思った以上の喪失感を掻き立てるものでした。打ちひしがれて身動きとれなくなる時期もあったのですが、それらの経験を通して「自分は何をしたいのか」「私にとっての心理援助とは一体何なのか」ということを以前よりも強く自問するようになったように感じています。そのような折、日本で仕事を共にした大切な旧友より誘いを受け、このマガジンでの連載に参加させてもらうことになりました。

連載という文章寄稿をさせていただく中で「対人援助、心理援助とは？」という問いについて、私自身の旅を続けていければと思っております。これを読んでくださる方と直接お会いすることは叶わないのかもしれませんが、文章を通して、そのような旅を時にご一緒することができたなら、大変嬉しくまた光栄に思います。それでは、どうぞよろしくお願い申し上げます。

奥野景子　新連載

大切なことはやっぱり、人とのやり取りの中にあると思う出来事があった。出来るだけ、取りこぼしたくないと思うけど、取りこぼしたり、気が付けなかったりすることもあるんだと思う。「無駄なことなんてない」なんて言われてしまうように、大切じゃないことなんてないんだろうなとも思う。でも、そのどれもを拾い集めることは出来ないから、自分が大切にしたいことは何なのかを考えていきたいと思っている。

今回から連載を始めさせていただく奥野景子と申します。ぐるぐるもやもやしていることを自分なりにのこしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

馬渡徳子　新連載

いきなり私事で恐縮ですが、昨年の下半期に、三人も身内を看送りました。その合間に、子どもの結婚式に、家族の入院と手術が二件、最後にとうとう私も過労で救急入院しちゃいました。当然、葬儀が三回に、初盆が一回に、四十九日と百日法要が三回。お寺さんが本当に身近な存在になりました。

先日、とあるワークショップで、「今、はまっているもの」というアイスブレイクをしました。 迷わず、「お経」という単語が浮かび、我ながらびっくりポン ！ キリスト者である私にとっては、お経が新鮮で、興味深くて、何ともいえないあの節回しが、ぐっとくるんです。とうとう CD も購入し、二歳の孫も、はまって、すっかり節回しを覚えてしまい、勝手に踊りも創作し、お寺さんにスカウトされそうです。笑。

また、当然ながら、嫁ぎ先と実家の「相続」という体験もしました。そこで、まさにこれこそ「システム論」だなと実感した「素敵な出来事」について、4 月に早樫一男さんにご報告しましたところ、「金勘定は、金感情」との名言を戴き、目からウロコ がてんこ盛り‼ 「やっぱり、家族システム論を学んでいて良かった。」

そういえば、と、昨年、団士郎さんに「介護体験が、ひと段落したところで、三年ぶりに連載書いてみたら」と宿題を戴いていたことを思い出し、今回の投稿に到った次第です。

交通事故の被害者となり突然死した義父と、4年半年の療養を経て病死した実

父。最期を看取れなかった家族の辛さと、「幻視」と「不眠」と「人を初めて『恨む』体験」をしました。

死因による社会保障関連制度の矛盾も経験しました。当事者団体ならではの「力」にも、改めて気付くこともでき、心より感謝しております。

この機会に、当事者体験とソーシャルワーカーであることも活かした視点で、つれづれなるままに、素直に率直に書きたいなと思います。

「父と義父の、看取りと、私への最期の宿題。 今から、ここから 」 さあ、始めさせて戴きます。

柳　たかを

この春から新しく短期大学で週一回、マンガの授業を受け持たせて頂いている。12名の学生は全員アジア数カ国からの留学生。いまや、日本マンガは世界の若者に日本のサブカルチャーの代表として親しまれている。

外国人は日本という国をマンガを通じて知っている時代だ。受け持つ留学生の日本語レベルは学生によりまちまち、こちらはカタコトの英語まじりの日本語しか話せないので、数回の授業を経験してみて当方が学生に伝えたいことがなかなか伝わらず、学生の言わんとすることを私が正確に理解するのも簡単ではないということがわかってきた。

「母国の有名なむかし話から3つ選び、それぞれ題名と簡単なストーリーを書いて提出しなさい」

さしずめ日本人の私が学生なら「桃太郎」「浦島太郎」「かぐや姫」あたりを選び書くところだが、留学生が返してきた回答を見ると期待どおりむかし話を書いてくれた人もいるが、それとは別に殉死の風習、「(亡くなった)主人の体、火の中で焼くところに、(妻にも」行かせていました。今はそのことが、なくなってとてもよかった。」
読んでみて目をむくような風習の記事だ。ネットを検索してみると確かにそのような記事があった。

そりゃまあ、世界の歴史を直視すれば珍しい話ではないのかもしれないが、、、冷静に冷静に。それはそれとして求めている昔話とは少しちがうなぁ。

先生が書いてほしいのは主人公やわき役の出てくる民話･おとぎ話なのですよ～。そのことをきちんと伝えたいのだが、「わからない！」「それならそうと最初に言えばいい！」と、ヘソを曲げられるのではないかドキドキしている。

これもマンガを介した異文化コミニュケーションなのでしょうね。

齋藤　清二

4月から、茨木キャンパスの総合心理学部に正式な所属が変わり、昼間は茨木キャンパス、夕方から夜は衣笠キャンパスという日が多くなった。それでも仕事量としては、まだ応用研のほうが多い。スクールバスを上手く利用すると、意外にスムーズに移動できる。立命館の総合心理学部の開設の影響で、今年の大学入試では、心理学部、心理学科希望者が前年比で20%も増えたということだ。医学部を希望する受験生が約30000人(合格者は8000人)、心理学部を希望する受験生は約20000人ということである。あらためて、“総合”心理学とは何か？ということを考えさせられている。

石田　佳子

マレーシアでは電化製品ひとつ買うのにも、予想外の展開が起きたりします。最近、家電専門店で電気オーブンを買った時のことです。
＜店員との会話:その1＞
私 「(最終候補に残ったマレーシア製のオーブン①と欧米製のオーブン②を見比べながら)①と②は、どこが違うんですか？」
店員 A 「(じっくり見比べてから、どや顔で)大きさが違います」
私 「(そ、そんな事は見ればわかりますけど･･･と思いながら)他には？機能とか使い方とかには、どんな違いがあるんですか？」
店員 A 「(しんから不思議そうに)えーっ？たぶん同じなんじゃないかなー？？」
＜店員との会話:その2＞
私 「(これはあかんと思って、別の店員に)すみません、①と②の違いを知りたいんですけど？」
店員 B 「(笑いながら)ああ、これ①！これと同じ製品で昨日同僚の奥さんがクッキーを焼いていたら、爆発しちゃって大変だったんだって！(お腹を抱えて爆笑しながら)それ聞いて今日はもう、朝から皆で大笑いしてさー！！」
私 「(ドン引きして)じゃあ、それと違う方②をください (u_u)」
＜店員との会話:その3＞
店員C 「((②の新品を倉庫から出し、箱から出して正常に動くことを確認して)大丈夫です」
私 「ありがとう」
店員C 「(品物を元の箱に戻そうとするが、発泡スチロールが入っているため上手く行かず、3 人がかりでやっと元に戻して)はい、どうぞ」
私 「(会計を終えてふと見ると、オーブンのトレーが箱に入れ忘れられていることに気づいて)あのー、トレーがないとオーブンって使えないよねー？？？」
店員C 「(照れ笑いしながら)あぁー、そうねー！ f^_^;)」
･･･というやり取りが行われました。なんとか無事にオーブンを買うことはできましたが、あきれ過ぎて可笑しくなり、『最後にドッチャンガラガラ･･･と大きな音がして、上から金だらいが落ちて来るのでは？(ドリフのコントかい？)』と想像してしまう自分が居ました。

しすてむ♪きよたけ

僕は、東京オリンピック･パラリンピックに先駆けた文化事業の一つ、「TURN」に携わっている。施設にアーティストが介在し、そこで生まれたものを形にしている「TURN フェス」が毎年行われる。2020年まで、なされる予定だそうだ。

僕は、応用人間科学研究科の東日本･家族応援プロジェクトに携わっている。2011年から10年続けることを掲げ現地の

コミュニティに団士郎家族漫画展といくつかのプログラムをもち地域に足を運んでいる。

ニュースを見れば、オリンピックに震災と経済にまつわることで相反しているかのような活動に身を置いている。そんな中、熊本・大分における震災。何も葛藤がないわけではない。

経済だけでなく政策があり、生まれる活動、現場で起きていることにより始まる展開。いずれも僕が、活動に身を置くことで葛藤していることである。

しかし、これまで、自分が行ってきたこと、今していることは何であるのか、見直しつつ、自分ができることは何かと考え、反発を受けることがあろうとも、やろうと決断した。なぜやるのか。やるなら何をしたいのか、そこが僕の決めてとなっている。葛藤は何であるかと言う現場と政策への自己の問いともいえ、決まっている中で、どうするのか、どうしたいかを実践に向けているのだろう。

ふと思った。このように考えるのはなぜか。僕はさまざまな事の始まりは思いがけないところから起きる。それは、周囲にいる人が携わっている仕事によるので必然性もはらんでいる。

自分に起きる予期せぬ出会い。そこには、コミュニケーションがあり、そこには、既にあるコミュニティがあるから起こる。また、関与する事でコミュニティの変容を知る。

今僕は、金沢に拠点を置いているが、月の半分は東京に住んでいる。家は、即決。ひょんなことから物件も見ずに決めたシェアハウス。不要になった板をもらい、酒屋でビールケースを買い取り、板を置いた。ここが、東京の僕の書斎。今、僕は、ここで書いている。

小林茂

いろいろ考えた末、増えすぎた仕事の再構築を目指し、4月から教会の牧師と幼稚園の園長の業務、それに外勤で札幌の精神科クリニックの心理士が仕事となりました。

この1週間ほど会議や外勤が続き、普段の生活の場から離れることが多く、車の走行距離のメーターが 1500km ほど上がった。北海道での車生活に慣れたとはいえ、さすがによく走った。相変わらず多動の生活は変わらない。

1 日あたりの仕事時間は改善されたが、1 週間、1 ヵ月では良くなった感じがしない…。気づけば、家の敷地の雑草が伸び、マガジンの締め切り日も直前となっていた！

ソロー,H,D.や鴨長明に倣い、晴耕雨読の生活を理想としたいが道のりは遠いなぁ。

水野スウ

4月に完成したばかりの、松井久子監督作品、ドキュメンタリー映画「不思議なクニの憲法」。けんぽうBOOKを書いたことがきっかけで、私たち親子もほんの少し、この映画に登場させてもらっています。

そんなご縁から、東京の映画館での初日に上京。上映後、松井監督とトークする舞台挨拶、というものをはじめて体験。あ、もちろん、映画に出る、というのも初の経験でしたけど。

この映画では、登場する誰もが一一国会前で声あげる若者も、アイドルグループの10代の女の子も、北海道の「戦争したくなくてふるえる」デモを呼びかけた女の子も、主婦も、高校生も、自分の言葉で憲法を語っています。

もと外交官の孫崎享さん、憲法学者の長谷部恭男さんが、折々に登場。お二人とも、普段着の語り口調での解説がとてもぴったりの、すばらしい水先案内人さんです。

紛争解決人として知られる伊勢崎賢治さん、自民党の草案作りに関わった船田元さんも、この映画の中で重要な役割を担っています。

あすわか弁護士の竪ともこさんもあちこちタイムリーに登場して、「権力の暴走をとめるのが法律家の役目」「貧困と格差をなくすことこそ」と。

今の憲法を知るにはそのおいたちも、そして、戦前戦後の政治の歴史を学ぶ必要も、おおいにあり！とこの映画で痛感します。

観た後、観た人といっぱい話したくなる映画です。タイトルの、「不思議なクニ」って、どういう意味？ということについてもね。

5月7日と8日、紅茶の時間と金沢で自主上映した後もやはり、みなさんといっぱい語り合いました。

全国でいま続々と、この映画のミニ自主上映会ムーブメントがおきつつあります。映画館でみるのもいいけど、参院選前にどうか、あなたの町で、あなたのおうちで、この映画みてくださいな！って私からもお願いしたいです。

「不思議なクニの憲法」公式サイト
http://fushigina.jp/ で、上映方法や、各地の上映会予定など、どうぞチェックしてみて下さいね。

＊＊＊＊＊＊＊＊

今回の上京中、娘から初の出前注文を受けて、「きもちは、言葉をさがしている」というコミュニケーションワークショップを2回しました。定員8人のごくこじんまりグループのワークを、彼女の家のひと空間で。

去年あたりから娘が、憲法カフェによく行くようになり、そこで語られた話を、自分のまわりのみじかな人たちとも語りあいたいのに、それがどうしてこうもむずかしいんだろう、“せいじてき”とされる話を自然にしにくいのはなぜだろう。そんな話をしあうには、どうやら、コミュニケーションの練習も必要らしい、と娘が感じはじめた時に、私が以前からそんなワークショップしていることをふと思いだして、ここでもそれをしてくれない？とリクエスト。

集まった人たちは、娘がこの1年間に紡いだひとネットワーク。そんな人たちとする、自分にも相手にもきもちのいいコミュニケーションのとり方を練習する時間は、私にもとても新鮮でした。

短い時間のコミュニケーションワークだけで、すぐに政治の話がしやすくなるわけじゃむろんないけど、自分という存在が大切にされる感覚、話す／聴くの関係性、自分のコミュニケーションのくせ、私メッセージとあなたメッセージの違い、上から目線では伝えたいことは伝わらない、言葉の選び方のヒント、などなど持ちかえってもらえたら、もうそれで十分です。

娘は、自分には「ふだんの努力」の大きな 12 条はなかなかできそうにないけど、すきま産業ならぬ、大きい 12 条と 12 条の間をうめる「すきま 12 条」くらいなら出来るかも、と考えているようです。

そういうことをしていく場所として名づけたのが、「ことこと 4 畳半」。いわゆるせいじてきな話を人とする時に、たいてい感じるきもちの段差。その段差をすっきりとなくせないまでも、せめてゆるやかなスロープにしていきたい。そんな話をしあえるささやかな場所としての、このネーミング。 ちなみに、「ことこと」の由来は、個人と個人が Co=ともに、という意味からきているとのこと。

こんな場で、民主主義の種がいつか芽吹いていくといいな。話すことと、と、聴くこと、これがもっとも大切な民主主義の基本、と思っている私なので。

高垣愉佳

ラホヤ村通信をスタートして 8 回目の原稿提出。早 2 年が過ぎました。お伝えしたいネタはたくさんあるのですが、ラホヤ村通信は次回の 9 回目をラストに、そろそろ次のステージへ移りたいと考えています。最終回の次回は、アメリカ生活お役立ち特集にでもしようかなとぼんやりと考えつつ。

浦田雅夫

京都府より委託を受けている退所児童等のアフターケア事業。拠点を三条会商店街近くに移し、サロンドツキイチも開催しています。全天候型京都最長アーケード「三条会商店街は今日も熱いです」熱気ムンムン。詳しくは、facebook　Minuet Kyotoaftercare　まで。

早樫一男

年齢を重ねると共に、身体のあちこちに痛みを感じるようになりました。そもそも、運動不足が大きな要因だと思います。一方で、大きな病気になったことはありません。この年齢まで元気に過ごしてこれたのは不思議なことです。「先祖のおかげ」などと言うつもりはありませんが、今回の連載は我が家のジェノグラムに焦点をあててみました。

中島弘美

対人援助学会研究会の準備等のお手伝いをさせていただいていると、楽しいことがあります。まずは、さまざまなゲストスピーカーの方とお会いできて話をうかがえること、そして参加者の方との交流があります。さっきまで、「はじめまして」だったのが、二時間後はちょっとしたつながりができます。

これまで、ゲストスピーカーをお願いすると、快く引き受けて下さる方が多いのですが、毎回すんなりと話が進むとは限りません。日程が合わなかったり、会場が空いていなかったり、依頼の仕方がまずかったように思うこともあります。しかし、さっぱりと断っていただけると、どのような条件が整えばお引き受けいただけるのかがわかります。

また、こんなに魅力的な内容だったのに、もっと多くの方に聴いていただければよかったと思うこともあり、宣伝方法についても、もうひと工夫できないかなぁとくり返し考えています。

次回の研究会は、以下の通りです。

ひさしくお越しいただいていない方も、どうぞ。心よりお待ちしています！

■対人援助学会　研究会
■ 第 １８ 回 の ご 案 内 ■
テーマ:「熊本での震災
ボランティアを経験して」
ゲスト:酒井　良輔　（元精神障害者福祉施設 スタッフ）
日時:2016 年 6 月 17 日(金)
19：00 ～ 21：00
場所:キャンパスプラザ京都 6F
第 1 会議室
※無料でどなたでもご参加頂けます。

藤信子

今年は、近衛の糸桜を見て、次の週に藤右衛門さんのところでしだれ桜を見て、大覚寺へ行きソメイヨシノを見たことで、桜を見るのが終わった。いつもの年はそれから紅しだれをどこで見ようと思うのだけれど、予定がたたなかった。今年の桜は糸桜から、しだれ桜、ソメイヨシノと各種類の間が空かずに、次々に咲いたから何か忙しいような気になった。そうする内に家のそばの欅の並木が、いつもは5月の連休の頃に葉が広がりはじめるのだけれど、4月半ばにはそうなった。花や木の時期が急いでいるようで、何が影響しているのだろうかと人と話すこの頃である。

これを書きながら、確か1年前のプロフィールにも近衛の桜などのことを書いたことを思い出した。4月の初めに桜のことを一番気にしているのは、年をとったせいなのだろうかと考えている。

中村周平

一昨年の夏、現在住んでいるアパートに引越しました。お世話になっているヘルパー事業所が建てられたバリアフリーアパートです。車いすユーザー…とくに大きめの車いすを使う人間にとって引越しは厄介？すぎるイベントです。バリアフリーの点から引越し可能な物件が少ない。何か不便な箇所を直そうと思えばお金がかかる…それを出る際にも直すので(涙)。なので、現在のバリアフリーアパートは非常に住みやすい環境でした。ただ、ここもこの夏には引っ越さないといけない状況にありまして。次はどこに…今年の夏もせわしないことになりそうな予感です。

浅田英輔

毎年、年をとっていく。4 月生まれなので、年度が変わるのとほぼ同時に年をとる。こないだ抱っこしていた子どもたちも、かなり大きくなった。身長はまだ息子のほうが小さいけれど、息子の足のサイズは 28 センチになった。私は 26 センチだ。高校生のころ、父の革靴を借りて履いていたことがあったが、息子とはもうそれができない。それくらい、年をとったんだなあと感慨深い。今の身長は、父(私)が 178 セ

ンチ、息子は 171 センチ。中学生の間は服を貸してあげられるかもしれない。高校生になると、越されるだろうなあ。あと 1 年半と思うと、感慨深い。思っていたよりも、遠くにきてしまっているようだ。でもまあ、来た道を戻るよりは、もうちょっとだけ進んでみようかと思う。

中村正

法務省の法制審議会刑事法部会に呼ばれて意見を述べた(2016年5月25日)。そこでの内容はいずれ議事録としてアップされるが全体としては厳罰化といえる刑法の今次改正への批判的意見を述べた。今回は性犯罪関係の改正である。強姦や強制わいせつ等を非親告罪化すること、強姦の法定刑の下限を3年以上から5年以上にひきあげること、監護者等による性犯罪についての罪をつくること、肛門や口腔をもちいた男性から男性への暴力を強姦罪に含めること、集団強姦罪を削除すること(強姦等を5年以上にするのでそれで十分)等についてである。よい面もあるが、全体としては重罰化なので、更生には否定的な影響をもたらすと意見を述べた。さらに、いずれ出所する人たちなのでその人たちが生涯かけて犯罪から離脱することへの刑務所以外における更生の取り組みが組織されるべきことを主張した。法の解釈に関心がある方々なので、こうした心理的社会的取り組みの話にはどの程度関心をお持ちかは不明だ。本マガジンの執筆者や読者はその点、安心できる。心理的社会的課題に関心をもってくれているからだ。そしてそうした相互了解のある場を「関心のコミュニティ」という。よい聞き役がいると思うと話も弾むが、その審議会の関心は法的解釈なので、なかなか難しいコミュニケーションだった。

牛若孝治

「資格・免許」というものに胡坐をかいてはならない。 白い杖を持って外出していると、よくこんな声の掛けられ方をする。

通行人:「私、ガイドヘルパー(視覚に障碍のある人たちを目的地まで誘導すること)の資格を持っているのですよ」
私:「それがどうしたんですか?」
通行人:「いや、「だから安心して歩いてください」っていう意味で」
私:「あなたがガイドヘルパーの資格を持っているかどうかなんて、僕にはまったく関係ないですよ。悪いけどね、ガイドヘルパーの資格を持っていなくても、手引きの仕方がうまい人はいっぱいいますよ」
通行人:(少々困惑気味で)「そうですか。では、あっちの方向に目的地が見えています」
私:「あっちってどっちの方向ですか?あなたは、ガイドヘルパーの資格を取ったときに、「視覚に障碍のある人たちには、あっちとかこっちなどの指示語を使わないようにって習わなかったのですか?」
通行人:「はい、どうもすいませんでした」
私:「「資格」とか「免許」というものに胡坐をかいていては、それ以上技術が向上しないってことを、もっともっと勉強してくださいね」。

袴田洋子

締め切りを数日過ぎてしまって、すみません。今日は、5月29日。6月1日から、自分の新事務所でお仕事を始めます。と言っても、内容は変わらず、介護保険のケアマネジャーの仕事ですが。きっとこの事務所での仕事が、自分が引退するまで働く職場になるでしょう。今、48歳だから、あと20年くらい? 今回は、夫婦げんかの話を書きました。けんかをきっかけに、夫婦システムが、変わりました。雨降って地固まってればいいんですけれど。

団遊

歯の調子がいい。48 時間虫歯菌増殖説を信じ、頻回の歯磨きよりも徹底した一回を重視するようになったからだと思う。ことの起こりは 1 年ほど前。近所に予防歯科ができ、そこが評判だと聞いた。早速行ってみると、過診療ではないかと疑いたくなるくらいにあらゆる検査をしてぼくの歯のカルテが作られた。その後歯磨き指導をされ、さらに歯とは何か、彼が信頼する北欧のメソッドとは何かという講義(?)も受けた。その大半は忘れてしまったが、ぼくのこれまでの常識を壊してくれたのが「1 日 3 回歯磨きしても虫歯対策には無意味です」ということ(口臭予防とかリフレッシュの効果はあると思う)。虫歯菌は、付着後 48 時間で増殖を始めるので、虫歯対策を考えるのであれば、48 時間毎に一回 10 分以上をかけて徹底的に磨くのが一番効果的だ、と言ったのだ。そこで、1 日 1 回~1.5 日に 1 回くらい歯磨きをし、その際は歯間ブラシも活用し徹底的に磨く、一方口臭とリフレッシュにはフリスク系で対応とするという風に生活リズムを改めた。その結果、ほんとに歯の調子がいいのです。もう一つ分かったのは、10 分以上歯磨きしようとすると、手磨きでは腕が疲れ果ててしまうので、電動歯ブラシが必須だということ。次に虫歯ができるまでは、このリズムを続けようと思います。

大石仁美

昨年ホームページをプロに更新してもらって、スマホで検索できるようになったことで、今春の入会者が激増し、驚いています。嬉しい悲鳴を上げていると言いたいところですが、どこかで打ち切らなければ対応出来なくなるという不安も大きいです。動けるスタッフの数と部屋のひろさ、それと、会員の中の手のかかる 0~2 歳児の占める割合をにらみながら、ストップをかけるタイミングを模索しているところです。

村本邦子

熊本へ向かう新幹線の中で、偶然、東北支援をされているハワイの知り合いもちょうど熊本に入ったところだと知った。前回の短信で「焼きそばを焼いている」と書いた人だ。今回も東北のあちこちで焼きそばを焼いた後、義援金を持って熊本に来たのだという。この義援金は、先日、ハワイでチャリティイベントをやって集めたもの。

うちの息子もラップで参加したと言っていた。自分の予定を終えた後、急遽、彼と合流し、彼が関わる避難所について行った。彼はすでにそこでニーズを聞き、義援金で実物を調達して贈っていた。きめ細かな良い方法だ。来月はまた、500食の焼きそばを焼きに来るそうだ。避難所では、毎日、パン、おにぎり、コンビニ弁当というメニューなので、焼きそばは喜ばれる(とくに彼の焼きそばは抜群においしい)。最近、食中毒があって炊き出しを禁止にした避難所が多い中、ここは禁じなかったようで、良かった。終了後、熊本駅に向かうと、なぜか構内でフラダンスをやっていた。相変わらず不思議なことが続く・・・。

國友万裕

先日、5年ほど前にお世話になったある女性から Facebook の友達リクエストが来ました。しばらくお会いしていなかったので、このまま疎遠になってしまうかと思っていたのですが、偶然、「男は痛い！」を読んで、ぼくのことを思い出してくれたとのことでした。やはり、連載を続けていると誰か読んでくれる人がいるんですねー。とても嬉しいことでした。

ぼくが「男は痛い！」で書いていることは、全部実話ですが、自分の身に起きることのすべてを書いているわけではありません。本当はもっと書きたいことはあるのですが、公の場でそうそう差し障りのあることは書けない、しかし、ある程度は激しく書かなかったら、自分の思いは伝わらない、そのジレンマの中で、どこまで書こうか、どこまで書けるか、悩みながら書いているという状態です。

そのうち、中村先生にも協力してもらって、「男は痛い！」を本にできたらなあと思っています。じっくり練って、大幅に書き換え、連載では書けなかったきわどい(？)話もたっぷり書いて、拙著『BL 時代の男子学 21世紀のハリウッド映画に見るブロマンス』の日本映画版にしたいと考えたりしています。とはいうものの出版不況。まだ何もあてはないのですが、希望は常にもっていたいですよね。

もっと読んでくださっている人たちの感想を聞きたいです。よかったら、Facebook にメッセージください。

北村真也

認定フリースクール「アウラ学びの森 知誠館」代表。（http://tiseikan.com）

今回で一旦「学びの森の住人たち」は最終回となります。次回からは、また新しいものをスタートさせますね。よろしく！！

古川秀明

「保護司のおっちゃん」の歌を歌うと、必ず女性の保護司の方から「保護司のおばちゃん」という歌はないのか？と聞かれる。きっとお愛想で言ってくれるのだろうと思っていたのだが、あまり何度も言われるので「保護司のおばちゃん」の歌も作って歌ってみた。これもなかなか気に入っている。

シンガーソングカウンセラー

西川友理

京都西山短期大学で講師をしつつ、色々と学生支援に関わる事をさせていただいています。

この職場に移って 2 年目に入りました。去年は何もわからずオロオロと周囲についていくだけだったのですが、今年は自分で出来る事、やりたいと思ったことをどんどんやっていこうと動いています。「こんなことしたいなぁ」と頭で考えるだけではなく、周りの人に話をして、実際に書類を作って、学生に呼びかけて…出来るかどうかわからない事も、とりあえず行動に移せば、何かが動くし、誰かに響く。

「とりあえず行動する。うまくいけば成功だし、うまくいかなかったらそれは失敗ではなく、学びである。」という言葉を胸に、何事も行動に移していきたいと思っています。

坂口伊都

5 月だというのに暑いですね。皆さま、暑さにも負けず、お過ごしでしょうか。

私事ですが、生まれて初めて全身麻酔で手術を 3 月にしました。1 週間程入院し、その間、夫は職場から夜勤を免除してもらえて、何とか乗り切れました。入院中、中学生の娘は部活が終えてから電車とタクシーを乗り継いで来てくれましたが、娘が一人でタクシーに乗るなんて初めてだったので、待っている方は時間が長く感じました。

里子の息子は、土曜日に兄に連れられて病室にやってきて、父が迎えに来るまで一緒に過ごしました。高校生の息子は、弟を病院に連れて行くミッションをしてくれましたが、母の様子は全く気にしていない様子。「大丈夫」の一言もなく、弟を置いて遊びに出かけていきました。はぁ、ため息が出ます。

入院中、お腹の傷が痛み、手でお腹を押さえながら「いたた」と言いながら歩いていると、里子の息子が何気なく歩調を合わせてくれました。ベッドを乗っ取られましたが、病院の金魚を見たり、売店に行ったり、クラッシクコンサートも付き合ってくれました。

手術から 2 か月が経ち、元気に過ごしています。看護師さんからは、思っている以上に身体に負担がかかっていますからね、くれぐれも無理はしないようにと言い渡されたので、用心して過ごそうと思います。

河岸由里子

北海道　かうんせりんぐるうむ

かかし　主宰

片付け：最近、家の中を片付け始めた。別に断舎利ということではない。忙しさにかまけて、中々手を付けていなかったところに、手を付けはじめただけである。

先ずは書類。これは連休に頑張った。長年の間に溜まった書類を思い切って 6 割くらい捨て、かなりすっきりした。

次に子ども部屋へ。子ども達が置いて行った物を整理する。玩具やぬりえ、ぬいぐるみ、絵本や子供向けの本。中には私が子どもの頃に買ってもらった絵本もある。

そんなものを一つ一つ見ていると、思い出がいっぱい出てきて、片づけが進まない。

今の家に住んで25年。引越しをしないと物が溜まる。元来物を捨てられない性格なので、異常に物が多い。その性格が子どもにも遺伝していて、壊れたおもちゃの部品や石ころの果てまで残されている。大人にとってはガラクタでも、当時の子どもにとっては宝物だ。

そんな物を時折、写メにとって子ども達に捨ててよいか確認する。

入院ばかりしていた末娘の物は、特に多いが、扱いが良いので玩具の部品がすべてそろっている等、びっくりすることもある。長女も比較的物を大事に扱うので、壊れている物は少ない。雑だったのは次女。あれこれ分解してしまうのでバラバラ。しかもカササギの様に光物が大好き。河原で拾ったガラスなども宝物だ。おもちゃを見ていて、三人の性格が良く分かる。大人になった三人の性格は、むしろ逆になったように思えるので不思議。

玩具を寄付したり、職場に持って行ったり、捨てたりと、楽しいような寂しいような、そんな思いで、暇な時に蟻が引いて行くように、少しずつ少しずつ片付けている。

岡崎正明

最近話題の2人。サッカーの岡崎選手とカープの新井選手がすごい。

どちらもあふれる才能ときらびやかなキャラで成功した人ではない。粘り強く泥臭い全力プレーが身上。正直イマドキのスマートとはちょっと違う、昭和な香りのするタイプ。そんな2人がたて続けて脚光を浴びた。今年の流行語は「努力と根性」か「泥臭い」だろうか？

「臭い」つながりで思い出した話を。先日、用が足したくなってコンビニのトイレを借りた。新しい店舗で、車いすでも使える広くてきれいなものだった。

「ラッキー」と思って便座に座ると、ジャバジャバ～っといきなり水音が。いわゆる音姫機能。「別にこっちは必要ないのに、自動で鳴るなんてご丁寧な」しばらくしたら止まるかと思っていたが、30秒経っても40秒経ってもジャバジャバいい続ける…。よく見ると便座の横の操作盤に「水音停止」のボタン。なんで鳴るの前提？と軽くイラッとしながらボタンを押す。

ようやく室内が静かになったかと思うと、今度は「カチッ」という微かな音と同時に照明が消えて真っ暗。おいおい。両手を高く上げると、センサーが反応して明かりがついた。やれやれ。しかし5秒もしないうちにまた「カチッ」…。はあ？少々体を動かしたくらいでは反応しないようで、その後ずっと両腕を伸ばしてぐるぐる回しながら踏ん張ることに。

おそらく便利を考えて作り出されたであろう自動センサーに、踊らされながら排便する人間。こんなに無様なことがあろうか。これではもう、どっちが主だか分からない。「言う通りしますから動いてください、コンピューター様～」「ガハハ。ソレ、オドレオドレ」私には機械の高笑いが聞こえた気がした。

なにかと世の中にはびこっている全自動化だが、正直「それくらい自分でさせて！」と思うものが結構ある。特にトイレはその宝庫で、近づいたらフタが開くとか、便座から立ったら勝手に水が流れるとか。おかげで何度無駄に驚いたり、センサーが反応しないよう工夫した動きをしたことか。誰に気を使うこともないはずのトイレで、機械の動きに振り回される時代がくるとは。手塚治虫も想像しなかったに違いない。

対人援助もトイレ利用者のニーズも、あまり先回りして手取り足取りするのは、人間をダメにするんじゃないかと思うのは、私だけだろうか（共感した方のメッセージお待ちしております）。

buimen0412@yahoo.co.jp

千葉晃央

国家資格社会福祉士の養成課程の教務主任になって、9年目になった。担当科目も複数あり、この養成課程だけでも年間100時間以上授業をしている。そんな生活になって9年ということである。

これまで、家族療法、システム論、構築主義、ナラティブ、ソリューションフォーカスド、行動療法、ユースワーカー論…などの自分が大切だと感じる複数の考え方に出会うたびに、自分が学びたいように学んで楽しんできた。そんななか社会福祉士養成課程の相談援助の科目の授業でも、最初に話すのはフロイトさんの話。ソーシャルワークでもフロイトさんの影響は強く、そのソーシャルワークの一定のベースを作ったといえる。超自我、自我、原我の話をして、それがどのように後年の人たちによって発達していったのか？はコミュニケーションを扱う援助職には欠かすことができない視点だと思っている。その理論が交流分析にまでどうつながったのか？そして、知的障害者領域における利用者と援助者のやり取りを精神分析的に捉えた場合はどのようにみている意見があるのか？をいつも話していく。こういう視点をほんまに知ってほしいとつくづく思う。

対人援助の基礎資格である社会福祉士の課程で伝えたいことは

①常に学ぶ姿勢を持ち続けること、②社会福祉士はえらいというプライドを持たないこと、③わからないときに聴くことができる仲間を持つこと、④しょうもない「イジワル心」は持たないこと、⑤実際に足を運び、多くの人に出会うこと、⑥正しさよりも結果を大切にすること、⑦どんな状況もたのしむこと、⑧人生は長いので短期的視点ではなく長期的視点を持つこと、である。

こんな対人援助職になってほしいと願い、プログラム作成に苦心をしている。

大川聡子

3年と9か月におよんだ連載も、今号でとうとう終了となります。思えばこの間、著書を出版したり、職場では職階が変わったり、家庭には未就学児がいなくなったり等、色々な変化がありました。博士課程在学中は、博論が最大の関門のように思っていましたがそんなことはなく、その後もたくさんの難関はあり、でもそれを超えないと新しい景色は見えないのかなと思っています。

これからも、援助職の方々にはあたりまえに認知され言語化されていないハッとするような実践や、こういう対象にこんなアプローチをしたらどうだろうか、といったような挑戦的な実践を広めていくお手伝いができたらなと思っています。

これから連載をと考えていらっしゃる方がもしこの原稿を読んでいただいていたら、ぜひ始められることをおすすめします。私の原稿の基となっているのは博士論文で、一部の内容は論文化もしているのですが、これまで講演を依頼していただいた方は、対人援助学マガジンで私の原稿を読んでいただいた方がとても多いです。WEB に掲載されることで、若いお母さんの子育て実態や、それを踏まえて私が考えたこと、したいことを知っていただく機会が大きく増えたと思います。何かを誰かに伝えたいと思う方がいらっしゃったら、マガジンはおすすめですよ♪

編集長ならびに編集委員の皆様には、長い間本当にお世話になり、ありがとうございました。

大谷多加志

4 月から現職のまま、週に 1 度だけ大学院で K 式の授業を担当するようになりました。これまでは職場の講習会などで「K 式を学びに来た人」に向けてしゃべっていたわけですが、今度はそういう人もいれば、とくに興味はないけれど単位としては取らざるを得ず来た人もいるはずです。検査に関心がある人もない人も、子どもや発達に関わる仕事を志す人もそうでない人もいろいろな人がいる中で、何を伝えることができればよいか。試行錯誤中ながら、子どもの世界を想像することを通して「自分が当たり前と思っていることを疑うこと」を体験してもらえたらと、今は思っている。自分の枠を外して考えることは、きっとどんな現場でも役に立つと思えるから。

竹中尚文

浄土真宗本願寺派専光寺住職。

先日、60 歳になった。40 歳の時に自分の人生が折り返しだと思った。自分の人生の転換期だった。自分の意思を確認しながら生きてきたつもりであるが、わがままに生きてきただけだとも言える。周りの人たちに迷惑をかけてきたことだと思う。しかし、それを指弾する人もほとんどいなくなった。

◆昨年に亡くなった恩師である山田明爾先生は、「俺は何一つ作ったことがない、誰かの役に立ったこともない。自分の好きな事だけして生きてきた」と言っていた。私は「自分の好きな事すらできていない」と思ったものだ。先日、ホームレスの食糧支援をしながら、「ホームレスも私も通行人の邪魔になっているなぁ」と思った。私の存在や行為は社会に貢献するどころか、誰かの邪魔になっている。世の中に迷惑をかけているけれど、自分の好きな事をして、この先を生きていきたい。先は分からんが、まだまだ長く生きるつもりである。まだまだやりたいことがいっぱいある。

川﨑二三彦

人口増加

4 月中旬から、正確には熊本地震の前夜から、我が家の人口が一時的に増加して生活が一部影響を受けている。増加の要因は、生後 1 週間の女児とその母親が、ともにやって来たことによる。

この母子に 1 階和室を明け渡しても、居住空間的に特に支障はなかったし、夜中に台所でごそごそミルクを作る物音がしても、2 階寝室にまではそれも届かず、私は眠りこけているばかり。ただし、連れ合いの求めに応じて時々ベビーショップに足を運び、3～40 年前との違いに時代の移り変わりを感じるとか、日常の時間が何かと賑やかになるような変化は現れた。

とはいえ、滞在が長引くにつれて、用もないのに和室に出向いてまじまじとベビーの姿を見つめたり、たまには抱いてあやし、さらにはミルクを飲ませてみるなど、想定外の行動をとる自分自身を発見して驚いた。

ところで、私は今、嬰児殺研究を行っているのだけれど、たとえば生後 1 か月の子どもが泣き止まないとして暴力を振るった父親のことを考える際など、現在の境遇が大変参考になる。

「ははーん、生後 1 か月の子は、こんな泣き声なんだ」

と思いながら、暴力をふるった父親の気持ちを推し量るのである。ただし、どうしてそんな暴行に及んだのか、かえってわからなくなるということもあるのだが……。

（2016/05/28 記）

荒木晃子

先日、京都国際社会福祉センターの社会福祉講座で話す機会があった。事前に提示されたテーマは「家族という発達の場を支える実践」。筆者の講演タイトルは、「生殖医療が問う家族の選択と決断－福祉・医療・行政の連携から－」とした。パートナーと共に子どもを迎える家族形成を「家族の発達」ととらえた援助システム「島根モデル」の取り組みの話である。不妊家族臨床が専門の筆者のことゆえ、結婚＝妊娠＝出産→楽しく子育て、などと順調な話をする筈もない。おそらく、150 分の講義中、結婚・妊娠・出産などという“おめでたい”キーワードは、ほとんど口にしなかったと記憶している。代わりに熱く語ったのは、不妊、精子・卵子の提供、代理出産、LGBT などなど。家族の発達を考えたとき、誰もが考えることのない（というか、考えたくもない）、家族の発達過程に派生する“子どもの課題”を扱ったのである。まさに、家族という発達の場に、他者からの支えが必要な対人援助の話である。当日、熱心に耳を傾けてくださったスタッフを含む、社会福祉士を目指す数十名の老若男女の参加者各々が、自分のこととして、また、我が子をそこに重ねて一考していただけたのではないかと思う。あの日、会場から筆者に注がれた視線が、いま、そう語らせてくれる。

サトウタツヤ

2016 年４月になって、肩書きが変わりました。

文学部教授→総合心理学部教授

研究部長→総合企画室長／学園広報室長

だから何だということもないのですが、気分を変えて頑張っていきたいと思います。総合心理学部の上に作る大学院についても、展望が見えてきました。

TEA（複線径路等至性アプローチ）は、色々な展開があり、今年度中に、英語の本、日本語の本、それぞれ1冊ずつ出版されそうです。

見野 大介　みのだいすけ

京都高島屋での個展も無事終えることができました。自分の中の「陶芸」の可能性が一層拡がった、そんな手応えを感じた一週間でした。作りたいもの、作らないといけないもの、これからも一つ一つを丁寧に作っていきます。

【 陶のかたち展 】

会期:2016.6.14-6.26 11:00-18:00（最終日17:00まで・月曜休廊）

会場:GALLERY北野坂　神戸市中央区山本通り 1-7-17 WALLAVENUE2.3.4F

30人の陶芸家による、30人それぞれの表現によるオブジェ・うつわが展示されております。

【 見野大介 梶本直子 -陶硝子展- 】

会期:2016.7.6-7.17 12:00-19:00（最終日18:00まで・11.12休廊）

会場:町家 Gallery cafe 龍　京都市紫野下石龍町 3-5

日用的な器から嗜好的な器、硝子のような陶、陶のような硝子、偶然の出会いによる異素材の展示です。

鶴谷圭一

今回の原稿を書いている時期、沼津市の私立幼稚園協会と静岡のFMラジオ局K-mix（ケーミックス）、そして趣旨に賛同して協賛してくれた企業がブースを出展し、6月11日にイベントを行います。マガジン25号が発行された頃には終わっていると思いますが、題して**「おやこんぼフェスタ2016in キラメッセぬまづ」**

沼津にあるイベントホールを借りて、午前10時から午後3時まで、200人の幼稚園教職員も動員して、約3,000人の集客を狙っています。我々は幼稚園の振興とおやこんぼの普及、企業は親子世代の取り込みと、双方の思惑が合致しての初の試み。現在ラジオで「おやこんぼ！」が連呼されておりイイ感じです！

ただ、本来の幼児教育以外の業務が多量にあるので、あちこちから連絡が入り、対応せねばならず目が回るようなハブ空港状態となっております。(@_@;)

おやこんぼってなに？と思われた方は、ぜひマガジン9号をごらんください。

こちらの HP でも→

http://oyacombo.net/

原 町 幼 稚 園

http://www.haramachi-ki.jp

メール osakana@haramachi-ki.jp

ツイッター haramachikinder

木村晃子

編集長、ごめんなさい。25号のマガジン、お休みさせてください・・・

5月初め、今号の締切り案内を頂いて間もなくのメールです。拙いながらも、創刊号から、執筆エントリーさせていただいている自負もあって、連載ストップはこれまで考えたこともありませんでした。私にとっては、「書きたい。書かせてください。」とお願いして始まった、対人援助学マガジンです。決まった枠組みがあると、24回も継続できている、と嬉しくもありました。その大切な連載から、一旦ドロップアウトを決断しました。その前段に、大きな別れがありました。大切に、大切に育んできたものを失ってしまったのです。恥ずかしながら、心も体も壊れてしまいました。元気だとか、パワフルだとか形容されることの多い私ですから、壊れた私は自分ではないような感覚でした。

けれども、そのうちに、体の方は回復に向かいました。そして、体が回復したのだから、結局、25号も書く事にしました。心はまだ、あの時のまま、悲しみを背負ったままですが、今できることをしていくことでしか、未来は築くことはできないと思いながら、いつも通り今号も連載を続けることができました。マガジンの中に、自分の居場所があることが特に嬉しく感じた今号です。私にとっても、記念すべき25号となりました。

北海道　ケアマネジャー

乾明紀

前回の短信に「今度は腰痛と乾燥肌に悩まされることになりました」と書きましたが、腰痛は治りましたが、肌の痒みが未だ治まりません。乾燥する季節はとっくに終わったのに・・・。

以前に長期間悩まされた「歯の痛み」に比べるとマシと言えますが、発疹は原因がわからないのが厄介です。皮膚科に行っても対処療法でステロイドなどをもらうだけで、根本原因が何かは依然わからない状況です。今日、同じ悩みを持つ先生が、「研究室にある本のカビが原因だと思うようになってきたわ」とおっしゃってましたが、何が原因なんだろう・・・。

団士郎

前回書いた内村鑑三つながりの続きです。5月22日（日）、大阪難波のジュンク堂書店で、「高尚なる勇ましい生涯―内村鑑三と「代表的日本人」―と題した講演会があった。

「悲しみの秘儀」の著者であり、Eテレ「百分で名著:内村鑑三―代表的日本人」の解説で知った若松英輔氏が登場とあって、上手い具合に予定の入っていなかった私は、勇んで出かけた。

書店の一隅に椅子を並べて、書棚の森に中で話を聞くのはとても気持ちが良かった。そして若松氏の話はとても面白かった。

話すことが好きであった内村鑑三を語る氏も又、話すことが好きなようで、同類の私には好ましかった。

内村が「日本中、二人以上居てくれれば、どこにでも話しに行く」と言っていたというのには笑ったし、実際、日本中出かけていたらしい。そして、もう少し聞いてみたかったのは、聖書研究雑誌を刊行し続けていたということである。

それは「対人援助学マガジン」を発行し続けている自分に引き寄せて、よく理解できる行動であり、次の時代への地ならし、準備こそ、自分が生きることであると考えていたというのは心に浸みる話であった。

終了後、持参の「悲しみの秘儀」にサインをして貰った。その時、東日本大震災被災地を中心に5年間、発行配布し続けている「木陰の物語」小冊子を手渡した。

その後、余韻を楽しむべく、近くのカフェで一息つきながらツイッターに会場の写真と感想をアップした。

すると帰路の車中、ツイッターに若松氏から返信があった。そして更に、新幹線の車中から、小冊子「木陰の物語」の感想を届けて下さった。

伝わるものがあるに違いないと思って手渡した冊子が、そのような役目を果たしてくれていることの幸福は何ものにも代え難い。

（ネット写真欄から持ってきたこの新聞記事。出版されたものから 2011 年の記事らしい）

ひと

井筒俊彦の本格的評伝を書いた企業家

若松　英輔さん(43)

「井筒俊彦は読むことが書くことに劣らぬ創造的行為であると教えてくれた人です。誤読を恐れず読むことから、豊かな実践が始まります」

世界的イスラム学者・言語哲学者として知られながら、国内では「つまみ食い的な紹介しかなかった」井筒（1914～93年）。その著作と生涯を丹念に論じ、知的軌跡を生き生きと描き出した第1作「井筒俊彦 叡知の哲学」（慶応義塾大学出版会）を5月に発表、大反響を呼んだ。第2作「神秘の夜の旅」（トランスビュー）の刊行を記念して9月、井筒をはじめ私淑する思想家・文学者をめぐる連続講演会が計4回、紀伊国屋書店など大型書店で催され、一躍出版・読書界の寵児に。

本業は数十種類のハーブを調合した健康食品を製造・販売する中小企業経営者。「私にとってビジネスと書くことは不可分。自然が育んだハーブを消費者のもとへ運ぶのと同じように、井筒から預けられたものを、必要とする読者に届けているだけです」。ビジネスマンに対しては、井筒やプラトンなどの精読を真剣に勧める。「持続的な事業展開を望むならば『存在の深み』からの思考が必要です」

「叡知の哲学」のもとになる論文を雑誌連載中、妻を亡くした。「執筆は、目には見えないけれども隣にいる妻との『協同』作業でした。読者には私の本を通じて井筒本人と出会ってほしい」。死者の実在を信じるカトリック教徒でもある。

文・伊藤一博
写真・三浦博之

新潟県糸魚川市生まれ。慶応大卒。シナジーカンパニージャパン社長。「三田文学」に「吉満義彦」を連載中。

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場

25：　クルマ社会と福祉政策

千葉　晃央

「ガリガリガリ…」

私は急いでいた。納期ギリギリでの商品の出荷を任されたからである。今回出荷するのはお菓子を入れる箱。納品に使う車はトヨタ・ハイエース。その荷台いっぱいに積みこんで出発をした。その箱は利用者さんがみんなで作った「製品」。今日の朝、この箱の納品先である同じグループの施設から「14 時までに必ず欲しいねん！」と確認の電話が入ってきた。自分の職場からその施設までかかる時間は 40 分程度。13 時、いわゆる「昼一（ヒルイチ)」で出発したので間に合う予定である。しかし、今日は金曜日。若干道が混んでいる。

仕事を始めて 4 ヵ月。先輩から教えてもらった渋滞が少ない道をチョイスした。先輩には仕事で運転する時は、いつも以上に速度に注意するよう言われたこともよく覚えている。スピードメーターを確認しながらアクセルを踏む。それにしても、このクルマは運転がしにくい…。先輩が同乗して、出荷の方法を教えてもらったときの施設のクルマとは勝手が異なる。今日乗っているのはコラムシフトのミッション車。コラムシフトのクルマは就職して初めて運転を経験した。ミッション車に関しては、それまでも運転をしてきたので、たくさん不安があるわけではなかった。しかしコラムシフトの車は、シフトがどこに入っているか？がわかりにくい。そして車ごとにシフト？（ギア？）の入り具合に癖があるように思う。それでも普通に出荷する分には不安はなかったので「大丈夫です！」といって職場を出てきた。

グループ施設につくと、こういわれた…。「千葉君！ごめん！このままの業者に一緒に行ってくれへん？荷降ろしをして、積み替えをしている時間がないねん！さっき業者さんから電話があって、どうしても 14 時 30 分に欲しいといわれてん…頼むわ～！」この仕事はグループ施設から頂いた仕事だった。そのグループ施設は業者さんから頂いた仕事だった。その業者さんから、さらにタイトな要望を言われたらしい。…私は事情がよく分からず（迷惑をかけてはいけない）と思い、「ハイ、わかりました…」というしかなかった…。相手は私たち施設に仕事をくれた立場の人（グループ施設の職員）であり、この次以降の私たちの仕事がなくなっては困るし、同じグループの先輩でもある…。そして、なんといっても依頼

元の業者さんに迷惑がかかるといけない…と考えた。…とはいったものの、出荷先がどこにあるか？については知らなかった。そして、ここは「京都」である。秋田生まれ、大阪で育った私には京都の地理はわからないところが当時はまだ多かった。

「千葉君、ついてきて！」とグループ施設の職員が言って、その施設の車に乗り込んだ。その車も出荷する箱が荷台に山積みである。…行くしかない。先に施設を出たグループ施設のクルマは構内を前に進んでいった。門を出た車は私が知っている道とは逆方向にむかった！「え、そっちからいくの？？？？？？？？？」私が知っている方ではない方の門を出た道を進んだのである。…焦った。まわりは入り組んだ住宅地。道も広くはない。とにかくこちらは前の車についていかなくてはならない！…そう思ったが、道には勾配があり、ミッションをゴソゴソと変速しているうちに距離が空いてしまった。もうすでに前の車は一つ目の十字路を抜けて右折し、右折後すぐにある橋を渡っていってしまったのが見えた。また焦った。とにかく行こう！でも混んでいるやん。同じように十字路で右折をしたいのに、交差する道路が渋滞をしている！渋滞の列の車と車の間をすり抜けながら、右折をしなくてはならない。しかもミッション。ほんでコラムシフト。でも置いていかれては、どこに行くかすらわからない。さらに業者さんに迷惑がかかるし、グループ施設にも当然迷惑をかけてしまう。行くしかない…。

自家用車とは違い、ハイエースは車長があり、内輪差がでやすい…。気をつけなくては…と判ってはいるが私は今、ついてい

くべき、前のクルマに置いていかれている…。やっぱりいくしかない…。その時、嫌な音が聞こえた。乗っていたハイエースの右の腹を渋滞している車の右前部に当ててしまったのである…。

仕事をし始めて数カ月の私には判断できないことが多かった。今なら、「無理です」という。あくまで自分の施設からグループ施設までの出荷の作業は、私たちの施設側でやることになっていたので、その業務はするけれども、その先に関してはグループ施設と業者さんとの間で決められるべきことである。だから、今なら当然「無理です！」という。しかし、仕事を初めて数か月の私にはこの判断ができなかった。

車道と廊下は違う！

神戸三ノ宮歩道暴走事故、山陽道渋滞車列にブレーキなしでの追突事故、滝畑ダムでの車の事故…交通事故のニュースは毎日なくなることはない。昭和 30~40 年代、「モータリゼーション」「交通戦争」といわれ、年間の交通事故による死者数 1 万 6000 人を超えた。ここ数年は年間約 4000 人台では推移している。ちなみに児童虐待の年間死者数は二桁（うん十何人）とも言われている。ニュースでは高齢ドライバーによる暴走、逆走のニュースも当たり前になってきた。

車を動かす以上事故のリスクは逃れられない。「あの職員は運転が得意だから…」、「あの利用者さんは運搬が得意だから…」、「あの利用者さんは挨拶が得意だから…」と同じ人ばかりが車に乗ることも偏った人だけにリスクが増えてしまうことも忘れてはいけないと思う。

福祉の業界では、公が数年後のヴィジョンを事前に示し、そこに向かって制度を整えていくことがよくある。その流れのなかで「脱施設」の意味も含めて行われたのが、福祉利用者の地域生活への移行である。そのヴィジョンで使われるのが次のイメージである。それまで、「施設の中で」利用者が暮らす居室に、何かの時はすぐに介護や医療のチームがすぐ対応できるようにしてきた。それを施設規模ではなく、地域規模で実現するというイメージであるという。つまり施設内の利用者さんの居室は地域の利用者さんの住宅に置き換え、そして施設の廊下は地域の道路と置き換えて考えるというのである。そこでは「シームレス・ケア」という言葉も用いられていて急性期から地域生活までの切れ目のないケアを地域全体で実現することが大切であるといわれた。そのためには、地域内の医療機関、介護の施設がともに連携をするシステムを構築し、実現していくということが求めた。施設に入居しているときは、どんな状態であっても、どんな時間であっても基本的には介護、医療を届けることができた。これを地域のレベルで実現するために現在、医療、介護、福祉などが訪問型等のサービスで取り組んでいる。

クルマ社会集金システムの中の福祉

…以上のようなすべての話は大前提に「クルマ社会」がある。つまり移動手段としての車を前提にしている。施設内なら医

療・介護チームが徒歩で廊下を歩いていくが、地域では「車」による移動となる。ヴィジョンをきいているだけなら、とても簡単に聞こえる。しかし、使うのは「車」。そこには交通事故のリスク、車のメンテナンスの手間とコスト、課税、そして車両があることによる駐車場スペースの必要性などが付随する。車を買い、保険代を払い、税金を払う。車は日本の基幹産業といわれ、そして車が走るには道路建設のための工事が必要になる…。つまり、これら全てが前提と言える。クルマメーカーも、国も、広告等を駆使し、車を持たないことへの不安を国民に植え付け、購買意欲を掻き立てる。企業は自動ブレーキ等による安全性能、環境負荷の軽減、さらにかっこいい、かわいいと感じる車をつくる。先日は運転が終わると「おつかれさま！」と話す車に「本当に癒される！」と言っている方にも出会った。

若者のクルマ離れというけれども、こういう社会のカラクリに気づきはじめたのではないかとも思う。つまり、クルマが国にとって、重要なお金を集めるしくみになっている！ということ。それが若者のクルマ離れではないのかと。

京都でも車の暴走事故があった。亀岡でも、祇園でも。その後に対策としてなされたことは、私のまわりでは学校の近くの道路に歩行者と車を分ける線が色つきで塗り直されたこと、そして軟質プラスチック製のポールがその一部に建てられたということだけ。根本的な解決には程遠い現実と感じる。

「クルマ社会」を批判する本も絶版が目立つ。そう、今はもう「クルマ社会」を批

判する人たちすら、絶滅の危機。大気汚染、騒音、排ガス等による健康被害も「エコ減税」などのキャッチフレーズのもと、すっかり払拭された感もある。ドラえもんに出てくるような子どもたちが遊ぶ空き地は全て駐車場になったという指摘もされて久しい。多くの人が一定の生活を享受できる社会を大切にするのが「福祉」ならば「公共交通機関」の意味は再度考える機会があってもいいのではないか？

朝の住宅街には、幼稚園バス、高齢者のデイサービスの送迎車、障害児・者の施設送迎車が連なる。支援学校の終わる時間には放課後等デイサービスの送迎車が連なる。再度、得ているものと、失っているものを知っておく必要があるように感じる。

事故当時、グループ施設の先輩も仕事を始めて 3 年目ぐらいだった。事故は仕事を頂いている業者さんの要望に応えようという思いの結果だった。悪気は全くない。業者さんの要望に応えなければ次の仕事が危ういかもしれないというギリギリの関係の中、お仕事を頂いているという厳しさがある。先輩を恨んでいたりはしない。問題なのはこういう福祉の状況、障害者がおかれている状況である。

BACK ISSUES

施設が求める「障害者像」はあるのか？24　2016 年 3 月

連絡帳 23　2015 年 12 月

におい 22　 2015 年 9 月

作業着 21　2015 年 6 月

食べる 20　2015 年 3 月

通勤 19　2014 年 12 月

クスリの作用、人の作用 18　2014 年 9 月

倫理観でかたづけられる暴力 17　2014 年 6 月

触れる 16　2014 年 3 月

対談企画　「教育と福祉の連携を模索する」2014 年 3 月

情報の格差 15　2013 年 12 月

20 年前のノートから 14　2013 年 9 月

そうじのねらい 13　2013 年 6 月

個別化の暗部 12　2013 年 3 月

グループワークの視点 11　2012 年 12 月

実習生がやってきた！10　2012 年 9 月

月曜日のせいやな 9　2012 年 6 月

所得を決める福祉職？82012 年 3 月

世界とつながる社会福祉現場 7　2011 年 12 月

この現場へのたどり着き方 6　2011 年 9 月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会

2011 年 9 月

旅行がない！5　2011 年 6 月

職員の脳内回路 4　2011 年 3 月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3

2010 年 12 月

利用者が仕事上の戦友 2　2010 年 9 月

障害者自立支援法で不景気に！？1　2010 年 6 月

臨床社会学の方法

(13) 社会構築主義

–ワードwordとワールドworldの関係について–

中村正

1. 言葉の位置

言葉が現実をつくるのか、言葉は単に記号として何かを反映しているだけなのか、また、その名指しされた事項はどのように実在しているのか等、言葉 word と現実 world の関係はそう簡単ではない。本マガジン第 22 号（2015 年 9 月）の「サイレンシング（沈黙化作用）–語られていないこと・語りえないものがあることへの配慮–」はその様相の一端を把握しようとしたものである。特に社会病理、心理臨床、対人援助の理論と実践はこの点について敏感であるべきだ。何事かを「問題である」と認識する過程それ自体への関心である。これを社会構築主義という。

以前にも指摘したが、たとえば不登校を表現する言葉はこれまでかなり変化してきた。①長期欠席・不就学問題（ずる休みのような印象もあるし、貧困や病気が背景にあると別の問題になる。truancy）、②学校恐怖症（分離不安という心理的な面が前景化した言い方であり、個人の問題という力点がある。school phobia）、③登校拒否(強い意志を想起する言葉である。school refusal）、④不登校(かなり包括的な表現となってきた。Non-attendance at school)という具合だ。一義的には決められない多様な姿があるということだろう。状況にあわせて造語されている。

逆に、学校への適応（同調）のなかに問題はないのかついても同時に問われるべきだろう。

1992 年に文部省（当時）は「不登校はどんな家庭の子どもにもおこりうる」といいきった。となると問題視だけしていてもだめだろう。現在、中学の一クラスに一人の割合（十三万人）となるにいたった。その延長になることも多いひきこもりは百万人と想定されている。少数の問題ではなく社会問題といえる。

さらにたとえば薬物使用。欧米諸国では争点を成している。各種の薬物取り締まり法令違反者と考えれば犯罪者であるし、薬物が大

Ritsumeikan University

量に存在している社会における依存症者と考えれば要治療者となる。政策上は、刑事事件なのか、公衆衛生の課題なのかについて分岐し、社会構築の現実が異なる。厳罰・必罰主義をとれば「ゼロ・トレランス zero tolerance（不寛容）政策」となる。依存症と定義すれば治療となる。

しかしクライエントとしては動機づけが弱いこともあり、単なる治療にはならない面もある。断薬主義を原則とした強い介入を採用している多くのアジア諸国があり、代替え薬物を用いて当人と社会にとっての有害性をなくしていくべきだとすればハームリダクション政策（有害性を除去することを優先し、代替え薬物を与える政策 harm reduction）に至る。

厳罰主義ではあるが、治療を命じるために薬物専門の裁判（ドラッグコート drug court）の仕組みを導入し、脱依存症へと自己コントロールすることを誘導する受講命令の仕組みをつくっている社会もある（米国）。これらは動機付けを社会の指示によって行う方策である。薬物対策はこのように多様な相をもつ社会的構築物である。

こうして言葉が現実をつくり、その現実がまた新しい言葉を要請しているという循環があり、それを社会構築主義という。これと類似の社会問題の事例は枚挙に暇がない。家庭内暴力、発達障害、ストーキング、過労死、過労自殺やいじめ自殺（とくにその責任帰属問題は裁判の争点となる）、ブラック企業、ハラスメント問題（この間、セクシャル・ハラスメントそれ自体も新しい言葉として社会問題を構築してきたが、さらにアカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメント、スクール・セクシャルハラスメント、マタニティ・ハラスメントをはじめとしてさらに拡大して用いられてきている）、体罰と指導、躾と子ども虐待、介護ストレスと高齢者虐待等があり、定義をめぐる争点を成している。

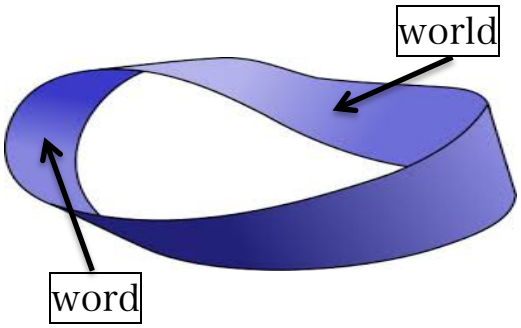


図 1　言葉と現実の相互関係イメージ（言葉が世界を創る面と、構築された世界がもとになって言葉をつくる面のイメージ図。中村作成）。

2. レトリック（類型化された語彙もしくは認知のフレーム）への注目

言葉と現実の関係は、社会問題の定義に関わり複雑である。ジョージ・レイコフらの認知意味論というアプローチはレトリックに焦点をあて、認知と意味の関連を扱う。「われわれが考えたり、生活したり、世界を体験したりするときに用いる根本的なレトリック的発想があり、あることを別の種類のことを通じて理解したり経験したりするということ」に着目している。「レトリックは、現実、それも社会的現実を、つくりだす。したがって、レトリックは将来の行動への導きともなるし、将来の行動は、当然、レトリックに応じたも

のとなる。そのことが今度は逆にレトリックの力を強化し、経験を首尾一貫したものにする。この意味でレトリックは、ひとりでに成就する予言ということができる。」(*Metaphors we live by*, George Lakoff and Mark Johnson, University of Chicago, 1980. ジョージ・レイコフ&マーク・ジョンソン著『レトリックと人生』大修館書店、1986 年、23 頁)。

このレトリック分析を社会病理学や社会問題の社会学的研究は応用してきた。社会病理の認識に関わる意味付けのレトリックを「喪失、名付け(権利付与)、危険、悲惨、非理性」と区分けした研究がある。

「喪失のレトリック」は社会のなかの価値あるものが消滅しつつあることを指すノスタルジックな問題の定義である。たとえば、家族の絆を大事にする見地からすると、離婚は問題視される。生命の価値を尊ぶ見地からすれば中絶は問題である。何を価値あるものとするかによって定義が異なる。

「名付け(権利付与)のレトリック」は個別の関心というより、社会全体の関心を表現する。差別問題について語られることが多い。セクシズム(性差別)、エイジズム(年齢差別)、レイシズム(人種差別)である。不寛容と抑圧や差別が語られる。多様性と寛容への選択、自由へのエンパワーメントや自立と参加が目指される。

「危険のレトリック」は社会問題の医療化にかかわるレトリックである。衛生学的・医学的な科学的言説が用いられる。タバコ、アルコール、ドラッグなどを問題化する際に用いられるレトリックである。非喫煙者の被害という無垢な犠牲者の存在も指摘される。

「非理性のレトリック」は自己破壊的な行為や無謀な行為などを問題化するときに用いられる。人間の理性的な自己コントロールを確立することが意図され、社会のなかの無教養に由来する事態を指摘する。ここからは教育的課題を立てることが意図される。ティーンズたちの無謀な行動を戒め、問題解決に教育がいかに必要かを訴える。

「悲惨のレトリック」は都市の犯罪薬物依存、10 代の妊娠などを生む貧困を問題化するレトリックである。エイズの社会問題化にもこのレトリックが使われる。

レトリックは類型化された認知の仕方であり、社会的な規模で意味の体系をつくりだす。政策や制度の根拠となり、人びとの合意や認識の内容を成していく。人びとの動機として内心を構成する。ものの見方、価値観、思想がそこに表現される。こうした一連の経過は動的であるので、レトリカル・ワークともいう。物語を構成する作業となる。

こうしてみると、言葉が人間の認識に先行し、現実をみる見方をつくる。その意味の体系は人間に対しては外在的なものである。認知、行動、意味、動機、語彙は一続きのものとして構築されている(詳細は、中村正『家族のゆくえ』、1998 年、人文書院で紹介した)。

レトリックは、言葉が人間にとって先行しているということを意味する。何かを問題視し、定義する際に認知の枠として物語性を与えるものである。事態をみつめ、何事かを認識し、解釈するコード、スキーマ、語彙、フ

レーム、意味づけとして作用する。この連載、「臨床社会学の方法」でも扱ってきた「動機の語彙」、「マトリックス」と類似している。さらに、これを暴力臨床論して暴力加害者の言い訳や中和化の言葉をとりあげ考察したこともある（中村正「暴力臨床論−暴力の実践を導く暗黙理論」『立命館文学』第 646 号、立命館大学人文学会、2016 年 3 月。これは同会の HP にアップされる）。

3. それらをとおして何が構築されているのか−認知意味論と暴力

では、レトリック、レトリカル・ワークをとおして社会的現実はどのように構築されていくのか。たとえば、性犯罪について応用した研究がある。性犯罪加害者や司法関係者の男性たちへのインタビュー集があり、どんな言葉で説明しているのか分析したものがある（『レイプ・男からの発言』ティモシー・ベネイケ、鈴木晶・幾島幸子、ちくま文庫、1993 年）。男性たちの性犯罪についての見方や考え方の特徴をひきだすために、彼らが使うレトリックに注目して考察をくわえている。それらを次のようにまとめている。「セックスとは手柄である。狩り、あるいは征服である。試合である。ギャンブルである。戦争である。女性に奉仕させることである。演技である。教えることである。勝利である。喜びを与えることである。それで勝利感を得ることである。商品である。所有である。盗みである。食べ物である。女は物である。女は動物である。女は子どもである。女は性器である。セックスは狂気である。性的な感覚は女が仕掛ける電流/体液である。セックスとは女性器に一撃を加えることである。マスターベーションは自分の性器に一撃をくわえることである。娠させることは暴力行為である。男性器は銃で精液は弾薬である。」（43−48 頁）と。

さらにそれらを性犯罪者たちの行動の意味として整序している。①セックスとは相手を攻撃し、その地位を引き下げることである、②勝利とは、攻撃を強行することである、③レイプは肉体に傷をつけることである、④レイプは神聖な場所への侵入である、⑤レイプは高価な商品を盗むことである、⑥レイプは手ほどきである、⑦レイプは大事な物を汚すことである、⑧レイプとは復讐である、⑨レイプは自然な行為だ、男はしょせん男なのだからとまとめている（54-58 頁）。

最終的にはこれらを分類して性犯罪のもとになる認知の仕方や意味づけの特徴を取り出し、抽象化している。「地位、憎悪、統制、支配」の４点である。

この結論は、レイプと性的快楽・性的満足との結びつきよりも、これらの「地位、憎悪、統制、支配」との結びつきのほうがはるかに強いということを示そうとしたものである。この４つを実現するために性にまつまる行動が選択されたが性犯罪である。他の形式を選ぶ場合は別の問題行動となる。だから性犯罪も性欲だけが欲望なのではない。形式としては擬似性的な行為である。性とは関係のない第一次的欲求にこたえるという性行動がレイプだと指摘していることになる。

この研究は加害者臨床をもとにしたグロースの研究に依拠している(*Men who Rape* -

The Psychology of The Offender, Nicholas Groth & Jean, Birnbaum,1979, Plenum Press, p.13)。グロースはこれらの４点を性犯罪者の「非性的ニーズ」として位置づけた。

この「非性的ニーズ」は心理的不全感といえる。原因は何であれなんらかの心理的不全（感）をもとにして、敵意・怒りを処理し、コントロール・パワーを発揮するために選択された行動としてが「性化された強いる行動 sexualized coercive control behavior 」である。対象を性化しており、弱い者を選択している。性的欲求 sexual desire そのものの実現というよりは、「非性的ニーズ」non-sexual needs を満たしつつ、それでもって性的な快楽を得る。私も関係しているが、刑務所での取り組む性犯罪者再犯防止プログラムは性的欲求に焦点をあてているので、その根幹からの再編成が求められる指摘である。

さらにそれが性問題行動となる点に男性性を扱う意味があると私はとらえている。身近にいる脆弱な対象が選択され、男性の性化された暴力として発現する。男性として、補償的、報復的、劣位回復的であり、不全感を埋めることが意図される。コントロール感、達成感を得るということは、その暴力が、被害者の人格それ自体や統合性を破壊するものであるといえる。性のもつ人間の尊厳にとっての大きさがあるからこそ、それを貶める行動として性が選択される。

しかも力の強弱や関係性やジェンダー役割に根ざして行われる。被害者の屈辱感を想定して、征服感、達成感、充足感を得る。性的な攻撃や侵入となることの意味は、女性蔑視、ジェンダー固定観念、思いを受け取るべきという女性依存意識、地位降格で人格破壊的な儀式的暴力となる。性行動をとおして屈辱感、陵辱感を満たし、万能感、達成感を得るのが性犯罪である。被害者はその逆の傷つきとなる。

さらに、加害者の言い訳をとらえる。女性の誘惑論につながるような性的魅力論が性犯罪者の言い訳にある。これは男性にとって美の知覚は受動的であるという仮説にもとづき、女性の挑発としての面があるという正当化である。しかし現実の性犯罪者は、女性の身体を盗むようにして知覚し、選択し、犯罪を企てている。だから加害者は能動的である。対象を物色している。決して受動的ではない。これは、①性的な欲望の対象として女性をみること，②女の方から望んだことだといい、被害者のせいにすること、③女性が魅力や外見という武器で勝負にでたのだから男性もその喧嘩を買うべきだという認知の仕方を正当化する。

4. 隠された欲求−非性的・非犯罪的なニーズ

性犯罪や性問題行動を「非性的ニーズ」と擬似性的行動に分けて考えるアプローチは、女性への態度や意識、性についての勝手な枠づけ、男性性の信念、性行動についての恣意的な解釈等の独特な認知の仕方をもとにした意味づけの世界をつくっている様相をとらえることができる。ほとんどのレイプは、強盗、暴行、誘拐、殺人の暴力に付随しておこるのであり、性的行為だと考えるべきではないとベネイケはいう。さらに、「精神的ストレス−

精神症状のひとつ–性衝動–性的逸脱–男性はコントロールできない」という思考の連鎖ができて、男性中心の性犯罪の説明がなされる。この見方は、被害者非難の物語であり、男性中心、支配的な（ドミナント）物語である。

「彼は何故個人的な暴力に訴えるのか、どうしてレイプを選択するのか」とさらにベネイケは問う。「レイプすることで女性への怒りを感じやすくなる。レイピストは、相手の女性に卑しめられ、貶こめられて腹がたったからレイプする」（p.312）、「自分が貶められたと感じるので、自分より劣った存在をレイプする。優位をとりもどす。女性が選ばれるのは性的な欲求不満からではなく、怒りを向ける対象として都合がよい」（p.312）からだと考察している。

犯罪一般においても、「犯罪的ニーズ」と「非犯罪的ニーズ」をみる。「非犯罪的ニーズ」は、低い自尊感情、精神的身体的な不健康、過去の被虐待の歴史、育った家族の不幸、物質的かつ関係的な意味での貧困等があり、これらは一般に情状と呼ばれている。

DV や虐待においても、その暴力をとおして満たそうとしていたことは何だったのかは加害者への対応の対象確定にとって大切な問いとなる。

犯罪とならない日常的暴力はたくさんある。しかし放置しておいてよいものでもない暴力に対していかにして積極的に関与できるのか。そのための制度構築と臨床支援に関して挑戦的な課題を含むのが親密な関係性における暴力である。その暴力の中心には関係コントロール型暴力がある。性犯罪も見知った者同士の被害と加害が多いが、親告罪でもあり、現実を反映しない認知件数となる。

この関係コントロール型暴力への対応には刑事罰だけではないアプローチが求められる。日常的に、反復して行われている行為でもあり、相手を責める意識も強い他罰性のある加害者の特性もあり、刑罰とは異なるアプローチをも可能にする治療的司法のアプローチが有効であることが多く、諸外国の刑事政策は受講命令等の方策を講じている。治療的司法は狭義の医療的アプローチだけでは届かない要支援ニーズを視野に入れるので、その心理学的-社会学的な様相を把握して対処する。

この様相を把握するために筆者は、司法臨床研究者でもある Evan Stark の「coercive control 論」を参考にしている。

スタークは、①威嚇（脅す）、②孤立化させる、③コントロールするという 3 つの要素を重視した暴力を「関係コントロール型暴力」の特徴としている。DV や虐待だけではなく誘拐、ハラスメント、ストーキング、カルト支配にも見られるという（Evans Stark, *Coercive Control: The Entrapment of Women in Personal Life*, Oxford University Press,2007, p.5）。

特筆すべきこととして、この理論にもとづき心理的感情的な暴力として定義してきたものを犯罪化するという法律が英国で具体化された。Serious Crime Act の 2015 年改正で、Domestic abuse（家庭内虐待）の項に「76 Controlling or coercive behaviour in an intimate or family relationship（親密なあるいは家族関係においてコントロールするある

いは強いる行動)」が追記された。その例示的内容は「友人や家族から孤立させる、基本的ニーズを与えない、時間を管理する、デジタルを用いて監視する、日常生活を統制する(どこにいくか、誰と会うか、着るもの、寝る時間等)、病院に行かせない、お前は価値の無い奴だと繰り返して言う、辱める行為、自己非難を相手に強いる、警察にいかせない、経済的に追い詰める、殺すぞと脅す、プライバシーを明かすと脅す」行為であり、犯罪化される。最高5年の刑が可能となっている。

また、スタークは、女性の人生における罠がジェンダー社会では存在しているという。筆者は非対称関係性に根ざして生成する暴力としてこの側面を位置づけている。

とくに親密な関係性に根ざす暴力は、親子、夫婦、男女、師弟という対になる非対称関係性を背景に生じる。被害者が逃れにくい関係性であり、加害者が自らの暴力の正当化や中和化を展開しやすいという非対称性があり、暴力がそこを根拠に巣くう。この「関係コントロール型暴力」という定義があれば、身体への暴力に付随した人格への暴力を心理的感情的暴力として追加しなくてもよくなる。暴力の実体にそくした定義といえる。言葉が現実理解を深めていく。既成の暴力論を拓き、被害も実相に近づき、加害者への気づきとなる。

5. 多元的社会と社会構築主義

こうして関係コントロール型暴力という言葉も含めて、親密な関係性における暴力の様相をクリアにする努力が続いている。よりよく社会的現実に迫る言葉が構築される過程に着目することは、同時にそれを変わりにくい人間の本性や男性的な特質に根ざしたものとして把握するのではなく、脱構築できるという点を示唆したいからでもある。

社会構築主義は、言葉による社会的現実の(再)構築過程を重視するアプローチとして位置づけることができるとすると、構築された現実の変更を意図するナラティブセラピー(ナラティブアプローチ)は脱暴力のための臨床と相性がよい。これは社会の動態とも関連している。社会の価値の多元化である。複数の視点、視界があるということを前提とするのがナラティブセラピー、ナラティブアプローチである。現実が一枚岩ではなく、多相性を帯びているからこそこの視点は活きてくる。

何かを問題だと定義して当該のシステムの内部で解法を求めるだけだとそれは単なる適応や順応でしかない。社会臨床論としてはそのシステムの反省、更新、省察を考える。社会構築主義はそこを可能にする。まずはそれを語る語彙、文脈、定義の再検討を行う。言葉や定義の枠を広げるか、再構成を意図する。さらに既製品となった定義に付随する解法や実践も省察する。主流となった問題の定義や逸脱を語る言葉だけではなお語り得ない、語りにくい、語られないこと、つまりそこには外部、沈黙があるので、それを斟酌する。さらに語り方も既製品のように主流となっているモードに依拠するとその沈黙のなかにある可能性を切り捨ててしまうことになる。

対人援助と臨床実践の一つ一つの具体的な

検討をおこなう。社会構築主義的に歴史を記述する。それがいかなる社会的編成や集合体として組成された問題群として位置付くのか、そのことの記述をとおして当事者の苦悩や困難が和らぐための再組成へとむかう、つまり再構築過程である。そのためにはナラティブアプローチは有効に位置づく。

6. 複眼的思考−複数のニーズ

もちろんネガティブなことだけではなく、言葉やレトリックは当事者にとってのリアリティを創る。対人援助の理論と実践はそうしたことの宝庫だろう。ずいぶんと以前のこと、子育て現役時代、父親としての育児体験を記していたことがある。「あなたへ」というコラム（末尾に資料として掲載した『読売新聞』）である。そのなかでも読者からの読みが多様に返ってきたものが末尾に掲げたものである。子育てする男性たちに二人称の言葉で呼びかけるようにして私の子育て経験を記していった。

従来は用いないようなレトリックやレトリカル・ワークを体験記述では用いた。それは私自身の再学習過程でもあった。子育てをとおして得たことを伝えるにはそれまでにはない語彙と文脈が求められていた。子育てのナラティブは男性性の語彙の再構築と重なった。ナラティブセラピーやナラティブアプローチをとおして構築される過程を記述するということは、支配的で主流となっていない、もうひとつの、異なる現実を創出するために奏功した。「いま・ここ」で支配的となっていることを再構築し、意味付けの体系をずらしていくことが、異なる現実の構築にむかうことであり、異なる word をひきだし、その支配的な物語から、そうではない別の物語のための言葉とレトリックが模索されることになる。それは一人ではできない協働作業である。その相手は子どもだった。

7. 背景を焦点化する

何かからの逸脱行動をとおして実現させていることがある。とりわけ親密な関係性における暴力や関係コントロール型暴力は、非対称関係性にもとづき、より脆弱なものが対象として選択されること、いかなる形態の暴力であれ、そこから快楽を得ようとしていること、そのためには対象者の人格を破壊する陵辱的な行為が用いられるという経過を辿る。欲望を満たす直接の行為は、暴力、薬物、ギャンブル、アルコール、盗み等である。それらが嗜虐性や快楽ともに常習的行動となっていく。これらの結びつき方の特徴をこそ治療的司法は対象にする。

その行為が表出される際に、満たされない人生という意味づけが心理的不全感や不定愁訴のようにあり、非性的、非犯罪的ニーズが暴力、性行動、薬物摂取、ギャンブル等と結合されていく。そこに女性や子どもの利用、少年愛好が重なり、対象が選定される。怒り（憎悪）、嗜虐性、パワーは性欲、性行動と結びつくだけでなく、薬物、暴力、権威、支配、金銭、怨恨等と結びつき、多様な逸脱行動をつくりだす。

関係コントロール型暴力についての諸相は、

この連載でとりあげてきた(ガスライティング、モラルハラスメント(人格への暴力・侮辱)、ストックホルムシンドローム(生存戦略/加害同一化)、代理ミュンヒハウゼン症候群(献身と承認の欲求)、強いるコントロール行動(COERCIVE CONTROL、強いられた合意、偽自己決定等含む)、忠誠葛藤の利用(弱みの活用、相手の欲望に根ざす)等である。

さらに最近のハラスメント裁判ではこんな判決もあり、「迎合メール」として定着している。「被害者は対等な当事者間での行動とは異なった行動をとらざるを得なくなるとの経験則(例えば、やむを得ず行為者に迎合するメールを送ったからといってセクハラを受けたことを単純に否定する理由にならない)。強制わいせつ行為の被害者の言動としては、通常でない点、不自然な点が多々存在するとして一審が強制わいせつ行為の存在を否定したのに対し、不自然さがあることは認めつつも、性的被害者の行動パターンを一義的に経験則化し、それに合致しない行動が架空のものであるとして排斥することはできない(逃げたり声を上げたりすることが一般的な抵抗であるとは限らない)として、判断を逆転させた事例がある(仙台高裁秋田支判平成 10 年 12 月 10 日)。関係コントロール型暴力を視野にいれたハラスメント論である。

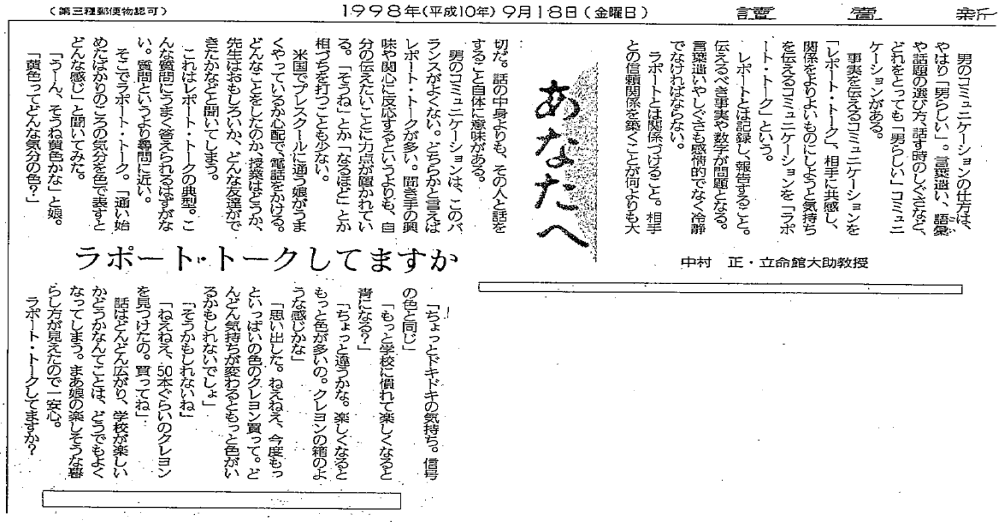
8. 想像力の領域も視界に入れる

言葉をとおして世界や意味がつくられているとすると、認知的な知識領域だけではなく、私たちの想像力や感情の世界もそうであるといえる。たとえばセクシャルファンジーにポルノグラフィーが侵入していることを想定してみる。「ポルノは理論でレイプは実践だ」とまでいえないかも知れないが、想像力についてどこまで自由かと問うてみる。暴力の多用や性的な空想について、文化の拘束力は強い。

私たちの想像力はメディアや既製品が押しつけた物語性の上書きになっていないだろうかと考えてみる。「ナンパしてついてきたのだから合意はあった」と語り、性犯罪の合理化でしかない「レイプ神話」も同じことを指摘した。男性加害者の勝手な意味づけなのでずれている。非対称関係性にもとづく想像力である。

また、DV 加害者が解決の方向性を示すことがある。反省もしたし、これから暴力は振るわないという。喧嘩もあるかも知れないがそれは愛しているからだと言い訳する。被害にあっている妻にむかって解決策を提案する際の想像力は貧しい。同じように、虐待を躾だと、体罰を愛のムチだと言い張る側はいつも他罰的であり、他者への想像力が貧しい。あるいは勝手な意味づけのファンタジーには他者の姿が都合良く登場するといえる。想像的な領域さえもが構築されている事態である。「男性の空想するレイプはレイプの実態を男性にとっても理解しづらいものにしている」とベネイケはいう(40 頁)。加害者と話をしていると被害者への共感は実に難しい。「猥褻ないやがらせ、殴打、のぞき、いたずら電話、露出狂、いやらしい視線、痴漢――女性はつねになんとなく脅えながら生きていかな

くてはらない（31 頁）」。これをレイプ・サインと名づけている。それはいたるところにある。ポルノグラフィー、広告、歌の歌詞、レコードのジャケット、小説・・。想像力さえもが社会の主流となった物語をとおして構築されている。社会構築主義の検討対象をこうした想像力の領域へと広げる必要があるが、それは自己反省を迫るやっかいなものである。



（第三種郵便物認可）　1998年（平成10年）9月18日（金曜日）　読売新聞

あなたへ

男のコミュニケーションの仕方ほど、やはり「男らしい」。言葉遣い、語彙や話題の選び方、話す時のしぐさなど、どれをとっても「男らしい」コミュニケーションがある。

事実を伝えるコミュニケーションを「レポート・トーク」、相手に共感し、関係をよりよいものにしようと気持ちを伝えるコミュニケーションを「ラポート・トーク」という。

レポートとは記録し、報告すること。伝えるべき事実や数字が問題となる。言葉遣いやしぐさも感情的でなく冷静でなければならない。

ラポートとは関係づけること。相手との信頼関係を築くことが何よりも大切だ。話の中身よりも、その人と話をすること自体に意味がある。

男のコミュニケーションは、このバランスがよくない。どちらかと言えばレポート・トークが多い。聞き手の興味や関心に反応するというよりも、自分の伝えたいことに力点が置かれている。「そうね」とか「なるほど」とか相づちを打つことも少ない。

米国でプレスクールに通う娘がうまくやっているか心配で電話をかける。どんなことをしたのか、授業はどうか、先生はおもしろいか、どんな友達ができたかなどと聞いてしまう。

これはレポート・トークの典型。こんな質問にうまく答えられるはずがない。質問というより尋問に近い。

そこでラポート・トーク。「通い始めたばかりのころの気分を色で表すとどんな感じ」と聞いてみた。

「うーん、そうね黄色かな」と娘。

「黄色ってどんな気分の色？」

ラポート・トークしてますか

「ちょっとドキドキの気持ち。信号の色と同じ」

「もっと学校に慣れて楽しくなると青になる？」

「ちょっと違うかな。楽しくなるともっと色が多いの。クレヨンの箱のような感じかな」

「思い出した。ねえねえ、今度もっといっぱいの色のクレヨン買って。どんどん気持ちが変わるともっと色がいるかもしれないでしょ」

「そうかもしれないね」

「ねえねえ、50本ぐらいのクレヨンを見つけたの。買ってね」

話はどんどん広がり、学校が楽しいかどうかなんてことは、どうでもよくなってしまう。まあ娘の楽しそうな暮らし方が見えたので一安心。

ラポート・トークしてますか？

中村　正・立命館大助教授

参考資料１『読売新聞』連載記事

2016年5月25日受理

中村正（社会病理学、臨床社会学、社会臨床論）

ケアマネ　あの目　この目
ゴミ問題　～ICF で考えるゴミ問題の解決方法と、そもそも論～

指定居宅介護支援事業所　あったかプランとうべつ

ケアマネジャー　木村　晃子

私の仕事の領域である、高齢者支援の現場では、「ゴミ問題」が身近にあります。世間を賑わす「ゴミ屋敷」などという大それた問題だけではなく、誰にでも起こりそうな、日常に潜むゴミにまつわる問題です。

介護サービスで解決できる「ゴミ問題」と、解決できそうにない「ゴミ問題」があります。今回は、いくつかの「ゴミ問題」の解決を、ICF で考えてみようと思います。

雪が多い地方では、ゴミステーションの除雪が大変です。また、雪道を歩いて、ゴミを捨てに行くことも、大変になることがあります。

１、「ゴミをなげる（捨てる）までのプロセス」

北海道では、ゴミを捨てることを、「ゴミ　ナゲル」という言い方をします。よその地域の人が聞いたら、ゴミを野球ボールのように放り投げることをイメージしてしまうかもしれませんが、道産子は、ゴミを捨てることを言っています。

さて、家庭から出るゴミが、ゴミ捨て場まで運ばれ、ゴミ収集車が来て回収していくまでには、いくつかのプロセスを経なければなりません。

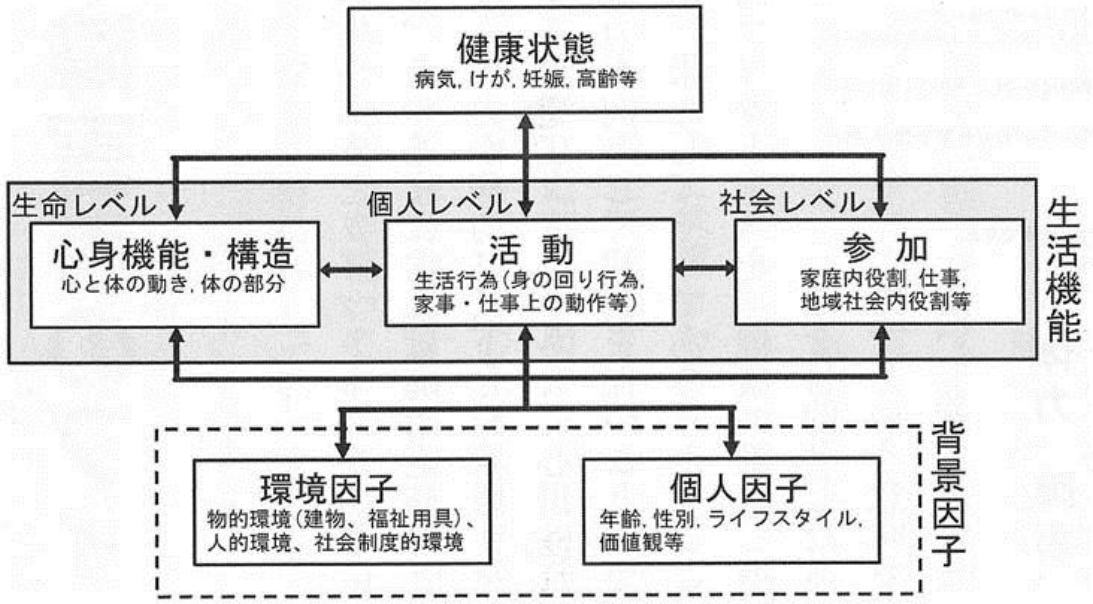
① ゴミと認識する。(要るもの、要らないものの区別がつく。)・・・認知機能

② 自治体の指示に従って分別ができる。・・・認知機能、運動機能

③ 所定の曜日に、所定の時間までにゴミを捨てに行く。・・・認知機能、運動機能

大きく分けると、以上のような３つのプロセスを経てゴミは家庭の外へ持ち出され、結果として、すっきりした暮らしとなります。

２、「ICF」と、「ゴミ　ナゲル」



＊生活機能モデル

上記の、生活機能モデルにおいて、「ゴミを捨てる」という行為は、**【活動】**にあたります。「ゴミを捨てることに、なんらかの問題を抱えている」という状態は、**【活動】**部分の「制限」にあたります。**【活動】**に制限を与える影響は、他のどの項目になっているのか、そこをアセスメントしていくことで、解決策も変化していきます。以下、いくつかの事例で考えてみます。

（＊事例は、個人情報に配慮して、事実情報から加工をしています。）

事例１　８５才。独居。自宅玄関前から、５０メートル先にある、ゴミステーションまで、ゴミを運ぶことが困難になった。隣の家も同じく５０メートル離れている。

アセスメントでは、この男性は、①消化器疾患があり、食事摂取量が少なく、やや栄養状態が低下しており、体力も落ちていました。そのため、②自宅でじっとしている時間が多くなり、

歩く機会がほとんどなく、下肢の筋力が落ちていました。もともと、腰椎のヘルニアがあり、痛みのある方を、かばうように歩いており、今では、③歩行時にはバランスが非常に悪くなっていました。認知機能には支障はありません。

① に対しては、栄養状態の改善のために、**訪問介護**による調理の支援を導入しました。食べたいものを考え、買い物を頼み、ヘルパーと一緒に、消化吸収の良い食事の調理をする、というプランにより栄養改善を目指しました。

② と③ に対しては、運動機会を増やし、歩行機能の改善を図る為に、**リハビリ**での室内外での歩行練習、バランス動作などを行いました。また、ゴミステーションまで歩いて、ゴミを捨てに行けるように、**福祉用具**の利用を導入しました。物を載せて運べるタイプの歩行器をレンタルし、歩行器の操作の練習もリハビリで実施しました。

このケースでは、「ゴミ捨てができない」という**【活動制限】**に対しては、**心身機能**回復へのアプローチと、**環境因子**として、リハビリ（制度サービス）と福祉用具の導入で、解決しました。

補足ですが、隣の家が離れていることで、回覧板を届けることも大変ではありましたが、歩行器を利用し、回覧板を届ける前に隣の家へ電話すると、隣の人も、途中までこちらに向かって歩いてきてくれる、という約束ができたようです。「回覧板を隣に回す。」というのは、町内会（地域コミュニティ）の活動への**【参加】**ということになります。

事例２　８０才独居。ゴミステーションが、道路を渡った向こう側にある。信号のない道路を横切るのは危険が多すぎる。なんとかしたい。

アセスメントでは、心身機能・構造には問題はみられませんでしたが、**環境因子**として、①横断歩道のない道路の向こう側にゴミステーションが設置されている、というマイナスがありました。**個人因子**としては、８０才という高齢です。この地域では、町内会の中の、班という単位の中で、数軒毎にゴミを捨てる場所を決めています。ゴミステーションの設置場所変更は、自治体に届け出ることで可能になります。その段階としては、班の人の合意と町内会の合意によります。ケアマネとしては、本人の希望により、本人の抱える課題を町内会長へ伝え、ゴミステーション設置場所の変更の検討をしてもらうように依頼しました。その後、ゴミステーションの設置場所は変更され、本人が安全にゴミを捨てられるようになりました。**環境因子へのアプローチを行うことで介護サービスを使わなくても解決しました。**その他に、この方がお元気な頃、町内会等において地域貢献の活動をしてきたことは、**個人因子としての強み**であり、

町内会の理解に繋がりやすかったのかもしれません。町内会で、ゴミステーションの設置場所変更について検討してもらう、というアプローチは、ゴミ問題以外にも、元気に暮らしている高齢者でも、いつか日常生活に支障が出てくるという当たり前でありながら、見落としがちな課題を地域で意識するきっかけになりました。

事例３　６０才。慢性疾患（筋・骨格系疾患）により、歩行困難。屋外への外出は一人ではできない。配偶者が、病気のため療養することになり、ゴミ捨てができなくなった。自宅内のことはなんとか自分でしているが、ゴミ捨てだけは外出を伴うためできない。

筋・骨格系の疾患があり、**心身機能・構造にマイナスの因子**があります。けれども、訓練して改善が見込める状態ではありません。このケースにおける心身機能の目標は、現状を維持することであり、転倒や骨折などのリスクを避けることでした。ゴミ捨て以外の日常生活動作や家事動作などは、不十分さもありながら、自分で管理できています。ゴミ捨てだけに、何らかのサービス導入とはならないのです。本人と話合った結果、週１回程度のごみ捨てを近所の人へお願いしてみる、ということになりました。自分で外出できず、相手先の電話番号もわからないため、一旦はケアマネが近所の人へ状況を伝えに行くことにしました。なかなかタイミングが合わずにいたところ、本人からケアマネのもとへ連絡があり、近所の人への依頼は取り下げるとのことでした。解決策としては、子どもが月のうち、何度か訪問してくれることになり、その時にゴミ捨ての協力をしてもらえることになったということです。**本人の環境因子（人的環境）がプラスに作用し、介護サービスを利用せずに解決しました。**ゴミ捨てだけではなく、子どもの来訪があることは、本人にとっても心強いことであり、また、ゴミ以外の生活課題への相談対応もできる可能性が広がりました。ケアマネのアプローチとは別に、本人が自分の課題を子どもに相談することが解決へのきっかけとなりました。

事例４　９０才独居。認知症あり。ゴミの分別ができない、捨てる曜日の認識ができない。

心身機能に、認知症による、理解や判断能力の低下があります。**環境因子**としても独居であるのは、マイナス要因です。この方が、ゴミの分別ができないまま、指定される曜日とは違う日にゴミを捨てるため、近所の人が異変に気がつきました。幸い、昔から親しい付き合いをしてくれている人だったため、それからは、こまめに訪問してくれるようになり、ゴミの分別や、指定の曜日にゴミを捨てに来てくれるようになりました。これは、**環境因子**（近所に親しい付き合いのある人がいる。）がプラスに作用した結果です。ゴミ捨ての支援は、近所の方が担うこ

とになりましたが、その他の生活にも支援が必要な状態だったため、他の部分に関しては、介護保険のサービスを計画することになりました。近所の目配りと、認知症ケアについては専門職の介入がありました。

「ゴミ捨て」にニーズがあった時に対応するのは、ゴミ捨てボランティア？でいいの？！

紹介した４事例では、結論として、ゴミ捨ては、自分で行う、システム変更（ゴミステーションの変更）、家族が代行、近所の人の支援などで解決し、介護サービスの利用にはなりませんでした。

ケアマネは、利用者に困り事が生じると、簡単にサービスを当てはめ対応している節はないでしょうか？ケアマネは、介護保険サービスのマッチングメーカーか？と揶揄したくなるようなケアマネジメントを展開しているケースも見受けられます。

また、「新しい総合事業」の名の基に、制度ではない地域資源の構築を検討している最中でもあります。（既に新しい総合事業を展開し、要支援１・２の認定者に対する保険給付外の資源をマネジメントしている自治体もあることでしょう。）地域の中に、困り事に対応するサービス資源を生み出すことはもちろん必要なことですが、困り事の背景をしっかり理解した上で、アプローチしていくことが大切です。本人自身の持っている力（内的資源も含む）を活用していくことを忘れてはいけないと思います。

「ゴミを捨てることができない。」という課題は同じでも、解決方法はひとりひとり違うのです。その違いを蓄積した上で、共通する地域の課題を集め、地域全体で取り組むことが**【環境因子】**としての環境整備なのだと思います。

ゴミの処理について　蛇足・・・分別は必要か？

燃えるゴミ、燃やせないゴミ、燃えないゴミ、資源ゴミ、危険ゴミ、私の暮らす町のゴミの分別方法です。燃やせないゴミ、というのは、ナイロン系のゴミです。お惣菜などがいれてあるパックなどはこれに該当します。燃えないゴミは、金属類など、燃えきらず残ってしまう質のものです。ダンボールや新聞紙、ペットボトル、空き瓶や缶などが資源ゴミです。危険ゴミは、傾向管や電池などです。生ゴミは燃えるゴミです。もう数年前から、この方式になっています。これが「エコ」だと信じていたので、何の疑いも持ったことはありませんでした。けれども、今回ゴミの分別について書かれた本を読んでみました。すると、地域によってゴミの分別や処理に違

いがあることは知ってはいましたが、これほどまでの差があるとは知りませんでした。
分別が多いところでは、３４種類もの分別、ゴミ収集車が来ない地域、などもあるようです。
その善し悪しについては、やはり地域の特徴などもあります。そして、私自身が暗黙のうちに信じていた、「環境とコスト」について、分別が必ずしも、環境にとって良い結果、コストを減らす結果にはなっていないということでした。

そもそも、消費に偏る暮らしでは、ゴミは増える一方です。物を大切にすることすら忘れてしまっていないでしょうか。消費と浪費を繰り返し、私たちには何が残るのでしょう？
ゴミをどのように処理していくか、ということも大切かもしれませんが、ゴミを出さないような暮らし方を身に付けることが大切だと感じます。

ゴミを捨てるために、また新たなサービスがそこに生まれる懸念。サービスがあれば使う社会。もし、そのサービスがなかったら出てきたであろう手だても、結局光を見ずになくなっていきます。
生きることは、生産と消費だけなのでしょうか？
紡いだり、残したりしていくことも、考えないといけないと思いつつ、これは、蛇足・・・

＊参考文献：ゴミ分別の異常な世界　リサイクル社会の幻想　杉本裕明　服部美佐子　幻冬舎新書

街場の就活論 vol.25

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

団 遊（だん あそぶ）

現役バリバリ就活生のつぶやきから

私が代表をつとめるアソブロック株式会社では、現在 2017 年春入社の学生に向けて「コンビ採用」という採用活動を展開しています。これは学生にコンビで応募してもらい、コンビで選考し、コンビに対して内定を出すというものです。つまりひとつ内定を出すと二人採用することになります。vol.24 にその狙いなどを書きました。

現在通算で 100 コンビほどが受験し、うち 1 コンビに内々定を出しました。今回はその選考過程で出会ったある学生の就活への感想から、ぼくが思うことをツラツラと書いてみようと思います。その学生には三つの質問を投げかけました。「就活をしていて疑問に思うこと」「就活をしていて良かったと思うこと」「就活がもっとこうなればいいのに」です。まずは疑問に思うことからです。

▼ ▼ ▼

SPI テストについて／友達と一緒にやっているという声や、他大学の子に解いてもらったという声を去年から聞きます。企業は知らないの？やっている意味あるの？

ちなみに SPI テストとは、リクルートのグループ会社が提供する学生の能力と適性を見るためのテストです。SPI にとどまらず、この手のテストはたくさんあります。最近は企業が受検会場と時間を指定し、そこで受検してもらうことで公平性を担保しようとするケースも多いですが、自宅 web 受検の形式もあり、疑問が湧いたのと思います。この手のテストはあくまで選考の参考程度ですから、企業側もこれまでの流れで受けてもらっていることも多いと思います。堂々と不正がまかり通るということは、裏を返せば、企業はそれほど結果を重視していない、ということでしょう。

どこでもいいから出しまくる友人／70社エントリーシートを出して半分も通ってないという友人がいます。人は人でそういうのもやり方としてはひとつだと思うけど、もっと通るような方法もしくは、絞り方みたいなんがあったんじゃないかなぁと思います。やばいやばい、しんどい、疲れたって言っています。

エントリーシートを出しまくっている人のエントリーシートは見て分かる、ということを案外理解していない学生が多いです。もちろん学生も同じエントリーシートは出さないのですが、いくつか雛型があり、要素の使いまわしと、一部オリジナリティある表記を上手く絡めて作成してきます。エントリーシートを出しまくるということは、就職活動の軸が決まっていないこと表れであり、そもそも合格可能性が低い人たちです。

大学受験で数を撃っても当たらないのと同じで、就職活動も数を撃っても当たりません。例えば内定を 5 つもらった人がいたとして、その彼・彼女の受験社数を聞いてみても、それほど多くはないと思います。狙い球を絞らないと、打率は上がりません。たまにイチローのように来た球をすべてヒットに出来る人もいますが、そういう人は就職活動の天才です。その才能は、できれば別のことに使うべきだとも思いますが、大学内では、得てしてそういう天才が「就活とは」を語ります。

▼　▼　▼

次に就活をやっていていいなと思う事を聞きました。

自分が好きな企画や、広告を仕事としている人と面接で話が出来るのが何より楽しい。

素敵なことです。ちなみに「こんな風に会いたい人にどんどん遠慮なく会わせてもらえる時期は就職活動の時だけだから目一杯活用するといいよ」とアドバイスしている人をよく見かけますが、社会人になってからも、会いたい人に「会いたい」と言えばたいがい会うことができます。社会人になると「お忙しい人たちに、そう簡単に会いたいなどと言うべきではない」という遠慮が個々人の中に生まれるだけのことです。しかし社会人になって伸びる人は、無遠慮にどんどん「会いに行ける」人たちであることが多いように思います。

大人でも、目がキラキラしている人に会えるのはいい刺激です。自分もこんな大人になりたいと思います。

就職活動中に会う人は、人事が厳選した「目がキラキラした人たち」なので鵜呑みにはできません。ブラック企業と呼ばれる会社にも、その中で目をキラキラ輝かせて働いている

人が必ずいます。ブラック企業とは、多くの人にとってツラい会社（法令違反は別の問題として）のことで、全員がツラい思いをする会社ではありません。逆を言えば、優良企業と言われる会社の中にも、目が死んでいる人は必ずいます。話を聞いていて特におもしろいのは、優良企業と言われる会社で働く目の死んでいる人たちです。そこには「働くとは何か」という問いかけが隠れていることが多いからです。

▼　▼　▼

最後に、就活がもっとこうなればいいのにを聞きました。

お金／東京にでてくるのに、お金がかかる。5社受けるとして毎回、それぞれの選考で東京にでてくるとしても、1社4回でてきて、5社で20回。往復の夜行バスで、1万円。夜行バスでも20万円かかるということです。アルバイトでも厳しい学生、親には頼めない学生たくさんいると思いました。正直夜行バスで連続で東京来るとやっぱり体調良くはないですし。週1で東京ではなく、5日間連続で面接とかがあってもいいなと思いました。

関西の私大などは特に大変だと思います。というのも、例えば北海道や九州といった遠隔地の場合は、東京でシェアハウスをして就職活動を乗り切るなど、節約術が引き継がれていることが多いからです。また、大学側も地元企業への就職がメインにならないことを理解しているので、大学の東京事務所で仮眠ができたりと、サポート体制を組んでいることも多いのです。一方で関西の大学の場合は、地元企業も多く、東京も日帰り距離のため、金銭課題が就活問題の中心に来にくいのです。この学生が言うように、企業の説明会や面接も、インターネットのホテル予約のように空き日程表が掲示され、自分で好きに組めるようになると良いのでしょう。そんな風に、もうすぐなる気もします。

親との関係／小さい会社は親に説明したときに親の反応が、少しうーんって感じになってしまうのがとても心苦しいです。自分の好きな道に進みなさいとはいうけれど、大きい会社の方が良い安心という、昔の考え方みたいなものがあるみたいで、なんか説得というかうまく良さを伝えられるものがあればいいのになと、思います。ネットではないツールで。男の子の友人でいえば、アパレル業界が第一志望らしいですが、どうしても親は反対だそうです。反対まではいかないけれど、うーんって感じみたいです。できたら、大きい会社、商社や銀行など。親心としては、22歳になり責任を自分で持たないといけない年齢だけれどもやっぱり子供だし心配なところと、昔からの考え方みたいなものがあるのだなろうなと思います。

「子どもが決めたことは、素直に認めてやったらいいんや！　親が口を出してもろくなことにならん」と考える人が大半でしょうし、ぼくもそう思いますが、実際はうーんってな

る気持ちもわかります。それは例えば「お父さん、ちょっとニジェール（アフリカ大陸にあります）行ってくるね」と言われた時に「うーん」となるのと同じです。知らないことに無責任に「いいんじゃないか」と言えないのは、ある意味普通で当然の反応です。基本的にどの親も子どものことを信じたいと思っています。だからあと一押し、「信じた道で頑張れ」と言わせるための素材集めが必要です。大手の内定が親受けがいいのは、親が知っているから、ただそれだけです。でも数年前まで、あの楽天でさえ「いかにして親御さんの信頼を集めるか」が採用課題で、三木谷さんが親に向けてスピーチをする内定パーティーが開催されていたと聞きます。

内定企業が信頼の素材集めに積極加担するケースもあれば、そうでないケースもありますが、少子化世代のいまどき学生の就活には、親との関係性も自分で整理する力も求められているのかもしれません。ひとつ間違いないことは、親の言うとおりに道を決めて将来後悔することがあったとしても、それはすべて自分のせいであり、親のせいではないということです。つまりそこが、学生と社会人の大きな差なのでしょう。最近は企業の採用意欲も高まり売り手市場化し、一時期よりも就活は楽になったという声も聞きますが、いつの時代も就活をする学生はタイヘンですね。

文／だん・あそぶ
「社会課題を創造的に解決する」をモットーに様々なプロジェクトを手がける。元は雑誌の編集者。立命館アジア太平洋大学では「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にそれぞれの人生のビジョンを考えるキャリアの授業を展開している。

カウンセリングのお作法　第七回

家族カウンセリング　家族を視野に入れた支援

CON(こん)カウンセリンオフィス中島　中島(みずとり)弘美

家族を視野に入れた支援

今回は、家族カウンセリングについて、話をします。

カウンセリングと言えば、一対一の面接をイメージする場合が多いと思いますが、家族を視野に入れた面接あるいは、家族の複数の人が来所して行う面接を、家族カウンセリングといいます。

今から三十年ほど前、日本語で書かれている家族療法や家族カウンセリングの本は、数冊しかありませんでした。今では、心理、社会福祉、医療などの分野で家族対象の支援に関する文献や研究が数多くあり、関心の広がりを感じます。

家族療法、家族カウンセリング、家族支援と良く似たキーワードがあり、いずれも、家族の視点にたって、家族とともに問題解決等の支援をすることを意味します。

特徴は全体でとらえる視点

点　→　全体○

家族カウンセリングの大きな特徴は、ものの見方です。ひとことでいうと、点ではなく、全体でものをみることです。

家族に置き換えると、支援を必要としている子どもがいるとすれば、いっしょに生活している家族、学校、地域など広い視野で状況を理解してアプローチします。

そのように、全体でとらえるという視点を持つことで、気がつくことがあります。つまり、それらの考え方は、地域の出来事、学校、企業、組織での事象にも当てはまることが多く、相互作用からどのような現象が起こるのか、の理解につながります。

家族療法

親が不仲で離婚したから子どもに問題が発生した、だから、家族療法が必要だという図式があります。子どもの言動は、家族に問題があるのが原因で、治療が必要だという考え方です。一見、もっともらしく、飛びつきたくなる発想です。実は、この延長線上には、悪者追求しかなく、変化につながりません。

本来、家族療法は、家族や関係者がいかに協力して問題解決をしていくかという、家族とともに問題解決をする、関係者協力支援で、家族の回復力、解決力を引き出すことが目的です。

家族カウンセリングは

回復力や解決力を引き出すアプローチ

はてな子さん　カウンセリング初学者

家族療法って、家族関係がよくないから、治療するっていうことですか？

ＣＯＮ子さん　心理カウンセラー

家族療法は、家族が協力して問題解決する方法のことです。子どもについて困っていることがあれば、家族や学校など関係している人が協力をすることです。

心理や社会福祉、医療の領域で関心が深まっています。

＜視　点＞

家族の良いところや、強みに注目しながら、どう変化していくのがよいかを描きます

家族面接のポイント

ジョイニング　家族の中に参加させていただく

初回面接で家族と関係づくり

家族カウンセリングの初回面接では、なんといっても家族との関係作りが重視されます。家族と波長を合わせるということです。

何か課題を抱えている内容そのものを理解しつつ、一方で、家族がその課題をどのように受け止めているのかを把握します。あくまでも、ポイントは、家族の中に参加させていただくことで、この信頼関係作りのプロセスのことをジョイニングと家族療法家のミニューチンは説明しています。

ジョイニングのことをさらりと書いていますが、家族との関係作りは、極めて慎重に行う必要があります。

来所される家族は、ときに反省を口にしたり、問題は、別の何かにあると話したり、悪いのは○○だとそれぞれの課題に対しての受けとめ方があります。

例えば、高校を中退して働きたいと言い出した子どもさんがいるとします。子どもはやめたい、親はやめてほしくない、学校の先生から問題は家庭にあると指摘されるなかでの家族面接となると、最初の関わりが大切です。

学校をやめるか、やめないかの話に対して、これから家族がどうするのが良いのか、たとえば二十歳のときにどうなることを希望するのかを考えながら、子どもや親、学校それぞれの意見や考え方を受けとめる必要があります。

巻き込まれず対立を作らずバランス良く

カウンセラーは、バランスが大切です。

親と同じ立場にたって、子どもに話すことを避け、反対に、子どもの言い分に耳を傾け過ぎると、親と対立関係になる可能性もあります。

家族とのやりとりのなかで、誰かひとりだけの意見を聴いていると、巻き込まれます。巻き込まれることで、別の家族と意見が分かれ、誰かの行動を攻撃的だと感じることもあり得ますので、家族の中にそっと参加させていただくよう、家族それぞれから話をうかがいます。

一方で、家族の誰かが話をしているとき、別の家族はどのような反応をするのか、話していないときの家族の様子も把握します。

「こんにちは、きょう、ここに来られてどんな話ができたら良いと思われますか、どなたからでも、どんなことでも結構です、お聞かせください」

このように、家族が主役になって話せるような配慮のもとで家族面接がはじまります。

家族との信頼関係作りがポイント

ジョイニング（Joining with the Transaction）とは

家族との信頼関係を築くため家族交流に参加させていただくこと

ミニューチンの家族療法より

・トラッキング（Tracking）

→支持的コメント　家族が言ったことばの繰り返し　興味をもってきく

カウンセラーがリードするよりも家族のあとをついていく

・アコモデーション（Accomodation）

→カウンセラーの行動を家族の交流に適合させる　家族構造の保持

例）権威的な父がすべて窓口になっていれば父を通して質問をする

・マイム（Mimesis）

→言葉遣い、しぐさ、感情的表現、比喩的表現等、言語、非言語的行動をまねる

家族面接のトレーニング

役割演技をすると家族理解が進みます

家族カウンセリングの練習で家族のそれぞれの様子を受けとめる

家族カウンセリングのトレーニングを何回も繰り返すと、演じてみて初めてわかることがあります。

まずトレーニングで、最初に心がけるのは、家族それぞれとバランスよく交流することです。そして、ご相談に来られている方、全員の言葉と言葉以外の様子を受けとめるようにします。

面接のときは、家族それぞれの表情をみるために、かなりキョロキョロ見渡すことになります。面接室での様子をしっかり見せていただきながら、メモをとり、時間管理をして、いまそれぞれのご家族は、どんなお気持ちで面接室におられるのかを想像しながら、すすめていきます。

演じると家族の心境がわかる

カウンセラー役とともに、子どもの役、お父さん役、お母さん役など、家族のさまざまな役を交代して演じてみましょう。

小学生二年生の男の子太郎くんと、会社員のお父さんと、お母さんとの役割演技の場面を考えてみます。

朝になったらお腹がいたくて、学校に行けない状態はどんな感じかな?と子どもの気持ちになって演じます。同じように、心配するお母さんの気持ち、その様子を見ているお父さんの気持ちとは? 設定を変えて練習します。

どうしても子どもの心境に関心が行きがちですが、仕事が忙しい状態でカウンセリングに来られたお父さんの気持ち、それをどう感じているのかのお母さんの気持ちなどを考えて、カウンセラーの質問にこたえていきます。

すると、母親の心境はわかりやすいとか、仕事で忙しいお父さんの気持ちがやっと少し理解できたとか、あまり家にいないお父さんは、子どもの対応が苦手なのではなく、様子を知らないだけとか、発見があります。

子どもの課題も、不登校やプチ家出、進路変更希望、リストカットなど、さまざまな役割を次の頁に書いてみました。

みなさんが対応されているクライエントさんや家族さんについても演じてみてください。

最初は少し恥ずかしいかもしれませんが、その役になりきって演じることで理解が進みます。

家族面接のトレーニングをしましょう

家族面接のロールプレイ（役割演技）をしてみましょう　４人組になります　設定サンプル

設定１　父親　母親　子ども（小学２年生男子　太郎）お腹が痛くて学校に行けない

設定２　父親　母親　子ども（中学２年生女子　はな）プチ家出　友人の家を泊まり歩く

設定３　父親　母親　子ども（高校１年生男子　一郎）学校がおもしろくない、やめたい

設定４　父親　母親　子ども（高校２年生女子　かな）情緒不安定　リストカット

・初回面接の最初の５分間

カウンセラーのトレーニング課題『家族全員と何らかの形でかかわる』

ことばかけの例

きょうはどういったことで来られましたか？　どなたからでもお聞かせください

これからどうなったら良いと思いますか？　家族それぞれにたずねる

キーワードのくり返し　大切なことばが話されたときにはくり返し　例　お腹が痛くなるのですね

ふりかえり　　カウンセラー役のうまかったところをコメントする

（＋α　家族面接ロールプレイのテーマ『家族のリソースは何か』）

映画の中の子どもたち

第24回 スポットライト
－ジャーナリストの魂－

川﨑　二三彦

気になるニュース

かつて私は、全国児童相談研究会（児相研）のメーリングリストに、「気になるニュース」を見つけては不定期に投稿していた。かれこれ 10 年以上前にさかのぼるだろう。おもには、児童相談所関係の出来事であったり、虐待がテーマの事件などである。

本作品を見て、あらためて過去のデータを調べてみると、2007 年 7 月 17 日 AFP による「ロサンゼルス聖職者の児童性的虐待事件、805 億円で和解」という記事を投稿していた。次のような内容だ。

「米国最大のロサンゼルス大司教区の司祭らが数十年間にわたって信者の子どもたちに性的虐待を行っていたとされる事件で、同大司教区が被害者らに和解金 6 億 6000 万ドル（約 805 億円）を支払うことで原告側と合意したことが 16 日、明らかになった。

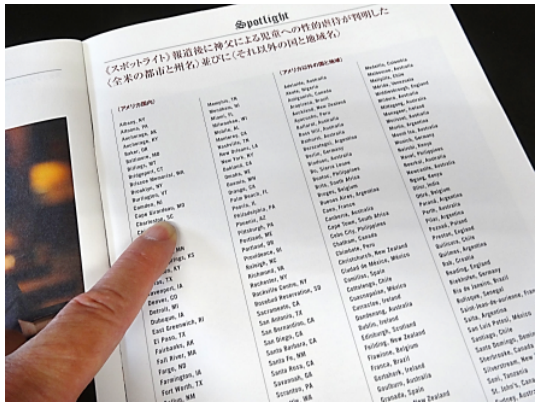
被害者 508 人を代表する原告側と被告の大司教区側の双方の弁護団が同日、ロサンゼルス高裁に出廷し和解を確認した。これにより、聖職者が関係したスキャンダルとして 2002 年にこの事件が発覚して以来、5 年間におよんだ裁判に終止符が打たれた」

この記事に対して、私は次のようなコメントを書いていた。

「こんな事件があるのかと驚いた」

「ほんとにこんな高額の賠償金を？誤りではないかと、思わず再確認した」

コメントを読み直す限り、こうした事件があると知ったのは、このときが初めてのことであろう。とはいえ、聖職者が性的虐待行為を行ったというので驚いたわけではない。事実、この報道に接する 2 年前には、当時私が勤務していた児童相談所管内で、キリスト教系新興宗教団体の牧師が地位を乱用、信者の少女 7 人に対して計 22 件の性的暴行を繰り返したとして、求刑どおり懲役 20 年の刑が確定もしている（聖神中央教会事件）。



問題は、こうした性犯罪が、長年にわたり多数の聖職者によって全米各地で、否、全世界で行われていたということだ（上の写真参照、ここに記載の地域すべてで犯罪が行われていたという）。

長い道のり

さて、こうした事件が自然に明るみに出ることは、通常起こり得ない。特に、世界中のどこであっても大きな影響力を持つカトリック教会組織の問題となれば、なおさらだろう。では、こうした事件はどのようにして発覚したのか。正直言って、当時の私はそこまで関心を払っていなかったのだが、事件が表沙汰になるまでには知られざるドラマがあり、それをまざまざと示してくれたのが本作品であった。アメリカ東部ボストン市で発行されている日刊地方紙ボストン・グローブのスクープを題材にした映画である。

教会は、聖職者による子どもへの性犯罪に気づくと、当人を病気療養や休職扱いし、次いで片っ端から転属させる。しかし、密かに行われるこの人事異動は彼らを罰するものではないから、必然的に広汎な地域に被害児童を広げることに貢献するだけであった。

本スクープが掲載された紙面のタイトルが、映画の題名にもなった「スポ

ットライト」であり、記事を担当するスタッフは、陰に陽に妨害する協会に屈せず、極秘のうちに調べ上げ、動かぬ証拠を一つ一つ積み上げつつ、個人の不祥事ではなく、組織犯罪であることに焦点を当てて確認作業を続けていく。途中、9.11 テロも発生して、一時は全員がそちらの取材に動員されるなど、さまざまな困難があっても、本記事はそれを乗り越え、ついには一面トップを飾ることとなるのである。

長い道のりだったというほかないが、翻って考えると、性被害を受け続け、トラウマを抱えているのに泣き寝入りを余儀なくされ、懊悩していた人にとっては、もっともっと長い時間であったと言えよう。

波紋

記事が出たあと、スタッフは、読者からどんな反応があるのか不安と期待の入り混じった気持ちで受話器を握る。何しろグローブ紙は、定期購読者の 53%がカトリック信者なのだ。

待ち受けているところへじゃんじゃん架かってくる電話の内容は、しかし私の想像とは違っていた。

「協会を誹謗して怪しからぬ」

「勇気を出してよくぞ書いてくれた」

こんな反応が交錯して電話回線がパンクすると私は思っていたのだが、実際は、

「今まで誰にも黙っていたけれど、実は……」

「私も過去に……」

記事を契機に、これまで堪え忍んでいた人たちが、この記事によって勇気づけられ、記者を信頼して次々に自らの被害を告白してきたのである。「スポットライト」は、その後ボストン教区にかかわる 600 以上の関連記事を掲載し、ピューリッツァー賞も獲得する。

生きられなかった人も？

とはいえ、彼らも自ら顧みて考える。というのは、聖職者による性犯罪には以前から気づいており、単発的には記事にもしていたのである。だから言う。

「私たちは暗がりの中を歩いていた。それが間違いだとは知らずに」「光が差して初めて、間違いに気づくのだ」

反省、怒り、正義感、使命感、ジャーナリスト魂、etc。さまざまな感情が混ざり合って闘う力が引き出されて初めて、光が差し込み、無理だと諦めていたことも、結実するのである。

と、ここまで思いつくまま書き連ねてきて、ふと気づく。私はこの映画をフィクションだと思わずに見入っていたということに。ただし、一言弁解させてもらうなら、それこそが、事実の確かな裏付けを力にした本作品の魅力だと言えよう。

それはさておき、映画の中で重く受け止めざるを得なかったのは、成人した何人もの被害者が、問われるままに苦難の道を語った後で付け加える言葉だ。

「でも、私はまだいいんです。生きていますから……」

＊ 2015/アメリカ
＊鑑賞データ 2016/05/02 TOHO シネマズ二条
＊公式 HP http://spotlight-scoop.com/
＊ Twitter への投稿 http://coco.to/movie/40389

＊題名を click すると本文へジャンプします。

へこれまでの連載へ
第 1 回 プレシャス
第 2 回 クロッシング
第 3 回 冬の小鳥
第 4 回 その街のこども
第 5 回 八日目の蝉
第 6 回 いのちの子ども
第 7 回 ラビット・ホール
第 8 回 サラの鍵
第 9 回 少年と自転車
第 10 回 オレンジと太陽
第 11 回 孤独なツバメたち
第 12 回 明日の空の向こうに
第 13 回 旅立ちの島唄
第 14 回 くちづけ
第 15 回 もうひとりの息子
第 16 回 メイジーの瞳
第 17 回 ファイ
第 18 回 思い出のマーニー
第 19 回 ショートターム
第 20 回 真夜中のゆりかご
第 21 回 きみはいい子
第 22 回 エール！
第 23 回 サウルの息子

コミュニティと集団精神療法
（　5　）
― 災害とメンタルヘルスケア ―

藤 信子

5 月 22 日が日本集団精神療法学会（JAGP）の「第 38 回東日本大震災関係者の相互支援グループ」の日だったので、21 日午後仙台空港に着いた。仙台駅で人が多いなと思っていたら、G7 の財務相・中央銀行総裁会議が仙台で 20-21 日に開催されたとのことだった。「復興の状況を主要国の要人、メディアに見てもらうことが出来た」という財務大臣のことばに、違和感を感じ、それから自分が少し怒っているとも思った。三陸沿岸の土地の盛り土に家を建てられるのは、まだ 2-3 年かかるようだし、福島から避難している人のことはどのように考えているのだろう。日本の復興する力を各国にアッピールしたかったのだろうけれど、G7 に参加している人たちやメディアはそんなにのんきなのだろうか。もし素晴らしい復興の様子だと言ったのなら、それはリップサービスではないだろうかと思った。

G7 財務相・中央銀行総裁の会議に集まる人たちは、災害で傷ついた人たちのメンタルヘルスと、災害後の不安で不自由な生活の中

で、被災者の精神的な負担は大きく、様々な困難が今起きてきていることは、関心の他なのかもしれない。経済や社会の機能の方が大で、人の精神的な問題は次だという考えの人は多いのかも知れない。個人のメンタルヘルスというものを、個人の中で完結させる考えかたでは、そうなるのだろう。

熊本地震が発生したので、JAGP の相互支援委員会として「被災地に行く前に―支援者のメンタルヘルスのために―」という記事をホームページにアップした。これは相互支援グループを継続する中で、支援に行く前に知っておいたほうが良いのではないかと感じたことがあったためである。A4 一枚にプリントアウトできるようにしているので、支援に出かける人には読んで欲しいと思っている。職場で被災地への派遣の要請があった時、またヴォランティアで出かける時、家族や職場に理解をしてもらっていれば、被災地から戻ってきた時に感じる心理的な溝が大きくならずに済むのではないかと思い、職場や家族との関係に配慮することが、自分自身のメンタルヘルスに影響を与えるという良い例になると私は思っている。

この文章を作成しながら、仕事の業務で派遣されるのに、家族に気を使う習慣は、日本には少ないのかも知れないと考えた。職場に関しても同じで、「仕事」なのだから、留守で欠員が生じることは仕方が無いということになるのだろうか。仕事に関しては、しなければならないことだから、そこで生じる負担は仕方が無いということなのだろうか。このように考えるのは、やはり日本の職場では組織の決定は大事で、それを伝える上司の命令は守らなければならないという制度が、まだ人々の精神にあるからではないかと考えてしまう。明治憲法の元で家父長制の中で決められることは、そこには個人が関係性を考える必要は無かったと思われる。そんなことは意識的にはもう関係ないように暮らしているけれど、そこを十分に違う制度として、今の自分たちの人間関係を見ているとは言い切れないのではないか。

職場の人間関係と言っても、日本の会社はつい最近まで家族そのものだったと言える。社員とその家族を丸抱えにして面倒を見るというような組織なのだから、社員は上司（そして結局は会社の父親である雇用主）の言うことを聞くことが当たり前だったらしい。らしいというのは私は会社勤めをしたことが無いから、その辺りはわかりにくいことがある。そのような組織では、仕事をすることで生じる相手の負担に気遣うことが人間関係を円滑にする真も知れない、ということにはなりにくいかもしれない。

「被災地に行く前に、家族や職場の理解を得る」ということを考える時に、それは人間関係というものは、やはり自ら主体として引き受けて考えることではないかと思う。個人のメンタルヘルスを、個人という有機体の中

だけで考えるのは、日本人の家制度の影響と、もう一つの視点は、病気は人という器官の中で起きる、という生物学主義的な考え方だと思う。しかし、宮城県では震災の２−３年後に、DV、虐待の件数画増加し、2012 年,2013 年の中学生の不登校率が全国１位である（足立 2015 ）など、子どもの育つ環境は不安定であることが推測される。災害後の生活の困窮は、災害から年を重ねるごとに、格差が広がっていっている。そのような環境が改善されずに続き、不安は解消されずにいるとしたら、人間関係への気遣いに割く余裕はなくなるだろう。人間関係をサポートする中で、環境が整えられると言う面はあると思う。

財務大臣ではないが、復興というと建物、道路等の設備のことしか未だに頭に浮かばないと言う人は多いのかもしれない。そして災害との関連のメンタルヘルスといえば、PTSD の発生率の問題になり、個人のカウンセリングなどが受けられるなど、個人単位の対応になるだろう。しかしそろそろ個人の病理としてではなく、コミュニティでの人間関係をサポートするという中で、メンタルヘルスを考えるという視点に立つ必要があるのではないだろうか。

文献: 足立智昭(2015)不測の事態に応える―３年間の PTSD の予防活動を通して―. 発達障害研究 37(１) 44-52.

蟷螂の斧

次の一歩

社会システムを変える
第１回
地域子育てネットワーク

何事にもきっかけは必要だ。この連載を開始するそれは２０１６年９月に長崎・ハウステンボスで開催される日本家族研究・家族療法学会である。そこで私は「木陰の物語」パネル漫画展をする。そしてワークショップも担当する。更に、自主シンポでの助言者も卒院生の依頼で引き受けた。また、同学会誌には１０年余り「連想映画館」という4頁コラムの連載も続けてきた。それを今年度いっぱいで終える事になっている。そんなこんなでまぁこの際、一度くらいいいか！と思って、六十代のフィナーレにあれこれ受けることにした。

しかし長崎大会会長・児島達美さんからの提案、「東豊さんとのコラボWS」なんて、何が出来るんだろう？、そう思いつつ、まずは一度打ち合わせをしようと言うことになったのが3月下旬。ところが約束当日、児島さんは緊急事態で来られなくなり、京都駅ビルのがんこ寿司で東さんと二人（急なキャンセルはきかないので、食べ役に一名、龍大院生同行）での話になった。そこで話しているうちに、今語りたいテーマの中核が「社会システムへの変化処方」であることに改めて気づいた。そして一任された大会WS案内文にこう書いた。

家族支援入門の東門・西門・南門・北門

入門の入口にも四方あります。２０１６年３月１９日、京都某所でたっぷりと、このWSのための打ち合わせをしました。そこで、参加者があらかじめ予想するような、私達も飽きているような展開はやめておこうと合意しました。ただ、初学者、フレッシュマンに不親切な業界語りにもしたくない。やはり、学会のWSであることは踏まえておきたいと話しあいました。

そこで今回は、滅多に顔を合わせることのない二人で、切り口を少しサイズアップして、社会システムというものをまな板の上にあげる事にしました。この切り口での入門です。これには団の意向が強く作用しています。東は「なんでもええですわ！」と言いました。

実は今回の学会では、別のスペースで家族マンガ展が開催されていますし、学会誌には映画の連載を１０年も続けています。私のやりたい放題みたいですがご容赦いただいて、そんな素材も使って、（1）団が語り東が問う、（2）東が語り団が問う（3）参加者が小グループになって、自分の周りの社会システムの課題を語り、二人の話を受けて介入を話しあってみる、という時間配分を考えました。

果たしてこれが面白くなるのか、期待はずれになるのか、責任は持ちかねます。面白くなればいいなぁとは思っていますが、どうなるかはライヴですから、参加者の皆さんと大いなる方の御心のままです。　　（文責　団士郎）

システムは部分が全体と連動している。始まりと終わりは直線的に因果で結ばれたりはしていない。「風が吹いたら桶屋が儲かる」、これを因果論的に説明したものは落語にはなっても、合理科学にはならない。しかし現実には、そういうことが多々ある。

この連載を書き始めるに当たって、構成をどうするかについては随分思案した。そしてたどり着いたのは、システムについての文章を書くのに、全体を計画性、必然性で貫いた構成を考えるのはシステム論的ではないということだった。そして、これがシステム論か？という批判も又、システム論的ではないと思う。

どこから、なにから書き始めても、私の考える社会システムの一相面であるに決まっている。小さな出来事が結果的に全体システムを引っ張ることになっていたりするのは周知のことである。書き連ねていく内に、その文章がそこにあるシステムを照らし出し、少し動かしてくれる。そんなことになれば嬉しいが、そうなるかどうかは分からない。

システム論

社会システムを考えること、それに小さな変化を処方することはそれ程難しいことではない。もう少し厳密に言えば、「ひとつ追加」はそう困難ではないと考えてきた。

一方、世の中も人もそう簡単には変わらないこともまた承知している。私はこの兼ね合いについて、こんな整理をしている。

客観的に事実をとらえれば、あらゆる事が日々変化している。時と共の緩やかな変化には、人は意外なほど従順だ。しかしそこには、現象的事実と感情的事実が横たわっているようだ。

こんな例をあげると分かりやすいだろうか、それともかえってややこしくなるだろうか。

バンジージャンプの台の上で飛ぶのをためらっているのは感情以外のなにものでもない。身体現象の事実としては、誰であろうと押されれば落ちてしまう。そして落ちても死ぬことはまずない（多分）。「死ぬほど怖かった、二度とやらない」という感想は当然だろう。でも、突き落とされるのに、勇気も決断力も要りはしない。

だがこれを「意志に基づいて飛び出す」という話にすると、ややこしくなる。無理してそんなことをするのに意味があるのかとか、トラウマになる、悪影響だなどと言い始めると議論ばかりが長引いて、聞きかじりの説明世界の虜になる。そんな一つ一つの説明概念をドンドン採用して自分を固めてしまうのが好きな人は、そうしか生きようがないのかもしれない。

だが、水に飛び込んだら助かったものを、高所恐怖症だから飛び込めなくて、ベランダで火の手に飲み込まれて亡くなった、などというシチュエーションを、もっともだなどと共感する理由が分からない。

その人の命を守るのが第一だと考える時には、気持ちや意見など聞かないことだ。無論、命より意見や感情が大事だと考える人の自由は認めたらよい。その上で、圧倒的多数の人々は、意見よりも結果に支配されるところが大きいことを、もっと真摯に受け止めねばならない。

映画「明日に向かって撃て！」で、ブッチ・キャシディとサンダンス・キッドは追い詰められた崖から、手に手を取って谷に飛び込む。その時一方は「俺、カナヅチなんだ！」と告白している。

社会の仕組みの変化を阻止しているのは多くの場合、人の主観的こころというものである。人のこころが人の世を、困難から脱却できにくくしている。無論私とて、これが分からないわけではない。愚かしいとも思うが、人間とはそういうものである。そして、愚にもつかない説明が巷に溢れる。

しかし一方で、だから人生は楽しく豊かなのではないかと語られると、そういうところがあるのを否定できない。全くもぉ哀しくも愛おしい人間よ！といった気持ちになる。

そんな既成の勢力バランスに変化を挑もうとするようなことを言うのは、まさに「蟷螂の斧」だ。イメージは巨大風車に突撃するドンキホーテ。

クールに見通すなら、一矢報いることくらいは出来るだろうが、それを社会が継続するのは難

しいだろう。

スマホや車、酒やコカイン、宗教などのように、大多数の人々を魅了して離さないような吸引力を持つ装置でない限り、マイナーなチャレンジは社会システム全体の中では敗北を続けるしかないだろう。つまり、元の木阿弥は残念だが折り込み済みの未来である。

それでも一時、場所や関係や面子を限定したところでは、少々の改革は可能だ。大変化はなかなか生じないが、小変化に意味がないわけではない。その小変化が思いがけないところでの新たな変化のきっかけになる場合も少なくない。

何故こんな事になったのか、誰も分からなくなってしまった頃に、従来には考えられなかった事態が生まれることもありうる。システム論者はそのように考えるから、そこに向けての試みも空しくはない。

その上で、そう簡単に既存の社会システムが変化するとは思っていないことは、やはり明らかにしておきたい。

具体的実践

対象へのアプローチと変化を、今いる場所で論理的に考えることそのものが、既存のシステムに対して、因果論的な絡め取られ方を避けられないのは覚悟しておかないといけない。私達が状況から独立して、何かを考える事など不可能である。

最近のことから書き始める。2016年3月、奈良県広陵町で団士郎家族マンガ展が開催された。きっかけは、地元出身の社会人大学院生Nさんである。

彼女は教員として働きながら子育てをし、定年退職を迎えた。そして大学院で学ぶ選択をしていた。

地元中学校で長年教職にあった彼女は、今後は地域の子育て支援に何か貢献できることをしたいと語っていた。そして入学初期には、修論構想のステップとして、あちこちの子育てサークルや、先進的保育実践などの調査を始めていた。

こういう関心や調査を、よくあるものだと言ってしまうと身も蓋もないが、実際そう言える面もある。時代の必然を踏まえているということは、既に多くの試みが実現されてきたフィールドなのである。それにも関わらず、相変わらずテーマとして登場するのは、実際にはなかなか成果への道筋の見えにくい事であることも示していた。

そしてその後、出会うことになった地域に暮らし、老いていく老女達の地域ネットワークの姿に焦点を当てた「観音堂に集う女達」と題した修士

論文を書き上げた。そこには、土地の上に「人の記憶」によって刻まれた、地域の歴史があった。

家族応援プロジェクト

2011年3月11日の東日本大震災・津波被災は、日本社会に甚大な影響をもたらし、今に至っている。立命館大学大学院応用人間科学研究科では、京都という遠隔地から、被災地に向けて出来る発信はないだろうかと考え、実現に結びつけて今に至る事業がある。それが東日本家族応援（十年）プロジェジェクトである。

これは東北被災地の街で1～4週間、家族パネル漫画展を2011年から2020年の10年間、継続的に毎年行う。そして週末には出向いていって、子育て支援者や被災地住民向けの、対人援助実践プログラムを開催するものである。

直ぐに効果の出るようなモノではないが、大震災という大きな物語に取り込まれてしまった個々人の小さな物語（思い出）を、別の場所、別の時代に生きた家族の物語に触れることを通して取り戻すことを意図した。そして時と共に起きる身勝手な世間の風化を防ぐ、細く長くの支援を考えてきた。（詳しくは、本誌連載中の村本邦子「東日本家族応援プロジェクト」を参照）

広陵町マンガ展

Nさんは院生として、このプロジェクトに参加していた。これが卒業後、地元でマンガ展を開くことに繋がっていった。

広陵町での実施ということになると、これは被災者支援ではない。幅広い、子育て渦中の親御さんへの支えにならなくてはならない。

今、子育て支援プログラムは、全国各地で、恐らく想像を絶するほどの数、実施されているに違いない。ここでその効果や成果をあれこれ言えるほど、実態は知らないが、私達の社会が持っているメニューは、類型的で、いかにもやりましたとアピールするだけの短命なモノに陥りやすい。

待機児童問題が未だに課題になる社会が、同時に少子化時代でもあるという、笑ってしまうような矛盾。

そのひとつひとつがどうこうではなく、そこにある隔靴掻痒感を一歩脱することが出来ないまま、様々な対策は長い時を経てきたように思う。子ども虐待対策にどれほどの専門家と予算を動員してきただろう。そしてその結果を、私達は現実として引き受けている。

そんなところで、一筋の光明を見た気がする出来事を経験したので、ここに書いてみることにした。

子育て支援プログラム

「地域の子育て」という単語を、流通しやすい文言として使ったところで、従来の歩みから一歩も踏み出すことは出来ないだろう。

広陵町はNさんが生まれ、育ち、家族を設け、子育てをした場所である。そして同時に、教員として40年勤め上げた土地でもある。そこにはその年数だけの教え子が居て、巣立っていった。

これは全国各地、特に地方の街にはきっと、同じ状況が存在しているだろう。そして今までも、その退職者の人柄や意志による取り組みは、行われた経過があるにちがいない。

例えば家裁の調停委員として、退職教員が関わる事も多いと聞いた。それが近年、減ってきているという話。何が変化してきているのか、考えてみる必要があるだろう。

教員であったことを資源に、地域の子ども達の学力保障、支援にボランティアの私塾のような取り組みをする人もあると聞く。

教員退職者のための天下り対策だとの指摘もある学校相談員（いろんな呼び名があるようだが）。主に退職校長の再任用職になっているものは、たしかに、子どものことや、子育て中の親のことを考えて作られているとは言えない。

そんな町のひとつ広陵町で、子育て支援の取り組み（児童虐待防止も念頭に）として、家族マンガ展と講演会を開催した。展示作品は5話（展示パネル数21枚）で会期は2週間。

この間、会場受付にはNさんがずっと詰める。これは、東北各地で開催継続中の方式と基本的に同じである。

漫画パネル展ギャラリーは作品を鑑賞して貰う場であると同時に、そこにこめられたメッセージを噛みしめ、しばし佇む場所でもある。

東北被災地では、たまたま来場された方が、会場に詰めているスタッフ(大学院生)に、作品の話題に重ねながら、被災体験を語り始めることが時々あった。

家族の物語に溢れた会場が、自分の物語を語り始める場になる。東北の場合は被災と不可分な自らの家族物語が語り出されるきっかけの場になった。

しかし広陵町にそんなシビアな経過は存在しないから、ごく一般的なイベントとしてのマンガ展の来客が私の目には浮かんでいた。

何が起きたのか

そして実際に開催された場で起きたことは、振り返れば、納得のいくことであるが、恐らくこんな事は今まで考えたことがなかっただろと思うことだった。

会場を図書館ロビースペースに設営していた。これは、むつ市、多賀城市と同様である。日常生活の一部なのであろう、いつものように図書の返却に訪れた女性は，Nさんの教え子だった。地元開催である。意図せざる、しかし必然性の高い再会であった。

企画された中学卒業二〇周年同窓会などで久しぶりに元教師と元生徒が会うのとは違った、驚きを伴った邂逅だった。

そこには、学校時代の序列の匂いの漂わない、偶発的喜びがあった。同窓会ならクラスメートとの話に夢中で、話しかけなかったかもしれない元生徒が、「先生！」と話しかけた。

マンガ展の受付テーブル付近は、溢れる過去と現在が交錯する時間になっていった。偶然の出会いを受けて来訪者は昔を語り、現在の子育てを語り、家族を語った。

展覧会場は融通性の高い空間である。長時間居たとしても迷惑がかかるわけではない。子どもがウロウロしても、大声で騒がなければ了解される安全な図書館の一隅である。

そこでは

マンガ展は二週間、継続開催されていたから、連日のように訪れる人もいた。夫を連れてきたり、地元で暮らす親を誘って再訪したりと、さすが地域社会と思わせる動員の多様さである。そしてこれらを支えたのは、Nさんの教員としての長い蓄積だった。この要素が一般的な展覧会とはおおきく異なった空間を作った。

今日社会の定年退職者の現状を考えてみよう。ことに豊かな老後を約束された教員、公務員、大企業リタイア組は、文字通り仕事を離れ、悠々自適の生活である。

しかし、実際は多くの高齢者が厳しい老後を迎えざるを得ない現状にあるとNHKスペシャルでは報道され続けている。四分の一くらいの富裕高齢者を除けば、後はなかなか厳しい高齢化社会の到来だと言えるようだ。

ここではその問題は置くとして、ゆとりがあると言われている安定した高齢者に焦点を当てたい。

なにがしかの専門的知見を蓄えて、永年のキャリアを積み上げた団塊世代とその上世代。この人達を、欧米型のリタイアのまねごと消費者へと誘うのは何故なのだろう？

Nさんは間もなく年金暮らしの地元出身者である。地元には今、子育て真っ直中のかつての教え子達がたくさんいる。そこには夫のDVに悩む妻や、児童虐待と通報されそうなギリギリの孤独な子育て営むお母さん達もあるだろう。

その人達の一部とでも、Nさんがこの図書館ロビーで遭遇していたら、ひょっとして、子育て支援や、児童虐待の予防機能が果たせていたのではないかと想像したのだが、いかがなものだろう。

私達は、何かが起きてから騒ぎ立てるのに慣れすぎている。そして、何かを予防する話をし始めると皆、過激派になる。

「それで、ゼロになるのか！」と言うのだ。何であろうと「ゼロ」を目指す等というのは過激派の主張でしかない。

システム論者は、過去にあって、今もあるものは、未来もなくなることはないと考える。しかし、だからしようがないのではなく、1000あるもの

なら800にならないか。500にするには、どうすればいいだろうと考える。

子育て支援

地域の子育て支援を、予防の視点から考えてみたとき、その対応資源として、地元の退職教員、公務員に担ってもらうのは理に適ったことではないかと考えるが、いかがなものだろう。

私達の社会は、個人を強調しすぎたあまり、地域ネットワークを失った。そして縁もゆかりもない場所に一戸建てを建てて、上手くいく時だけ、上手くやった者だけが暮らせる生活に舵を切った。

しかし人の暮らしは決して、個人主義で完結してしまえるほどすっきりはしていない。誰かの世話にならずに一生を全うするのは難しい。つまり、お互い様の一翼は担わねばならないと言うことである。

だからといって、いきなり私達の暮らしにホームパーティや、教会での日曜礼拝を持ち込めるわけがない。だから、リタイア後の悠々自適生活の欧米型デザインも合っていないのである。

私達のこの狭い国では、お互いが姿の見えるところで時を経て、役割交代をしながら、お互い様生活のデザインを刷新していくしかないのではないか。そのヒントが今回の広陵町マンガ展会場に見て取れるのではないだろうか。

漫画　木陰の物語

過疎の島々を
つないで
架けられた橋と

誰もが車を
運転する
ようになった
時代の恩恵。

下の子は近所の
お婆ちゃん達が、
こぞって
子守してくれる。

若者流出が
著しい地域で、
彼女たち夫婦は
希望の星。

佐織は同級生と恋愛し
程なく妊娠。

卒業後直ぐ、
大きなお腹で
できちゃった結婚。

二人目を二十歳で産んで
今では二児の母。

娘の小学校入学を
きっかけに、昔の夢を
叶えたいと思い、
美容師学校に
通い始めた。

故郷の両親からは、

と安堵の声が届く。

親がそう思うのは
当然だろうから、
加奈子は
何も言わない。

しかし実際は、
卒業すれば早速、
奨学金の
返済も始まる。

でも、何の経験もない専門職希望の
新人に、仕事の口はそんなにない。

一方、加奈子はこの春、
大学院を卒業する。

希望する
専門職の
採用通知は
なかなか
届かない。

建築現場で働く夫も、
周りの人たちから
息子のように、
よくして貰っている。

卒業年度の
景気による
運、不運も
噛みしめる
日々だ。

まだ何も始まっていない。

児童心理を
学んだ私が
母になれるのは、
いったい
何時の事だろう。

これから
どうなるのだろう…

と思いながら、希望一杯だった
高校合格の日のことを
思い出すという。

経験を積んで、正規雇用され、
生活が安定するのは
何時のこと
だろうと思う。

恋愛も結婚もそれからのことだ。

先ずは自立した
経済生活の為に
とにかく仕事！

自分は努力して
やっと専門職の
卵になったが

これは10年ほど前、私のところの大学院生が修論のために調査した極めて個人的体験に近い事実である。

ここに私達は、日本の偏差値教育が形成している非社会性を読み取ることが出来るだろう。地元生活の彼女と、院生の彼女がそれぞれ、自分の意志的選択として今を選び取っているならば、何も言うことはない。

だが現実社会がそうではないことは誰もが知っている。教師も生徒も親も、みんなで予備校が算出した偏差値に振り回されている。

このマンガのように、誰かの未来の可能性、可塑性を承知した制度になっていないことを考え、変化を作りだす力が弱い。煽って作り上げた偏差値ピラミッド体制が、ちっとも人々を幸せにしていないにも関わらず、変わるつもりがない人も少なくない。

予備校企業は少子化対策として、他業転出を熱心に画策しているし、学舎の転売も実行している。それなのに他人事だと考えているとしか思えない教員だけが今も、過去の民間受験業者の設定したルールに載っかって指導している。

この作品は、今日社会の有する実態に目を向け、そこに形成されているシステムに焦点を当てている。そして小さくても良いから変化の芽を探ろうとした。

現実

敗者のルール、失敗のメカニズムは、しばらくすると上手く行かなくなってしまう勝者のメカニズムよりも可能性を秘めていることがある。

非常勤専門職として次年度の契約がどうなるか不安を抱えながらスタートしたスクールカウンセラーの彼女。一方、地元でいつか自分の美容院を開設！と魂胆しつつ、修行勤務をしながら、子ども達の成長を見守るお母さん。もうどちらかが、どちらかに優越感を持ったり、劣等感を感じたりする必要もないだろう。

私達はもっと、我々の持つ現実に確かな目を向けなければならない。偏差値教育のもたらした志の低さを自戒すべきである。

昔、ドイツのマイスターは名誉ある職であり、わが子を継がせるに値する選択肢であった。ところが誰もが高等教育を受けられる社会になり、職人を目指したりするのは、学力がそれ程高くない者たちという世界的風潮を受けて、学力の高い子ども達を育てた職人（親）は、自分の子に

高等教育を受けさせたがった。そして出来の良い子達は皆大学に行き、職人にはならなかった。その結果、マイスターに至る職業選択をする者の社会的価値が低められた。

大学を出てホワイトカラーのサラリーマンになった者が皆、良き社会人として、この世界を支えたわけではないのを、私達は知っている。

更にそれに留まらず、例えば米国で医師になる教育を受けた優秀な人々が雇われる保険会社。そこでの仕事は、医療保険の給付額をいかに抑えるか、患者の治療費を削るために医者としての知識を駆使する。そして一人の患者も治療せず、時には治療の選択肢を奪うことで、自身は莫大な給与を得る。

能力や技術が、己の経済生活を支えるだけの手段になった。

ドイツの職人世界の衰退、劣化が進んだ。同様のことが戦後の日本社会でも起きた。近年、調理師を初め、伝統工芸職など、職人世界への回帰が散見される。とても良いことだと思うが、自認インテリ親は相変わらず、わが子がそうなることをまだためらっている。一般論としては賛成だが、わが子がそうすることには賛同できない。こういうメンタリティが社会を変革することを妨げ、既得権の世代伝達に向かわせる。

おわりに

大雑把だが、こんな歴史経過が過去にあった。我々の世界は、こういう馬鹿げたことを、繰り返すシステムなのだということは承知しておくことだ。

さて、地元に残った彼女のこれからの人生は、どのように展開してゆくだろう。この経過だから美容師の彼女は幸せになり、SCになった彼女は不安定雇用のまま、幸せにはなりませんでした、などと語るのもまた愚にもつかない因果論である。

結婚した人は離婚の可能性を、健康な人は病気の可能性を、生き物を育てている人は、その中に僅かな死の可能性を秘めると考えるのが、システムを分かった人間である。

こういう相対化が成立したところで、今後の私達の社会システムの構築デザインに目を向けるのがシステム論者の責務であろうと考えている。

学校臨床の新展開

― ㉔居場所なき子らの生活保障Ⅱ ―

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

あなたのためだから

「社会はそんなに甘いところではないのに、施設の子どもは護られているから、その癖がついてしまって、どうしようもないですね。」

「生活保護を受けている人だってそうでしょう。一回生活保護を受けたら、もう立ち直るのは無理でしょう。」

「だって病院に行ったってタダなんだから。お金を払う習慣がないんだから、施設を出てからも病院はタダだと思っているんですよ」

「だから、あえて厳しいことを言うけれど・・・社会は厳しいのよ。大学に行くんなら自分でお金を貯めていきなさい。」

おっしゃる通り。でも、そんな話を聞くたびに、「あなたは、立派かもしれないけれど、あなたは親からお金を出してもらっていたのでは？」と思ってしまうことがありました。

また、前回にも述べましたが、児童養護施設における高校中退問題では、「高校中退＝施設退所」と施設内ルールを作っている施設もあるのではないでしょうか？

そういう私も、高校中退を前にした子どもに、「それだったら、施設を出ていかないと・・・働かないと・・・」と話し、住み込み就労先を探したことがありました。当然のように彼は早々に退職。それは、彼のしたい仕事でもないのだから、あまりにも当然のことでした。職と住をいっぺんに無

くした彼は、施設に助けを求めにやってきましたが、みんながみんな彼のように助けを求めてくるとは限りません。行く場をなくし、カラオケやネットカフェを転々としながら、気が付けばホームレスという人もいます。たとえば、ビッグイシューの調査（2010）では、調査対象若年ホームレス 50 人のうち 6 人が児童養護施設経験者であったと報告しています。また、NPO と大阪市立大学大学院が共同で行った「若年不安定就労・不安定住居者聞取り調査（2008）では、20～30 代の調査対象者 76 人のうち 10 人が児童養護施設経験者であったということです。女子の場合は性産業に取り込まれてしまうことも珍しくありません。

求められるアフターケア

2004 年の児童福祉法改正により児童養護施設では「退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うこと」という一文が加わり、アフターケアが施設の業務として法に明記されました。しかし、各施設では法改正以前からあたりまえのこととして、担当職員を中心にアフターケアが行われてきました。一方で、そのかかわりの濃淡は施設や個人によって差が生じていたことも事実ではないでしょうか。何せ、アフターケアに関わる経費はない（厳密には自治体による）のですから。

高校中退率や大学進学率が地域や施設によって大きな差があるということも現在進行形の問題です。子どもは施設を選べないわけですので、どの施設に行ったとしても、同じ水準のサービスを選択できるようにならないといけません。そして、困ったときには、困ったと言えるように。

いま、各地で、社会的養護等を終えた人たちを支援するアフターケア事業所が開設されています。厚生労働省家庭福祉課の調べによると、2014 年 10 月現在、全国の 18 自治体で 20 件のアフターケア事業が展開されています。筆者も京都で少しずつですがアフターケアの活動を始めています。

施設退所児童等の大学進学

日本政策金融公庫の調べ（2015）では、1 人当たり大学入学にかかる費用 は、短大が 76.8 万円、大学が 102.2 万円となっています。これは公私の平均額で私学の場合はさらに高額となるのです。1 年間の在学費用は、短大が 130.7 万円、大学が 141.8 万円となっています。これも公私の平均額で私学の場合はさらに高額となり、在籍年度分費用は倍増することになります。これに自宅外通学の場合、アパートの敷金や家財道具の購入費などに入学者 1 人当たり平均 45.1 万円かかっているそうです。なお、家庭から自宅外通学者への仕送り額は、年々減っているとはいえ、年間平均 140.3 万円（月額 11.7 万円）となっています。親からの経済的支援はもちろん、精神的な支えと

しても期待できず、奨学金とアルバイトで学費と生活費を工面することは大変困難なことです。そのような問題に光がさしたことは昨日のことです。前回にも述べましたが、いま、18 歳が選挙権を得ると同時に退所児童への支援も急激に制度化されています。退所後、就職をする者については、家賃相当額を 2 年間貸付し、5 年間の就業継続で返還免除とすること。進学する者については、就職する者と同様の家賃相当額に加え、月額 5 万円の生活費を大学の場合は 4 年間貸付、卒後 5 年間の就業継続で返還免除とするなどです。また、今国会では、児童福祉法が改正され、自立援助ホームでは、就学中に限り 22 歳までの入所が可能となりました。自立援助ホームには、中卒や高校中退後、身寄りなく、暮らす若者などさまざまな人が入所していますが、学生なら 22 歳まで可能ということになり、運営のあり方にも変化が求められます。

働くにせよ、勉強するにせよ、継続して行っていくためには、本人の力だけではなく、周囲からの支えが必要です。

さて、各地の大学でも、児童養護施設等退所者を支援するための奨学金制度等が整えられつつありますが、まだまだ限られています。そのようななか立教大学では、児童養護施設からの入学者に対して４年間の入学金・授業料の免除、４年間を通して年間約 80 万円の「学修奨励金」の給付、さらに経済的な支援体制だけではなく、年間を通して「支援担当教員」を中心にした学生生活への支援体制を整えています。

いま大学内にキャンパスソーシャルワーカーをおいている大学も増えましたが、退所児童等を施設と連携し、支える役割を担うことも期待されます。

学びの森の住人たち（20）

－学校でもない学習塾でもない、〈学びの森〉という世界が投げかけるもの－

アウラ学びの森　北村真也

3.　物語とキーコンピテンシー

私たちの実践の中から、不登校の子どもたちの自己変容は、彼らが自身のコトバを獲得する過程と重なっていることがわかってきました。彼らは、そのコトバを通して自分自身の過去を見つめ直し、その意味を置き換え、それを足掛かりにしながら、さらなる自分たちの新しいキャリアを築いていたのです。そして、そこには、彼ら自身の固有の物語がありました。

そしてやがて、その物語は彼らの家族や仲間たち、そして地域の支援者たちへと伝わり、しだいにその影響を与えていきます。まさに物語の持つ力によって、不登校という一つの社会現象が、再び社会へと回帰し、社会そのものに何かを働きかけようとした事例だと思います。本稿の中では、京都府教育委員会の「フリースクール認定制度」、そして、アウラの森が主催する「ラウンドテーブル」を、その実例として取り上げました。私たちの社会の中に、ある仕掛けとある場を設定することで、再帰性を担保した社会循環型の学びのモデルが実現できること、あるいはその意味についても触れてきたつもりです。

以上ここまで、ただ「苦しい」という思いの中にいた不登校の子どもたちが、学校でもない塾でもない学びの森という多層的な広がりを持った場で、自律的な学び、教師たちや仲間たちとの関係、そしてアウラの森の持つ環境と、その何かを足掛かりとすることで、再び何かを語り始めていく様子を見つめてきました。そして私たちはこの過程の中に、先に取り上げたキーコンピテンシーを満たす営みの存在を感じ取っていきました。

DeSeCo プロジェクトにおけるキーコンピテンシー*Key Competency*は、自分とは違う他者と出会い、関係を構築し、その考えを自分のものといかに統合するかを目標においた学力概念（「社会的に異質な集団での交流」というカテゴリーで表現）です。そして、その目標を達成するために、「自立的に行動する能力」や「コトバ等のツールを相互作用的に用いる能力」（リテラシー）を要求しています。このキーコンピテンシ

ーでは、自分自身の既有する知の体系を他者の知の体系といかに統合させていけるかを大変大事なポイントとして考えています。多様化の一途をたどる現代社会においては、この「統合」そして「理解」といった過程こそが、世界基準の学びの柱であることは言うまでもありません。

しかし、一般的な学びの世界では、学習者自身の生活やこれまでの経験、知覚、認知といった個人の領域は、学びの対象から切り離されていきます。つまり、新しく出会う概念や知識が、学習者自身の固有の世界と統合されることはほとんどないのです。むしろ、その新しい知識をいかに効率よくテストや受験に活用できるのかということばかりが重視されてしまっているように思えます。多くの情報を集め、機能的な問題解決法を手に入れて、とてもスマートに問題を解決していく。この過程を振り返った時、確かに効率よく問題は解決されたわけですが、その一方で、果たしてどこに異質な世界と出会いがあり、どこに自己が統合されていくような過程があるのだろうかと、首をかしげてしまうことも事実です。

しかし、一方で不登校の子どもたちの学びの世界を見ていると、そこにはまるで生まれ変わるかのような変容が見られます。「キーコンピテンシーは、一旦挫折を味わったりすることで獲得できる能力かもしれない」と思う時さえあります。そしてそんな時、大変有効に機能するものがコトバであり、物語であると私たちは考えています。今までも繰り返し述べてきたように、アッコは自分の過去を振り返り「棘が取れてきた」と表現し、サトルは「土台作りをしてきた」と表現し、ユキエは「二年前の私に言ってやりたい」と表現したそれぞれの物語が生まれる背景には、彼らが手に入れたキーコンピテンシーが確実に存在しているように思います。彼らは物語を通してキーコンピテンシーを獲得し、キーコンピテンシーを活用しながら物語を描いていくように思うのです。そしてこの〈個人の物語〉と〈キーコンピテンシー〉とが互いに交差する接合点にこそ、J.メジローの言う〈パースペクティブ変容〉が生じていくように思います。彼らはこの接合点における営みをアウラの森で経験し、その経験知を土台としながらさらなるキャリアへの地平を広げていったのだと思います。

4. キャリア再考への序章

アウラの森には、幾人かの大学生のスタッフがかかわってくれています。そして毎年この時期になると、あちらこちらから「どうしよう…」という声が聞こえ始めます。その理由は、〈就活〉が始まったからです。ここには、スタッフたちのキャリア形成というもう一つの物語があるのです。

かつて、アウラの森のスタッフを引き受けてくれていたサキが、顔を出してくれました。彼女は昨年、「就活が始まるので、アウラの仕事に迷惑をかけてはいけない」という理由で、スタッフの仕事を辞めました。黒いスーツ姿でやってきたサキは、一通り今の状況を説明した後、「自分が何をしたいのかわからなくなってきた」ということを私に話し始めたのです。

彼女の話によると、今どきの就活は、莫大な情報に埋もれてしまうような状況におかれることを意味するのだそうです。就活を始めると、いくつかの就活支援用のサイトに登録して情報を得るそうなのですが、そこから次々と情報が発信され、結局それに振り回されていくことになる。そればかりではありません。彼女は京都市内の某私立大学に在籍しているのですが、そこのキャリアセンターがまたすごい。いろいろな資格講座や面接講座、就活セミナー、企業説明会…。それこそ、数えきれないほどの、仕掛けが用意されていて、それぞれの情報が学内のメールを通して各学生へと送られるようになっているのです。ここでも学生たちは、大量の情報に埋もれることになるわけです。さらに学生たちは、自分の興味のある企業をネットで調べます。そこには、企業の経営的安全度から福利厚生の充実度まで、さまざまな分析や口コミが載っていることでしょう。そしてここにまた、大量の情報との葛藤があるわけです。

サキは、そんな情報の渦に巻き込まれながら必死で「自分自身が何をしたいのか」、「どういった基準で就職先を見つけていけばいいのか」を模索するわけですが、結局それさえもがわからなくなっていったというのです。それならば、最初から情報を制限しておけばとも思うのですが、なかなかそうはいかないようです。まわりが、そういった流れに乗っているわけですから、自分だけそうしないことはとても勇気がいるのです。実際、大変不安になるそうです。だからどうしても、たくさんの情報に埋もれてしまうことになるのです。

最近の大卒者就職内定率は 12 月の段階で約 70%程度、そしてそのうちの 30%は就職して 3 年以内に離職しているのが現状だといわれています。今の学生たちは、大量の情報の渦の中にあって、その渦に巻き込まれるかのように就活を終え、自分たちのシゴトを手にしていくのかもしれません。

このサキのエピソードから、現代の一般的な大学生の多くが、就活をめぐってはとてもたくさんの情報に翻弄されながらも、その活動を続けている状況が読み取れます。ましてや、昨今のように厳しい就職状況ともなれば、なおさら、「自分が何をしたいのか」ということが置き去りにされていくのかもしれません。自分たちの思いとは関係のないところであっても、人気があるとされる企業に学生たちは集まるからです。そしてそのことが、どこかで高い離職率とつながっているようにも思います。個人の思いと切り離されたシゴトの中では、その厳しさに対してなかなか意味を見出すことができず、結局その辛さが離職ということにつながっていくように思うのです。

そして、そんな大学生の就活とは対照的なカタチで、本稿で紹介した不登校を経験した子どもたちのキャリア形成があります。サトルは、大学院へと進み、ヒロシは大手自動車メーカーのディーラーへと就職していくのですが、ここで大事なことは、彼らのキャリア形成が、彼らの個人の物語と絶えず交差していたという事実です。サトルは、「得体のしれない不安」と向き合うために、それを言語化し、さらに理論を持ってそれを相対化していくために大学院へと進んでいきましたし、ヒロシにおいては、自分の抱えるコミュニケーションのコンプレックスをいかに克服していくかという文脈が、そのキャリア形成の過程を貫きます。その他にも、自分自身の発達課題と向き合いながら助産師となったエミ。彼女は自分自身の命と向き合うために、生まれてくる新しい命の誕生という現場に立ち合う決意を持ちました。また拒食症に苦しみ、毎晩お母さんが「自殺しているんじゃないか」と不安になりながら、ベッドを覗き込んでいたケイコは、食へのこだわりから、管理栄養士になり、現在、福祉施設で働いています。

非不登校である今の大学生の就活と不登校であった彼らの就労。それらをキーコンピテンシーという座標面で捉えた時、そこに浮かび上がってくる違いは、〈個人の物語〉へのこだわりであったのかもしれません。不登校という厳しい現実を通過した彼らは、その過程で自らのコトバを見出し、それを使って過去を再構築し、一つの物語へと仕上げていきました。そしてこの過程を媒介として彼らはパースペクティブ変容の経験知を手に入れていったのです。アッコが「リアリティ」と表現し、サトルが、「土台作り」と表現したものは、まさにこの経験知だったようにも思えます。そして彼らは、変容の経験知をしっかり手に入れながらアウラの森を巣立っていき、それぞれの世界で、さまざまな課題に直面しながらも、自分自身の物語を描き続け、そのキャリアを形成していくのです。

『幼稚園の現場から』
25・お話あそび会（その２）

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

前回は、生活発表会をはじめ、幼稚園や保育園等の幼児教育施設で行われている「形骸化した発表会」の構造的な問題について書かせて頂きました。今回は、**「やって楽しい見て楽しい、お話あそび会」**の取り組みについて具体的に書いていこうと思います。

私たちの園独自の取り組みなのでどれだけ参考になるかわかりませんが、いま取り組んでいる発表会に疑問を持っていたり、何かしら変えていきたいと考えていらっしゃる方のヒントになれば幸いです。

この活動にとって、何よりも大切なことは、活動のねらいを教職員がしっかり理解していることです。指導者のエネルギーの方向が「しっかりやらせる」ことや「完成度」に向かわず、「子どもたちが表現を楽しみつつ、見ている人にもそれが伝わる劇」が行えるように意識を持っていくことです。

「お話あそび会」は造語ですから、新規採用の保育者たちはそんな活動は見たこともないし勉強したこともないので、イメージを伝えていくことが要になります。生半可に理解したような気になっていると、前回書いたような発表会の形骸化に陥ってしまいます。なので「お話あそび会とはどういう活動なのか」「劇と似ているけど何が違うのか」という説明にかなりのボリュームを要します。

そのため、私は活動の提案（計画書）にも概念的な文章を書いて、保育者の意識を、目指す方向に向けることに腐心致しました。たとえば次のような前文です。

以前、テレビの番組でジョニーディップのインタビューシーンをたまたま見た。「良い役者の本質は何ですか？」という質問に「観客を飽きさせないこと、それから自分も飽きない（で演技を楽しんでいる）ことだよ」と答えていました。更に、「観客は役者が飽きていることをすぐに見抜いてしまうからね」と付け加えました。

「観客」を子どもに置き換えてみてください。先生が飽きてしまっている（或いは、嫌々やっている、ノルマをこなしている、やらなくちゃいけないのでやっている･･･）言い換えると「楽しんでいない状態」は子どもに見抜かれ、子どもたちもまた「やらなくちゃいけないからやる」という気持ちになってしまいます。どんな活動もそうなんですが、とくにお話あそびではそれが顕著に現れます！人は「楽しめ！楽しめ！」と言ったところで楽しめるものではありません。「やらされる」活動は楽しくありません。ぜひ、先生達も自分で楽しんでこの活動に取り組んで下さい。

シナリオを考えたり準備するのは苦労するし、大変なエネルギーを使うでしょう。それも楽しんでしまうということです。山登りをする人は、キツイ局面では険しい顔をしています。決して微笑んだりなんかしていません、でも登りきった時に「楽しかった」と言うでしょう。それと同じです。本番で子どもたちとお話あそび会を楽しむために、「楽しむ」気持ちを忘れずに活動を進めて下さい。

毎年毎年視点を変えて「お話あそびとは？」「お話あそび会とは？」ということを皆で理解し合います。ちょっと気を抜くとそれぞれの経験値の中で活動が収まってしまうからです。

次のページからは、ところどころ解説を入れながら、私たちの使っている活動の提案(計画書）を中心に具体的に見ていきます。

2015年度【お話あそび会】計画書

「お話あそび」を進めるための提案

2015年度の実施日程

日程	開始	クラス	テーマ
2016年 1月28日（木）	10：20 11：00	年少めろん組 年少いちご組	はらぺこあおむし おむすびころりん
２月５日（金）	10：20 11：20	年中　ばら組 年長　ほし組	ジャックとまめのき びじょとやじゅう
２月10日（水）	10：20 11：20	年中　ゆり組 年長　つき組	さるとかに おしいれのぼうけん
インフルエンザ等の流行で欠席多数やあそびが十分でない場合は日程を変更する場合もあります。			

〖解説〗お話あそび会の発表形式は、行事日として一斉に行うのではなく、他クラスは平常保育を行いつつ、クラスごとに発表します。発表には、担任のほか伴奏者、大道具小道具の出し入れや、劇の補助的出演者など、補助の教職員がついて実施します。
主に、担任+園長+主任+バス運転手さん+アシスト教員、という構成になります。
その時間だけ、他クラスの担任が入ることもあり、園全体でサポートしていく体制で臨みます。
保護者は、自分のクラスは必須。希望のクラスも観覧できます。
子ども同士では練習の様子を見合って刺激し合ったり、前日に行うリハーサルには全クラスがお客さんになって観覧します。

〖解説〗計画書には、活動の主旨がしつこいくらい書かれています。

お話あそび会は、原町幼稚園の歴史の中で、1992年度まで行われていた「生活発表会」に問題を感じ、→1993年度「劇あそび会」→1995年度「お話あそび会」と活動を展開してきた「演劇活動」です。

生活発表会の何が問題だったかというと、発表会当日のために演劇、歌、お遊戯といった数種の演目を練習せねばならず、子どもたちは膨大な練習量を強いられていたことと、練習そのものが果たして子どもの発達に有益なのかという疑問があったことです。なぜなら、子ども自身が楽しめておらず、型にはまった表現を間違えないように発表することに主眼が置かれていたからです。一つ例を挙げれば市販のCDシナリオに合わせて口パクや動きを制限され、どこが本人たちの表現活動か！と言いたくなるような状況があったわけです。

しかし、観客（保護者）の期待は高く、祖父母も楽しみに朝早くから席取りのために並ぶような行事でした。そんな行事を大きく改革してきて、

お遊戯的な身体表現は→運動会へ、歌や楽器の発表は→音楽会へ、“ねらい”を移行して子どもへの負担や散漫になりがちな“ねらい”を明確にして保護者への理解を得ながら進めてきたものです。

「劇あそび会」の時代は手探りの状態でした。「子どもは楽しそうだけど何をやっているか分からない」という批判も頂きながら、自己満足や子ども目線だけではダメだ、保護者に理解されてこその園の教育活動であるという視点を持ちつつ『やって楽しい見て楽しいお話あそび会』を積み重ねてきた活動です。

結果として、子どもたちにとって大きくなっても印象に残る楽しい活動になったこと、子どもたちが日常生活で自身を表現することに積極的になったこと、物語が好きになったこと、年長組では役割分担や責任感といった面の発達も期待できる活動になってきました。

お話あそび会の結果は、発表の日の子どもたちの表現に全て集約されます。それだけに、楽しいけれどもとてもプレッシャーのかかる活動ですが、先輩達の苦労と楽しさの結晶を参考にしながら、世界でたった一つの、あなたのクラスのお話あそび会をつくっていきましょう！

お話あそび会のねらい

・ストーリーを理解して、みんなで一つのお話を楽しむ。
・楽しい時間・経験を共有する。
・培ってきた想像力を発揮する。
・登場人物になって演じることを楽しむ。
・自分で表現することを楽しむ、或いは表現できるようになる。
・工夫する力（創造力）をつける。
・自分が考えたことを発表し、
**　友だちの意見も聞いて取り入れていけるようになる。**

【1】原町独自の活動　お話あそびとは？

「お話あそび会」はモーリスセンダック著「かいじゅうたちのいるところ」からインスピレーションを受けて生まれてきました。あのお話を思い浮かべて下さい、主人公のマックスがお母さんに叱られて部屋に閉じこもったときに、部屋がファンタジーの世界へと次々と変わっていきます。マックスの想像が広がってきたのかもしれませんし、あくまでもマックスの頭の中を我々が絵本で読んでいたのかもしれません。お話あそび会は、会場をマックスの部屋のように「お話の世界で満たして」その中で子どもたちに“なりきって”遊んでもらおうという意図があります。
テレビや映画のような設定は現実的には不可能ですが、出演する子どもたちはもちろん、観客の皆さんも自身の想像力を高めて、限られた空間の中でお話の世界へ誘（いざな）い一緒に楽しめることを目指します。

●具体的には
絵本や昔話といったお話をモチーフにして、原本の楽しさを尊重しつつ、クラスの子どもたちが活躍できる演劇の台本に仕立て上げます。
担任のイメージを子どもたちが受け取り、それぞれが登場人物の役割を担って、自分たちのアイディアも（少し）出しながらみんなで楽しく表現してあそぼ！というところまでもっていければ活動としてはかなりいいセン行ってます。
意識しておくことは、担任は役者として子どもたちと活動を一緒にすすめつつ、監督（+脚本家、演出家、大道具、音楽･･･）という大役もこなさなくてはなりません。担任の『世界』の作り方がお話あそび会成功の要（かなめ）になるのです。

■比較するとわかりやすいので「お話あそび」になり得ないものを挙げてみます。
・ＣＤや出来合いのシナリオ集をそのまま活動に当てはめているもの。
・見せることばかり意識して、進行重視の表現になっているもの。
・動きの少ないもの。
・音楽の無いもの、少ないもの。
・ユーモアの感じられないもの。
・楽しさの感じられないもの、笑顔が少ないもの。
・ストーリーから外れてデタラメなもの。
・自分の役割をきちんと演じないもの。
・気分で参加したりしなかったり。（自由な遊びではない）

〖解説〗ことばの使い方→「お話あそび会」は発表会当日のこと、「お話あそび」は、それまでの過程を指します。

●子どもの演劇は表現（表情）が命！
しかも楽しくなけりゃイキイキした表現は無い！

子どもたちが楽しくない劇は“猿回し”である。
指導者が、楽しくやってやろうという気持ちを持って取り組む。
発表しなきゃというノルマ意識ではなく、自分も楽しんでやろう！という下心が大事。
先生が「たのしいことやるよ〜！」というオーラを出して段取りよくやれば、
子どもたちの気持ちは、もう手のひらに乗ってくる。
その上で、子どもが自分から動けるような、動きたくなるようなシナリオを考える。

point／机上で考えるより子どもと先生が一緒になってやってみる。
point／やってみたときに出てきたおもしろいアイディアを逃さない！
point／一人で考えるより、いろいろと他人の意見を聞く。話している中でアイディアは生まれる。

●楽しければ言われなくてもやる！

「さあ、お話あそびやるよ！」と言ったときに「えー、あそびたーい」というブーイングが聞こえたらまだまだ楽しさの中に引きずり込めていないのです。
全員が最初から楽しさを感じられるものではなく、とくに何をどうすればいいか迷っている段階では温度差は大きいでしょう。段取りよく、少しずつ、子どもたちも理解しながら進めていくことで、だんだんやることがわかり、楽しくなってきて「やるよー！」「ヤッター！」と言う反応が返ってきたら、みんなで勢いを持って取り組めていけるでしょう。

「やって楽しい、みて楽しい、あなたも私もしあわせマル！」

よくわからない
キャッチフレーズ
まで
とびだしております

●step１　ベースになる条件（題材を選ぶ前に！）

◎クラスの子どもたちが絵本などの「お話」を楽しむ心が育っていること。
↓
バロメーターとして
・何回も「読んで！」と言われるようなお気に入りの絵本をもっていること。
・子ども達がお気に入りの絵本のお話をよく理解し、登場人物に感情移入できること。
・目を輝かせて絵本を読んでもらっていること。
・ごっこあそびや、絵本の話が日常の中でみられこと。

●step２　お話し好きに育った心を表現に導く

◎気に入ったお話でごっこあそびをしたい！
これがお話あそびの原点です。
○一人或いは数人でごっこあそびをやっているときは、自分の頭の中のイメージだけで動けますが、クラスみんなで、お客さんも一緒に？となると、そうはいきません。
○みんながわかるイメージを共有して動きを整理しなければなりません。
↓
演劇の楽しさを味あわせよう！
①登場人物に変身する楽しさ、ストーリーに沿って動く楽しさ・・・
②大道具や小道具を作って使う、音など効果音を演出する楽しさ
③みんなで息を合わせていく楽しさ、ファンタジーの楽しさ・・・

ファンタジー的な演技自体が苦手な子どももいます、そんな子どもには②を処方し、徐々に①へ導くのも良いでしょう、いろんな楽しさを総合してお話あそびの表現に導いていきます。

（既に、年中長クラスは誕生会の劇で演劇の楽しさが導入されている）

〖解説〗マガジン19号参照/原町幼稚園では毎月年長の誕生児が、舞台でアドリブ劇を行って楽しみます。これがお話あそび会の導入にもなっています。

【2】年齢別・お話あそび会の持ちかた

◆年少児のお話あそび

保育者のリードに乗って元気にイキイキとお話あそびを楽しむ。

先生がお話の進行役となって一緒に演技しながら子どもたちの表現を引き出していきます。たいていは、主役の子どもたちを引き立てながらも、あそんでいるうちにストーリーから子どもたちがはみ出さないように劇中のセリフとして言葉掛けしながら進行できるお母さん役や登場人物のリーダーが適任です。このときに気をつけてほしいのが、あくまでも先生ではなく登場人物としてのセリフの中に子どもたちの動きや表現を促す言葉が発せられることです。たとえば「さあ、ジャンプしましょう」という指示語ではなく「とんでみようか、どうする？」という促す言葉が使えるように配慮します。

子どもの担当する役は一役（全員で同じ役、もしくはキャラクターを変えても同じ動き。）もしくは二役までのほうが良いでしょう。セリフは多く長くならないように気をつけ、子どもたちが言いやすいことばをみんなで言うようにします。

シナリオ作りは子どもたちの様子を見ながら先生がほとんど行います。構成は、ストーリーをなぞるだけでなく、場面場面でリトミック的な動き（子どもにとってはあそびの場面）を創作でも良いので挿入しながら、子どもたちの自然な表現、かわいい表現を引き出します。歌も場面ごとに歌っていくといいでしょう。

また、補助者（道具の出し入れや他の登場人物）の登場により、ストーリーの展開を面白くすることも必要なら取り入れていきます。

◆年中児のお話あそび

保育者の助けを得ながら、全員がストーリーを理解し、
自分の役割を楽しみながらお話あそびを楽しむ。

年少児同様に先生が劇中の登場人物になり、進行をサポートしながら、子どもたちの表現を促します。クラスの全員がお話の筋や、登場人物の役割をきちんと把握していることが前提で、年少児より先生の出番は控えめになり、子どもたちだけでのセリフのやりとり、歌、ダンスなどが表現されると良いでしょう。キャストも大人数ではなく、役も数役つくり、役柄のイメージもクッキリとさせます。セリフや動きのタイミングも先生の進行だけではなく、効果音や音楽を聞いて動けることも年少児との違いです。

シナリオ作りの９割は先生が行いますが、「こんなときはどうしようか？」と劇中の登場人物にもし自分がなったらどうしようか？といった投げ掛けから返ってきた子どもたちの意見をアイディアに生かすとシナリオがイキイキしてきます。年少同様、練習中に子どもたちが思わずおふざけで表現したアイディア等も取り入れることも良いでしょう。

※年少、年中のお話あそび会には、ナレーターは基本必要なし。

◆年長児のお話あそび

見せることを前提として構成、演出を考え、保育者のイメージを受けて、それを受け入れたり、反発したり、更に子どもからのアイディアをシナリオに盛り込みながらダイナミック*でアイディアがいっぱいの楽しい劇を展開させる。

*ダイナミック＝動きがあり迫力がある、動と静のメリハリがある、ストーリーがテンポがよく引き込まれること

練習段階では保育者が前面に出て子どもたちを引っ張っていくことが求められます。子どもから出てくる表現を待つのではなく、保育者が提示した「このお話でこんなお話あそび会をしよう！」という提案を受けて、子どもたちが自分の思いつきや意見を言いながら、たとえ保育者の考えと違っていてもそれが良いものなら積極的に取り入れたり、ここは！というところは保育者の意見に納得してもらったりしながら次第に劇を構成していきます。子どもの持っている表現力を引き出し、「やりたい！」という楽しさを発生させるパワーが求められます。シナリオの７割は先生、３割は子どもたち、というイメージでシナリオ作りを進めます。そして本番では、先生は伴走や演出にまわり、子どもたちだけでお話あそびを展開できる完成形を発表します。

【3】シナリオ作りの方法

どんなお話で何を伝えたいのか、何を楽しみたいのか、
お話のヤマ場をはっきりさせておく。

◎ポイントは、子どもたちが「やってみたい！」という面白い内容になっていること。
○演じる舞台、演出、音楽はお話の世界をできる限り再現して子どもたちが"その気"になるのを手伝います。活動にとりかかる前に、保育者自身が場面場面の構成や子どもたちの動きなどのイメージがしっかり持てていることが大切です。

●シナリオ作りで共通する　お話あそび会の「決め！」

①必ず一人ひとりが表に出る場面を設ける。（役者紹介）
②ストーリーの要所要所に歌、音楽を挿入していく。
③ユーモア、笑いを挿入。
④舞台構成では、お客さんからの視点、動き回れるスペースを考慮する。
⑤待機場所、待ち時間に配慮し、出演していない時の効果音、裏方仕事を入れる。
⑥最後に歌を用意してフィナーレを演出すること。
⑦一人で考えず、早めにいろんな人に相談することが必要！

当事者以外だと良いアイディアが生まれたりするものです。

1.シナリオ下地作り/1～2学期

絵本を何回も読んで自分のイメージをしっかり作ること、そして絵本の絵の細部やストーリーや絵を深読みすることでシナリオに生かすアイディアが生まれてきます。絵本の中でクライマックスはどこか、登場人物の心情の起伏が大きい場面はどこか、お話のプロローグで後半のキーとなる場面はどこか、など本の中に必ず大切な場面が描かれていますので、そこの的を外さないように押さえます。準備はここからです、この準備をおろそかにしては良い活動は望めません。同時にクラスの子どもとよく遊び、子どもの傾向や一人ひとりの性格を良く見て把握することが不可欠です、子ども抜きでは活動はできないのです。

また、保育者自身が幅広くいろんなお話を知っていることで他の話のアイディアをやろうとする題材に展開することもできます。しっかり勉強してシナリオ作りの下地を作るべきです。その上で次のようなポイントを押さえて題材を選びます。

話のテーマが明確な話
誰もが良く知っている話
クライマックスや起承転結がはっきりした話
クラスの雰囲気に合っているか
登場人物の気持ちがよくわかり、共感できるか
舞台構成やシナリオが自分にイメージできる話
創作話の場合はストーリーの周知に配慮する

2.導入→題材決定/2学期

シナリオを作る前には子どもたちの反応を見なければなりません。子どもをよく見れば必ずヒントをくれます！選んだ題材が子どもたちの気に入るのか、「もう1回読んで！」とせがまれるような話か、それを見極めます。何回も読み過ぎて子どもが飽きてしまうような話は、既に興味が無くなっているので避けます。逆に言えば題材として候補にあがっている話は大切に（たとえば1回読んですごく反応が良かった話はそのまま温存して時期を待つなど）子どもたちの欲求を高めながらもったいぶって進めていきます。

同時に、子どもたちの表現力を高めたり、表現のレパートリーを増やすために、「元気な挨拶や返事、ことばあそび、人前での話、簡単なあそび歌、ごっこあそび」ということをふ

だんの生活や自由遊びの時間にも少しずつ導入して行くことが必要です。一斉活動ばかりが導入とは限りません。

3.シナリオ下書き/冬休み中

○シナリオの大まかな構成

全体のストーリー（起承転結）
舞台（会場）の使いかた
キャストとセリフ構成
歌・音楽
スポット場面、役者紹介場面の挿入
大道具、小道具、衣装
（本番の舞台挨拶）

○シナリオ作りの流れ

(1)題材（絵本）をしっかり読む

(2)シナリオ下書き執筆／ストーリーだけをなぞるのではなく
プロットをふまえて登場人物の行動を表現していく

(3)場面ごとに、どんな演技、アクションができるか考えてみる

●ストーリーとプロット
日本語では両方とも筋書きと訳され同じ意味で使われていますが、フォスターの文学論によると「王様が亡くなられて、続いてお妃様も亡くなられた」というのがストーリーで、「王様が亡くなられて、悲しみのあまりお妃様も亡くなられた」というのがプロット。子どもたちが「それからどうなったの?」と聞くのがストーリー、「どうしてそうなったの?」と聞くのがプロットという訳です。物語はストーリーとプロットの絶妙な組み合わせによってできていることが分かります。
■斎藤惇夫著 キッズメイト発行
『いま、子どもたちが求めているもの』より

4.シナリオ仕上げ/取りかかり～本番直前まで

(4)ためしてみる→子どもの反応を見る（部分遊び、ごっこあそび）
ストーリー、音楽、歌、舞台設定と子どもの動き、大道具、小道具の役割と効果、衣装の案を総合して考える。全体のイメージを大まかにかためて、場面を多くて４つぐらいにまとめて考えておく。

(5)シナリオを仕上げていく
・実際にお話あそびの活動をしながら、子どもの意見や実際の動きを見て下書きを修正して仕上げていきます。動きの良くない部分はカットしたり子どもに合わせて修正し、面白いこと、効果的なことは取り入れるという具合に枝葉を改良していけばいいのです。

・また、伴奏者や補助者との話合いからも演出効果を高めて修正をしていきます。話し合いはマメに！

・ストーリーの中で起こる「こまったこと」、たとえば「どうやったらオオカミをやっつけられるか」などを絵本の筋だけでなく、「みんなならどうする？」と保育者が投げかけることにより、子どもが考えた思いつきを取り入れてシナリオに生かしていく。

●シナリオは下書き段階で保育者間で検討します。これより遅いとダメです。
他の保育者と話すことで、新たなアイディアが湧いてきたり、違うイメージやアイディアを得られたり視野が広がるのがメリットです、ただし、自分がどんな風にやりたいかをしっかり持っていないと修正のしようがなく、他人の言うがままになってしまうので注意！

◇シナリオの書式

①お話あそび会専用用紙に作成して下さい。
②シナリオの１ページ目に舞台図を付けます。
③表紙に舞台図を付ける。シナリオのあとに使用する楽譜を付ける。
④Ｂ５サイズに統一してページを振り、左上をホチキスで止める。
※自分も他の人も見やすいように、また書き込みができるよう行間に余裕をもって書いて下さい。
※絵や図を入れたりするのも可。イメージが伝わることが大切です。

【4】活動を進めるための具体的なヒント

〖解説〗経験の浅い保育者でもとりあえず、手がかりになるように具体的なヒント満載です。
全てこれまでのノウハウの蓄積から現実的な内容となっています。

1.役・演出について

○役決めは、くじ引きやジャンケンなどで決めずに、音楽会と同じように、話し合いの中でそれぞれが納得して選べるように配慮する。
○必要な役になり手がいない場合は、必要性を強調して頼み込んだり、役柄を魅力的に演出したりといった工夫をする。
○年長組では一人二役、ナレーターや効果音係も重要な役と位置づける。

2.演技指導について

○基本はごっこあそび。日常のあそび、絵本のあとの会話等で活発に行っておく。
○先生は、お話あそびが始まったらもはや先生ではなく劇中の人物となる。
○口だけで子どもを動かそうとしてはいけません。一緒に動きながら身体全体で指導する。
○子どもたちのアドリブにも対応できる演技力を身につけておきましょう！！

○どの程度まで子どもに任せ、どこまで保育者が引っ張っていくかということについては、一概には言えないが、とくに、年中長は「次はこう言うんでしょ」「はいこう動いて！」と全部先回りして保育者が言ってしまっては子どもは自分で覚えようとしないし、考えることもしない。話の内容を子ども自身が理解して自分で動けるように次第に仕向けていかなくてはならない。そのためには、練習の前にきちんと子どもに「これからどんな場面の練習を何のために行うのか」「ここではなぜこんな台詞を言うのか」伝えて、意識をはっきりと持たせることが必要である。（もちろん年齢によって言葉掛けの内容は違ってくる）
○とくに保育者が一緒に演技するときに、直接的な指示語を言わなくても動作を見て子どもが動けるよう配慮する。※「さあ、ボールであそびましょ」→「これ何かしら？」「いくわよ！」
○子どもの気持ちを盛り上げることを抜きにしては活動は成功しない。常に意識する。
常に「楽しい！」という雰囲気をもちながら、やるときはやる！という積極的な気持ちを高揚させながら練習に望むようにする。

3.スポット場面（アソビの場面）

○イメージを動きであらわす身体表現を取り入れる。
※身体表現の例→紙風船、風船、スカーフ、動物ごっこ、パントマイム、転がる
○リトミック的な動きを取り入れてメリハリをつける。
※ボールやフープ、鈴などを使ったリズム遊び、世界のあそび歌などを活用
○なぞなぞや、じゃんけん、わらべうたあそび、運動あそび、お笑いのギャグも適度なら可

4.場面展開・セリフ・セリフ歌 ※セリフ歌は造語です

○お話の展開（筋）がクラスの全員がわかっているか確認をしたほうがよい。とくに年少。
○お話の全体がわかった上で、場面に応じた身体表現やことば（セリフ）を覚えていく。
○セリフは場面でのキメのセリフ、自由に発言するセリフに分けて考えておく。
※キメのセリフとはそのセリフが発声されて次の場面が展開するためのセリフ。
○セリフは、子どもたちから出てきたような日常使っているようなことばがスムーズに言える。
○音楽を登場人物の出番の合図として使うときは、その役のテーマソングのような扱いをすると分かりやすい。（登場場面で同じ曲を使う）
○実際に音楽やストーリーに合わせて動く位置を決めていく。シナリオ段階で考えていた動きが動きやすいか、きっかけとして適切かを練習で見極める。
○ストーリー中の「遊ぶ場面」「見せる場面」のちがいをはっきりと分け、子どもに意識を持たせる。

○みんなで声をそろえてセリフなどを言うことで、一人で台詞を言うときも自信を持って言えるように練習する。
○みんなで台詞を言うタイミングは伴奏や効果音の合図をうまく使う。
○「セリフ歌」を効果的に使う。（あそび歌わらべ歌、ＣＭソングの替え歌なども使える）
○台詞はバラバラに言っても勢いがあればそれも良い場合がある。
○みんなで行うときには、みんなで一緒にやるように促す。はじめに注意すべきことはきちんと約束しておく。

5.大道具、小道具、音楽(効果音)について

○大小道具は、初めからつくる必要はなく、最初はありあわせの物を代用するところから始めよう。剣がなければ紙を巻いてつくればいいし、ただの棒っきれを箒に見立てて使うことも大切な活動である。そして、本番に向けて少しづつ小道具が揃っていくのが（気分も高まり）望ましい。
○大道具小道具は、クラス間で共有できる物があればできるだけ共有して使うことを考えたい。※大道具、小道具は子どもと一緒に作れる部分はなるべく一緒に作ること。
○バックは雰囲気作りに大きな効果をもたらすので（シナリオができてから）早めに取り組んでおきたい。
○大道具は、はじめから「これは大きいから面倒だな」などと考えては大胆な物はできない。「こんなものがほしい」と思った物をとにかく絵に描き、なんとか身の回りにある材料を工夫して実現させていくほうが良い。その時は思い浮かばなくてもあとから思いつくことがあるからです。そのためには、常に頭のどこかに大道具のイメージを持って周りにある物をながめたり「何か使えないか？」と観察することが大切、ただ待っていてもアイディアはでてくるものではありません。
○伴奏、効果音は演出になくてはならないものだが、それに頼りすぎて伴奏に子どもが動かされているような状況にならないように注意するべきだ。また、クラスの雰囲気にあったもの、伴奏を依頼する保育者に負担にならない曲を選ぶ配慮も必要だ。
○雰囲気作りとして音楽ＢＧＭ、は欠かせない。テーマにあったものを選ぶ。

6.活動を進めているときの配慮

○活動をクラスで進めていると、客観的に活動の進行状況や子どもたちの様子が把握できずに自信を失ってしまうことがある。そうなる前にできるだけ活動の様子を保育者同士で話し合ったり、見てもらって意見をもらったりしながら進めていくことが必要である。
○演技のない子どもの待っているポジション、意味付け（まだ隠れている、ここでエネルギーを溜めているなど）を行う。役割などを積極的に考えていく。

【５】会の運営など

○クラス便りなどで、ストーリーや取り組みの過程をお知らせし保護者の理解と協力を高めておく
○伴奏者とは十分に打合せを行う。練習にもできる限り多く参加してもらう。
○キーボードの録音機能などの方法も積極的に使う。
○本番は緊張するものであるが、その緊張が子どもに移らないように気をつける。
○保護者にもリラックスしてみてもらえるよう、はじめの挨拶を事前に考えておく。
○ビデオ撮影、最後の集合写真を考慮する。
○クラス運営がそのまま活動に反映される活動であるから、日々の保育をしっかり行う。
○わくわくホール利用日程など作成（→幼保調整/町田）

■会終了後の扱い
◎大道具、小道具は、今後のごっこあそびや、誕生会劇で使用するため破損のひどくないものは種類別にしてとっておく。保管は古いものと入れ替えたり、収納場所が確保できるように調整する。
◎衣装やお面は基本的に持ち帰さない。日常保育の中で自由にクラスでごっこあそび、お話あそ

びで使用しても良いし、誕生会劇でも使用し、破損したものから順に処分する。結果捨てることになっても子どもには持ち帰さない。

◎持ち帰して良いものは、子どもがほぼ完成まで手がけたもの、もしくは、家庭から持ってきてもらった材料を加工したもの。一人ひとりの作品としての個性が際立つものに限る。

【6】バックサイズ等データ（参考）

〖解説〗とってもパーソナルな資料ですが、一応こんなところまで。

・模造紙（薄口～中厚）788×1,091　※フレーベルのエデュース発注50枚箱入り
・クラフト紙　900×1,200　※同発注
・ひな段サイズ１枚　1,818×909　高さ（箱無しH121、小H250、中H450、大H650）
・ステージ南サイズ：フルサイズ（窓～窓）w9,522　ひな段５枚w9,090

■バックサイズ〔タテ/H〕
・ひな段大H650使用の場合、模造紙　縦に２枚つないで下を100カットする→H2,082
・ひな段中、小の場合はH200ずつ加えたサイズ。中H2,280、小H2,480、無しH2,730

■バックサイズ〔ヨコ/w〕

◎推奨	11枚	w8,668（フルサイズより両端⊖427）	計22枚
○フルカバー	12枚	w9,456（窓をフルカバー）	計24枚
△小さめ	９枚	w7,092（フルサイズより両端⊖1,215）	計18

今回は、具体的な「お話あそび会」への取り組みについての内容でした。

あくまでも文章化されたガイドラインですから、実際にやってみると思うようにいかないことがたくさん出てきます。経験豊富な教務主任や先輩に相談し、またクラスで実践する・・・それを繰り返して仕上げていきます。保育者の経験値が上がってくると、自力でできるようになってきます。

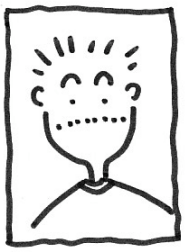
次回は、まだ続きますが、「お話あそび会」の主旨をどう保護者に伝え、どんな当日を迎えるのかについて書いていきたいと考えています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「幼稚園の現場から」マガジンラインナップ

第１号　エピソード
第２号　園児募集の時期
第３号　幼保一体化第
第４号　障害児の入園について
第５号　幼稚園の求活
第６号　幼稚園の夏休み
第７号　怪我の対応
第８号　どうする保護者会？
第９号　おやこんぼ
第10号　これは、いじめ？
第11号　イブニング保育
第12号　ことばのカリキュラム
第13号　日除けの作り方
第14号　避難訓練
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について
第17号　自由参観
第18号　保護者アナログゲーム大会
第19号　こんな誕生会はいかが？
第20号　ＩＴと幼児教育
第21号　楽しく運動能力アップ
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く
第24号・お話あそび会（その１・発表会の意味）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊



原町幼稚園　園長　鶴谷主一
ＨＰ：http://www.haramachi-ki.jp/
MAIL：osakana@haramachi-ki.jp
Twitter：@haramachikinder

福祉系対人援助職養成の現場から㉕

西川　友理

「大人になるってどういうこと？」

子どもに関する授業をする時に、「大人になるとはどういうことか」というトピックを学生に問いかけ、考えてもらうことがあります。これが結構面白いのです。

学生たちは頭をひねります。

「タバコや酒が解禁されたら大人！」

「それって電車料金が大人料金になったから大人、って言ってるようなもんやんか！」

「ああ、それに 18 歳から選挙が出来るようになったよな。20 歳になったら成人になって…あれ？成人と大人って一緒？」

「20 歳を超えたら大人、というわけじゃないように思うわ。私、21 歳やけど、全然自覚ないもん。」

「俺も自分の事まだまだ子どもやと思うけど…どうやろ、世間的には大人って見られるよなぁ…」

「飲み屋で、感情的に怒鳴っているおっちゃんて、子どもっぽいしな。うーん、大人になるって、どういう事やろ…？」

20 歳前後の学生の多くは、自分の年齢と引き比べて色々と考えます。それぞれで出てきた答えを発表してもらいます。

「一人でちゃんと何でも出来るようになること…ですかね。」

「自分の食い扶持を稼げるようになることかなぁ。」

「自覚の問題かなぁ…自分で、自立したって思ったら大人！」

「自分で自分の責任をとれるようになること。30 歳や 40 歳を過ぎても、大人になれてない人はなれてない！」
この問いかけは 10 年以上前からやっていますが、このような答えが最も多いです。しかし一昨年前ぐらいから、少しずつ傾向が変わりつつあるのです。
ほとんどの学生は上記のように答えるのですが、その中に、
「色んな人達と一緒に世の中を渡っていけるようになることだと思います。」
「周りの人と、うまくやっていける力を得られるようになること。」
「最低限のモラルやマナーがあって、多くの人と協働できるようになること、かな？」
という答えが出てきているのです。

つまり、その個人が単体で自立できるようになること、というイメージの答えが多い中に、少しずつ、他者と共に居れるような社会性や協調性があること、他者とのつながりをつくれること、という答えが混じるようになってきているのです。

これが、1 つの学校や 1 つのクラスから出るだけなら、その学校・その学科のポリシーが反映されているのかなと思うのですが、どうも複数の学校で、この傾向が見えて来ています。

つながること＝大人になること？

以前、10 人ほどから成る大学生のあるグループに関わった時、その内の約半数から、ほぼ同時期にこっそりと、人間関係や進路についての悩み相談を受けました。皆、口をそろえて言っていた事は、
「こんな話、グループメンバーには出来ないよ。皆そんなところまで考えていないと思う」
という言葉でした。

似たような悩みをもちつつ、それぞれが友人同士に打ち明けたり相談したりせず、あまりにそっくりな言葉を、「誰にも言わないでね」と、私に打ち明けてきました。

そのグループ内部では、問題らしき問題も発生しません。ただなんとなく関係性がズレたまま固定化されて、それぞれの中に、皆には内緒のストレスがくすぶっていたような状態でした。グループメンバーは、やがてそのストレス環境に慣れ、どうでもよくなったようで、波風立つ事もなく何となく、ちいさなグループに分かれて過ごし始めました。

自分が居る場所がある安心感と、その場所を維持させるための努力に、みんな疲弊し、腐ったようになっていました。

確かに私達は、気が合い、気を許しあえる仲間がいると安心します。そういう仲間に囲まれている、自分の居場所を確保したいという欲求があり、何人かがつながりあう事で「居場所」が形成されていきます。

上記のグループの学生達は、協力して、傷つけあわない人達のいる場所を作り出して、いわば自分にとって安全地帯のようなものを故意につくろうとしていたようでした。

しかし当然ながら、誰かとコミュニケーションをとる上で、絶対に相手を傷つけたり、傷つけられたりしないという事はありません。

LINE や Twitter、Facebook などのインターネットを利用した SNS は、今や生活に欠かせないインフラのひとつといってもい

いほど普及しています。私もいくつか利用していますが、確かに便利で、楽しいものだと感じます。

一方で SNS を発端としたトラブルについては、改めて書くまでもありません。言葉ひとつのやり取りが、後々まで人間関係の諸問題に発展したり、時には犯罪を引き起こしたりします。

単純な「人間関係のこじれ」だけでなく、巧みにクローズされた情報と不用意にオープンになっている情報があり、それぞれの持つ情報の量や質には極端に差があり、そのせいで誤解が生じやすくなります。

そこで、相手の腹をさぐりながら、次の行動をとるという方法を選択し、ストレスを貯め込んでいきます。大変精神的に疲れる作業ではありますが、多くの学生たちにとっては、相手に踏み込んだり、相手に踏み込まれたりするよりは、ずっと軽いストレスだと捉えるようです。

学生に、仲間内での SNS の使い方を聞いてみると、思ったよりもずっと様々なことを勘案し、判断し、できるだけお互い傷つかないようなコミュニケーションをとる方法を探っているように感じます。また、インターネット以外のコミュニケーションの場でも、そういった気遣いをきめ細かくしています。そうしないと、仲間内の輪からいつはずされてしまうのか、わからないからです。

学生が利用する SNS のコミュニケーションからも推察出来るように、彼らにとって居場所として自ら形成するコミュニティはまた、傷つけたり傷つけられたりしないように、緊張と細心の注意をはらって過ごす場所でもあるのです。そのつながりは、変化をする事を極端におそれる、発展性の弱いつながりだといえるかもしれません。

それでも、どんなに居心地が悪くても、孤独でいるよりは、何らかの関わりがある方が安心だし、よほどのことがないかぎり、不平不満や意見を言わないように、気をつけているように見えます。

冒頭に挙げた「大人になるとはどういうことか」という問いかけに対し、「他者とつながること」と答えていた学生は、仲間内のＳＮＳのつながりのような、緊張感のあるつながりを作ることを指して大人になる。と言っていたのでしょうか。

つながりの発展性

時々、居心地の悪い、緊張感の高いコミュニケーションを自分で自分に強いている学生が、疲れや焦りを感じ、個別で相談に来ることがあるのです。そのようなコミュニティだけで過ごしている人を見ては、「子どもみたいだ」と揶揄しつつも、自分も似たようなメンタリティがあるとひそかに落ち込んだりしているのです。

学生達は、何となく一緒にいて、何となく誰かの方向性に合わせるような、発展性のない「同調」と、お互いに遠慮なく皆で話し合いや意見交換ができる発展性のある「協調」とは違う、ということは気づいているのです。気づいているけれど、付和雷同を辞められない、という悩みを抱えている学生も多くいるようなのです。

この状況を踏まえると、冒頭に挙げたとおり、学生らにとって「大人になる」とは、「色んな人達と一緒に世の中を渡っていけるようになること」

「周りの人と、うまくやっていける力を得られるようになること」
「最低限のモラルやマナーがあって、多くの人と協働できるようになること」なのですが、
これはそれぞれ、
「『自分の身内だけではない』色んな人達と一緒に世の中を渡っていけるようになること」
「『自分と違う生活や違う考え方をして来た』周りの人とも、うまくやっていける力を得られるようになること」
「最低限のモラルやマナーが『擦り合わせできて、その合意形成のプロセスが』あって、多くの人と協働できるようになること」とでもいうような、『自分とは全く違う考え方の人ともつながっていこう、理解しあおうとする事』を指しているように感じるのです。

発展性を感じるつながりに勇気を出して自ら飛び込み、そうして大人として成熟していきたいと行動する学生もいます。勇気を出したいと思いつつも難しく、「子どものままでいたい」とでもいうような対応をする学生もいます。背を向けてしまう学生も、もがいている最中なのです。

20 歳前後という歳で、単なる自立だけではなく、社会性のあるつながりの大切さを認識し、それに対して怖さを感じつつも、自分なりに何とか対処しようという傾向があることに、私は、「今の学生は凄いなぁ…」と感心するのです。

学生の変化を
学習指導要領と社会の動向から見る

ところでなぜ、このような傾向が出てきているのでしょうか。

様々に理由はあると思いますが、私は、小中学校の頃に受けた教育と、その当時の社会情勢が大きく影響しているのではないか、と考えています。私は教育学の専門家ではないので、手っ取り早く学習指導要領を概観してみようと思います。

戦後、学校現場に提示された学習指導要領は、現在までにその時々の情勢にあわせて何度も改訂されています。最初は 1947 年に文部科学省の試案として作成されたもので、アメリカ的な児童中心主義の教育観に基づいて作られたものでした。これを実際に運用してみると、戦前教育を受けた子どもたちに比べて、戦後の教育を受けた子どもたちは、読み書き能力が極端に低下するということがおこり、児童・生徒の保護者から不満の声が上がりました。このような声に答え、学習指導要領は 1958 年に大幅に改定されました。

1958 年の改訂では、基礎学力の向上を目指して、教育課程の最低基準を示し、のちに「詰め込み教育」と揶揄される学習時間の増加が図られました。試案という言葉がなくなり、一定の法的拘束性をもつものとなりました。そしてあらたに、道徳の時間が設けられました。これにより、教育に対する国の標準化が図られたと言えます。その後、詰め込み教育の反省から何度か改訂が行われましたが、科学文明の発達に伴い、内容自体は高度になる一方でした。

1973 年のオイルショックを経て、経済が停滞した 1977 年に、いわゆる「ゆとり教育」への転換を図った改訂が実施されました。この改訂は、「ゆとりの時間の設定」などの

ように、科目の新設とか、授業時間数の改正といった、実際的・具体的な変更事項もありましたが、大きくは「ゆとりと充実」という理念的・抽象的な方向転換が中心でした。ですから、「何をどうすればゆとり教育になるのか」といった解釈があいまいな部分が多かったようです。「ゆとりの時間」として設定された授業時間も、その多くは他科目の授業の補習などに充てられていたという状況があったようです。

1989 年に改訂され、1992 年から 1993 年にかけて適用された学習指導要領には、個性や人間性の重視はそのままに、今度は「新学力観」という考え方が新たに提示されました。これは、「個性をいかす教育」を目指して設定されたものです。

1998 年の改訂は、当時ショッキングな少年犯罪が多発したことなどをふまえ、心の教育に力を入れる事を目途に、「生きる力」というキーワードを軸に、ゆとり路線をさらに推し進めていくような内容になりました。この時の改訂は、「個性をいかす教育」がなんとなく定着した現場に対し、当時の子どもたちの学力低下への対応として考えられたものでした。これを受けた改訂の内容は、観点別学習状況の評価だけではなく評定にも絶対評価がとりいれられたり、総合的な学習の時間がスタートしたりと、かなり話題になりました。また特にこの時、改訂内容の一部である「円周率が 3.14 から『およそ３』という表示になる」「台形の公式が教科書からなくなる」等がメディアで随分話題になりました。おりから大学生の学力が低下しているという問題が指摘されており、「ゆとり教育」の方向は間違えているのではないかという議論が全国的に巻き起こりました。ゆとり教育を推進することでむしろ学力は伸びるはずだという意見の識者もおり、ゆとり教育と学力の低下に関する論争は白熱化しました。

しかし、1998 年の改訂案が出されてから、それが 2002 年に小中学校で実施されるまでの間に、一般国民には「ゆとり教育=悪」のイメージが徐々に、確実に刷り込まれたと言えます。

2008 年に行われた改訂の際には、「ゆとり教育」からの明確な転換がはかられました。「これからの教育はゆとりでも詰め込みでもありません」とし、「生きる力」を育むという理念のもと、基礎的な知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視することとしました。授業時間が増やされ、全ての科目の基礎に「言語力の育成」が関わり、体力低下を防止するため、保健体育の時間数も増やされました。

このようにみると、戦後の児童中心主義→詰め込み教育→ゆとり教育→生きる力教育というように、学習指導要領は緩急つけながら、その時々で必要と思われるものを探すように変化してきたのがわかります。

多少乱暴ですが、戦後の学習指導要領の歴史をいくつかにわけて、社会状況と 20 歳前後の学生はどのように変化してきたのかを見てみたいと思います。

詰め込み教育の時代

今でこそ詰め込み教育と批判的な名前で呼ばれますが、当初は社会から必要と考えられて始まった教育です。戦後の発展、高度経済成長の波と、それに伴う科学技術の発展に乗り遅れまいと、必死に子ども達に

勉強をさせ、受験戦争が起こるまでに発展しました。

1960 年代の中盤頃から、新幹線や高速道路などのインフラが整備されはじめ、地方から都会へ多くの人が流入し、産業構造が大きく変化しました。しかし、人々のメンタリティは、それまでの伝統的な文化を尊重する性格を持ったままだったのです。そんな中で教育指導要領は、法的にも時間数的にも、より強い拘束性を求めるものとなりました。

このような背景があり、若者の中には「周囲の人とのしがらみ、古くからの制度が煩わしい」という気持ちが生まれますが、かといって「世間では常識とされている考え方」や「集団から外れた考え方」から外れると、生きていきづらい現実がありました。

これに加えて、詰め込み教育が行われるわけです。「古くからのしきたりやしがらみの関係性から逃れて一人で生きていきたいけれど、それはきっと無理だろう。今の自分にそんなことを考える余裕もない。」というあこがれとあきらめがあったのではないでしょうか。

土井隆義は、当時の若者の悩みは一人になれる時間や場所がないことであり、それらは 1980 年代まで続いたとしています。「制度に縛られた濃密な人間関係」を嫌悪し、「一人でも生きられる人間は『一匹狼』として憧憬のまなざしで見つめられたのです。それは集団のしがらみからの解放を意味していたから」だとしています[注1)]。

当時の流行歌はいわゆるフォークソングやニューミュージック。確かに、閉塞した時代に対する反感や、自由な生き方を求めた曲が多いように思います、1980 年代の初頭には、尾崎豊がカリスマ的な人気を得ていました。

ゆとり教育の時代（前半）

私自身が義務教育をすごした 80 年代中盤から 90 年代初頭は、ゆとり教育の初めの頃、ちょうど「新学力観」という言葉が出来る直前でした。詰め込みから一転、子どもひとり一人の個性を見つめる教育が尊重されました。

この時代、いわゆるバンドブームがありました。当時、人気があったアーティストは、ブルーハーツやプリンセスプリンセス、ジュンスカイウォーカーズ。たまや米米クラブ等も人気でした。どの流行歌にも、

「“普通”って何？“みんなと一緒”って何？個性が大事でしょ！！」

といった歌詞や、

「これが私の個性です！」

といった強烈な表現があちらこちらで見られ、もてはやされました。

ロックバンドは反体制を歌うものだと思うのですが、上記の点を見ると、まさに体制の権化である学習指導要領と、言っていることは同じというのが興味深いところです。

現在 20 歳の人は、1998 年に改訂され、2002 年から実施された学習指導要領のスタートとほぼ同時に義務教育をはじめています。ゆとり教育の最後のあたりの教育を受けてきています。

この時話題になった「総合的な学習の時間」の趣旨は「各学校は、地域や学校、児童の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など

創意工夫を生かした教育活動を行う」ものとされており、そのねらいとして「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること」「各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること」の 3 つが挙げられています。

この内容から判断すると、今の 20 歳前後の人は「人と比べてどうか、と比較するより、自分の思いや考え、興味や関心をしっかり持って、それを表現しなさい。」といった、まさに個性を尊重した教育を受けて来ていると言えます。

ところがこの時代、教育分野が個性に着目するのに対して、若者文化の方は、個でいるよりも、みんなで集まって賑やかに元気にいこう、というような動きがみられたように思います。個性の大切さを訴えるロックバンドは徐々に姿を消し、2000 年をすぎたあたりで、ＡＫＢ48 や、ＥＸＩＬＥなどの大規模グループが、グループ内での人間関係などの物語性も含めて、人気が出てくるようになりました。

生きる力教育の時代

2008 年からの現行の学習指導要領は、詰め込みでもなく、ゆとりでもない、1998 年に提示された「生きる力」というキーワードを中心に据えて、実施されています。これはいわば、社会性をもった人間への教育を目指しています。

現在の若者は、デジタルネイティブであり、テレビやインターネットなどから、あふれるほどの情報を享受する日常を過ごしています。これにより、「この世の中には、沢山の価値観があって色んな人がいる」ということを、もう重々理解しています。そのさまざまな価値観を持つ他者と、意見を擦り合わせ、一緒に何かを成し遂げていく難しさもわかっています。そして、そのようなことを行っていくことが社会では必要だという事も認識しています。

音楽シーンを見れば、嗜好は大変多様化しており、流行らしい流行はあまり見受けられません。皆自分の好きな音楽を好きなように聞いています。

そう言えば、「個性を大事にしてほしい」とか、「これは私の個性なんだから、認めてよ！」といった発言をする学生も 10 年ほど前と比べて、かなり減少した…というよりは、ほとんどそのような言葉を聞かれなくなったように感じます。個性に着目する教育から、社会性を志向する教育に変化し、子ども達の目が個性という方向に向かなくなってきたためではないかと推察されます。

社会の移り変わりとともに

「詰め込み教育」時代に対する、「１人になりたい」時代。
「ゆとり教育」時代に対する、「個性を求める」時代。

社会の移り変わりとともに教育は変化します。教育が変化すると、子どもや若者の

心にも大きな影響を与えます。若者の文化を見てみると、教育されたことをまずは受け入れ、やがてその逆方向を「成熟」と捉え、教育されたものの上に構築し、自らバランスをとろうとするような力が働くのは、大変面白いなぁと感じます。

例えば教員歴 10 年の人が、それまで蓄積してきた教育に代わって、突然来年から新しい学習指導要領に基づいてやりなさい、といわれても、たとえ研修などが行われていたとしても、急に教行く方針を変えることは難しいのではないかと思います。
「一人一人の個性を尊重した教育をするぞ」と言う教員に対して、
「そんなの面倒くさいよ」と言う子どもがいて、これに対して教員が
「みんなで個性を尊重した教育をしようとしているのに、なんで一緒にやらないんだ」と注意した、という、笑い話を聞いた事があります。

2002 年から始まり、2008 年から本格化した「生きる力」教育についても、今やっと定着し、学生が「社会性って大事だよね」と意識しはじめ、冒頭の私の授業での発言につながって来たと思うのです。

文科大臣がうち出した今後の方針

平成 28 年 5 月 10 日、馳浩文部科学大臣が『教育の強靭化に向けて』を発表しました。この文書は、今後の教育のあり方について書かれたもので、平成３２年から順次実施される次期学習指導要領の方針についても触れられています。

文書は 2 つの項目から構成されており、一つは「「次世代の学校・地域創生」の実現」、そしてもう一つは「社会に開かれた教育課程の実現」となっています。

今度は 2008 年からの社会性を志向させる方向をさらに推し進めるようです。

まさに私達が、「個性って大事だよね」という考え方が広まって来た頃に「個性をいかした教育」が提示されたように、「社会性って大事だよね」という事を感じている若者が増えている中で、「社会性」が提示されています。

「社会性」に対する若者のアンチテーゼのような動きは、まだ明確には見えていません。しかしこれまでのパターンだと、社会性とは逆の方向を目指す動きが出てくるのではないかと推察されます。

さて、この新たな学習指導要領に基づく教育を受けた子ども達は、どういう社会状況の中で、どのような子ども時代を過ごし、そして、何ができることを「大人」と考えていくのでしょうか。ちょっと怖いような楽しみなような気持ちでいます。

引用文献
注 1）土井隆義「つながりを煽られる子どもたち――ネット依存といじめ問題を考える 」岩波ブックレット　2014 年 6 月
参考文献
野崎剛毅「学習指導要領の歴史と教育意識」國學院短期大学紀要　第 23 巻 P151-P171　2006 年 3 月
文部科学省ホームページ

先人の知恵から
13

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

保護者と話す機会が多いが、諺や故事をロにすると、「それはどういう意味ですか？」と聞かれることが増えた。意味を説明すると、「へえ～」「ほ～」と感心される。古くから言われていることは、全部とは言わないが、今の人たちに響くことも多い。そう思って書き続けて３年。勝手に書いているので、周りでどのように受け止められているかは気にしていないが、この調子で書いていたら、５０音の最後まで行くのにいつまでかかるのかとちょっと不安になっている。

今回は「お」のつくものから、次の８つを挙げてみた。

- 鬼も十八番茶も出花
- 己の欲せざるところは人に施す勿れ
- 溺れる者は藁をも摑む
- 思い内にあれば色外に現る
- 思う事言わねば腹ふくる
- 親の甘茶が毒となる
- 親の恩は子で送る

＜鬼も十八番茶も出花＞

器量の悪い女性でも、年頃になれば皆娘らしい魅力や色気が出てくる、粗末な番茶でも最初に湯を注いだばかりの一番茶は、香りが良くておいしいと言う意から。京都のいろはがるたの一つ。

最近の子ども達は、中々器量が良くてこんな諺を使う事も少なくなったが、時折、保護者から我が子の不器量を嘆く声が聞かれる。我が子なのに「ぶす」とか「ぶさいく」と言って、子どもの心を悪戯に傷つけている保護者もいる。思春期の子ども達は自分の器量を気にしだして、整形手術をしたいと言いだす子もいる。「一重の目がいやだ」「鼻が低い」「顎が張りすぎている」などと自分の顔を鏡で見ては「目と鼻を整形するまでは学校に行かない」とまで言いだす。不登校になっては困ると保護者が整形

を許す事例もちらほら出てきている。しかし、女の子は、年頃になるとそれなりにきれいになるものである。特に恋をすると、見間違うほどになることさえある。化粧が更にそれを引き立てる。

18 歳と言うと、夢や希望に溢れ、恋をしたり、バイトをしたり、ちょっと大人の雰囲気になる。お化粧も子ども達は上手にするので、きれいに化ける。ファッションも決め、スタイルもそこそこ良いので、輝いている子が多い。この年齢から上 10 年くらいが出花か。例え器量が悪くても、我が子を「ぶす」だの「ぶさいく」だの呼ぶのではなく、良い所を褒めて、子ども自身が器量で悩んでいたら、この諺を伝えてあげて欲しいと思う。

英語では・・・

Everything is good in its season.（物はすべて旬が良い）

＜己の欲せざるところは人に施す勿(なか)れ＞

自分がして欲しくないと思う事は、他人にとっても同じことだから、他人にしてはならないと言う戒め。出典は論語

似た言葉に「わが身抓って人の痛さを知れ」というのがある。これらの言葉はとても分かりやすい。最近の子育ての場面では、子ども達は親が望まないことはしないように気を付けている。ところが親の方は、自分が望むような子に育てたくて、子どもの意向を考えない場合がある。自分の基準で考えてしまうと問題が起こる。

小学校での出来事。ある子が暴力をふるうので、人を叩いたらいけないということを伝える際に、先生が「叩かれたら痛いでしょ？痛いのは嫌でしょ？あの子も叩かれて痛かったんだよ。だから叩くのは辞めようね。」と言う話をした。するとこの子は「あいつが嫌なこと言うからいけないんだ。叩かれたって、僕は痛くないもん。叩かれたって平気だもん。だから叩く。」と言った。こういう子には、この諺は通用しない。説得しようとするのではなく、駄目なものは駄目と単純に伝えた方がこういう子には良いのかもしれない。

では自分がして欲しいことを他人にすればよいのかと言うとそういうわけでもない。

こんな事例があった。女の子なのだが、余り女の子らしい、フリルが一杯付いた服が嫌いな子だった。しかも周りの女の子達も、ヒラヒラのついた服は着ていないのに、母親がその子にそういう服ばかり着せた。子どもは学校でいじめに遭う羽目になったが、母親には話さなかった。母親は自分の好みの服だったのだろう。もしかしたら母親自身が子どもの頃着たかった服だったのかもしれないが、子どもの気持ちを無視した行為であった。その後母子の関係は最悪になり、その子は家出少女となった。

自分がして欲しいと思う行為であっても、相手が好まないということもある。しかし一般的には、自分がして欲しくない事はしない方が良い。せめてこれだけは最低限守って欲しいものだ。

英語では・・・

Do as you would be done to.（人からし

てもらいたいとおりに、人に対してやりなさい。）

＜溺(おぼ)れる者は藁(わら)をも摑(つか)む＞

困難に直面している者は、手段を選ばず、どんな物にでもすがりついて救いを求めようとすることのたとえ。元々は英語のことわざ。

困っている人、悩んでいる人は、視野が狭くなりがちで、グルグルと同じところを回って悩んでいたりする。更に困ってしまうと、何も見えなくなってしまう事さえある。目の前に手を差し伸べてくれる人がいるのに気付かず、あらぬ方向に手を伸ばしてしまうケースに度々出会う。

誰かに相談すればよかったのに、或いは何か違うことをしてみればよかったのにと思うことがあるが、そういう時に入り込んでくるのが宗教や占いではと思う。

「困った時の神頼み」などと言う言葉もあるように、やるだけの事をやったら後は神様に頼もうということで、合格祈願や就職祈願に神社に通う人も多い。宝くじが当たりますようにと祈っている人も多いだろう。それはそれで本人の安心感の手伝いになることもあるので特に問題は無い。誰に迷惑を掛ける話でもないし。

ただ、怪しげな宗教や占いに頼ってしまうと問題に巻き込まれることがある。

問題解決や困難を乗り切るために、板切れを数百枚庭に埋めろとか、高価なツボを買えとか、酷い場合は離婚しろとか、家族を壊すようなお告げ（？）があったりする。それをまた真面目に言われたとおりに実行する人がいる。

不登校の子どもがいて、不登校になったのは先祖に不義理をしているからだと言われて、遠くまでお墓参りに行った方がいた。お墓参りに行く事自体は別に悪い事ではないが、それで問題が解決されるはずもない。お墓参りに行っても変わらなかったと、よせばよいのに再び相談に行ったら、今度は〇〇を買って家に置き、毎日拝みなさいと言われた。その方は、子どものためと思って数十万もする〇〇を買って拝んだ。それでも解決するはずはない。そこで初めて騙されたと思ったそうだ。数十万で済んだことが、「良い勉強になった」と諦められる値段かどうかは家によって違うだろう。なけなしの貯金をはたいてしまっていれば目も当てられない。

平静であれば、そんな事には引っかからないのだが、困って居る時は簡単に引っかかってしまい、結果、更に困ったことになり易い。気を付けたいものである。

英語では・・・

A drowning man will catch at a straw.

＜思い内にあれば色外に現る＞

何か心に思っていることがあると、自然に表情や動作に現れるということ。「心内にあれば色外に現る」ともいう。出典は大学。

子ども達と面談をしていると、友人の関

係性に悩んでいる子が多い。人の様子に過敏に反応し、「あの人私の事嫌いなんだ。」と言う。「どうして？何か言われたの？」と聞くと、「そういう雰囲気、態度だから。」と言う。

本当に嫌っていて、あからさまに態度に出している子は確かにいる。しかし最近の子は余り外に感情を出さない。となると思い過ごしということが多い。それ故、子ども達には思い過ごしかもしれないということを上手く伝え、確認してみることを勧める。

ただ、いじめられて居る子で、口で「辞めて」とか「嫌」と言えない子には、担任や親に相談することも勧める一方で、この諺を伝える。全身で「嫌だ」「辞めて」という思いを表現することで、避けられるいじめもある。

困った時に笑顔になってしまう発達障害の子がいるが、そういう子には「嫌だ」と言う顔を練習して貰ったりする。

人を嫌っていればそれは言わなくても伝わってしまうことは確かにある。相談場面で、「この人苦手だ」と思いながら話を聞いていると、そういう雰囲気が相手に伝わるだろう。支援者として気を付けなければならない。

子ども達のためにも、我々支援者のためにも使える諺ではなかろうか。

英語では・・・

The face is the index of the heart.（顔は心の指標）

＜思う事言わねば腹ふくる＞

思っていることを、差し障りがあるからと言って言わずに我慢していると、食べ過ぎて腹がふくれている時の様に気分が悪いものだということ。

この諺は子ども達によく使う。小さい子には風船を例にして説明する。腹が立ったことを我慢し続けると、風船に空気を入れ続けているようなもので、どこかで爆発してしまう。爆発してしまう時は、思いもよらぬことを言ったりしてしまう。その結果、周りの人との関係性を最悪にしてしまうこともある。だから、腹が立ったことは我慢し続けるのではなく、小出しにして行くことが大切と伝えている。

大人でも同様だと思う。矯めて貯めて爆発するのは、大人であっても良い結果にならないだろうから。大人が先ずは見本を見せて行くと良いのではと思う。

＜親の甘茶が毒となる＞

子どもを甘やかして育てることは、その子の将来のためによくないということ。

「毒親」という本があった。子どもにとって毒となる親は今も昔も変わらないと思う。

先ずは、子どもを虐待する親。この手の親はもちろん毒であろう。それは誰もがわかる話だ。一方、甘やかしすぎる親も問題だ。子どもが少なくなり、親も祖父母も子どもがかわいくて仕方がない。小さいうちはともかく、ある程度自分の事を自分で出

来る年頃になれば、手放していかなければならない。それが出来ない親や祖父母がいるために、子ども達はこの上なく甘やかされて、依存的になってしまう。そんな過保護は子どもにとって一つも良い事は無い。

子どもに愛情を向けることは当然の事で、それ自体は問題ない。では過保護とはどういうことであろう。子どもが自分でできることに手をだし、子どもが決めたいことを決めさせず、何でも子どものためという大義名分のもと、大人の思い通りにしてしまうことである。親は子どもの自立を喜べるよう、親自身が自立することも必要である。子どもの自立こそが、子育ての最終目標なのだから。

＜親の恩は子で送る＞

親から受けた恩は、我が子を立派に育てることで恩返しできるということ。親に恩返しができる頃には親はもう生きていない場合が多いことから。

親と言うものは子どものためならどんなにでも頑張れるものである。そんなに頑張ってもらっても、子どもが十分な恩を返す前に、親が亡くなってしまうことがある。親への感謝の気持ちを伝えたくても伝えられない。しかし親はそんなに子どもから恩返しをして欲しいと思っている訳ではない。親にとっての一番の恩返しは、子どもが成長し、自立し、元気に暮らしてくれることである。それが親と言うものだろう。そしてもし出来れば、結婚して子を持ち、その子を元気に育ててくれれば、親の血が繋がって行く。それもまた嬉しい事だろう。たまに元気な顔を見せてくれたり、声を聴ければそれでいい。

今回はここまで。

出典紹介

大学

一巻。孔子の遺書とも子思または曾子の著作ともいう。もと「礼記」中の一篇（第四十二）であったが、宋代以後、単行本として独立し、朱熹（朱子）がこれを四書（『大学』『中庸』『論語』『孟子』）の一つとしたことから、特に広く読まれるようになった。修身、斉家、治国、平天下の道を説く。朱熹が全文を「経」と「伝」に整理し、三綱領（明徳・止至善・新民）、八条目（格物・致知・誠意・正心・修身・斉家・治国・平天下）の体系をたてた。

論語

三十巻。儒教の経典。『大学』『中庸』『孟子』と共に四書の一つ。孔子の言行や門人たちとの問答を記録した書で、孔子の死後に門人たちが編集したものといわれる。孔子は諸国を回って仁の徳による政治を説いたが、本書は講師の人物や思想を知る上できわめて重要な資料である。

対人援助学マガジン第 25 号
生殖医療と家族援助

例えば、卵子提供による家族形成について⑩

～家族をひらく～

荒木晃子

家族のいろいろ

D 夫：僕たちは、結婚して自然に二人の子どもを授かった。よくよく考えると、これって、とても幸運なことなんだね。

D 子：え？突然どうしたの？

D 夫：うん・・・実はね、君が卵子を提供したいって言いだして以降、新聞や報道、生殖医療に関するネット情報にやたらアンテナを立てるうち、自分なりに家族について色々考えるようになったんだ。例えば、もし君に卵子がなかったら僕たちはどうしていたのか。もし僕に精子がなかったら、とか、いろいろ。

D 子：そうなのね。それって、私たちが今まで考えなくて済んでいただけで、本当はとても大切な家族の問題だったのかもしれないわね。それに、将来、子どもたちにもその可能性がないわけではないし・・・これまで考える必要がなかったということは、ある意味、幸運といえるのかもしれない。でも今は、生まれつき卵子のない女性の存在を知り、自分の卵子を提供することを真剣に考え始めてみて、本当は他人事ではない気がしてきた。もしかすると、私の卵子がなかったり、あなたに精子がなかったりして、私たちが悩んでいたのかもしれないし、将来、二人の子どもたちが直面する可能性も否定できない。生まれながらに卵子や子宮のない女性もいれば、中には、若くして卵子や子宮を失う女性もいると聞いている。がんや病気、交通事故やアクシデントで、いつ自分自身がその当事者になるかも知れない。そう考えると、誰もが自分や子どもたちのため真剣に、社会でどうサポートする/できるのかを考えなければならない問題のような気がする。

D 夫：僕もまったく同じことを考えていた。つい先日、いま日本には卵子提供や精子提供、そして代理出産に関する法律がないことは伝えたよね？（D 子：ええ。）法律がないってことは、言い換えれば、無法地帯ってことだよ。確かに、生殖医療施設にはそれなりのルールやガイドラインがあるのかもしれないけれど、それは、あくまでも医療現場の規制でしかない。だから、医療技術ありきの妊娠には、不妊治療が前提という条件付きで、子どもをつくることになる。ということは、医療施設がそれを「する」といえば、子どもを授かる可能性が生まれるし、反対に、施設から「できない」といわれれば、あきらめざるを得ないということになる。実際に、患者から、こういう治療があるからやってほしいとは言えないからね。

D 子：確かにそうだけど・・・でも日本では、精子提供だって、第二次世界大戦終結の数年後からずっと継続して実施されてきたとい

うし、最近では、卵子提供を実施する医療機関もある。すでに、国内でも代理出産で生まれた子どもも存在するし、今でもそういった生殖医療技術を必要とする当事者たちがいなくなったわけではないはず。そうやって過去に、数万人という子どもたちが誕生した事実があるのに、なぜ法律で認められないのかしら？なんだか合点がいかないわ。

D 夫：まったくその通りだね。素人の僕たちが考えても納得がいかないってことは、今まさに、その問題に直面している人たちにとっては、法律や医療、そして社会から、自分たちが子どもを持つことを拒絶されているように感じるかもしれないね。ちょっと極端な意見かもしれないけれど、当事者の立場にたち、自分の問題として考えてみると、そんな気がしてくる。万が一、物心つく年齢で自分が当事者であることが分かれば、なおさらだろう。自分には子どもが産めない/産ませられないと分かれば、それはそれは傷つくだろうしね。恋愛や結婚にも影響するかもしれないし、人生観が変わるかもしれない。それほど大きなショックを受けるんじゃないかな、僕ならば‥だけどね。

家族になれるのは生まれた後から？

D 子：そうなの！私も同じことを考えた。もし自分だったら、もしそれが我が子だったら、って。でね、卵子を提供したいって思ったの。もちろん、養子を迎える選択肢があるのは知ってるし、最近は、新生児委託といって、生まれたばかり/生まれて間もない赤ちゃんを、不妊カップルが育てるケースもあるらしい。TV の特集で見た養育家族は、両親も子どもたちも、とても幸せそうだった。面会交流の場面では、その子を産んだ女性も、その子を育てている両親も、互いに感謝し合っていた。家族って、皆が家族になろうと思えば、なれるものなんだって思った。だって、家族は血のつながりだけじゃないでしょう？私たちもそうだけれど、夫婦は、もともとは他人。お互いの意思で家族になったんだもの。だから、血のつながらない子どもとだって、家族になれるはず。親がその子を家族として迎えいれ、愛しみつつ一つ屋根の下で共に暮らし家族になる。そもそも、あなたと私だって、お互いが自分の好きなように勝手気ままに暮らしていても、夫婦でいられるわけじゃない。家族って、それなりに、皆が少しずつ頑張って（家族に）なっていくものだと思うのよね。そう考えると、卵子提供は卵子を養子に出すこと、っていう考え方は、そう難しくはないと思う。確かに、自分が産んだ子どもを養子に出す女性には余程の事情があると思う。でも、その子を養子に迎えるどの家庭でも、その子が幸せに育ってくれることを願い家族として迎え入れるはずよね？その点は同じではないのかしら。もちろん、生まれた子どもを迎えることと、卵子や精子を（養子として）迎えることが同じとは言えないかもしれないけれど、卵子/精子を縁組し、自分で産み育てる、と考えることができれば、複雑な生殖医療技術は、親子縁組のための社会的手続きの一つとして捉えることができないかしら。

D 夫：卵子の養子縁組ね‥‥。そうとう斬新な考え方だね！

D 子：そう‥‥かな。だって、産んではみたけれど、様々な事情で実際に育てられない人たちがいる。養子縁組ってそこから始まった子どもたちのための制度。子どもって、産まれたらみんな幸せになれるわけではない。

誰が/どこで/どう育てるかで、その子の人生が大きく変わるんだと思う。そう考えると、例え提供卵子で妊娠しても、その子は生まれる前から、その子の誕生を心待ちにするカップルに迎えられる。もしかすると、世界中の誰よりもその子の誕生を心待ちにしていたカップルに、よ！これって、子どもが幸せになる条件を満たしてるって、思わない？

子どもの幸せを願う

D 夫：なんだか変に説得力があるね。でも僕が言いたいのは、レシピエントと同じように、子どもが幸せになる前提で卵子を提供したいと考えるドナー、つまり君のことだよ。

D 子：あら、ごめんなさい！私ったら、生まれてくる子どもや、提供を受けるレシピエントカップルが幸せになることばかりを考えていて、提供するドナーのことは、あまり深く考えたことはなかった気がする。ふふ・・笑っちゃうわね、今回ばかりは「自分のこと」なのに！

D 夫：やはり、そうか。いろんな情報を集めてみても、提供を受ける側と生まれた子どもについては医学的な側面から、様々な課題や意見、さらには研究結果などが提示されているように感じた。特に、生まれてくる子どもの出自を知る権利については、子どもの福祉の視点で、とても重要だとされている。かつて、精子提供で生まれた子どもの権利など、まったく関心がなかった医療者たちも、今では、子どもの権利について、その重要性を認める方向に変わったしね。でも、提供するドナーに関しては、「ドナーになる条件」のガイドラインはあるものの、そのサポートや保障に関しての情報は全くといっていいほど見当たらない。だから、生まれてくる子どもの幸せや、レシピエントカップルに寄せる君の思いを聞くたびに、僕は複雑な気持ちになる。何故か理不尽な気がするんだ。リスクを承知でドナーになろうとする善意の行為が、このままでは、単に不妊治療の患者として卵子を取り出し、その後は君の個人情報と一緒に、僕や二人の子どもたちの個人情報までもが、一般人が勤務するような個人医療機関に数十年も保管される、って事実がどうしても納得できない。僕たち家族の情報を、信頼関係も成立していない医療施設で管理されるってことがね。

D 子：確かに・・・あなたの言うとおりだわ。もし私が卵子提供ドナーになるとしたら、検査する病院選びから、誰に提供するのか、そして、提供した後もずっと、一切何も選択の余地は与えられていない。色んな検査をした結果、果たして選ばれるのか否か、いつ採卵するのかもわからない。唯一権利として認められるのは、「いつでも辞退できる」ということだけだった。

D 夫：僕には、そのあたりも理不尽に感じる点の一つなんだ。善意を称賛される必要はないけれど、提供というリスクを伴う医療行為には、少なくとも社会的/身体的保障は必要だよ。ドナーなしには成り立たない医療行為に、ドナーにだけ、なにも保障されないことが、家族として納得できない。それに、生まれた子どもの権利を保障するならば、ドナーの子どもの権利も保障するべきだよ。提供卵子で生まれた子どもにだけ、特別な権利があるなんて、不公平だとは思わないかい？子どもだけじゃない、レシピエントだって、ドナーだって、少なくとも身体的保障と平等の権利は与えられるべき、というより、これは本来、全ての国民が持つ権利だと思う。

＜次号へ続く＞

対人援助学&心理学の縦横無尽

（１９）

コミュニケーションの心理学　－特にリスクを巡って

サトウタツヤ（総合心理学部）

本稿は 2016 年２月１９日に大阪府危険物安全協会で講演した内容の記録をもとに口語的に執筆したものです。

０ 前口上・概要

本日は心理学の解説や日常生活に役立つ話をした後にコミュニケーションについてお話をします。その後リスクコミュニケーションとエリートパニックという話題についてお話します。みなさんは危険物のエリートだと思いますが、エリートだから陥るパニックがあるということを聞いていただきたいと思います。そして、最後は「北極星的展望を持て！」ということをお話しします。今日、事故の予防のために人的要因（ヒューマンファクター）が重要視されています。その時にマニュアルを作成して、手順指示で行ってもあまり良いことはない。かえって問題が大きくなってしまうことがあります。このことから、遠い展望をもって物事を行いましょう！というようなお話しをさせていただきたいと思います。

１ 自己紹介

私自身は何をやっているのかといいますと、研究テーマは「ホントっぽいウソ」です。「○○神話」と呼ばれるものの研究です。「○○神話」とは何ですかと考えると、根拠が無いのに信じてしまうようなことです。「証拠もないのに正しい」と思われていて、人に広まっていくもの。それが「○○神話」です。また、うわさ話もそれに近いので、うわさも研究テーマです。

皆さんは血液型と性格の関係があると思っている方がおられると思いますが、それは錯覚だ、血液型神話だと言うのが私の立場ですし、実の母親が 3 歳まで育てないと子どもがちゃんと育たないというのも根拠のないもので母性神話という言い方になります。もし、そんなルールがあれば人類は滅びてしまったと思います。誰の子であっても誰かが育てるという柔軟性が必要だったのです。誰か重要な人が居ることと、実の母親でなければダメだということは、論理的にはつながりません。もちろん実の母親が 3 歳まで育てることに害があるということではありませんけども、そうでないとぜったいにダメだというのは母性神話なのです。根拠もなく信じているお話なのです。

２ 心理学とは何か

心理学は、人の心理についての学問です。その人というのは不思議な概念で、3 つの切り口があります。

ヒトを対象にした心理学、ひとを対象にした心理学、人を対象にした心理学、です。読むと全て同じですが・・。

ヒトを対象にした心理学。それは、動物と同じ、生物としてのヒトに着目するものですカタカナの「ヒト」で表します。

例えばチンパンジーの研究をしている有名な松沢哲郎先生がおられます。チンパンジーも計算ができるとかコミュニケ

ーションができる。そのチンパンジーと比較することにより、人間の特質を理解しましょうというカタカナの「ヒト」の心理。

ひとを対象にした心理学は成長していく存在としての人を扱います。ひらがなの「ひと」の心理があります。私たちは 5 歳、10 歳、15 歳、20 歳とそれぞれの年代で現在までは自分だと思っているわけです。しかし、一方で歳を重ねながら変わってきている部分もある。例えば、博多の女と書いて博多の「ひと」と読んだりします。博多というところで生まれ育っていくと、博多の「ひと」となっていくわけであす。性別についても、生まれつきというよりは、成長の過程で取り入れていく女性らしい役割、男性らしい役割というものがあります。それを積極的に取り入れていくと、男性となり、また女性ともなります。それをしない人もたくさんいますよというのが、現在、理解されているところですが、いずれにしても時間のなかで育っていくというのが「ひと」なんだということになります。

人を対象にした心理学は、社会に生きていく人間の心理です。社会というのは人と人が支えあって作っていく。そして、人間が社会を作り、作った社会に人間が育てられ、あるいは作った社会に人間が疎外されるというようなことがあります。そういった社会で生きていく漢字の人の心理ということで、動物での「ヒト」、発達・成長する存在の「ひと」、社会を生きていく「人」があるわけです。

さらに心には不調な状態があり、「うまくいっている」ときでだけではなく、「うまくいかない」ときもある。その時、カウンセリングなどの工夫をして不調を改善する。そうした分野を一般に臨床心理学と読みますが、それも心理学の分野の 1 つです。

心理学というのは心理というものについて、色々な角度から行うのが心理学になります。また、ライフという言葉があります。ライフは生命、生活、人生と訳されますが、このライフ（生命・生活・人生）について、生命と捉える場合は自然科学的アプローチ、生活として捉える場合は社会科学的アプローチ、人生としてとらえる場合は人文科学的アプローチ、として捉えるのが心理学の全体像です。最後のことについて補足しますと、過去は変えられない、過去に起きた出来事は変えられないが、過去のことを語り直すことができる。語り直しをすることによって意味づけを変えることができるようになる。こうしたことは自然科学的アプローチではできませんから、人文科学的な物語論みたいなアプローチで接近することになるわけです。

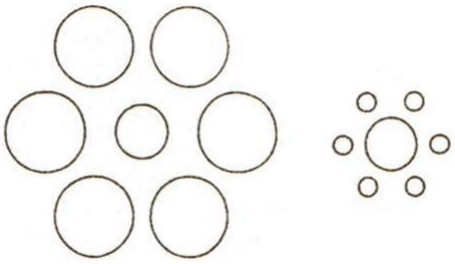
ここからは自然科学的なアプローチによる人の心理について話をしていきます。

☆自然科学的な心理学

ヒトの心理学の中は自然科学的な心理学で、感覚・知覚心理学の領域があります。

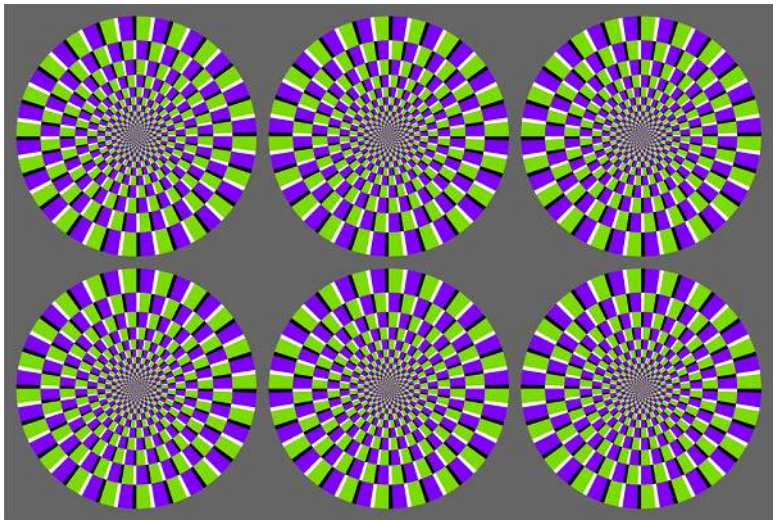
感覚・知覚というのは人間と同様、動物にも備わっています。わりと科学的な方法で行う領域になります。

図を見て下さい。



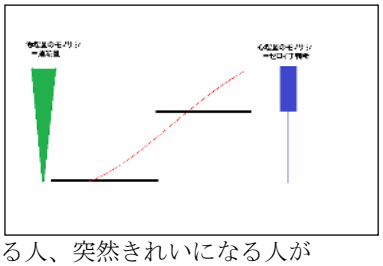
真ん中の円の大きさはどちらが大きいですか？実は同じです。周りに小さいものがあると大きく見え、周りに大きいものがあると小さく見える対比効果です。周囲の〇の大きさを変えるとどのように見えが変わるのか、を実験すること

が可能になります。こうしたことは、ヒトとしての心理学の対象になります。なお、立命館大学には有名な北岡明佳先生がおります。この図はアニメーションではありません。その証拠に、どこか一部分だけ見ているとどこも動いていないことがわかります。



他にもいろいろあるので北岡先生の HP を見てみてください。

http://www.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/



あともう一つの話題です。感覚と知覚で得られることは、0 と 1 しかないということです。

音を考えていただくと、音にはボリュームがあります。これは量で変換されます。ところが、聞こえる－聞こえないというのは、0 か 1 なのです。聞こえるまでは聞こえないわけで、物理量は連続的に増加しますが、心理量というのは、聞こえたかどうかの階段状態、0 か 1 ということになっています。皆様の周りで突然痩せる人や突然太る人、突然きれいになる人がいると思います。実は、体重は徐々に増減していますし、綺麗さも徐々に増しているのですが、閾値(いきち)を超えない限り認識されないのです。綺麗になりたい、かっこよくなりたいというときに、自分は努力しているのに外からの評価が追いつかないということは良くあります。そのような時は閾値に達していないわけですから、閾値に達するように努力を続ける必要があるのです。

人間の感覚というのは 0 か 1、つまり、質的に違っている事をこの機会に理解していただければと思います。

物理と心理は違います。心理学の理論の根本はそこにあるわけでして、心理が物理と完全に一致するなら心理学はいらないわけです。

☆発達プロセスの心理学

次に「ひと」の心理学、発達心理学ですが、発達とは量的な変化でしょうか。身長が伸びれば成長したと言えるのでしょうか。何が発達と言えるのでしょうか。

例えば、知能の発達というのは、あるところで止まるのか、もしくは衰えていくのだろうかという問いがあります。20 世紀の心理学においては、頭の良さであるとか、理性的判断は 30 才ぐらいをピークに落ちていくと言う中年にとっては悲しい理論だったのですが、最近は変わりました。単純な記憶力みたいなものは確かに落ちていきますが、「知恵」みたいな

ものは年齢と関係がなく、職業で蓄積していくというのがあり、仕事の回し方等については年齢とは関係なく、むしろ増えていくことがあるということです。単に丸暗記や、数字を 15 桁覚えるみたいなことは、加齢と共に確かに衰えていく。しかし、先ほど言いったような意味の理解とか知恵の働き方については生涯について発達していくというのが現代の心理学になっています。

☆社会の心理学

次に、社会心理学ですが、社会心理学の社会と言うのは、人と人との関係であり、まさに皆様がどのようなスペースで座っているか、どのような姿勢をとっているのかということも、社会心理学です。また、意味をどうとるのかということとも社会によって影響される側面があります。同じモノでも違った意味に取ることがある、というのは日常生活では良く知られています。私たちは物の意味をどのように取っているのかという問題を考えてみましょう。意味というのももちろん心理学の課題になり、その時に文脈主義という考え方があります。

ある「こと」や、ある「もの」の意味を考える時に、そのことだけを見誤る可能性があります。

例えば、図の左側のモノですが、これはなんでしょうか。おそらく今皆さまは意味づけをしていると思いますが、笑顔のように見えるかもしれません。しかし、もし右の図のような文脈があれば B と読むことになると思います。その時、意味はどこにあるのかと言うと、真ん中の文字にあると答えることもできますし、この文脈があることにより意味が分かると言うこともできると思います。アルファベットを知らない人は、B と読めないわけですから、これは社会的に構成された意味づけの問題だということになります。

物事の意味を取る時には、有ることだけを見たり考えたりしているだけではだめで、その周囲の文脈と一緒に考えることが大事なのです。紛争はたいてい、お互いの文脈を理解することで小さくなる、というのが社会心理学の提案です。

3 暮らしの中の心理学

少し話題を変えまして、日常で少し役に立ちそうな話題について考えていきましょう。心理学には応用心理学があり、心身が不調になった場合の対応や支援を考える分野があります。こういう話題について話していきます。自分の事として聞いていただいても構いませんが、部下がおられる方や自分のお子さんがおられる方は、その方々に役立てるために聞いていただいても構いません。

☆緊張しないにはどうするか

試験や試合の時に、あがってしまう、ご自身でなくても、お子さん等が緊張してしまってうまくできないからどうしよう！ということはあるでしょう。これは、心理学的に極めて簡単な解決方法があります。聞くとなんだというぐらいの簡単な話です。

リラックスすればよいのです。

それができれば苦労しない、というかもしれませんが、実はこれがポイントなのです。

緊張したくないと考えると逆に緊張してしまいます。そうではなく、緊張とは両立しないことをやれば良いと考えればよいのです。たとえば口は食べることと話すことに使います。1 つのことをしている時はもう 1 つはできない。このような関係を、拮抗関係と呼びますが、緊張と拮抗関係にある行動を行えば、原理的に緊張しなくなります。

緊張したくないのであればリラックスすれば良いわけです。緊張したくないのに、緊張すると思えばますます緊張するだけです。おそらく皆さまは、リラックスなんて自分でできるのか？それができないからこそ問題だ！と思っておられると思います。

リラックスは行動だと思うことが大事です。**行動**であればできるのです。**状態**と思うからできないのです。リラックスというのは、状態ではなく行動でできる！ということが心理学の工夫と言うことになります。

リラックスという行動をするためにどうするのかと言うと、たとえば深呼吸。皆さま深呼吸は息を吸う方からだと思いますが、吐く方から始めます。呼吸を吐いて苦しくなります。この状態は緊張状態です。その状態で息を吸うとホッとしますよね。この感覚がリラックスです。自分でいつでもできるようにも成ります。ちゃんとした訓練を受けないとできませんが、訓練を受ければできるようになります。

さらに、ルーティーンと呼ばれるような行動の連鎖を工夫することもできます。最近、有名になりました五郎丸ポーズですが、心理学の立場から見ると、完璧です。

このポーズは指先に力が入っていると思われがちですが、①掌を合わせて、②肘を閉めて、③腰に力が入り、④膝がクッションになっている。まさにリラックスしている状態を作り出しています。よって次に力が発揮できるのです。こういう型を行うことにより、リラックスをするポーズを作るということは、完璧だと思います。

なぜこれをルーティンと呼ぶのでしょうか。常々やることによって平常な行為連鎖のスタイルを作るということです。時間的に連鎖した行動を安定的に行うことによって平常心を保つことができるのです。未来に起きることは誰もわからない。だからこそ、未来に向かう際の行動を安定させて、未来の結果を安定的にしようというのがルーティンの役割なのです。スポーツでも仕事でも、こういったルーティンを作ることを是非、部下やお子さんに教えていただければと思います。

☆眠れないときどうするか

次に、疲れているのに眠れないということを取り上げましょう。みなさんは睡眠を**状態**と思っていると思います。睡眠は**行動**だと思ってみましょう。睡眠は行動だ、と思うと眠れないときの対処方法が見えてきます。

まず睡眠が行動だとするなら、疲れている時は寝られないのは当然です。若い時分は 14 時間くらい寝たりできたと思いますが、それは若くて体力があるからです。しかも 14 時間睡眠の後は疲れていたと思います。それは、睡眠が行動だからです。疲れているから眠れないのではなく、眠れないから疲れていると思うことが大事なのです。

では、眠れない場合どうするかというと、単純です。疲れていると思うことです。対処方法の一つは、疲れが取れるまで横になっているということです。眠れない時は疲れているのです。だから寝るのではなく、早めに床に入って疲れをとるのです。疲れが取れると眠れるようになる。他の対処方法は今の逆です。今日は疲れてもう走れない、という時でも一生懸命やれば走れるということがありますよね。それと同じで気合で寝る！というやり方もあります。どちらかというと疲れを取る方が良いと思いますが、どちらが良いのかは、人によって異なります。

さて、夢見が悪い、つまり悪夢で起きてしまうことについて話をしましょう。これは夢のせいで起きてしまう、と考えがちですが、実は逆です。夢は、皆さまを起こさないために物語を作っているのです。自分では気づいていないでしょうけれど、夢が作っている物語によって起きずにすんでいることの方が多いのです。夜中に物音（救急車のサイレンとか）がした時、夢は辻褄合わせの物語を作ってくれているのです。どうしても夢の物語が破たんしてしまう時には、起きざるを得ません。したがって夢で起きたときは必ず夢見が悪いのです。その時、夢のせいで起きたと思わず、起こさないように努力していた夢の力に感謝してください。

☆自分で抱えきれない問題がある時にはどうするか。

自分で抱えきれない恋愛問題や金銭トラブルなど自分のせいで起こした問題にせよ、社内抗争に巻き込まれて問題を抱えた時にせよ、自分で抱えきれない時には、爆発しそうになってしまいます。その時にどうするか？この答えも当然ながら簡単です。

相談相手を探すことです。

それができたら苦労しないし、そういう相手がいないことが、悩みを倍化させることになります。近しい人だけが相談

相手かといえばそうでもありません。少し距離が遠い人とか、中学校の恩師等、誰でも構いませんが、相談する相手を見つければ、悩みの半分は消えていると思います。

もちろん、相談ができたら苦労しないわけです。できないのであれば、小出しするやり方が有効です。絵を描く、踊る、歌う、日記を書く。これは、子どもの心理療法で使用する方法です。地震が起きたときお子さんが眠れないと言う例があります。子どもは地震がきたから怖くて眠れないと思わないですし、思ったとしてもしゃべりません。「○○ちゃん、どうしたの？」と聞いてもしゃべれないのです。そういう時、子ども相手の心理カウンセラーというのは、絵を描いてみようか！などと言って絵を描いてもらうのです。描くことによってどのような色使いをするのかを見ると同時に、描くという方法ですから、発散になるわけです。

あるいは、踊る、歌うということですが、私がおすすめするのはカラオケで歌うことです。これをすることによって、平穏性は取り戻せますし、これをしないとどんどん不眠になったりして、不眠になると疲れやすい、疲れると増々不眠になるということになりますので、悩み事があるときは、まずは相談、できない時は発散、ということを是非やってほしいと思います。

4　コミュニケーションの基礎

☆コミュニケーションは意味の共有

次にコミュニケーションの基礎に移りましょう。コミュニケーションとはどういう意味なのかというと、「共有」が語源です。複数の人が意味を共有するということがコミュニケーションなのです。コミュニケーションというのは、色々ありますが言葉によるコミュニケーションが基礎の 1 つです。しかし、コミュニケーションできた、というのは言葉だけではなくて、非言語コミュニケーションも存在します。言語かしぐさか、というのはコミュニケーションのチャンネルの話であって内容とは異なります。

今では SNS がブームになって、発信がすごく簡単になりました。実はそこが罠でして、発信はしやすいけども受信されにくい時代になっているという事実があります。発信すれば受信してもらえるわけではないのです。対面でコミュニケーションするのがなぜ大事か（部下と上司のコミュニケーションでも、親子のコミュニケーションでも)、と言えば、やはり面と向かって伝えることで、何が伝わって、何が伝わっていないのかを理解することができるからなのです。言語以外のチャンネルも使ってコミュニケーションできるので、対面コミュニケーションは豊かなコミュニケーションが可能になるのです。

言語以外のコミュニケーションについて、ミツバチはコミュニケーションしているのかを研究した学者がいました。このフリッシュという人は、ミツバチが仲間に対して蜜のありかを教えるのにダンスをすることを明らかにしました。蜜が遠くあるときは 8 の字ダンスをして、近いときは円を描くダンスしてコミュニケーションをとっている。言葉以外のコミュニケーション、非言語コミュニケーションといいますが、先ほど申しあげました、顔の表情、ジェスチャー、身体的距離、文字/記号なんかのコミュニケーションもあるわけです。

☆言葉によるコミュニケーション

言葉のコミュニケーションについてもう少しお話ししますと、情報伝達においては、非言語コミュニケーションより言語コミュニケーションのほうが主流となっています。関係によってこれも変わってきますが、「ねぇ取って」で通じると仲が良く、「それ取って」で文脈が理解されている。「本取って」いう、具体的になればなるほど、関係が深い場合には、「ねぇ取って」みたいなコミュニケーションになる。

言語と言うのは面白い現象です。世界の切り取り方そのものなのです。日本人で、稲、米、ごはんを混同する方はおられないと思います。しかし英語だとライスです。電車の中から外を見て稲穂が見えた時、で、「ごはんだ！」と叫んだら大変

なことになります。よほど、おなかが空いていることになってしまいます。しかし、外国の人は、これはライスだ！ライスは何だっけ、ごはんだ！となって、電車から稲穂を見て「ごはん！」と言うことが起きてくるわけです。

なお、これは日本人だから言葉が繊細だ、というわけではなく、それぞれの言語により、それぞれ繊細な部分があります。

さて、言語というのは音声と文字からなっています。音声と言うのは、揮発性で今この場所にあって、学習は容易で、ピッチであるとか、音の大きさであるとか等、付属情報が多いわけです。それに比べて文字は、保存できて、紙を持ち上げることができますが、読み書きの学習が困難です。例えば私たちにとってアラビア語などは、どこで区切れているのかわかりませんね。したがって、音声と文字とうまく使い分けることが大事となります。

また、言語コミュニケーションの特徴として、言葉には「感情価」と言うのがあります。同じ意味の言葉でも褒め言葉と貶し言葉があります。〇〇ちゃんの彼氏神経質だよねと、〇〇ちゃんの彼氏繊細な人だよね、とは違うわけです。お父さんであると、娘に彼氏ができたときについ、悪く言ってしまう。そういうつもりがなくても、言葉を選ばないと、かえって娘の感情を害することが発生します。「お前の彼氏、少し見たけど神経質だったな」と言うのか、「繊細でお前にも合っていると思うよ」と言うかで、娘さんの父親の見る目が全然違ってくるわけです。

☆記号によるコミュニケーション

次に、記号によるコミュニケーションの例ですが、韓国の大学院生からメールをもらいました。

I was deeply appreciative. ありがとうございます:)

末尾の「:)」は絵文字、専門用語だと Emotion+icon で Emoticon エモティコンと言います。私たち日本人は(^_^)のようなものを使います。

:) と ^_^

何が違うのでしょうか。縦横だけでしょうか？それだけではなく、笑顔の表現を目でやるか口でやるかが違っているのです。西洋の人は笑顔を口で表現するので、日本人が見ると味気ない物を送信してくるわけです。逆に、海外の人にとっては、日本の笑顔は口が平板なので笑顔には見えず、不愛想なメールを送られてきた！ということになってしまいます。

☆コミュニケーションのまとめ

前述のように、コミュニケーションとは、意味の「共有」です。したがって、発信しているだけではコミュニケーションではないのです。上司と部下のコミュニケーションが取れているはずだと思っていても、自分は喋っているかもしれませんが、相手が受けて止めているのですかという話になります。コミュニケーションには言語と非言語があって、言語だけ正しいことを言ったとしても、非言語では全然違うことを伝えていることもあります。非言語コミュニケーションは人間以外にも可能ですし、先ほどパーソナルスペースで見たように、割と動物的にやってることがあります。そういうことも無視できない事だと思います。

5 リスクについて

リスクについて考える前に、一般語である危険について考えてみましょう。一言で危険と言っても、3 つの側面があります。その３つとは、ハザードとリスクと危険、です。ハザードというのは、客観的な危険のことです。それに対してリスク及び危険とは何かというと、人とハザードの関係を含む概念です。ハザードに対する態度が受動的な場合、(狭い意味での) 危険 (danger) と呼びます。ハザードに対する態度が能動的である場合、リスクという概念で考えます。リスクは、危険と異なり、ハザードに対する主体側の能動的姿勢が込められています。

そもそも広い意味での危険 (danger) というのは、13 世紀に現れた言葉で、大雑把な概念でした。それに対して、リスクは保険などが出てきた、17 世紀になって生まれた概念になります。

Risk はイタリア語の Risco に由来する言葉で、「あえて～する」という意味をもちます。例として、「危険をかえりみずに船を出す」。江戸時代、紀伊國屋文左衛門が大嵐の時に江戸にみかんを持っていったので、大商いになったという話は皆さんご存じと思います。大嵐で船が難破する危険はあるが、品薄になっている所にみかんを持っていけば、皆に喜ばれるし、商売もうまくいく、という考え方の根本にあるのがリスクという概念になります。リスクをとる、という表現はこのことを良く表しています。

何らかの能動的なアクションをしようとするときに、「今これこれをしたら、何割の確率で失敗するかも」という表現はリスクの表現ではありません。確率的危険性の記述ですから、ハザードなわけです。客観的危険性の評価の上にたってそれでもかかわろうとした場合はリスクになります。考えるまでもなく危険だからやめよう、というのは単なるｄａｎｇｅｒです。

皆さま方のお仕事は、ある危険物について、その危険度を客観的に理解するということと、素人さんがリスクをとりにいったりしないようにすることが大事なのだと思います。

「混ぜるな危険」的なコミュニケーションがまず大事になってきます。

有無を言わさず「ダメ！絶対」的なコミュニケーションが大事な時もあるはずです。

それでも、危険なことが起きることを想定することは大切です。日本の原子力発電行政が、安全神話を振りかざし、福島ひいては日本を大きな危機に陥れたことは記憶に新しいことです。危険物を取り扱う方々は、起こりうる様々な客観的危険を想定内に置き、安全が破れたときに、「リスクを取って安全に復旧する」ことを考えないといけない尊い仕事だと思います。素人だと何かあればすぐに逃げる事になりますが、それが起きたときにどのようなリスクを取れば、抑えられるのかを考えていかなければいけない仕事だと定義することができます。

天災が起きたから、自分たちが保有・管理していた物質が、災害を引き起こしたという考え方は受け身的なものであり、管轄する危険と天災との関係を、シミュレーション的にリスクとして捉えることが求められているのです。

皆さまご存知の通り、福島第一原発事故においては、がれきを処理するロボットも作らせていなかったことが問題になりました。日本は、言霊（ことだま）神話があります。危険なことを口に出すと本当に起きてしまうから、口に出さないほうがいい、ということになります。事故が起きたときの対処法を作成すると、それにより言霊さまが出てきて、本当に事故を起こすので口に出したり準備をしたりするのはやめろというのが言霊神話の悪い面です。

東京電力福島第一発電事故以降は、「がれきを処理するロボットは作らなくて良いのだ、なぜなら絶対に安全だから」というような安全神話で考えることはできなくなりました。関係者が「想定外の天災だから責任は及ばない」というような考えを持っていたとは驚きますが、今後はむしろ、どのようなリスクをとれば安全に復旧できるのか、を想定しておくことが重要になるでしょう。

最後にアタマの体操。「虎穴に入らずんば虎子を得ず」というのは、danger ですか？risk ですか？「混ぜるな危険」というのは、danger ですか？risk ですか？「虎穴に入らずんば虎子を得ず」は risk についての表現。混ぜるな危険というのは狭い意味での danger、についての表現です。

6 エリートパニックとウワサの法則

次にエリートパニックという話題に移ります。これも東京電力福島第一発電事故の例を出しましょう。SPEEDI の件です。緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム（SPEEDI）というのがあり放射性物質拡散をかなり正確に予測していたにもかかわらず、そのデータが公表されなかったことが後に分かった事件です（外務省を通じてアメリカ軍には知らされていたことも大きな問題になりました）。

これは大変なことです。原発事故が発生した時、どの方向に放射能物質が拡散するのかを予測することが目的のシステ

ムが、原発事故に際して使われなかったというのですから。そもそも、こうしたシステムを使うまでもなく、放射性物質は、地形と風の影響を受けることは明白です。事故の直後は南東の風も吹いていたため、北西に流れていきました。もし、真冬で、常に北風が吹いていたら良い悪いは別として、放射性物質は南の方へいっていたかもしれません。たまたま、南東の風が吹いていて、それがかなり影響した。そうすると放射性物質というのは風に乗りますので、北西に行くわけです。しかもどのようなところを通るのかというと、低いところ。つまり必ず川沿いを通るのです。

相当なお金をかけて開発したSPEEDIという国のシステムを、肝心な時に使わなかったのはなぜでしょうか。理由のひとつとして、様々な前提のもとで計算したものにすぎないデータを公表すると、人々を混乱させ、パニックを引き起こしかねない、ということが言われていました。

しかし、社会心理学的には、仮にデータを公表してもパニックにはならなかったと思われます。パニックになる状況というのは、人が沢山いて、出口が一ヵ所しかないような場合です。出口が沢山ある場合や、逆に、飛行中の飛行機の中のように出ることが全く不可能な場合にはパニックはほとんどおきません。要は、中途半端に出口がある場合はパニックになり、人はどこでも逃げることができる場合、実際パニックになることはないのです。東京電力福島第一発電事故に関しては、SPEEDIのデータ情報があれば、「原発から半径20Km以上なら安全」のような考えにはならなくてすんだはずなのです。

むしろ、この情報が無かったせいで、原発の北側の浪江町などに住んでいた多くの人が移動しやすいという理由で請戸川沿いを上流に移動していき、20キロ以上離れた場所で一泊したのです。遠いから安全だろうと考えたため、実際には放射性物質が拡散しているようなところで夜を明かすということになってしまったのです。私の立場から申し上げますと、放射性物質がある方向に逃げるようなことが、情報を隠したことによって引き起こした人災だと言うことすら可能です。

このような事態のことを社会学者のキャスリーン・ティアニーはエリートパニックと呼びました。

つまり、情報を持っている人だけがパニックになってしまい、パニックになったらどうしようとパニックを起こしているだけだというのです。危険物の管理者はそのようなエリートパニックに陥らず、情報を適切に流していく必要があります。正しい情報ほど、効く薬はないのです。正しい情報があれば人はそれほど混乱しないのです。皆さまは、危険物取り扱いのエリートですので、1つアドバイスをしますと、「何かを隠した方が良い」と思ったら、「自分はいまパニックになっているのではないだろうか」と考えてみる必要がある、ということになります。

正しい情報は、パニックを起こしません。社会心理学にはウワサの法則というものがあるので、それを説明してみましょう。この法則を提唱したのはアメリカの心理学者・オルポートです。彼はウワサの流布量について、「R～I×A」という仮説的な式を提唱しました。この式で、R＝ウワサの流布、I＝情報の重要さ A＝情報の曖昧さです。「～」は比例するという意味を表しています。この「R～I×A」という式の面白いところは、“曖昧さ”か“重要さ”がゼロなら，ウワサは流れない、ということを述べている点にあります。

曖昧だけれど重要ではないことは、ウワサになりません。例えば、「どの歯ブラシが良いか」などがそれにあたります（だから、そうした情報を多くの人に伝えようとすれば、広告・広報が必要になるのです）。重要だけれど曖昧ではないこともウワサになりません。例えば「選挙の結果（得票数）」がそれにあたります。得票は一票単位で正確に発表されますが、この細かい正確さが重要なのです。もし選挙管理委員会からの情報が「△△候補、約１００００票で次点に約２０票差で当選」というものだったら、多くの人が憶測を流すことになると思います。重要な情報に空白が起きると、人はそれを埋めようとして憶測を始め、その憶測を人に流します。それがウワサというものになるのは、重要だからこそです。

そして、ウワサを拡散しない、パニックを防ぐ、という立場にある人は、ウワサの法則を常に考慮し、常に、重要な情報が曖昧にならないように心がけるべきだと思われます。情報を隠してウワサやパニックを防ぐことはできないと心得るべきだということを、心理学者たちは主張しているのです。

7 釜石の奇跡、石巻の悲劇

再三の震災ネタで申し訳ありませんが、釜石の奇跡と言われている事例があります。これは、釜石市において約 3 千人の小中学生の生存率が 99.8%だったという事例です。これの何がすごいのかと言うと、群馬大学の片田敏孝教授が以前から防災教育のプログラムを実施していて、その成果が出たというところです。また片田先生は「災害で人が死なない」という目標を立てていました。その際、全員をどうにかするというマス（大量）で考えるのではなく、一人一人が確実に生き延びるということだと再定義し、生き延びることを小中高生に教えたということです。津波の場合、生きるためにどうするのかというと、それは避難になります。

しかし、今回の震災の例を見るまでもなく、それが極めて難しい。その難問に対して、片田先生は、３つの原則を作って防災教育を行っていたのです。私は片田三原則と呼んでいますが、それは以下のようなものです。

第 1 に想定にとらわれるな。
第 2 に最善をつくせ。
第 3 に率先して避難者になれ。

これを見ると三番目だけが地震・津波に関係することです。第１、第２はむしろ一般的なキャッチフレーズです。

想定にとらわれるな、という言葉は極めて重いものです。片田先生がおっしゃっていることは、想定するな、ではありません。訓練も想定もし尽くしたうえで想定にとらわれるなと言っているのです。だからすごいわけです。想定にとらわれずに、その場所で最善を尽くしましょう。そして率先して避難者になれというわけです。皆様方の職場でも職場によって異なってきますが、想定をやり尽くしたうえで、想定にとらわれずに最善を尽くすというのが原則です。

そして、片田先生がさらにすごいのは、小学生、中学生、保護者にそれぞれ違うやり方で防災教育を実施しているところです。小学生に対しては、波は時速 115ｋｍで来るとしたら（これは、東北大震災の時の陸地に近い場所での実測値）、３０分で何キロ近づいてくるでしょうというような計算をさせるのです。中学生に対しては、お前らがキーなんだ。お前らが最初に逃げるんだ。逃げていれば後でみんな付いて行くから、などと鼓舞します。

保護者にはどのように説明したのか。親に紙を配って何か言ったところで誰も真剣に読まないことは明白です。なので、授業参観の時に防災教育を組み込んだのです。時速 115 キロの津波がきます。○○ちゃんのうちは海岸から何キロ離れてますか？などという問題を出すわけです。先生が、○○ちゃん地震が起きたらどうしますかと尋ねます。「お母さんから、まず家に戻りなさいと言われている」などと答えるわけです。お母さんの仕事場は家から何キロはなれていますか？車が渋滞したらどうしますか？津波が来るのと、お母さんが戻ってくるのはどちらが早いですか？などという問答をすると、津波のほうが早いということがわかります。ではどうなるかということを聞けば、「津波にのまれて死んじゃいます」ということにならざるをえない。子どもたちが、そこまで言うと親も「子どもを家に戻しちゃ危ない！」と気づくわけです。「地震が起きたら、それぞれ逃げよう。落ち合う場所を決めてここで会おう。お母さんも必ずそこに行くから、あんたもここにきなさい」などという話を家族ですればみんな避難できるようになるのです。

心理学の概念に「宛先」と言う概念があります。みなさんのメールとかハガキも住所（アドレス）がしっかり書かれていないと、届きませんよね。それと同じで、小学生という宛先には、小学生に伝わるように伝えなければいけないのです。保護者という宛先には保護者に届くようなやり方で伝えなければならない。コミュニケーションと言うのは、宛先に応じて、形を変えていかなければならないということを、ナラティブ心理学（語りの心理学）という領域では強調しています。片田先生の実践は、宛先ごとに異なる手法で内容を届けていたので、結果として 99.8%の生存率ということになったのだ

と思います。

もちろん、この地域にもハザードマップがありました。しかし、その想定は 100 年に一度程度の地震が対象でした。その想定で避難所などが設定されていました。実際は 1000 年に 1 度の津波が来たので、想定を遙かに超えて津波が内陸まで押し寄せました。もし、釜石の生徒達が、想定にとらわれていたら、おそらく多くの人が流されてしまったと思われます。しかし、先ほどの片田先生の三原則の第一は「想定にとらわれるな」でした。そして次に「最善をつくせ」さらに最後に「率先避難者になれ」でした。ひとりひとりが、逃げた結果、ほぼ全員が助かった、という事例だったのです。

この事例は防災教育のなせる成果であり釜石の「奇跡」ではないということも可能です。ある TV 番組のインタビューで中学生が「これは奇跡じゃない、当然だ」というようなことを答えていた場面がありますが、それも頷けます。

逆の例をお話しするのは気が重くなりますが、石巻の悲劇というのもあります。大川小学校です。児童 74 人、教職員 10 人が死亡または行方不明となりました。小学校という最も安全が保証されなければいけない場にいながら、全校生徒 108 名の約 7 割にあたる 74 名が死亡・行方不明になってしまったのです。

2012 年 1 月、石巻市教育委員会によるマニュアルの不備を認めた記者会見があったのですが、そのマニュアルには「近隣の空き地・公園等」とだけ書かれていたそうです。2011 年 3 月 11 日の午後 2 時 46 分に地震が発生しました。まずは最初の想定どおり校庭に皆が出てきました。点呼をとりました。寒い日だったそうです。（当日は校長が不在のため）教頭以下が校舎内で、どこに避難すべきか検討していたといいます。マニュアルには高台に逃げるとなっていましたが、当日雪が降っていたので、裏山を上るのは滑ったりして危ない、木が倒れてくると危ない、などといって裏山には行けずにいました。そして 50 分間ほど協議をした後、校庭より高いところに逃げることになり、近くの川の堤防に逃げることになったというのです。まさか、津波が来るとは思っていない。事前の想定ではそのように想定にされていないから、川の堤防は高いから安全だろうということで移動したらしいのです。

これはマニュアル不備の問題でしょうか？マニュアルの不備が問題というよりは、手順主義でやることが問題なのだと思われます。群馬大学の片田先生による三原則は「想定にとらわれるな」が最初にあったことを思い出してください。マニュアルは当然あるべきです。しかし、マニュアルは手段にすぎない。原理原則のない小手先の事だけを書いているのはダメなのです。命を守るということが本当に考えられたマニュアルだったのか、また、それをどのように使うことが命を守ることになるのか、が問われるわけです。

マニュアルがあっても、手順主義ではなく、原則主義であれば、臨機応変にできるのです。原則主義というのは良くないように思われるかもしれませんが、ここでは 1 人 1 人の命を守る、ということです。釜石の奇跡の例に戻ります。子どもたちのインタビューを読みますと「避難所に指定された所に来たけれど、下を見てみると津波が来ている。ここだってヒビが入っている、だからさらに安全なところに行こう」などということが沢山でてきます。

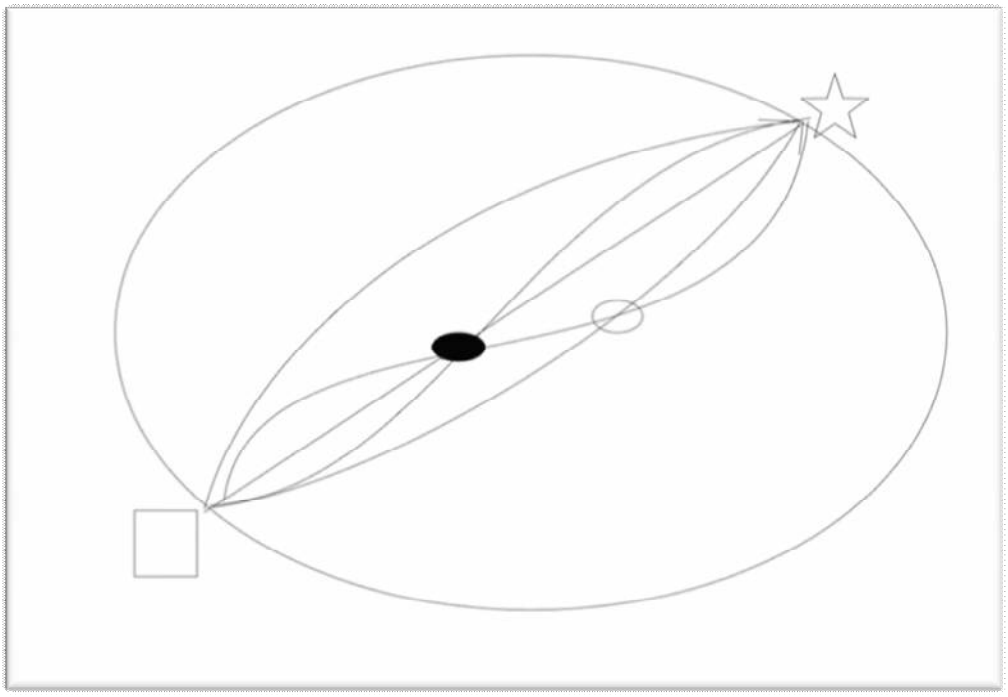
釜石の奇跡と、石巻の悲劇から学ぶことは、理念や原則をしっかり立てると言うことだと思います。近ければ近いほどブレてしまうわけで、遠くを見てると、ブレないというわけです。

8 北極星的展望を持て！

いよいよ最終コーナー。北極星的展望を持て！ということを最後に申しあげたいと思います。北極星的展望とは、より遠い目標のことです。私たちは、ややもすると手段と目的を間違えてしまいます。例えば、良い高校に行くなど、それは何かの手段でしかないのに、我が子に「良い高校へ行け！」などと、それを目標にしてけしかけてしまうのです。会社に行くことも同じですが、出世したいとか給料を沢山もらいたいということも、手段であるはずなのに、それらを目標にしてしまうことがあり、そうするとすごく視野が狭くなってしまいます。部下やお子さんの指導をするときも、手段が目標になっていて視野狭窄を起こしていることが結構あります。目標を到達するための道と言うのは、様々な道があり、手段

の一つがダメになったからといっても、他にもあるということを考えることが大事ではないでしょうか。

下の図で見ると☆が北極星。たとえば最短の道を行こうとした時に行き止まりだったらどうするか？図では●で表してみましたが、そういう時、遠くを展望することができれば、あたふたすることなく、他の道を探ることができるようになるでしょう。



目の前に何か障害物があるとき、遠い目標を持っていれば他の道がかならず見つかるはずです。

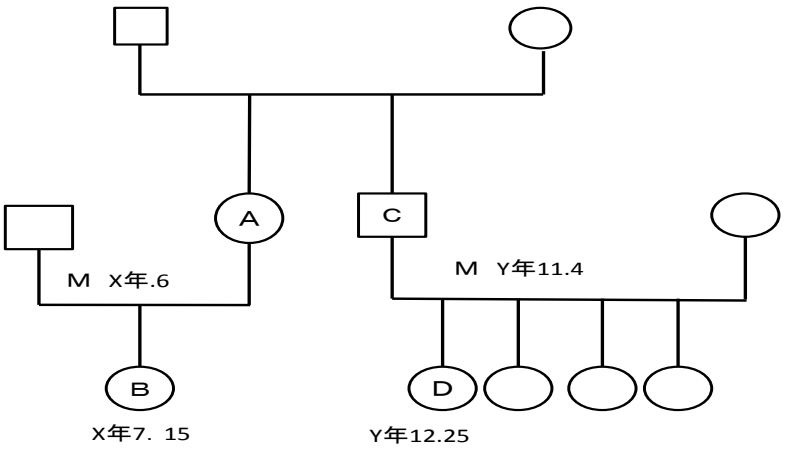
人生も同じで、北極星的展望として、皆さまそれぞれライフステージがあると思いますが、遠くの視点に立てばたつほど、複数の経路が見えてくると思います。人生ですので、道からそれることもあると思いますが、また、目標をもっていれば、戻ることもできます。目標を見失うと、ちょっとしたことで道に迷ってしまいます。人生においても危険物取扱についても遠い展望を持っていただいて、複線的な径路を想定して、リスク管理をしていただきたいと思います。

日本のジェノグラム

早樫　一男

12

次のジェノグラムをご覧ください。どのようなことが浮かびますか？



ＢさんはＸ年の７月１５日に生まれています。同じ年の６月に母親（Ａさん）は結婚しています。

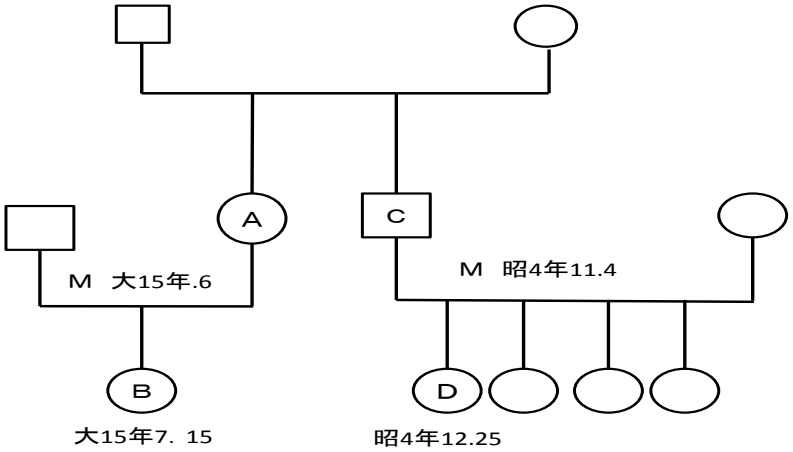
また、ＤさんはＹ年１２月２５日に生まれています。そして、父親（Ｃさん）は同じ年の１１月に結婚しています。

これらの情報から、どのようなことが浮かびますか？この二組の夫婦は「できたちゃった婚？」「おめでた婚？」ではないかと想像された方も多いのではないでしょうか？

さらに、ＡさんとＣさんの姉弟揃って、このような特徴がある家族かもしれないと思っても不思議ではありませんね。

年代の情報を追加すると…

Ｘ年やＹ年に実際の年代をあてはめたのが次のジェノグラムです。



Ｘは大正１５年（１９２６年)、Ｙは昭和４年（１９２９年）となります。そして、Ｃは私の祖父、Ｄは私の母です。

たまたま、残っていた古い戸籍などを改めて目にする機会がありました。これまで、何度か目にしていたのですが、今回、「ジェノグラム入門（後述)」を出版するにあたり、改めて、見直してみました。

古い戸籍やその他の文書等をまとめてみて、作成したのが、先程のジェノグラムです。家族関係についてはこれまで分かっていたのですが、今回、具体的な日時も付け加えたという訳です。

戸籍の記載を通して思い浮かぶこと…

私の祖父母や妻の祖父母などから、「昔は戸籍の届け出た日時はそんなに厳密ではなかった」というような趣旨のことを聞いた記憶があります。

例えば、「〇〇ちゃんは年末に生まれたけれど、忙しかったので、年が明けて、落ち着いてから届けた」というような話です。そのような話を聞いておられる方もあるかもしれません。

今回、作成したジェノグラムから考えたのは、婚姻の届けや日時の記載に関することです。例えば、祖父の場合、結婚した（結婚式をあげた）のは１１月ではなかったと思います。その証拠となるのは、祖父母の新郎新婦としての写真が残っており、裏に日付が入っていたからです。婚姻届の前に、既に夫婦としての生活は始めていたと思われます。実際

の結婚式と婚姻届のズレは、忙しかったから届けが遅れたという理由ではないのではかということを考えてみました。このズレは、当時の時代背景が関わっているのではないかということで。

女性は子どもを産むことが最優先の求められた時代であり、妊娠がわかり、出産が間近に迫った頃に、正式に籍を入れたのではないかということです。

夫婦として暮らしていても、籍を入れるのは、子どもの妊娠（出産間近）という根拠が必要だったのかもしれません。ただし、この点はまったくの推測でしかありません。

時代背景や日本の風潮や文化（価値観）を感じることになりました。

実は…

Ｂさんは生まれて間もなく亡くなっています。さらに、ＡさんはＢさんが生まれた次の日に亡くなっています。おそらく、出産前後のトラブルではなかったかと思います。２５歳ぐらいの若さでした。女性にとって、「お産」は命をかけた大きな出来事というのは、昔も今も変わりません。ちなみにＡさんの夫はその後、再婚しています。

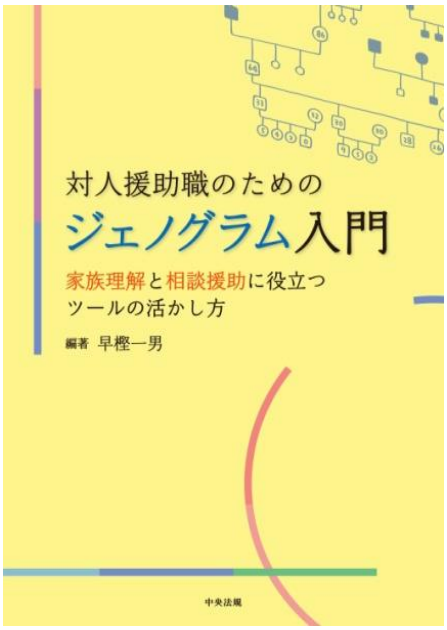
原家族をたどる…

これまでも、三～四世代遡った我が家のジェノグラムを作成しているのですが、改めて、具体的な日時なども確かめながら、思いを巡らせてみようと考えています。これまで気が付かなかった発見があるかもしれません…。

（つづく）

【対人援助職のためのジェノグラム入門】（中央法規出版）のお知らせ！！

前回も紹介しましたが、ジェノグラムに関するまとまった読み物があればという願いを込めたのが、一冊の書物になりました。「対人援助職のための家族理解入門」（団士郎著　中央法規出版）の兄弟版になればと願っています。 定価は1600円です。



きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第24話

水野　スウ

いのみら通信、増刷する

マガジン原稿が3ヶ月に一度の、私の今を整理して記録する文章なら、「いのみら通信」は半年に一度、私をふりかえり、私がいま伝えたいことを手書きでつづる、ごくごく個人的な不定期通信です。

創刊は、チェルノブィリ原発事故から2年目の春。「いのちの未来に原発はいらない通信」が本名だけど、長過ぎるのでちぢめて「いのみら」。やがて原発以外の、暮らしで気になることごとについても書くようになってからは、文字どおり、いのちの未来に関わるさまざまを伝える通信、ということで「いのみら通信」が正式名となりました。

いつも800部刷って、定期購読の方に半分以上郵送し、残りは手渡しや、出前先に持っていって関心ある人に読んでもらい、いつのまに在庫がなくなるころ次号を書く、というサイクルでこれまできたのだけど、4月にだした103号は様子が違いました。

書き上げたばかりの通信を広島の出前先に持っていき、そこで話す内容が、ほぼ今回の通信と重なってることに気づいたんです。出前の最後に、「いのみら通信、ご自由に好きなだけお持ちください、読んだら今日来られなかったお知り合いにプレゼントしてね」っていったら、あっという間になくなって。というわけで、即、改訂版を増刷しました。

私の、せんきょうんどう

その後の出前先で、「今回のいのみら通信、実はこれ、私の選挙運動です」と言うと、みなさん、？？？って顔になる。

———というのも、この通信には、今日ここでお話ししたことが、コンパクトにギュッとつまっ

ているからなんです。

今現在進行形のこの国のありようは、3年前の参院選と2年前の衆院選の、選挙結果をうけてのもの、って言いましたよね。たくさんの議席の数のちからで、今の政権はものすごく乱暴にこの国のかたちをかえ、人々の働き方もかえていきました。選挙は何を決めるものかといえば、私たちの未来を決めるもの、だと思います。夏に予定されている参議院選挙は、その結果次第で、戦後はじめて、憲法がかえられてしまうかもしれない、私たちの未来を大きく左右しかねない、とても重要な選挙です。

いのみら通信には、どこにも候補者の名前など出てこないけど、今度の選挙は特別だよ！と知ってもらうために届ける、私のできる選挙運動。もしもあなたが、いのみらを今日のおみやげに余分に持ち帰って、複数のおともだちに手渡していただけるとしたら、それがもうあなたの選挙運動になる、っていうわけです。

と説明すると、はあ〜なるほどね、とみなさん、わかってくださいます。

百人百様の、12条する

通信の増刷を知った人たちから、50部送って、100部送って、というリスクエストが相次いでいます。憲法や政治や、まして選挙のこと、手ぶらで人に伝えるって、すごくむずかしい。何かしら伝えやすい道具、ツールがあると便利です。

今は、SEALDsをはじめ、若い人たちがかっこいいデザインのちらしやリーフレットを次々だしてる。いのみらは、そういうリーフレットほど手軽じゃないし、文字数も多いけど、『わたしとあなたの・けんぽうBOOK』の本よりはちょっとハードルの低い、ツールの一つになるかもしれない。そうやって利用してもらえるならこんなありがたいことはありません。

それを誰かに手渡す時も、「これぜったい読んでねっ！」と勢いよく言うよりは、「読んだらおもしろかったし、あげるね、よかったら読んでみて」くらいの感じで、何気に渡してもらうのがちょうどいいな、と思っています。

私が『けんぽうBOOK』をつくったのも、けんぽうかふぇの出前に行くのも、いのみら通信を出すのも、ほんの少し私も出演しているドキュメンタリー映画「不思議なクニの憲法」の、自主上映会したり、それを人に勧めたりするのも、どれもみな、私が私の自由と権利を守るため、不断＆普段の努力の「12条する」ことなのだけど、一人一人のできることは、100人いれば100通り。

あなたのできる12条、誰かのできる12条、私のする12条。みんな違っていて、そこがいい。それが大事。だって、あなたがいのみらを手渡せる私の知らない人に、私が渡せるすべは何もないのだものね。

すきま12条

『けんぽうBOOK』の編集とデザインを担当した娘は、「母や、ほかの人たちほどの覚悟はまだ自分にないので、大きな行動ってなかなかできない。でもその間をうめる、すきま12条くらいならできるかも、って思う。憲法や選挙の話をする時、どうしてもそこに大きな段差を感じてしまいがちだけど、それをゆるやかなスロープにしていくような、ささやかなこころみ。ごく少人数で、社会と暮らしと政治のこと、自由に気軽に語りあえる、ちいさな場をつくっていくことからはじめようと思います」と言って動き出していますが、この「段差をスロープに」ってコンセプト、今とても大事な要素なんじゃないかな、と思います。

なので、いのみら103号も、選挙という段差をスロープにしていくための、すきま12条の、確かなひとかけらです。

緊急事態条項のこと

いのみら通信で特に伝えたかったのは、「緊急事態条項」のこと。

安倍首相は、今年にはいってからの国会で、憲法改正にとりくむ、と何度も発言しています。参院選で与党が大きく勝てば、ほぼ間違いなく、安倍さんは憲法をかえようとするでしょう。衆議院、参議院、ともに3分の2以上の議員が賛成すれば、憲法をかえる発議をすることが可能になるからです。

憲法のどこをどうかえるか、先ずは、国民にわかりやすい「緊急事態条項」からになるだろう、と言われていますが、この緊急事態条項、私にはちっともわかりやすくなんかありません。大日本帝国憲法（明治憲法）にはあって、今の憲法にはないものを、またあらたに憲法に書きこもうとするのに、一体どんな意味があるのでしょう。少しややこしい話になるけれど、ちょっとだけ、おつきあいくださいますか。

緊急事態条項とは、日本に対する外部からの武力攻撃や、内乱等による社会秩序の混乱、地震など大きな自然災害が起きた時、憲法のしばりを一時ほどいて、いつもとは違う大きな権限を内閣が持てるようにする条項です。

今が緊急事態だ！と判断して、緊急事態宣言を出すことができるのは、時の内閣総理大臣。総理がそう宣言したら、国会を通さずに内閣だけで政令＝法律と同じ効力を持つルールを定めることができ、その政令にはどんな人も従わなければならない、というきまりが記されています。

なぜ必要なの？

この新しい条項が必要な理由として、真っ先にあげられる例えが5年前の東北の大震災です。憲法にこの緊急事態条項がなかったから、政府が迅速に対応できなかったのだ、と。

あの時、ガソリン不足で救急搬送ができず、たくさんの救える命が救えなかったではないか、だから必要、という人たちがいます。改憲に賛成する人たちの出した本、『女子の集まる憲法おしゃべりカフェ』（明成社）にもその話がでていました。

実際にはどうだったのでしょう。あるテレビ局が東北3県の自治体の消防署に取材に行き、詳しく検証する番組がありました。どの県でも、津波の被害にあわなかったガソリンスタンドが、消防や警察や緊急車両に優先的に給油したので、燃料不足で出動できなかった例は一件もなかったことがわかりました。

番組の中で、仙台市長はこう発言しています。「災害時に緊急事態条項のような中央集権的な仕組みが基本になると、被災地は全て政府の指示待ちで、指示が出るまで一切何もできなくなってしまう」（TBS「報道特集」2016.4.30 放送）

緊急時こそ、現場に権限を降ろしてほしい。それは他の自治体の首長さんたちも要望していることでした。今必要なことは何か、それがわかるのは、災害現場にいる人たちだからです。

もし、この条項があったら

熊本地震で、そのことはもっとはっきりしました。揺れがこわくて家や体育館の中にいられず、外に避難している人たちに、首相が屋内退避させるよう言ったことを、熊本の市長さんは怒っていました。強い揺れの本震が起きたのは、実にその翌日です。

揺れがあるたびに出る激しい砂ぼこり、家のきしみ、とても中に居られるような状態ではない、その恐怖はそこにいないものにはわからない、それが当たり前ですが、もしもこの時、緊急事態条項が憲法にあって、誰もが従わなければならない政令が国からでていたとしたら、一体どうなっていたことでしょう。

東北の震災を経験した被災地の弁護士さんたちも、憲法に緊急事態条項をいれることに反対しています。なぜなら、そういう事態に対応するための法律は、すでにこの国に十分あるからです。大災害に対しても、武力攻撃に対しても、ほかの国と比較したって、より強い権限をもつ法律はもう整っている。でも3.11の時は、あそこまでの被害を真剣に想定していなかったために、法律の適切な運用ができなかった。必要なのは憲法をかえることではなく、今ある法律を活かすためのシミュレーションや、日ごろの訓練が、何より重要だと言っているのです。

なぜ、かえたいの？

備えの法律はあるのに、ではなぜ今、憲法をかえたいのだろう。緊急事態としての「内乱等による社会秩序の混乱」、私にはこの文言がとてもひっかかります。

憲法学者の木村草太さんは、報道ステーションの中で、「この“等”の一文字が曲者、この中に何でもいれられる」と言っていました。安保法や、原発再稼働や、憲法をかえることに、市民が集まって反対の声をあげることや大きなデモなどが、それこそ、時の政府の判断で、この「等」に含まれて、秩序を乱しているとみなされるのではないか、その懸念がどうしても拭えません。

この条項は、権力者が国民を支配して思い通りにできる条項でもあって、私たちの基本的人権や自由を制限する濫用の怖れ、おおいにあり。憲法学者、弁護士さんたちがこの条項にまっこうから反対している、それが最大の理由です。

権力は、集中すると暴走する。だからこその、三権分立。今ですら憲法を守らない政治をしている安倍首相が、または時の総理大臣が、この条項で、国会も憲法も一時ストップさせて、すべての権力を手にしてしまえるとしたら、って想像してみて下さい。

憲法学者の長谷部恭男さんは、ドキュメンタリー映画「不思議なクニの憲法」の中で、「安倍さんが法律をつくれる、ってことです」と。やはり憲法学者の小林節さんは、『「憲法改正」の真実』（集英社新書）という本の中で、「永遠の緊急事態をつくることも可能だ」と。

新聞に大きな意見広告をだした升永英俊弁護士は、その中で、「改憲草案の緊急事態条項は、9条改正とは比べものにならないほど怖い」とまで書いています。（2015.11.15 北陸中日新聞掲載の意見広告）

ナチスの手口を

2013年の参院選のあとで、麻生副総理がこんな発言をしたこと、覚えているでしょうか。麻生さんはドイツをひきあいに出して、「ナチス憲法にかわっていたんですよ、誰も気づかないでかわったんだ。あの手口学んだらどうかね」って言ったのです。その意味が、3年前より今の方が、ずっとリアルに迫ってきます。

ナチスのヒットラーはまさに、ドイツのワイマール憲法にある大統領令の「緊急事態宣言」をつかって、あの独裁国家をつくったのでした。1933年にヒットラー内閣ができ、そのひと月後に、大統領の名でこの宣言をだすと、たった数日間で、約5000人の共産党支持者たちを、司法手続きなしで、逮捕し、拘禁しました。言論の自由も、報道の自由も停止されました。

さらに、このひと月以内にヒットラーは「全権委任法」という新しい法律をつくりました。憲法と法律の二本立てで、ヒットラーはすべての権力を手のうちにおさめたので、もう誰も反対と言えなくなったのです。

緊急、という名のつくこの大統領令が、いったいいつまで続いたと思いますか。なんと、1945年5月にドイツが敗戦するまで、有効に存続したそうです。

3.11を口実にして国会に出されるだろう、改憲項目の緊急事態条項、その意図するところを、有権者の私たちはしかと見抜かなければならない、って強く思います。

めんどくさい、を受け入れる

長々、緊急事態条項について、読んでくださってありがとうございました。ね、わかりやすいお試し改憲、どころの話じゃ全然なかったでしょ？めんどくさくて、複雑で、いっぱい説明しなきゃならなくて。それでもここから緊急事態条項のアブナさ、少しでも感じとっていただけたなら、幸いです。

木村草太さんは報道ステーションの番組内でこうも言っていました。

「国民の側にめんどくささを受け入れる覚悟がいる。政府に何でも決めてもらう、頼んでしまう。そうなった時に、思考停止に陥るのです」と。

私たちが今、どうにか手にしている自由と人権を守るために、考え続け、行動するって、確かにめんどくさくて、手間ひまかかって、それでいてなかなか成果のあがらないこと。子育てと、とても似ている。でも平和って、民主主義って、まさにそういうものなんじゃなかったか、とあらためていま思うのです。

かわらないさ、ではなく

今度の選挙では、野党が選挙史上はじめて（オール沖縄で選挙をたたかった例はあるけど）、候補者を一本化して共闘する、そんな選挙区も春以降ふえてきたので（石川もしかり）、その意味でも、この夏の選挙は超特別です。

つまり、選挙したって何も変わらないさ、じゃない状況が、すでに日本のあっちこっちで起きているのです。そのことを、私はもっと伝えていきたい。選挙勝手連や、市民連合や、選挙に行こうプロジェクト、などなど、私の暮らす県でも、そんな動きが雨後のタケノコのように生まれています。そのことも、伝えたい。

党だけに選挙をまかせておけない、だからといって市民だけでも選挙はできない。いろんな政党といろんな市民と。違いがいっぱい。ぎくしゃくすることもとまどうことも、たくさんありながら、選挙までに今それぞれができることにむけて、石川のピースの仲間たちと一緒に、私も動いている真っ最中です。

県内の大学に、子育て中のママや10代の若者が、「選挙に行こう！」の授業をしにいってます。私も、ママたちと組んで、大学での憲法の授業を、選挙前にしにいくことになっています。そういう行動の一つ一つが、市民のちからを、民主主義を、育てていくことでもあるんだろうな、と思いながら。

PeaceにVote!

3月にあったピースウォーク金沢の、仲間たちと話しあって決めた今年のテーマは、「抱きしめるだけでは守れないPeaceにVote!」でした。大切なものを、ただ抱きしめるだけ、心の中で願っているだけでは、もう守ることができない。だから、行動しよう、平和に投票しよう、という意味です。

この平和、安倍さんのいう「積極的平和主義」とはまったく違う定義による、平和です。戦争の原因をつくる、貧困や格差や差別のない社会をつくっていこうとする、「積極的平和」という意味での平和。そういう社会をともに目指す候補者に投票しよう、という想いをこめての不思議な言葉、「PeaceにVote!」。

発音が似ているため、ピースボートとよくかん違いされますが（笑）、おかげで、あはは、ちゃうちゃう、voteは投票するって意味でね、とそのたび、安倍さんの平和と私の平和の違いについて語ることもできています。

＊積極的平和という概念を提唱しているのは、平和学の父とよばれるヨハン・ガルトゥング博士。一方、積極的平和主義は、英語でproactive contribution to peace. proactiveとは、戦略用語で〈先制攻撃〉の意。

今では、この「Peace に Vote!」も、「不断の努力を、普段から」も、「12条する」も、選挙で手をつなぐ石川の仲間たちの間で、格好の合い言葉となりました。

希望の人たち

選挙までたったひと月余りの今でも、選挙があること知らない人がいっぱい。選挙なんて興味ない、自分に関係ない、入れたい党も入れたい人もいない、投票に行く間もない、政治に何の期待もしてない、どうせ何も変わらない、って思ってる人はもっといっぱい。

そうだよね。その気持ち、わかります。選挙と自分と、全然関係なさそうに見えますもん。だけど、ほんとはそうじゃない。そのことを、これから出逢う一人一人に誠実に伝えていきたい。あなたの持っている一票は、私の／あなたの、未来を決めるちからを平等に持っている。そのこと、あきらめずにまわりに伝えていきたい。

だって逆説的かもしれないけど、そういう人たち＝これまで選挙に行かなかった人たち（その中にはもちろん、初めて選挙権を得る18歳19歳の人も含まれてる）こそ、私の希望なのだもの。

その人たちが、何らかのきっかけで、私の仲間たちと出逢い、誰かの言葉を聴き、政治と自分が実はつながってる、って気づくこと。はじめての投票に行ってみようかな、と思ってくれること。

その種がいっぱいまかれて、投票率があがって、その人たちが自分の一票で12条することでしか（その票のゆくえがたとえどこであれ）、今の私たちの社会はかわっていかない、と確信しているからです。

2016.5.18

映画「不思議なクニの憲法」全国で自主上映中！
http://fushigina.jp

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを乗り越えない生き方であり、悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

四　七　日

1. 『仏説阿弥陀経』

今回は『仏説阿弥陀経』の話をしようと思います。私は、「お葬式は『阿弥陀経』で始まって、『阿弥陀経』で終わる」とよく言います。

私は、門徒さんが亡くなったと聞くと枕経に駆けつけます。枕経と言いましたが、正式には臨終勤行と言い、臨終の時に、『阿弥陀経』をあげます。だから正式には、亡くなる前に臨終勤行の依頼を受けるべきなのでしょうが、現実的ではありません。私は、亡くなったと聞くとできるだけ早く駆けつけるようにしています。深夜であろうが、夜明け前であろうが駆けつけます。ときに、門徒さんが夜半に亡くなったと聞いても、夜が明けてからお参りに行く坊さんが「枕経ではなく、臨終勤行なのです」と言うことがあるそうです。困ったものです。

臨終勤行の後、通夜・葬儀と続きます。葬儀の後、お骨になって帰ってこられて、『阿弥陀経』をあげます。正しくは還骨勤行と言います。ここまでが「お葬式」です。だから

臨終勤行の『阿弥陀経』に始まり、還骨勤行の『阿弥陀経』でお葬式は終了するのです。

2. 『阿弥陀経』の序論

なぜ『阿弥陀経』なのか？それはこの経典の内容を説明すればいいと思います。

仏教のお経は、序分(じょぶん)・正宗分(しょうしゅうぶん)・流通分(るずうぶん)と言う三部構成になっています。序論・本論・結論と思って下さい。

『阿弥陀経』の序論は「如是我聞」というフレーズから始まります。「私はお釈迦様からこのように教えを聴きました」というところから始まります。舎衛国(しゃえこく)の祇樹給孤獨園(ぎじゅきっこどくおん)と言うところで、教えを聴いたといいます。そして、たくさんの証人の名を連ねています。これは、間違いなく仏説ですよと言っているのです。お経の正当性を語ります。

3. 極楽

次に本論です。まず始めに、これより西に十万億仏土を過ぎたところに、世界がある。それを極楽と言う。その極楽には阿弥陀仏がいる、と述べます。

極楽は西にあると言うのですが、極楽という言葉について考えて見ましょう。楽の極みであります。楽が 100%であれば、苦は 0%になります。大切な方が亡くなられた時、その方の人生を考えて下さい。苦と楽は相半ばしているでしょうか？私は、いろんな方の枕経にお参りをしました。どの方も苦労が楽に勝った人生を歩まれました。中には苦労ばっかりだったと思える方もいらっしゃいました。大切な方の臨終に際して、近親の方がその苦労を偲んでいただければ、それが枕経の時の作法だと思います。

その極楽は、西方へ十万億仏土の彼方にあると言います。この十万億仏土というのはどんな距離でしょう。十万億仏土という距離の単位はありません。その答えは、「遠い」でいいのだと思います。とっても遠いのです。人類がどのようなロケットを開発しても、とうていたどり着けない距離、それが十万億仏土であると思います。もし仮に、十万億仏土を飛ぶロケットを作ることができれば、極楽に行って亡くなった人を取り返してくればいいのです。でも、そのようなことはできない距離だというのです。死を取り消すことなど人類にはできないと言うのです。

『阿弥陀経』は、ここから極楽の様子を語ります。極楽の素晴らしさについて池には蓮の華が咲いていると言います。その大きな華は、青色は青い光を放ち、黄色は黄色い光を放ち、赤い色は赤い光を放ち、白い色は白い光を放つと述べます。こ

の部分については、当たり前のことなのです。青い色が赤い光を放つことはありません。当たり前のことを、そのまま受け入れることです。あるがままを受け入れるのは素晴らしいことでしょう。予断を挟まず、あるがままを受け入れることは、難しいことでもあります。愛する者の死を受け入れるのは、非常に難しいことです。斎藤茂吉の歌集『赤光』は『阿弥陀経』からとったタイトルであると、自ら記しています。

4. 往生

『阿弥陀経』の本論は、極楽の様子を描きますが、それは本論の前半部分なのです。後半では、その極楽に至る様子を描きます。

『阿弥陀経』は「その人、命終のときに臨みて、阿弥陀仏、もろもろの聖衆と現じてその前にましまさん。この人終らんとき、心顛倒せずして、すなはち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得」(『浄土真宗聖典(註釈版)』浄土真宗本願寺 p124-125)と述べます。息を引き取るとすぐに阿弥陀仏が迎えに来てくれるのです。そして、すぐに極楽に連れて行ってくれるのです。私は、ここは『阿弥陀経』の核心部分だと思います。

少し私の個人的な話におつきあい願います。私の父は、膠芽腫(こうがしゅ)という脳の病気で亡くなりました。担当医から、半年の命であろうと説明を受けました。本人は自宅に帰りたがっているし、病状の進行を考えてもそれは可能であるし、自宅で安らかな死を迎えるだろうと説明して下さいました。自宅に父親を連れて帰って、5ヶ月で父は息を引き取りました。確かに自宅で看取ることが可能でしたが、人の臨終までの経過は、それは大変なものでした。その大半を支えたのは私の妻でした。本当によくやってくれました。

素人目にも父の死が近いと思われた頃でした。往診に来てくれる近所のホームドクターが、往診の帰り際に、私にボチボチ覚悟をするようにと言って帰りました。私は父親の死をどうやって覚悟をするのか分かりませんでした。重苦しい夜が明けて、土曜日の朝でした。週末は法事の予約でいっぱいです。私は、法事に出かける前に、父親の手を握って、法事が終わるまで頑張っていてくれと言って出かけました。法事のお宅は、寺から数十メートルの所でした。挨拶をして、仏壇に向き直ってお経をあげようとしたときでした、妻が、そのお宅に駆け込んできました。お父さんがもうだめだという声が聞こえました。私は、法事の席の人たちに許可を得て、走って帰りました。帰り着いた時には、父の息はありませんでした。その時、私は『阿弥陀経』をあげたいと思いました。でも、法事のお宅では人々が

待っています。私はこのお宅に戻って法事を勤め始めました。

法事では『阿弥陀経』もあがります。『阿弥陀経』のこの部分に達したとき、私の頬を熱い涙が流れました。お経をあげながら、目に浮かぶような気がしたのです。今さっき息を引き取った父親が、阿弥陀様に連れられて極楽に行く様子が目に浮かぶように感じたのです。その光景が実にありがたかったのです。

5. 六方段

この後は、六方段と呼ばれているところです。東の方向には仏があって、〇〇仏、△△仏、◇◇仏とかです。さらにガンジス川の砂の数ほどの多くの仏がいて、時空を超えた世界を覆っています。南の方向には、また同じように仏名の羅列です。そして、ガンジス川の砂の数ほどの多くの仏が、大世界を覆っているのです。

西の方向には同じことです。北の方向にも同じことです。下の方向にも、上の方向にも同様です。

これは六方向に仏様がいっぱいいると言うことです。これは、全ての空間が仏によって満たされている状況だろうと思います。この中心にいるのは阿弥陀様です。極楽は阿弥陀様に救われて仏になった方がいっぱいおいでになります。今、新たに阿弥陀様によって救われた方は、阿弥陀様と共に極楽のど真ん中に生まれて行くのでしょう。

私はこの様子を、こんなふうに想像します。今、新たに仏と成って極楽に来たあなたは、何も恐れることはないのです。かつてあなたの知っていた方も既に仏と成ってあなたの周りにいらっしゃるのです。何も心配するような世界ではないのですよと。私は、この六方段というのは息を引き取って極楽往生される方への優しさだと思うのです。

ところで、私は火葬場からお骨とともにお帰りになったら、お骨と法名をお仏壇の中に入れて下さるようにお願いしています。一般的な仏教の場合は床の間に中陰壇という物を組んで、そこに安置することが多いのですが、浄土真宗では即得往生を説くのですから、亡くなると直ぐに極楽浄土においでになります。浄土真宗のお仏壇は、金仏壇が一般的であるのは、それが極楽を模した物であるからです。だから、この六方段で説かれるように亡くなられた方が極楽の中央に阿弥陀様とともにいらっしゃる様子を思って、お骨と法名をお仏壇に入れていただくようにお願いしています。

6. 結論

六方段を説き終えたら、「およそ男子であれ女子であれ、善良な在家

の信者が、この仏がたがお説きになる阿弥陀仏のみ名とこの経の名を聞いてよく心にとどめるならば、これらのものはみな、あらゆる仏がたにひとしくまもられて、この上ないさとりに向かって退くことのない」(『阿弥陀経』瓜生津隆真著 p.152)と述べて結論に向かうのです。出家も在家も男女も区別なく平等に救われるのです。

そして、結論では難信の教えであると述べています。この教えを本当に理解して受け入れるのは難しいのです。私は、大切な人を亡くしてとても深い悲しみを知る人が、この経典の価値を知ってくれることを願っています。

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

（２１）

中村周平

応用人間科学研究科での修士論文作成を通して過去と向き合うことができたことは、その後の自分に様々な変化をもたらすことになりました。今回は、その一つの「変化」について触れていきたいと思います。

ラグビーで事故に遭った…この事実は、ラグビーだけでなくスポーツというものから自分を遠ざける理由としては十分すぎるものでした。実際に試合に行くだけでなく、テレビで放送されているものにまで抵抗を感じる時期がありました。時間の経過とともに、それも少しずつ和らいでいっていくのを感じていました。修士論文で「ラグビーが好きだった自分」を取り戻すことができたことで、ラグビーやスポーツとの距離は格段に近づいたように思います。

それでも、スポーツを「観る」ことはありましたが、「する」機会というのは無いに等しい状況でした。アダプテッドスポーツ(障害の有無に関係なく、老若男女誰でも参加できるスポーツ)をされている知人から声を掛けられ、車いすバスケットやボッチャ(屋内で行うもので、カーリングとペタンクを合わせたようなスポーツ）の練習会場に足を運んだこともありました。でも、継続的に通うというところまではいきませんでした。もちろん、機能的なことでプレーできないということもあったと思います。車いすバスケットやホイールチェア・ラグビー(車いすのラグビー)は、非常に俊敏で、ときには激しいコンタクトも存在します。自分には到底できるものではありませんでした。ただ、すべてのスポーツをひっくるめて考えても、ラグビーの魅力に勝るものが無かったことが一番の要因だったと思います。ラグビーで感じたものを、どのスポーツからも得ることはできませんでした。後輩たちが懸命にプレーをしている風景を眺めながら、「もう自分でスポーツをすることなんてないのかな・・・」、そんなことを感じていました。

ある時、自分と同じ障害のある方々のコミュニティの新年会に参加していたときのことです。このコミュニティの歴史は長く、全国に〇〇支部が複数存在しています。京都在住の私は、本来であれば京都支部でお世話になっているはずなのですが、ご縁があり大阪の新年会にも毎年のように参加させていただいておりました。その新年会で、突然見知らぬ男性から声を掛けられました。

真冬やのにポロシャツ、不自然すぎるぐらい太い

首、がっしりとした体。どう考えても体育会、それもコンタクトスポーツのにおいがプンプンしていました。糸賀亨弥さんという方で、天理大学の体育会アメリカンフットボール部でゼネラルマネージャーをしていることを教えてもらいました。「やっぱり体育会・・・。でも、アメフトのゼネラルマネージャーが何でここの新年会に？」。話を聞くと、あるアダプテッドスポーツの普及に関われているとか。最初は話だけ・・・、そうそう、話だけ聞いて終わるつもりでした。ただ、糸賀さんがこのアダプテッドスポーツと出会い、普及を行っているのかお話を聞いていくうちに、なにか惹きつけられるものを感じていました。(この話は次回に・・・)そして、最後に「まずは練習を見にこうへんか？一緒に遊ぼうぜ！」と。「んん！これは勧誘というやつでは。こんなん中学生以来や。でも、観るならともかくプレーわなぁ」。

ただ行くだけ。行ってみて帰るだけ。そう自分に言い聞かせて当日を迎えました。でも、気付けば堺市の体育館で必死になってボールを追いかけている自分がいました。「Wheelchair Football(以下、WCF)」という名前のスポーツでした。アメリカンフットボールに大変よく似たルールが採用されていて、「車いすアメフト」とも呼ばれていました。また、自走式車いすと電動車いすのプレイヤーが同じフィールドでプレーでき、コンタクト(激しくぶつかる)プレーも無い非常に変わったスポーツでもありました。2 時間ほどの練習はあっという間に終わりました。「なんかこの感じ、めちゃくちゃ懐かしい。そういえば、こんな毎日を送ってたなぁ」。練習中の緊張感や、終わった後の爽快感、毎日泥だらけになりながら楕円球を追いかけていた高校生活を帰りの道中で思い出していました。

初めてお会いした時、糸賀さんは「これはいろんなやつができるアダプテッドスポーツ」ということを口にされていました。自分にとって大事なことは、「いろんなやつができる」一体感だったんだと思います。同じフィールドでプレーできる、ひとつの目的のために仲間と協力する、ラグビーで経験させてもらった大切なものをずっと探していたんだと。糸賀さんと WCF からその大切なものを思い出させてもらいました。

「まさか、こんなに好きになってしまうとは…やっぱスポーツはめっちゃええわ」。これが、今の自分の正直な気持ちです。また、修士論文で過去と向き合えなければ、スポーツともここまで向き合えなかったと思います。ようやく見つけた自分の新しいフィールド、これからも大切にしていきたいと思います。

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第19回

起終点駅　ターミナル

1．男と見られたくない

２月□日

京都みなみ会館で、『マンガ肉とぼく』という映画を見た。杉野希妃さんの監督・主演で、彼女が特殊メイクで丸々と太った女子大生を演じている。撮影が行われたのは京都なので、あちこちに見慣れた風景がでてきて、それも俺にはとても楽しかったが、何よりも共感したのは、このヒロインだった。

彼女は太ろうと努力する。普通の若い女性だったら痩せようとする人が多いのに、一生懸命太ろうとする。痩せてしまうと女という目で男から見られるから、それが彼女には耐えられないのである。

「この気持ちわかるなあー」。俺は、彼女の男バージョンだ。俺は女性に男と見られるのがいやである。男と見られると反発する。俺のこれまでの人生で俺を口説いてきた女性たちは、何か勘違いしていた。

大学の頃、俺をしょっちゅう誘ってきた女の子は、いつだって、涙ぐんだような顔で俺に迫っていた。彼女は何か悩みを抱えていたことは確かだった。だから俺にすがろうとしていた。最初からすがる目的の恋愛である。しかし、普通の男はこんな口説き方でなびくのだろうか。女の涙は武器だ。哀れっぽい目で男に追いすがることは、ピストルや刀をもって脅迫するのと同じことなのに。脅迫するような女と男がつきあいたいと思っているのか。今思い出しても、恐怖の体験だった。

俺が 30 代の頃、他の男にセクハラされていると訴えてきた女の子がいた。彼女は俺に自分の悩みを分かち合ってもらおうと思っていた。俺に一緒になって、「その男、ひどいやつだね」と共感してもらおうと思っていた。一

般に女性は、誰か共通の嫌いな人をつくることで団結しようとする。でも、俺は女のそういうところが嫌いだ。中村先生によるとこういうのはモビングというのだそうだ。一丸となって、誰かを嫌う。俺はこれまでその女性の習性の餌食にされてきた男だ。そんな俺に「モビングに加担して」と甘えることで口説けると思っているのか。セクハラなんかだったら、女性に相談すればよさそうなもんだ。女の性の悩みを男に聞かせようとするなんて、男へのセクハラだと思う。実際、あの時、俺はセクハラされている気分だったのだ。

俺が 40 代の頃、ブログをやっていた時期があった。そこに見ず知らずの女性がファンになって、俺にコメントするようになった。彼女は京都在住。30 代半ばで男に振られたばかり。俺の顔も知らんのに、ブログを読む限りでは優しそうだし、同じ京都だからつきあえると思ったらしく、毎日のようにコメントを入れて、モーションをかけるようになった。「あの人、確実に國友さんに気があるわよ。30 半ばの女は焦るのよ。これ以上年をとると子供が産めなくなるから」と知り合いの女性から言われた。ある時、彼女は、「私、高校の時に、リストカットをしたことがある」と秘密のメッセージまで送ってきた。カチン！と俺は切れた。リストカットをするような女を男が好きだと思っているわけ！？ 俺はそういう女とは怖くてつきあえない！

やはり、女性たちもジェンダーに染まっている。弱い女を演じれば、男はそこから救ってあげたいという気持ちになる、彼女たちはそう思っているに違いない。そういう男もたくさんいるんだろうなあ。だけど、俺はそんな男じゃない。そんなわけで、俺は女が怖い。女に恋愛や性の対象として見られたくないのだ。女は怖い！　怖い！！　怖い！！！

2. 息子と泳いだ日

３月□日

今年の春休み、久しぶりに専門学校で教えていた男の子と会った。彼とは Facebook でつながっていたのだった。

彼とは去年、一度は会って、ちょっとだけお茶を飲んだ。彼は専門学校から大学に編入し、今は営業の仕事をしているとのことだった。しかし、それきりで終わるだろうと俺は思っていた。ところがひょんなことから、また会うことになって、彼はスポーツマンで水泳もやっているので、ちょっとだけ泳いでから、メシでも行こうかということになった。

「先生、お腹出ていますよ（笑）」

「そりゃ、俺は 52 なんだから仕方ないよ」と話しながらプールの中を歩いた。

彼と俺はちょうど親子ぐらいの年の差だ。といっても、もう社会人になった息子と一緒にプールに入るお父さんはそうそういないだろう。俺は恵まれているなあー。二人で身体を動かし、あれこれ話をして、たらふく海鮮料理を食べて、立派な社会人になったもんだなあと思ったものだった。楽しいひと時だった。

こういうひと時を俺は小学校の頃から求めていたのだろう。しかし、発達障害的で浮いた存在の子だった俺は、友達をつくろうにもつくれなかった。俺はいつだって３軍の男だったのだ。１軍の男は勉強ができてスポーツマン。あるいは、喧嘩の強いガキ大将。２軍の男は、それなりに１軍のやつと友達になれる連中。しかし、変わり者で気が小さくて、

運動神経ゼロだった俺は、３軍の男で、女の子からもバカにされるようなタイプの連中としか付き合えなかった。学校はつまらなかった。学校という階級社会の中で、常に３軍でいなきゃならないというのは、自尊心を傷つけられる辛い日々だった。

小学校の高学年からはジェンダーにとらわれ、男の子の仲間にいることに抵抗すら感じるようになっていった。男になってしまったら、損をする、殴られる、理不尽な役割を負わされる。そう思っていた俺は男同士のつきあいを拒否するようになっていった。そこから俺の人生は大きく潮流からそれ始めたのだった。

でも、今は自分の息子ほどの年齢の男性と一緒にプールに入れる。俺は彼と会う前、俺は良くても彼のほうが一緒にプールに入ったりするのはいやがるのではないかと思っていた。しかし、まったく違和感なく、話はそういう流れになり、その後、食事の席でも気詰まりなく語り合えた。至福の時間だった。

彼だけじゃない。２月にもう一人、かつての教え子の男の子と焼肉にいっている。去年の春休みもスポーツクラブのインストラクターをしていたかつての教え子と温泉と寿司に行った。彼らはかつての教え子であり、もはや俺と利害関係はないので、無理に付き合う必要はない。だけど、彼らは俺とつきあってくれる。楽しい時を分かち合ってくれる。俺はもっと自分に自信をもっていいのかもしれない。これだけ若い男性と仲良く話せる 50 代のおじさんはそうそういるものではないだろう。そして、彼らは決して３軍タイプの男じゃない。一軍の男なのである。

しかし、未だに俺は自分に自信がないのだ。いつだって、自分はつきあってもらっている。そういう気分で俺は生きてきたのだった。

3. 男同士のパフェ

４月□□日

突然、メッセージが iPad に届いていた。もう４年ほど前の教え子からである。彼は体育会のキャプテンで、俺になついてくれていた。東京で就職したのだが、今日はたまたま大阪に仕事で来たから、昼間だけ時間があるから、「一緒に飯でも」という連絡だった。新学期が始まったばかりで、大学の授業が始まっていなくて、まだその午後は時間があった。

高島屋の前で待ち合わせ、近くの寿司屋でたっぷり寿司を食べた。彼はすっかりビジネスマンになっていて、あれこれ仕事の話をしてくれた。今は超多忙だけど、しばらくは無理してでも頑張る気でいるみたいだった。やはり体育会あがりのやつは目上の人と付き合うのがうまいし、爽やかである。俺は体育系になれなかったから、余計にまぶしく感じる。そういえば、俺よりも一回り年上の男性は、スポーツ万能だったにもかかわらず、体育系の活動はいっさいしなかったと言っていた。「僕たちの頃は、スポーツなんかやっているやつは、頭が悪いというイメージがあったんだよ」とのこと。へー、そうなのか。あの頃は学生運動もあっただろうし、長髪世代だから、スポーツよりもフォークソングのような雰囲気だったのかもしれない。俺は生まれた時期が間違っていたのか。俺から見ると、やはりスポーツマンはステキだ。

たらふく寿司を食べたあと、もうしばらく時間があるので、デザートでも食べるかということになり、パフェが食べたいというので、

新京極の有名なパフェの店でいちごパフェを注文し、二人で向かい合って食べた。昔の男だったら、男二人でいちごパフェなんて、嫌だと思うやつが多かっただろう。しかし、今の若い男は平気だ。体育会の猛者であっても、さりげなく男同士でパフェが食べれる。やはり時代は変わるなあー

4. 焼肉、風呂、ラーメン

5月□□日

飛び石連休の途中の平日、かつての教え子とばったり会った。彼は学校の先生をしているのだが、運動部の顧問をしているせいか、日に焼けてますます精悍になっていた。彼も俺になついてくれていて、２年前にも偶然会ったときも、メシ、風呂、ラーメンと過ごした。

「あれから連絡がなかったし、Facebook も更新していないみたいだから、どっか他の街にでもいったのかと思っていたよ」

「いや、同じ学校で働いていますよ」

じゃあ、２年前と同じことをもう一度しようかということになり、次の週末に待ち合わせした。二人で焼肉に行った後、ラーメン、風呂、そしてかき氷で閉めた。若い男の子は、焼肉やラーメンが好きだ。風呂もつきあってくれる。彼は、好きな女の子がいるみたいで、もうそろそろ結婚することも考えているみたいだった。

彼と話していると結婚も悪くないなあと思えてくる。彼は俺のちょうど半分の年なのだが、もし 20 代の頃にこうやって一緒にメシや風呂につきあってくれる男の相棒がいたら、俺だって普通に結婚していたのかもしれないのだ。つくづく学校へ行かなかったブランクは大きい。52 歳になって、俺はやっと自分の息子ぐらいの子にたどり着いたのだった。

5. ホモマゾ

東京大学の先生で女装ですっかり有名になった安富歩さんが、「ホモマゾ」という言葉を使って男の世界を表現していた。まさにこの言葉は的を射ている。ホモマゾとは、ホモソーシャル＋マゾヒズムである。

男たちはホモソーシャルな男の世界で、女にはないような苦しみはたくさんあるけど、でも俺たちは男なんだから皆で痛みを共有しようねというマゾ的な快感を支えに生きているのだ。

安富さんはそういう世界からはおりたいから女装になったのだろう。俺は逆だ。俺はそもそもホモマゾの世界に入ったことがない。だから、未だに男同士でプールに入ったりという小学生のような友情をたっぷり味わいたいという段階に留まっている。俺が一軍の男たちと親密なつきあいができるようになったのは 40 代になってからであり、それまではそういう男の関係に憧れながらも、入れないがために、まるで同性愛のようにそういう関係に焦がれていた。40 過ぎて、人間関係には恵まれるようになり、親密な友人関係を結んでくれる男性はたくさんできた。しかし、俺はまだ女性とのつきあいには躊躇している。

俺は子供の頃から、男たちが、平気でジェンダーを受け入れてしまうことがわからなかった。せっかく一生懸命働いてお金を稼いでも、妻や子供に吸い取られる。離婚なんてことになったら、子供は女にとられる。結婚なんて、女の術中にはめられる行為である。

おそらく、大概の男たちはそこまで考えて

いない。最初から一軍の男で、ホモマゾに生きてきた男たちは、結婚し、妻子を養うのが一軍の男のイメージだから、他の男もしていることだから、つらくても頑張ろうとホモマゾの理論で生きている。だけど、俺はホモマゾ理論を受け入れることができなかったのである。

今は、男性とのつきあいという部分ではホモマゾが受け入れられるようになったが、女性とのつきあいの部分ではまだできていない。なぜなのだろう？

去年の対人援助学会で、女性から理解されたくないという話がでた。ある若い男性が、女性に自分のことを理解してもらうのはむしろ不愉快だというのだ。分かる気はする。普通の男性はそうなのだろう。普通の男は、相手が妻や娘であっても、ある程度の距離はおいて、自分のすべてを知ってもらおうとは思っていないように見える。

俺は逆だった。俺はフェミニズムを一生懸命勉強して、女性を理解しようと努めてきた。だから、女性にももっと男のことをわかってくれと思ってしまい、わかってくれない女性とはすぐに喧嘩してしまう。これが俺が女性とつきあえない大きな原因である。

『男性は火星から、女性は金星から』という有名な本がある。俺たち男は火星人、女は金星人。だから分かり合えなくて仕方がないんだと割り切らなくては男女の関係は上手くいかない。

女性にわかってもらおうとする俺が間違っているのだ。もっと冷めた目で異星人として女性を見ることができれば、俺の女性恐怖はマシになるのだろう。考えてみると俺は、日本人の女性よりも外人の女性のほうに好感をもってしまう。外人の場合だと文化のギャップがあるから、最初から理解してもらえない部分があって当たり前という気持ちで接しているからだ。しかし、日本人の女性だと、「なぜ、これくらいのことがわからないんだ！！！」と俺は激昂してしまうのである。困ったものだ。

女性と喧嘩しないためには、俺はホモマゾにならなくてはならない。目一杯、他の男に同一化する。男たちと仲間意識を持つ。そして、女性は異星人だと思って、ある程度の距離を保つ。わかってもらえなくてもかまわないと割り切る。それが女性恐怖を防ぐ秘訣のようである。これからはそれを実践に移していかなくてはならない。

6.『起終点駅　ターミナル』(2015)

5月□□日

ホモマゾになりたいという思いもあって、シネコンで『64』の前編を見た。主演の佐藤浩市を筆頭に男性スターがたくさん登場する映画でまさしくホモマゾ。この映画のポスターを見ればわかるのだが、男たちは皆不機嫌そうな顔で写っている。不機嫌そうな顔をしながらも、これしか男の生きる道はない。煩わしい政治的な人間関係や家族とのしがらみに引き裂かれつつも、男という運命を生きている男たち。

俺は男の運命を受け入れることができなかった。そういえば、だいぶ前に中村先生から、「國友さんとつきあっているとすぐに傷つくから面白い」と言われたことがあった。俺は傷つきを表に出しすぎるのだ。普通の男は傷ついていても、それを表に出そうとしない。表に出さないのは問題だとこれまでの男性学

の人たちは訴えてきたが、俺みたいに表出的すぎてホモマゾに入れないのも問題なのだ。

『64』は、久々に充実した邦画の大作である。タイトルの 64 とは、わずか 7 日間で終わった昭和 64 年のことだ。この時、天皇崩御のニュースに紛れて、ほとんど報道されることもなかった女児誘拐事件に今も捕らわれ続ける男たちを描いている。昭和に取り残された男たちには、昭和は今も終わっていない。

俺にとっても昭和は終わっていない。俺は昭和が終わる時アメリカに留学中だった。したがって、あの時、日本がどういう様子だったのか全然知らない。あの時、俺が日本にいなかったのは、俺の人生は平成に変わっても、昭和のトラウマを引きずり続けることを暗示していたのかもしれないのだ。

俺は 1964 年生まれ。64 という数字も因縁めいている。この映画との出会いは俺にとっては運命だったのかもしれない。

佐藤浩市の初老ぶりにうたた感慨である。佐藤浩市は、『起終点駅　ターミナル』（篠原哲雄監督）でも同じような役で出ている。これも昭和から平成にまたがる話なのだが、昭和の終わり、女性が突然自分の前で死んだことのトラウマに引きずられ、25 年間、一人で暮らしていた弁護士が、新たな若い女性との出会いと別れにより、長年会っていなかった息子とも和解し、新たな人生を踏み出す話である。

「25 年間、俺は逃げ込んでいただけだ」というセリフが出てくる。男は一度トラウマを追うとなかなかそこから抜け出すのに時間がかかる。女性の方が潔い。この映画でも、「私何もいらなくなっちゃったんです」「うらやましいよ。男にもそれができたらなあ」というやりとりがでてくる。確かにノスタルジーという言葉は女よりも男に似合う言葉である。過去が好きなのは女よりも男だ。

佐藤浩市は 55 歳。俺より 3 つ上だが、渋みがでていい役者となった。彼のような男でも、四半世紀を超える時間、過去を引きずっているのだから、俺が過去をひきずっているのも異常なことではないだろう。

ただ残念ながら、男になれないことがきっかけでトラウマを背負う男の話は今のところ見つからない。この映画のように女を死なせてしまったことが原因という話はしばしば見られるのだけど。やはり、世間は女にトラウマを負わされた男よりも、女にトラウマを負わせた（女を死に追いやった）男の方に同情的なのである。

男は加害者でなきゃいけないなんて、そんなの変！　やはり男は痛い！！です。

援助職のリカバリー

《18》

～「断捨離」は、やっぱり「前向き」になる！？～

袴田　洋子

《「片付けない夫」に腹立てる》

５月の連休中に、数年ぶり？に、ハデな夫婦げんかをしました。別れたいけど、経済的に無理だよなぁと、何度も思いました。でも、世のシングルマザーたちは、もっとギリギリの収入の中で、母子家庭をやっているのだろうと思い、自分の根性のなさを情けなく思いました。同時に、別れたら、さみしい生活になるのかなぁ、でも、気楽かなぁとか、いろいろ思いました。夫婦げんかのきっかけは、「部屋の片付け」です。うちは子どもがいない夫婦ですから、「親として、多少はきちんとしてなくちゃ」感がゼロ、お互い実に勝手に生きてきた夫婦で、「夫婦で協力しあいながらやっていく」ということをやってきていないよな、と前々からなんとなく思っていました。問題が起こった時に、協力しあって「解決に向けて努力する」をやってきていない我ら夫婦が（私だけか？）、今回、離婚の危機を迎えたわけです。

《世は「解決したい夫婦」だらけ》

ネットで、「夫婦　別居　解決　回避　別れたい」などのキーワードで検索をかけて、みなさん、どうしているのか調べてみると、まぁ、出るわ出るわ、アドバイスや経験談、離婚カウンセリングなど、様々な情報がヒットしました。正直、「ああ、自分だけではないんだな、沢山の人が同じことで悩んでいるんだ」と妙な勇気も出ました。

その中で「３つのステップで夫婦関係を改善しよう」というサイトに目が止まり、これを印刷して夫に渡し、「ちょっとお互い、考えよう」と言いました。まぁ、その後の細かい展開は省きますが、結果として、別居は回避、「親業」をしていない私たち夫婦が、少しだけ「大人」になれたかもしれない感

じでしょうか。「自分たちの家を維持していくのは、自分たちしかいない」という自覚が持てたというのか。仕事や自分の趣味だけに時間を割いていた二人が、「自分たちの暮らし」に少し目を向けられた感じというのか。よって、かつてない勢いで、断捨離を実行できています。今の自分に不要なモノをどんどん捨てて、「居心地のよい住まい」に向けて、行動しています。

ずっと持っていた大好きなマンガ本は、「家栽の人」を残して全部処分、DVD は「バグダッド・カフェ」「あの日、欲望の大地で」など数本を残して処分しました。バリューブックスのチャリボンというシステムで買取をしてもらい、売れたお金は福祉団体に寄付することができました。そんなこんなで、勝手気ままに生きてきた子ナシ夫婦が、「お片づけができるオトナ」にちょびっと変化した５月でしたが、「家族って、夫婦って、いったい何だろう」と沢山考えた１ヶ月間でした。

《「片付けられない女」恐怖症》

今回、夫婦げんかのきっかけとなった「部屋の片づけ」は、長年、私が囚われているものの一つであり、自己肯定感を低くするものの一つと言っても過言ではなかったでしょう。ネットでポチポチすればすぐにモノが買える時代、持ち家の悲劇は、家の容量は、決まっているということです。買ったら買った分だけ、家のスペースは狭くまる。買ったら何かを捨てないと、どんどんモノに占領されていってしまう持ち家は、引越し断捨離ができないので、いつの間にか、ごちゃごちゃした空間になっていきます。

この「モノが多く、いつもなんだか、ごちゃごちゃしている家」は、「片付けられない私は、ダメな人間なんだ」という思考回路を生み出し、劣等感を増幅させます。これは、もしかしたら、男性には無い感覚なのかもしれません。私が「片づけなきゃ片付けなきゃ」と思って、休日にパタパタしている横で、夫は、一日中、PC 開いてネットやってりゃ、イライラするのは私だけでは無いでしょう。「家をきれいにしておかなければ」という呪縛は、女性にだけかけられているのかも、と今回、改めて思いました。

《念願の「断捨離」に挑む》

この、「モノをいかに捨てるか」ということに対して、本気で取り組みたいと思っていた私は、断捨離の教祖の一人、やましたひでこさんの DVD 付き本を購入（実は、Kindle で断捨離の本を買っていたが、読んでいなかった、というか買ったのも忘れていた）、本を読むのは時間がかかるので、手っ取り早く DVD を観て、「今の自分に必

要なものだけ残す」というフレーズだけを記憶し、まずは、食器棚の断捨離を始めました。景品でもらったマグカップとか、箱に入ったままの引き出物の食器とか、使ってない大量の食器をまずは捨てて、すっきりした食器棚を見て、「ああ、いい感じ」と心地よくなりました。

次は服の断捨離。ちょうど、がっつりの冬物は着ない時期になっていて、「この冬に着なかった服」をぼんぼん重ねて、紐でくくっていきました。その次の断捨離が、リビングに敷いていたタイルカーペット。そして、次が、今回の本と DVD。昨日は、ずっと処分できずにいた人形を、人形供養の神社に宅急便で送りました。実は、DVD を処分するのは、ちょっとためらいがありました。映画は基本的に好きなので、その中でも、もう一度観たい、手元に置いておきたいと思った映画を購入したわけなので、「本当に捨てていいの？」と自分に問いました。そして、なぜ、「映画・DVD を手元に置いておきたいのだろう」と考えました。

《元気になるのに、必要な「量」》

基本的に、私が購入した映画の DVD は、「楽しい」「嬉しい」「ハッピーになる」的なストーリーのものです。言い換えると、その映画を観れば、自分が元気になる、というものなのかもしれません。「映画を観て自分が元気になる」ために DVD が必要だった、ということであるならば、DVD を捨てるということは、今後、自分が元気を無くした時に、元気を取り戻すための方法・ツールが無くなるということです。でも、そんな時に役立ったフレーズは、「今の自分に必要なものだけを残す」です。今、ではなく、未来の自分が落ち込んだ時に元気を出すために、こんな、何十本もの DVD が、自分には必要、、、ではないよな、と冷静に判断することが出来たのは上出来でした。こうして、数本の DVD を残して、バリューブックスのチャリボンに送り、約 1 万 2 千円の買取金額を寄付することが出来ました。捨てる行為も、役に立てたと思います。

周旋家日記 18「キャリア形成について考える⑦ーシチズンシップ教育①

乾明紀

1．シチズンシップへの注目

筆者は、所属大学の全学必修科目「シチズンシップ」を担当しているが、筆者が大学生だった頃（25 年ほど前）、スポーツマンシップは聞いたことはあっても、シチズンシップという言葉を聞いたことはなかった（と思う）。英語では citizenship と書くが、市民を意味する citizen と形作るを意味する ship から出来た言葉である。以前は、「市民権」「公民権」などと和訳されることもあったが、近年は英語の語感に近い「市民性」として和訳され、「市民社会でいかに振る舞うか」という概念で捉えられることが多くなった[1]。

1990 年代ころから、このシチズンシップを育む教育（シチズンシップ教育）への注目が高まっている[2]。イギリスでは、ブレア政権が 1997 年に全国共通のカリキュラムでシチズンシップ教育を必修科目化した。当時のイギリスは、若者の政治的無関心や低投票率、学校の無断欠席や反社会的行為の増加という「若者の疎外」が問題となっていた。さらに、移民の増加などにより多文化・他民族社会が進んだこともその背景にあった。

また、アメリカでは、ボランティアや地域コミュニティでの活動の減少が見られたことと、グローバル化する経済活動に対応できる人材養成の必要性という視点からシチズンシップ教育が見直され、1994 年以降、州政府などにより「教育スタンダード」（公教育を通じて子どもに身につけさせたい内容や資質を定めたもの）[3]が定められた。

日本においては、情報化、国際化、価値観の多様化、核家族化、高齢化などが進展などの社会変化に対応する観点から 1989 年に「新しい学力観」に基づく学習指導要領の改訂が行われ、イギリスやアメリカのシチズンシップ教育で求められる能力の育成も重視されるようになった。

2. 新しい学力観

「新しい学力観」とは、社会の変化に対応して主体的に対応することのできる能力の育成を目指し、「知識・理解」よりも「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」に重点を置くものであり（田中，2005）、教育課程審議会（1987）で答申された以下のねらいを受けて出された学力観である。

①豊かな心をもち、たくましく生きる人間の育成を図ること
②自ら学ぶ意欲と社会の変化に対応できる能力の育成を重視すること
③国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育の充実を図ること
④国際理解を深め、わが国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること

また、学習指導要領の改訂に伴い、以下

[1]シチズンシップ教育ネット
http://www.citizenship.jp/citizenshipedu/
2016 年 5 月 31 日閲覧
[2]橋本将志(2013)日本におけるシティズンシップ教育のゆくえ,早稲田政治公法研究,
第 101 号,63-76.
[3]田中耕治編（2005）『よくわかる教育評価』ミネルヴァ書房

の教育課程の改革が行われた。

①道徳教育の内容の重点化と道徳的実践の指導
②小学校１・2 年に「生活科」の設置
③中学校で選択教科の拡大と習熟度別指導の導入
④高校の従来の社会科を「地理歴史科」と「公民科」に再編。世界史を必修化
⑤高校家庭科を男女とも必修化

３．シチズンシップ教育とキャリア教育

これまで述べてきたように、1990 年代ころからヨーロッパ、アメリカや日本などでシチズンシップ教育への関心が高まった。この背景について、小玉（2015）[4]は次の 3 つの要因があると指摘している。

①社会の変化を踏まえた、学校教育の変化
②多文化社会の到来
③学校が生徒を「大人」にして社会に送り出す必要性の増大

シチズンシップ教育への注目を高めた 3 つの要因の中のうち、「学校が生徒を『大人』にして社会に送り出す必要性の増大」という点は、近年のキャリア教育の質的変化の要因であるともいえる。例えば、2003 年に文部科学大臣、厚生労働大臣、経済産業大臣、経済財政政策担当大臣が取りまとめた「若者自立・挑戦プラン」は、「若年者の働く意欲を喚起しつつ、全てのやる気のある若年者の職業的自立を促進し、もって若年失業者等の増加傾向を転換させる」ことを目的に、学校教育と職業生活との接続を改善しようとした。

キャリア教育もシチズンシップ教育も「学校が生徒を『大人』にして社会に送り出す」という点では共通しているが、前者は「社会」を職業生活と捉え、後者は「市民社会」と捉えている点が両者の大きな違いである。例えば、イギリスのシチズンシップ教育では、「社会的および道徳的責任」、「共同体参加」、「政治リテラシー」の 3 点が教育の大きな柱（クリック・レポート）[5]としているが、「政治リテラシー」を特に重要視しているのが特徴である（図参照[6]）。イギリスのシチズンシップ教育は、既存の社会や国家にとって都合の良い「品行方正な市民」（グッドシチズン）を目指すにとどまらず、能動的な市民（アクティブシチズン）の育成を目指しているのである。

4. 政治的リテラシー

政治的リテラシーについて、日本の学校教育では十分に育成してこなかった。教育基本法第 14 条第 2 項にある「法律に定める学校は、特定の政党を支持し、又はこれに反対するための政治教育その他政治的活動をしてはならない」を過度に意識するあまり、社会的・政治的な課題に距離をとってきたのである[7]。生徒や学生の生活や将来に

[4] 小玉重夫（2015）「政治的リテラシーを身に着けることで能動的に政治に関わる市民を育成」河合塾 Guideline11 月号

[5] 1998 年のイギリス政府答申「学校における民主主義とシチズンシップ教育」の呼称。

[6] バーナード・クリック（2011）「シチズンシップ教育論」法政大学出版社

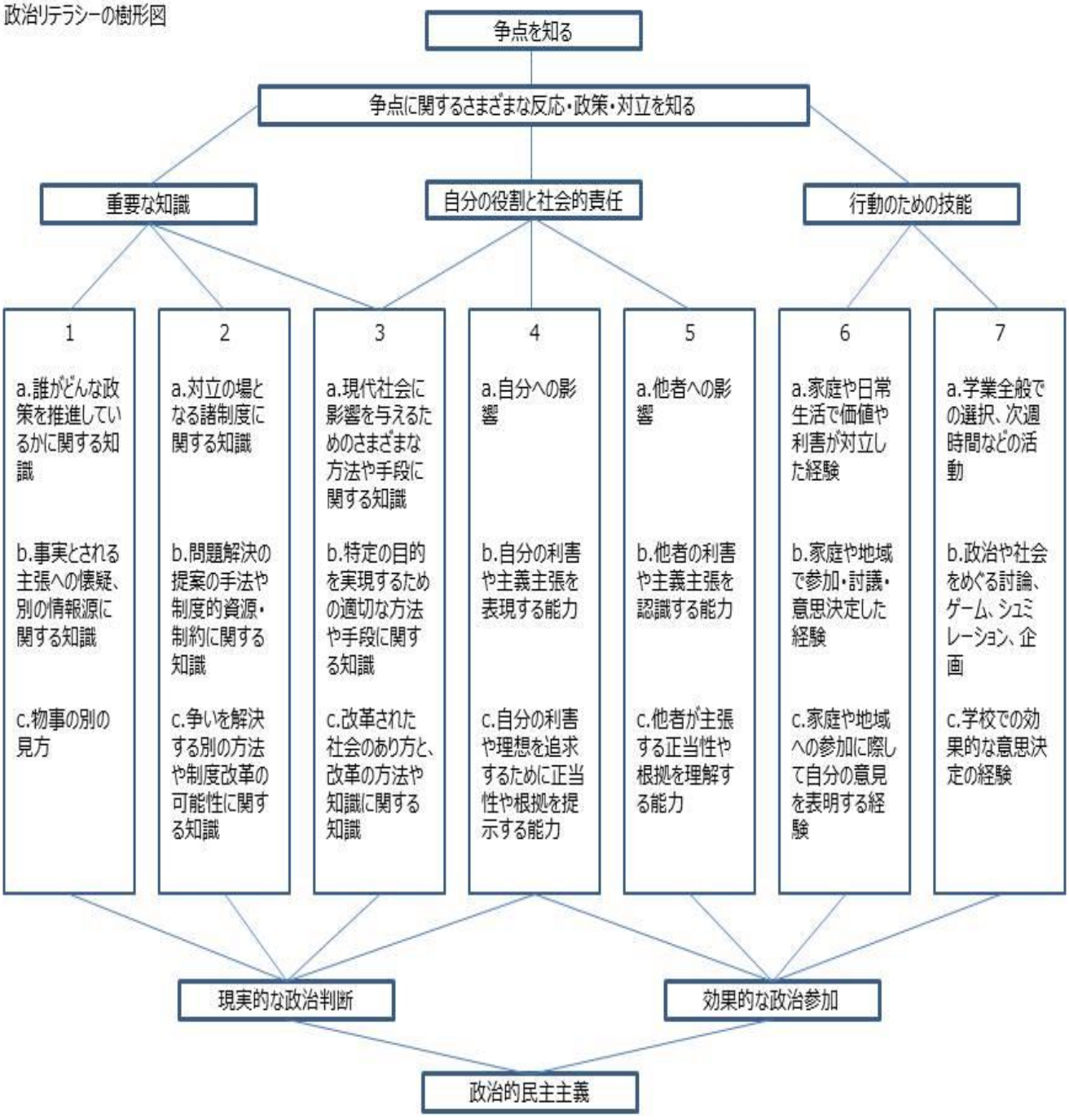
[7] 京都市教育委員会（2016）「政治的教養を育む教育を進めるにあたって～小学校・中学校・高等学校の発達段階に応じた政治的教養を育む教育にかかる学習指導案集～」平成 28 年 3 月

影響を与える政治は身近な存在にしておく必要があったにも関わらず、我が国ではそれができていなかった。つまり、学校は、生徒に政治的リテラシーを身につけた「大人」にして社会に送り出すことはできていなかったのである。

しかし、2015 年 6 月に選挙権年齢を 18 歳以上に引き下げる「公職選挙法等の一部を改正する法律」が成立したことにより、政治的リテラシーの育成は急務となった。筆者のところにも複数の高校からこの能力を高めるための出前講義の依頼が入った。

（つづく）

図：政治リテラシーの樹形図



バーナード・クリック（2011）「シティズンシップ教育論 政治哲学と市民」（法政大学出版局）

トランスジェンダーをいきる（１７）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

リアルライフの構築に向けて

１　始めに

リアルライフ構築とは、体・書類上の性別とジェンダーの性別が不一致である場合、自己のライフスタイルをジェンダーの性別に移行させることを言う。すなわち、筆者の事例では、体・書類上の性別は女性であるが、ジェンダーの性別は男性であるため、自己のライフスタイルを女性から男性に移行させる、ということである。

自己のライフスタイルをジェンダーの性別に移行するということは、たとえばそれまで身に着けていた女性物の服や小物を男性物の服や小物に変えていく、それまで「私」という自称詞を使っていたのが、「僕」・もしくは「俺」に変えて、男言葉を使用する、名前を男性名にする、などである。

今回から３回に渡って、筆者がどのようにして女性から男性への性別移行を行ったのかについて詳述する。第１回目の今回は、リアルライフ構築の最初の段階として、女性から男性への服装や小物の移行について、視覚に障害のある筆者が、どのようにして男女の衣服を区別するのか、実際に女物の衣服や小物から男物の衣服や小物に変えていく過程で、どのような心理的変化が起きたか、また、どのようにして紳士物の衣服や小物を購入しているのか、そして現在、男物の衣服や小物を身に着けることが「当たり前」の段階に至るまでになった経緯について述べてみる。

２「家族の洗濯物」から学んだ男女の衣服の違いと、「食器洗い」から学んだ男女の食器の違い

筆者は学生のころ、学校の長期の休みになると、「女の子であることを理由に」、家の手伝いとして洗濯を任されていた。夏休みには玉のような汗をかきながら、冬休みには、凍りつきそうな手で、毎日のように洗濯物を干していた。そして、時間を決めて、洗濯物を取り込み、たたんでたんすの中にしまいこんだ。

そのような一連の行為の中で、筆者は知らず知らずの内に、男女の衣服の違いに気づいた。ま

ず、同じ下着でも男女によってデザインや大きさが違うこと、生地の厚さが男物の生地は厚くて少々重いのに対し、女物の生地は薄くて軽いこと、そしてデザインにいたっては、男物はシンプル・女物はレースがついていてなんとなく華やか、という具合である。同様に、シャツ・セーター・ズボンに対しても、男物は生地がしっかりしていて厚みがあるのに対し、女物は生地が薄くて男物よりは小さく、しかも襟が小さい、などである。視覚に障害のある筆者は、触覚によって男女の衣服の違いを観察していたのである。

そのうち筆者は、洗濯物を干しながら、あるいは洗濯物をたたみながら、いちいち「これは男物のパンツ、いいなあ、俺もこんなパンツ、人生で1度でいいから履いてみたい」、「これは女物のTシャツ、俺は男なのに、こんな小さくて薄っぺらなTシャツを着せられてなんだか惨めやなあ」というように、一つ一つの洗濯物に、言葉にならない感想を交えながら観察していった。2歳年上の兄の洗濯物を触ったとき、「俺、本当はこんな下着や服を着るはずやのに」と、言い知れぬ興奮と羨望が入り混じった複雑な気持ちになったことを今でも記憶している。

また、筆者は毎晩のように、「女の子であることを理由に」、食事の後片付けをやらされていた。そのとき筆者は、男物と女物の茶碗と箸の違いにも気づかされた。すなわち、男物の茶碗は女物より大きくて重い、男物の箸は、女物より長くて太い、ということである。「なぜ俺は、こんな小さな女物の茶碗で、しかもこんな短い女物の箸で、毎食の飯を食わなければならないのか」と、食器を洗うたびに情けない思いに駆られていた。

3 女性としての服装から、男性としての服装への移行

①男物の下着を購入し、身に着けたことへの罪悪感

本格的な一人暮らしを始めた1996年ごろから、筆者は男物の下着に興味を持ち、仕事の休みを利用して、遠方のスーパーで、男物の下着を購入するようになった。

帰宅後、どきどきしながらスーパーで買った男物の下着を恐る恐る開けてみた。ブリーフ・トランクス・シャツ、、、。どれもこれも柔らかな手触り。女物よりさらさらとした生地でありながら、縫い目がくっきりと出ている。その手触りにかっこよさを覚えた筆者は、顔を赤らめ名がら、男物の下着をたんすにしまった。そして入浴後、いったんたんすの中にしまった男物の下着のなかから、ブリーフとシャツを取り出し、それを身に着けた。

別に悪いことをしているわけではない。まして一人暮らしであるから、誰が見ているというわけでもない。しかし、体が女性である筆者の心理状態として、男物の下着を触っただけで興奮しながら身に着けたことに、筆者は罪悪感を覚えた。そこには、「隠れて男装している自己」に対する軽蔑も含まれていたのかもしれない。

②男物のカジュアルな服装が「似合う」と実感して

男物の下着を購入し、触って興奮したり、身に着けたことへの罪悪感は、知らず知らず消えていった。すると今度は、「男物のカジュアルな服装」を「をしてみたいと思うようになり、それとなく紳士服売り場に立ち寄るようになった。

視覚に障碍のある筆者が、どのようにして衣服を選ぶのか。当時は、前項で詳述した洗濯物を

通じての触覚、つまり、記事の手触りが主流で、後は男性店員から色やデザインの説明を受け、試着をしながら購入した。そのような購入の仕方を繰り返しているうちに、「俺のような細井体系でも、男物の服が着れる」という自信がついてきたのか、2005 年ごろからは、週に 2 度の仕事の休みの度に、紳士服売り場に行くようになった。そしていつの間にか、衣服のデザインと色にも興味を持ち始め、ジェンダー化された自己の男イメージのデザインと色を図式化するようになった。すなわち、黒・紺・茶・グレーなどの色で、縫い目や仕立てがしっかりしている衣服は「男」というように、視覚に障害があっても、自ら積極的に色やデザインなどをある程度指定して、男性店員と相談しながら購入する、という仕方で変化していったのである。

③スーツ・ネクタイ・革靴その他の小物

2006 年になり、いよいよスーツ・ネクタイ・革靴その他の小物にも興味が沸いた。財布やバッグは、比較的身に着けやすかったものの、スーツ・ネクタイ・革靴を最初似身に着けたときは、それなりの「ハードル」を感じてしまった。(体系が細井俺が、男物のスーツを着て、ネクタイを締めて、その上革靴まで履いて、、、) と、自己のそのような姿に奇異な感覚を覚えて困惑した。

実際、女性の服装から男性の服装への移行期には、当時勤務していた鍼灸マッサージ治療院の患者さんたちから、筆者の服装に関する苦情が出ていた。また、職場の上司や同僚たちは全員視覚に障害があるにも関わらず、患者さんたちからの苦情を受けて、筆者を奇異な目で見るようになった。さらに、男物の服装で実家に帰省したときは、(すでに髪型は短髪だったので)、両親からの小言が絶えなかった。父にいたっては、「そんな男のかっこうで帰ってくるな！」と怒鳴られた。紳士服売り場ではうきうきしながら衣服の品定めを行っている一方で、通勤時や勤務中は、冷たい視線にさらされる。家族からは小言を言われ、半ば家から追い出されそうな迫力で怒鳴られる。「移行期」とは、なんと複雑でデリケートで脆弱な期間なのか、と、筆者はつくづくと思い知らされた。

4 終わりに―「私が男物の服装をし、男物の小物を身に着けるのは当たり前」

男物の下着を触って興奮し、身に着けたときに罪悪感を感じた日から早 20 年。「かっこいい」・「センスいいね」など、服装をほめられる機会が多くなったことで、筆者は年々メンズファッションにこだわるようになった。現在では、「男物の服装をし、男物の小物を身に着けるのは当たり前」と心底から思っている。

それでもたまには女性と見間違えられることがあるのだが、その度に、「女がこんなかっこうしとるか。あんた、ちゃんと目が見えとんか」と、人前で真正面から堂々と怒れるようになったことは嬉しい。

「服装の乱れは心の乱れ」という言葉をよく耳にする。今後、どんなに病気がちであっても、何らかの事情で、男物の衣服や小物を購入することが難しくなっても、今持っている男物の衣服や小物で、自己のメンズファッションにこだわりたい。

うしわか　こうじ（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

役場の対人援助論

（１６）

岡崎　正明

（広島市）

助けるチカラ。助けられる能力（スキル）。

とある相談から

大きな会社で重要なポストを務めた人だった。引退後は地域の役員を頼まれ、積極的にその役割を果たしてきた。妻も社交的な人で、実質的に夫の事務を差配し、周囲との調整やお付き合いなど、精力的に活動していたという。

その夫が脳梗塞で倒れた。

なんとか杖をついて歩けるまで回復したが、後遺症が残った。妻は介護に努めたが、夫は次第に認知症の症状も出てくるようになった。フラフラと外を歩き回ることもあり、周囲の人は妻を心配して声をかけたが、「大丈夫」といって隠れるように家の中に消えていく。

主治医や関係者も介護サービスを勧めたが、妻は「他人さまのお世話にはなりたくない」と、頑として受け入れない。

最近その夫の顔や腕に、小さなアザが見つかるという。

ある包括支援センターからの相談。話を聞いて、思わず私の口から出たのが、「もったいない…。」

この夫婦はけして孤立している人たちではない。地域活動にも熱心で、近隣関係も良い。それなのに、どうして。

「支え合い」の死角

先日受けた研修で心に深くとまった話がある。
テーマは「地域支え合い」。
以前から聞くフレーズだが、ここ最近の高齢者支援の世界で、特に聞く機会が増えている言葉だ。
講師はグループホームの施設長をしていたという男性だった。
彼は「支え合い」という言葉は、辞書で引くと『互いに支えたり、支えられたりする関係のこと』と書いてあることを述べた上で、ふいに尋ねた。

「みなさん。この中で自分の人生は『ピンピンコロリ』がいいな、という方は？」
会場のほとんどすべての人が手を挙げた。
次に講師は、
「じゃあ、最後を自宅で迎えたい方は？それとも病院がいいという方は？」
と聞いた。９割が自宅の方に手を挙げた。

講師はピンピンコロリは選択できないこと。今の高度に進んだ医療は、ピンピンコロリをなかなかさせてくれないことを解説した上で、こう言った。
「ピンピンコロリにならない方で、自宅で最期を迎えたいという人は、人生の最終盤で必ず地域で『支えられる』側にまわります。なのに私たちは『支える』側の勉強ばかりしている。これでいいんでしょうか？」

「支えられる」人がいて、はじめて「支える」ことができる

誰もが「人に迷惑をかけるな」「困っている人がいたら手を差し伸べなさい」といわれて育つ。世の中の役に立つ人になることが価値だと教えられ、「自分のことは自分でできるようになる」ことが、１人前だと学ぶ。
大筋でこれが間違いだとは思わない。

だが現代社会において、本当の意味で自分の生活に関わるすべてを、誰にも頼らず自前でやっている人など皆無だ（いるとすれば無人島で自給自足をしている人くらいか）。
移動すれば交通機関の、飲食すれば物流や調理する人の、病気になれば医者の、家を建てれば大工さんの…とまあ数え上げればきりがないくらい、さまざまな専門家の力やシステムを利用して私たちは生活している。それは紛れもなく、自分以外の他者の「お世話になる」ということに他ならない。
「金銭を払って正当なサービスを受けているのだから、別にお世話になってるわけではない！」なんて、了見のせまいことをいう人が万が一いたらいけないので付け加えておくが、タダの紙切れに価値を与えている今の金融システムとやらも、あなたではないどこかの「他人」が作り、維持している仕組みのハズである。

我々は、あるときは支援の担い手となり、またあるときは支援の受け手となって、まさしく「支え合って」この社会を維持している。社会的分業。相補関係。

持ちつ持たれつ。言い方はいろいろあるが、ようするにそういうことだ。

その中でも人生の前半と終盤。
人は支えられる側にまわる割合が多くなる。誰しもが通る、自然の摂理だ。
そして先日の熊本地震でも分かるように、いつ何時自分が支援の受け手にまわるかなんて、誰にも分からないのが生きるということでもある。

にもかかわらず、社会は「支援の担い手・出し手」になることにばかり価値をおき、その方法論や能力の向上といったことに興味が偏っていないか。
対人援助職だからこそ、自分自身が必ず「支援の受け手」になるという現実に、もっと真摯に向き合い、想像力を働かせるべきではないか。
先の講師の問いかけは、それを私に鋭く突きつけてくれたのだった。

支援を受けるって、そんなにダメなこと？

一般的に、支援の受け手にはどこか「弱い」「自立していない」といったイメージがつきまといがちである。
しかしシステム論的にいえば、支援の出し手にも受け手にも、上下や優劣はない。支援関係という状態を相互に維持している、１つのネットワークということにすぎない。
社交ダンスやフィギュアスケート・ペアの見事な演技。
あれを見て、支える男性側だけの力と技術で踊りが成立しているなんて、誰も思わない。飛んだり、回されたり、受け止めてもらう女性側の絶妙な体重移動や姿勢の取り方などがあればこそ、あの一体となった華麗な演技が完成する。男女どちらがかけてもいけないのだ。

支援関係にも、同じことが言えるのではないだろうか。
だから支援する側に「傾聴」「〇〇セラピー」といった、たいそうな名前の手法やスキルが存在するのであれば、当然支援される側にも、上手に支援される「コツ」や「作法」が存在するはずなのである。
しかし残念ながら、私たちはこれまでそれをほとんど語ることがなかった。バランスが悪いと言われても、しょうがないところだ。

最初に出てきたケースの妻は、支援の担い手になることには習熟していた。誰かのお世話を焼き、人助けに力を貸す。自らが相手に向かって働きかけることで人とつながる、助けるチカラは持っていた。
しかし相手からの働きかけを上手に受け入れ、人との関係を取り結ぶことには慣れていなかった。助けられる能力（スキル）は少なかったのだ。それは他人に迷惑をかけない自立的な人ほど、育ちにくい能力だろう。

私のいる高齢者の相談窓口でも、よくこの「お世話になりたくない」「迷惑かけたくない」というフレーズを相談者の方から耳にすることがある。だが皮肉なことにそういう人たちが、結構高い割合で“処遇困難ケース”と呼ばれる結果に

なっていたりする。
助けられ下手、迷惑かけ慣れていないというのも、人生の最終盤でちょっと困った課題にぶつかる危険をはらんでいるのかもしれない。

うまい迷惑のかけ方

岡田隆介著『家族が変わる子育てが変わるコミュニケーションのヒント』（明石書店）の中に、夏休みの宿題をやろうとしない子どもと、その対応に困る親の話がある。その中で著者は「どうせ（宿題を）手伝うのなら、世の中のルールと、『気持ちよく他人に手伝ってもらう方法』を子どもに教えるチャンスにしましょう」と言い、そのスキルを身につけることは、「世の中に出たとき、独立心と同じくらい大切なこと」だと語っている。
礼儀正しく、しかも相手をその気にさせる頼み方や、感謝の伝え方ができるか、そうでないかは、その後の子どもの人生を大きく変える可能性を秘めているといっていいだろう。

偉そうにならない。
かといって、卑屈にもならない。
「ありがとう」は、本当に感謝しているとき以外にも使ってみる。

私の少ない経験からいえるコツは、そんなものだ。
そして姿勢として大事だと思うのは「施されてる」「憐れまれてる」などと反応し過ぎないこと。もちろん、そんな見方が存在することは百も承知だが。

余計なお世話だったり、多少的外れだったとしても、相手の心がけと勇気にやさしく拍手してあげる。そんな気持ちで「ありがとう」と伝えてみる。笑顔を返す。個人的にはそんな風に心がけている（よほど迷惑な行為なら別だが）。
これは別に性格の優しさや心の広さの問題ではなく、そうしたほうが「相手の為になる→ひいては世の中に良い循環を生み→巡り巡って自分の為になる」という、私なりの計算からきている。心は無理でも、視野は努力で広くできるものだ。

電車で席を譲るのが優しさなら、「ありがとう」と受け入れて座るのも優しさだという話を聞いたことがある。あまりに礼儀を欠いたものは別だが、少しくらいの大きなお世話には、「私はまだそんなに弱ってない」などと目くじら立てず、笑って許して乗ってあげる。
それもひとつの対人支援なのかもしれない。

支援するのもされるのも、ようは人と人とがつながるということだ。
助けられる能力を高めることは、人と豊かにつながる確率をあげることになる。そう思うと、自分がいずれ本格的に支えられる側になるのも、悪いことばかりではない気がしてくる。

オール・オア・ナッシング

新版Ｋ式発達検査をめぐって　その⑮

大谷　多加志

今年度に入ってから、色々な場所でＫ式についてお話させて頂く機会を得ました。題材は全てＫ式ですから、同じような話を別々の場ですることもあるのですが、相手や場面が違うとやはりこちらが伝えるべき内容や、その内容を伝えるための工夫も違うように感じて、色々と試行錯誤をしているところです。そういう意味では、色々な場でお話する機会を得たことで、これまで以上に様々な観点からＫ式について考え直すことができたように思います。

ここ最近、選挙の季節ということなのでしょうが、テレビをつけると、参議院議員選挙やアメリカ大統領選挙のニュースをよく目にするようになりました。アメリカ大統領選挙では、当初は泡沫候補とされていたトランプ氏が、今や支持率トップになるまでの快進撃を続けています。トランプ氏が支持される理由には、色々な要素があるのでしょう。ニュースや新聞などで分析されているものも見かけます。そのような論評の中で、トランプ氏の「主張の明快さ」が、支持される要因として挙げられているのを見ました。しかし、その主張の中身は「100%費用負担するか、さもなくば撤退だ」というようなことだったりするので、言い換えて極端な主張と言う方がぴったりなのかもしれません。極端な主張や考えは、わかりやすく、一面では正しさや正当性を持ちます。しかし、その事柄にまつわる多様性や経過、いきさつ、それに関わる人々の感情や立場などを、一面的な正当性により「関係ない」とバッサリ切り捨ててしまうものでもあります。トランプ氏の快進撃を見ていると、このような主張が受け入れられ、支持されやすい土壌が、今の世界に広がっているようにも思えます。そんなことを考えながら頭に浮かんだのが、この「オール・オア・ナッシング」という今回のテーマです。

「発達」や「発達検査」に関わる中でも、時にこの「オール・オア・ナッシング」、言い換えるなら「極端さ」を感じる場面に出会うことがあります。今回は、発達臨床における「オール・オア・ナッシングに思える場面」について、頭に浮かんだことを書いてみようと思います。

遺伝か環境か、怠けか障害か

知能の決定要因が遺伝か環境かという論争は、知能研究の初期の一大テーマでした。一般的な感覚としては、学業優秀な親のもとに優秀な子どもがいるというのはイメージがしやすく、遺伝的な要因があるという

ことは感覚的には納得しやすいかもしれません。一方、環境的な要因があることも、それはそれでもっともらしく感じます。塾に通う子の方が、塾に行かない子より成績が良くなるような気がします。さらに、学業優秀な親だからこそ、学業に対しての関心が高く、学習のための環境を整える傾向が強い、つまり環境要因が整いやすいという側面も考えられます。知能に関する「遺伝か環境か」の論争は、一般的には両方の要因がある、というところで落ち着いているようです。

現在の発達臨床の場で「遺伝」が話題になるのは、やはり発達障害に関係する場面です。兄弟や一卵性双生児の自閉症の発生率に関する研究によって、自閉症スペクトラム障害には、一定の遺伝的要因があると考えられています。遺伝的要因があるということで、深く悩まれる保護者の方もおられます。自分が悪かったのではという自責の気持ちを持たれたり、第一子に自閉症スペクトラム障害の診断が出たことで、それまでは希望していた第二子について迷い始めた方もおられました。

また、親子で似たような特性を持っておられるという場合もあります。子どもの相談で来たのだけれど、お話を聞いていると保護者の方も色々と苦労されていることがあり、それが発達障害の特性から生じていると思えるケースもあります。

最近、少し気になっていることがあります。事例検討会などでディスカッションをしていると、ふと「実は親御さんも似た傾向があって…」という言葉があり、そこで『道理で難しいはずだ』と納得してしまう空気が生まれるように感じることです。もちろん、保護者の方が発達障害をお持ちの場合もあると思います。保護者の方が発達障害の特性を持っておられるなら、支援者はそれを踏まえた対応や環境調整によって、必要な支援が行えるように考える必要があります。しかし、『道理で・・・』という空気の中、遺伝と環境の、遺伝の話だけでなんとなく話が落ちてしまうような印象を受けることも、少なからずあります。

「怠けか、障害か」というのも、古くからのテーマです。“障害であるならば現状を認めるが、障害でないならばきちんと指導しないといけないから、発達検査や医者の診療を受けるように！”と先生に言われて相談に来られた方の話を、何度か聞いたことがあります。最近でこそあまり見かけなくなりましたが（つまり、今もたまには見かけますが)、結果的に自閉症の診断が出た途端に、“自閉症＝集団の活動への参加は難しい！”という風に思い込み、集団活動への促しをすっかりやめてしまう、というような対応になる場合もありました。これもやはり、極端です。

能力があるか、ないか

次に、発達検査のことに話を進めます。講習会などでよくある質問の１つに「それぞれの課題は、子どものどのような能力を測定しているのか？」、「○○の項目を通過したら、どういう能力があると言えるのか」というものがあります。いつもどう答えたものかと思案し、慎重になる質問です。素朴な質問ではあるのですが、下手をすると「○○の項目に通過していたら○○の能力があり、不通過なら○○の能力がない」と

いう極端な解釈を生む恐れがあるように思うからです。

人の能力とはそもそも、「ある」「ない」の 2 択で割り切れるものばかりではありません。例えば「発語」を例に挙げれば、まったく言葉がない時期と、流暢におしゃべりする時期どの間に、まったく発語がないわけではないけれどまだまだ頻度は少なく、促しても言ったり言わなかったりで、少なくとも主たるコミュニケーションの手段にはなっていない、という時期も存在します。この時期も「ある」「ない」で 2 分すれば「ある」に属するのでしょうが、その発語の能力は、特定の場面や状況に限って表れるものだと言えるかもしれません。検査場面や検査課題も、ごく限られた場面、状況に過ぎません。この場面での成否（通過・不通過）だけで何かを断言することは性急だと言えるでしょう。

さらに、項目の成否を能力の有無と結びつける考え方は、別の混乱を生じさせる原因にもなります。例えば、「〇〇に関する能力を有する」ことが検査場面以外の子どもの様子から明らかであるのに、検査場面で「〇〇の能力の有無を測定している」とその検査者が考えている項目に、不通過の反応が見られる場合もあります。このようなケースに対して、検査者によっては「能力はあり、検査場面では能力以外の要因で課題に応じなかっただけだから、通過として評価する」と言う方もいれば、「そもそも能力がある子がうまく応じられないような課題状況（設定）が悪い」「その子に合うように、課題状況を改変して実施しようと思うがそれで構わないか」という不満を漏らされる方もいます。私自身は、上記のような評価や対応の仕方をすることには慎重であるべきだと考えています。このような対応をすれば、発達検査は単なる「能力測定検査」になってしまうように感じるからです。

発達検査でみているものは？

もちろん、発達検査の課題をクリアできるかどうかと、子どもの発達状態、あるいは能力は無関係ではありません。また一般的に、能力は獲得されてから徐々に安定して発揮されるようになっていき、場面や状況の影響を受けにくくなっていきます。例えば、「自転車に乗る」という能力で考えれば、ひとたび安定した能力が形成されれば、多少タイヤのサイズが違う自転車や、他人の自転車に乗る場面があっても、それなりに適応して運転することが可能なはずです。

一方で、獲得したスキルや能力を、色々な状況で用いることが苦手な人もいます。自閉症スペクトラム障害の特徴の一つに、「般化」の難しさが挙げられます。いつもの手順のうち、一部でも変更があると混乱し、普段使っているスキルや能力を応用して用いることが困難だったりします。このような人の場合、「〇〇の能力がある」ということと同じくらい、「ある状況ではできることが、別の場面では困難になる」という情報が、支援を考える上で重要になります。ひとくくりに「〇〇の能力はある人です」とまとめてしまうことは、支援のポイントを却ってわかりにくくしてしまうことにつながるかもしれません。

発達検査を通して検査者がみているものは何でしょうか。もちろん、通過、不通過

の評価をするために子どもの行動や課題への反応を観察しています。その時、行動レベルで何をしたのかを見ていますが、同時に「子どもからは、この課題状況がどう見えたか（どう理解されたか)」ということに想像をめぐらせてもいると思います。この想像は、あくまでも観察した事実から膨らませていますから、勝手な妄想とは違います。しかし、実際に「こう見えていたよね」と子どもに答え合わせをすることもできないので、自分の中で仮説として保持しておいて、その後の行動観察や保護者とのお話の中で修正しながら、検査所見のまとめや検査報告などに反映させていくことになります。

答えのないものについて考え、自分なりの仮説を持つこと。仮説という不安定なものを、言い切りもせず、捨ててもしまわないという、敢えて言えば中途半端なところで踏ん張れること。冒頭で述べた「極端な意見」とは対極ですが、対人援助の場で大切なことはこういうことなのではないかと思っています。

バックナンバー

第 10 号　発達検査でわかること
第 11 号　通過・不通過
第 12 号　解釈・見立て・所見
第 13 号　検査手続き
第 14 号　導入
第 15 号　発達検査でわかること②
第 16 号　発達検査のもつイメージ
第 17 号　発達心理学用語講座（K 式編）
第 18 号　発達心理学用語講座(K 式編②)
第 19 号　行動の発達的意味と機能
第 20 号　K 式をめぐる私ごと
第 21 号　改訂に向けて
第 23 号　発達相談①
第 24 号　発達のアンバランス

10 代の母という生き方 ⑮
―最終回―

大川 聡子

1. 若年出産問題を把握するためのエコロジカルアプローチの必要性

これまで、若年出産がもたらす社会的経験の意義について、妊娠・出産・育児を通して周囲の人々との関係を再構築していく過程を中心に明らかにしました。

①②では、若年出産が日本において政策的課題として注視されない背景に、若年出産をもたらす顕著な社会的課題がないこと、家族の支援があることや既存サービスの活用により、問題が不可視化されていることを示しました。③では、若年母親に内包される社会的問題について、経済的問題、高校中退問題、家族の問題の 3 つに大別して整理し、日本において若年母親がどのようにとらえられているかを明らかにしました。

④⑤⑥では、若年母親の語りから若年出産をもたらす社会的特徴を明らかにしました。結果から、子どもが欲しかったと考え出産を自らの意思で主体的に選択する母親の存在を明らかにし、その背景に、若年母親の短い修学年数や不安定就労などの社会的に不利な要因、家族間の葛藤や家族への思慕、そして夫と新しい家族を作ることへの希望があることを示しました。出産後の母親は、インフォーマルサポート、社会的支援、そして若年母親自身の努力をもって、社会的に不利な状況に対峙しようとしています。⑦⑧⑨⑩では、若年母親のグループにおけるインタビューから、社会的不利な状況に対峙するピアサポートの役割について示しました。若年母親達は出産を通して、周囲の人々との関係を再構築し、将来を見越した生活設計をしていました。そのことにより自己肯定感を高め、母親としての生活に自信を持つことができていました。⑪⑫では、若年出産を「選択」する背景に、若年母親達の社会的に不利な要因と、10 代という年齢に期待されている教育や就労よりも、母親となることに意義を見出す若年母親の意思の双方が影響していることを明らかにしました。このことから、若年母親の「予防」の取り組みに傾注するのではなく、若年出産を

個人のライフスタイルの選択として認め、こうした若年母親を支えるためのセーフティネットの必要性について述べました。

⑬⑭では、地域住民ボランティアへのインタビューを通して、ボランティアが若年母親と関係を構築していく過程を明らかにしました。ボランティアは、若年母親の様子を観察することで母親のニーズを察知し、パターナリズムに陥らないよう自身の役割を「見守り」と位置付け、居心地の良い場づくりに徹していました。こうしたボランティアの関わり方が、若年母親と関係を構築するきっかけとなっていました。また支援が必要な人々と、関わりたいという思いを持つ地域住民をつなぐことで、お互いに支え合うことのできる地域づくりにつながっていくことも示唆されました。

若年母親に対する社会資源のあり方について、Germain(1980)は、これまでの伝統的なアプローチでは、クライエントを受け身で依存的な立場に置く医学・病理の比喩を用いるか、「個人」だけに関心が絞り込まれる傾向にあったといいます。若年母親においても、出産後の社会的不利な要因が主眼としてとらえられ、出産に至るまでの母親を集団として捉え、彼女たちが共通して抱えている社会的背景には関心が払われてきませんでした。しかし、⑪⑫で述べたように若年出産を「選択」する背景には、若年母親達の社会的に不利な要因と、母親となることに意義を見出す若年母親の意思の双方が影響しています。このため本号では、若年母親を「個人」としてでなく、家族、学校、職場、地域の一員としてとらえ、「個人」とそれをめぐる「環境」の相互適応プロセスに焦点を当てるエコロジカルアプローチを用いて、若年母親の支援のあり方について検討したいと思います。

1) 若年母親と若者問題

若年母親が主体的に出産を選択する背景に、家族、教育、就労など様々な社会的要因や青年期の特徴が背景にあり、その中で主体的に「選択」されていることを認識しておく必要があります。若年母親は社会的に不利な状況の中で生活していますが、社会的に不利な状況の誘因となるものは、原家族の経済的不安定さです。④～⑩におけるインタビューから、若年母親達は高校入学当初からアルバイトをして労働市場に参入し、家計を助けたり学費を賄うなど、家族の庇護に頼らず(頼れず)自立した生活を送っている人もいます。若年母親の原家族は経済的不安定を抱えていることもあり、それが学業の継続を困難にしている誘因となっています。中学卒業、または高等学校を中途退学している若年母親は、その後専門的な職種に従事することは難しい状況です。若年層が将来に希望を見出せないことが「何もすることなかったし、結婚しよう」といったように、彼女達を妊娠・出産に導く要因ともなっています。しかしこうした「経済的不安定」は若年母親のみにみられる問題なのでしょうか。

宮本(2004)は、「若者の貧困化が隠される日本社会では、真に問題を抱えた若者が存在していることが認識されるのに時間がかかる」とし、子どもや若者の貧困が表面化され難い現状を指摘しています。若年母親となることで顕在化する貧困は、貧困家庭に育った子ど

も期の問題であり、若者問題でもあります。こうした社会的に不利な状況は、個人の努力で解決できる問題ではありません。若年出産層とは、単に 10 代で子どもを産んだということではなく、その背景にある社会的不利－親世代からの貧困の連鎖、ステップファミリー、高校中退、若年父親の不安定就労、乳幼児を抱える母親の就職難、母子家庭等－を持つ人々です。若年出産を一つの選択肢として認め、不安定さを抱え込む母親に対しても、またその子どもに対しても、不安定さを補うための「人生前半の社会保障」を整備していく必要があります。

さらに、若年母親はこれらの社会的不利に加え、青年期の特性をも併せ持っています。その一つに、「現在の思い」を重視する行動特性があります。筆者は若年母親グループにおいて次の妊娠のタイミングを考えたり、保育所入所の意識付けの一助とするため、20XX 年からメンバーに今後 5 年間のライフプランを検討してもらう機会を作っています。若年母親はライフプランをそれぞれに持っていますが、生活基盤や将来設計を立てる事より現在の思いを優先するため、目標に向かってどのように行動すべきか考えることが難しい状況にあります。「働く」ことを希望していても職業へのイメージも乏しく、今－ここの楽しさを重視しています。青年期の特徴である「時間的展望の拡散」がこうしたライフプラン構築の困難さにつながっていると考えます。

しかし、子どもが保育所または幼稚園、小学校、中学校と成長していくにつれ、若年母親は子ども達の成長の時間軸に合わせた生活設計をしていくことが必要となるでしょう。そうした際に、今後の見通しを立てることができるようなアプローチが必要です。

2) 若年母親に対するエコロジカルアプローチ

若年母親の支援は、若年母親を予防する取り組みの下に不可視化され、これまで家族に回収されてきたために、支援を受けられる母親と受けられない母親の間での育児の困難感は大きく異なっていました。若年母親が離婚し母子家庭となった場合は、母子家庭に対する支援が行われます。母子家庭に提供されている支援は子育てと生活支援、就業支援、養育費の確保、経済的支援の 4 本柱です。若年母親も教育・就労や育児支援など複合した問題を抱えており、生活支援・就業支援・経済的支援を必要とする存在です。

広井(2006)は、人生前半の社会保障として「若者基礎年金構想」を挙げています。また阿部(2008)は、貧困率を下回る生活をしている世帯に対しては、児童手当等の金額の見直しが必要であるとしています。しかし、若年母親にこうした現金支給を行ったとしても、⑦の G さんの「貯金なんて考えていなかった」といった語りもあったように、その場の遊興費に使ってしまうことも考えられますし、家族に支給したとしても、子どもの教育や就労に関心を持っていない親もおり、出産後の社会的に不利な状況を緩和する使われ方をされるとは限りません。経済的支援だけでなく、包括的に教育、就労、育児、そして地域社会の理解を促すための実態に即した社会資源を整備していくことこそ必要だと考えます。宮本(2011)は「人生前半期を支える支援コミュニティ」として、0～40 歳を対象に①コミュニテ

ィにおけるセーフティネット、②中間的労働市場・地域活動への参加、③キャリア教育・職業支援、進路選択支援、④病気や障害などにより市場経済に入れない若者への生活支援、⑤就業経験のない若者が「市場経済」へ入るための就労支援、⑥「市場経済」における雇用を通じたセーフティネット及び経済的セーフティネットを挙げています。さらに、すべての世代において、「ケア、教育、就労支援による社会へのつなぎ」が必要であると明示しています。家族・親族によるセーフティネットが乏しい若年母親にこそ、「ケア、教育、就労支援による社会へのつなぎ」が必要であり、一般的な若者に対する雇用対策や、離脱してきた学校に戻すための支援ではなく、より教育や雇用が困難な人々に対するオルタナティブなセーフティネットを構築し、個人の機会の平等を保障する必要があるでしょう。若者支援の取り組みとしては 2010 年に「子ども・若者育成支援推進法」が施行され、その基本理念の一つに、子ども・若者の発達段階、生活環境、特性その他の状況に応じてその健やかな成長が図られるよう、良好な社会環境(教育、医療及び雇用に関わる環境を含む)の整備その他必要な配慮を行うことが挙げられています。若年母親はライフサイクルが交錯する存在であり、若者であり子育てをする母親であるという大きな特徴を持っています。次項では若年母親の機会の平等を保障するために、エコロジカルアプローチを参考に検討します。エコロジカルアプローチ実践のための「生活モデル」として、人間の成長力と適応への潜在的可能性に関わり、援助媒体としての環境を動かし、環境の要素を変えていくといった 3 つの行動が不可欠であるとされています(Germain, 1980)。若年母親についても「個人」としてとらえるのではなく、その成長力や可能性を重視し、機会の平等を支えるための「環境」をどのように整えることができるでしょうか。教育、就労、育児、地域におけるアプローチの 4 つに分けて検討したいと思います。

(1) 職業教育の推進

若年母親は学校からの離脱により修学年数が短く、また横のつながりと言った同質性を持つ人との対人関係を築くことを求めるために、様々な文化を持つ学校文化 1)への親和性は低い状況にあります。基礎学力が未定着であり親しい友人もいなければ、学校に通い続けることは困難でしょう。また若年母親の親達も学業継続にそれほど重きを置いていないことも、意欲の低下に影響を及ぼしています。一方で、校則違反のため本人は在学を希望していても退学を余儀なくされる母親もいました。妊娠後に出産を決意した際も、育児と学業継続との間で葛藤することもなく、自分のお腹に子どもがいるという身体感覚を重視し、出産後のライフプランはなくとも、若年で出産するということを主体的に「選択」します。こうした教育上の「失敗」が、不利益とリスクを産む大きな原因(Jones et al,1992) となり、就業の困難さや貧困に直結していきます。若年母親は出産後の生活で初めて、中卒者(高校中退者を含む)の就労の困難さに直面します。教育の未達成による社会的不利を若年母親に帰する見方もありますが、義務教育でない高校に、高校生年齢にある生徒達の 98%が進学するという現状が特殊な状況であるとも言えるでしょう。若年母親には高校を中退してい

る人が多かったのですが、内閣府が実施した若者の意識に関する調査(2011)によれば、高等学校中退者のうち、妊娠・育児を行っている者は 18 歳、19 歳で 10%を超えています。この数値は性別に分類していないため、単純に計算しても、高校を中退した 18,19 歳の女子の 20%が妊娠中もしくは育児中であることが分かります。若年母親は高校中退者の支援を行っていく上でも看過できない数存在すると考えられます。こうした、若年母親の就労を保障していくためには、どのような方法があるでしょうか。

本田(2009)は、戦前からの普通教育重視傾向に伴い、職業教育が後退していること、さらに、学歴分布が現状で固定されると想定すれば、高卒者や高卒未満の者が、労働市場の中で酷い扱われ方をすることを防ぐために、教育において職業的な準備・装備を与えた上で社会に送り出し、その後も継続的に職業能力や教育暦を向上させる機会を拡充する必要性を述べています。現在の高等学校の入学者の多くは普通科が 72.3%(2010 年)を占め、高等学校で専門的教育を受ける人は少数となっています。一方で、2009 年度において社会人が最も多く入学した学校は、専修学校が 67,567 人であり、大学院 18,432 人、大学 12,399 人、短期大学 2,990 人と比較してもはるかに多く、職業訓練等の事業を含めると 10 万人を超えています(文部科学省, 2011)。これほど多くの人々が専門教育を受けることを望んでいるのは、雇用情勢の悪化のため学びを職業に直結し、確実に就労できるための技能や知識を身につけたいという思いがあるからでしょう。

若年母親も専門職であり、求人数も多い対人援助職であるホームヘルパー、看護師、保育士、養護教諭、カウンセラー等への関心を持っています。しかしこれまでの学校生活において、こうした専門教育を受ける選択肢がなく、教育到達度が低く、就労経験が乏しく、さらに子どもを抱える母親といった社会的に不利な条件を複数抱える若年母親達にとって、職業的社会化は非常に困難です。さらに、若年母親が教育から離脱するのは、彼女達が今ーここの思いを最優先する行動特性を持っていることから、教育を受けることで将来に展望を見出そうとする、未来志向の学校や学校生活にそぐわないからです。こうした、若年母親の「文化なるものに固有の集団的な論理」(Willis, 1985)に基づくライフスタイルを尊重し、以下の 3 点が若年母親の教育環境整備に必要であると考えます。1 つは、出産後の職業的社会化を進めるための専門的教育を身につける環境です。資格取得といった分かりやすい短期目標を提示することで、長期のライフプランを構築しにくい若年母親が教育を継続する動機付けとなると考えます。2 つ目に、高等学校において職業教育を推進し、高等学校在学中にホームヘルパーなど職業に直結した資格を取得し、出産後の職業的社会化を推進することです。3 つ目に通信制高校の活用です。高校中退あるいは中卒者のための定時制高校や単位制高校を活用し、仲間作りの場を提供し、希望があれば高校を卒業することができるような体制を整えることも必要です。

若年母親にとって、職業に直結した教育を受けることは貧困の轍から脱却する重要な手段です。困難な状況にあっても教育を受けることができるといった、生徒の多様な背景を認める環境、そしてそれを身近で継続的に見守る人が必要だと考えます。

(2) 就労環境の整備

若年母親は、出産後就労希望があっても学歴が低く、職歴が乏しく、さらに乳幼児がいることからアルバイトさえも採用されない現状にありました。夫である父親も収入が高いとは言えず、若年母親の家族は金銭的には逼迫している状況にあります。その背景に若年層の高い失業率があります。貧困の再生産を絶ち切り子どもの可能性を広げるためには、就労を規模する若年母親及び父親に対して、就労に至るまでの道筋を広げることが必要です。

若年母親の就労につながる取り組みとして、宮本(2011)は就業経験がない若者が「市場経済」へ入るための支援が必要であると述べています。この一例として、筆者が聞き取り調査を行った、アメリカミネソタ州ミネアポリスの若年母親のためのオルタナティブスクールでは勉強だけではなく、母親に子どもの保育を 1 日 1 時間担当してもらい、それに対する賃金を支払っています。子どもの保育を行うことで、子育て経験を積む機会にもなり、教員は母親を知る機会にもなります。そして、母親には収入が得られるというメリットもあります。このように、子どもを預けて働くことが困難な状況にある若年母親に対して、子どもと共に 1 日数時間でも働くことができ、仕事をすることで知識や対価を得ることができる中間的な就労環境を整備していくことが必要でしょう。そのことにより「市場経済」に入る準備体制ができ、本格的な就労につながりやすいと考えます。

若年母親の就労支援では NPO 法人青少年就労支援ネットワーク静岡が実施している、「地域のおせっかいおじさん・おばさん」が行う、若者が就労できるための伴走型支援も参考になるでしょう。この取り組みでは、地域で様々な職業を持つサポーターが自分のネットワークから就労体験先を探して、できるだけ早くその現場に若者を入れるようにしています。サポーターは、コンビニエンスストア店長やケアマネジャーなど様々な職歴を持っており、自らの職場に就業が困難な若者達を受け入れ、働くことを通した成長を見守っています。理事長である津富(2011)は、「こうした職歴とサポーターとの二枚看板を持つことで「縦割り」の壁を崩して相互に浸透しあって、重層的な支援を提供することができている」と述べています。就労支援は固定された機関及び期間だけの取り組みに終わるのではなく、継続して母親が生活する地域で支えていくことが必要です。現状では、生活保護を受けている母子家庭の母親には、母子自立支援員が就労や生活に関する相談を受けていますが、生活保護を受けていない若年母親に対しても、継続して関わり見守る地域の人々の存在は重要です。こうした取り組みを通して、若年母親に対する地域住民の認識が変化し、若年母親と関わることの難しさを感じている地域住民に対しても、関わり方の方向性を伝えることができると考えます。

さらに、母親が就労するための保育環境を整備していくことも重要です。そのことにより、子ども達だけでなく若年母親の地域参画にもつなげることができます。保育所入所には選考基準があり、母子家庭や母親の就労時間の長い家庭、母親が疾患を持っている家庭

が優先されるため、母子家庭でなく就労をしていない若年母親は、待機児童の多い地域では申請をしても入所が困難です。このため、待機児童の多い 0～1 歳は自宅保育をし、比較的待機児童の少ない 2～3 歳で保育所入所もしくは幼稚園に入園し､就労を検討する母親や、認可保育所と比較して高額な無認可保育所を利用する母親もいます。一方イギリスの就学前児童の子育て環境整備(Sure Start)では、条件不利地域での保育環境整備を推進しています。待機児童の緩和はもちろんのこと、若年母親のように社会的不利な要因を持つ母親や、そうした母親が多く存在する地域には、保育所入所が優先的にできるような政策的配慮が必要であると考えます。

(3) 相談できる身近な専門職

若年母親は、乳幼児健診などの母子保健事業や保育所入所など母子福祉事業により、公的機関とつながり社会資源の情報を知ることができています。高校を中退した若者のうち、社会サービスの認知度が高いのは「妊娠・育児中」の者です。その理由について宮崎(2011)は、母子保健等を利用した公的機関との接触あるいは既に生活保護を受けていれば、それを起点として社会的な支援の集中的な投下が行われ、一定の情報量が確保されているといいます。乳幼児健診の受診率は、子どもの月齢が 3～5 ヵ月において 95.3%(2013 年)と高くこの期間に多くの人が地域の母子保健専門職と関わり、地域資源の情報を得ることができていると考えられます。

家族とのつながりが希薄な若年母親にとって、乳幼児健診や地域における母子保健や子育て支援事業を通して身近な専門職に育児を相談できることは貴重な機会です。現在では保健師や助産師、保育士が若年母親に関わり育児相談を行うことが多いです。対人関係に葛藤を経験している若年母親に対しては、できるだけ同じ支援者が継続して関わっていくことが必要です。また個人対個人では関係が構築しにくいといった特徴を持つ若年母親に対しては、母親が心を開いた支援者とともに訪問したり、夫や祖父母が同席できる時間に訪問したり、個別だけでなく集団での支援を取り入れ、友人を通じて支援者との関係構築を図るなど、若年母親が心を開く人と関係を構築し、母親個人の支援につなげていくことも有益であると考えます。さらに、このような場に自ら来所できる母子ばかりではないために、潜在的ニーズを掘り起こすことや、地域の病院や保育所などの情報を把握し、いざという時に連携できる関係を構築していくことも必要です。

若年母親のニーズである教育、就労、育児及び生活支援、そして地域社会に受け入れられることは、単独の機関の支援だけで達成できるものではなく、互いに関連し合う問題です。このため地域で若者に関わる機関－教育、医療・保健、雇用などの機関が連携して、包括的に社会資源を整備していくことが重要でしょう。

(4) 地域社会における「場」づくり

若年母親は母親として承認され、自己肯定感を向上させることができるような「場」を

求めています。⑦～⑩で述べたように若年母親達は、ピアグループに自主的に参加し友人の輪を広げたり、母親としてどうあるべきかを学んだり、母親としての自己認識を深めるなど、多くのものを得ていました。若年母親達は、学業を中断したことにより同世代の若者達が共同生活を営む場から離脱しており、集団生活で得られる友人関係や連帯感、何か一つのものを行った時の達成感などを得られる機会に乏しい状況にあります。若年母親の孤立化を避けるためにも、地域において若年母親同士が集まることのできる場の構築が必要です。

若年で子どもを持つことに関しては、他者に母親として認められることの困難さが明らかになりました。若年母親に対する周囲の人々の評価は、若年母親の努力の下に「若いからできひんやろ」から「若いのに頑張ってんねんな」もしくは、《“子ども”なのに子育てをしているのは偉い》という評価に変わっていきます。育児を「若いからできひん」とする見方は、一見若年母親の能力を過小評価しているようにもとらえられますが、その反面「若いのだから、(育児が)できなくても当然だ」として、若年であることの「伸びしろ」を認め、明らかな差別に結び付けるのではなく、母親の育児を寛容的にとらえ、若年母親を力づけている言葉ともとらえられます。日本における若年母親は、スティグマを付与されるのではなく、地域住民ボランティアが述べているように〈ほっとできる場づくりに徹する〉といった、曖昧な形で関わる周囲の人々によって、地域社会に受け入れられています。そして、若年母親に身近に接する人々は子育てに励む母親を「頑張っている」として認めるといったように、若年母親と接することで周囲の人々の評価も変わっていきます。

このように、地域社会において若年母親の伸びしろを認めることが重要であり、地域住民が若年母親を理解することができるような場を提供することも必要でしょう。今回の連載では若年母親グループの事例や、若年母親の育児方法を尊重し、パターナリズムに陥らず母親を見守る場を構築する地域住民ボランティアの例を提示しました。若年母親達は、年齢の違う母親や近隣住民からの認識を敏感に感じ取ります。ボランティアはこれまでの支援の積み重ねから、自分自身の「母親」という枠にとらわれず、少し想像力を広げ、自分達の思う「親切」が彼女達にとって「苦い言葉」ととらえられるのを恐れ、「小言」は言わずに場づくりに徹していました。このように住民一人ひとりが、社会的に不利な立場にある人々に対し少し想像力を広げ、そうした人々を受け入れるような声かけ、態度を示し、地域社会に受け入れていくことが必要であり、そのことの積み重ねが母親の自信につながっていくでしょう。

また、今回対象となった若年母親は、仲間とつながることで自身の世界を広げることができていました。このことから、若年母親同士が集まり、友人との関係性を育てる場を設け、その場に地域の人々の参加を促し、若年母親と地域住民が関係構築を促す機会を作ることが必要であると考えます。

若年母親自身も、周囲から認められることの困難に対する対処方法として、〈保育所の役員を買って出る〉と言う意見も挙げられていました。⑬で挙げたイギリスの事例のように、

若年母親自身が母親として何らかの役割を持ち、地域住民と接する機会を作ることも、地域住民が若年母親への理解を深めることにつながると考えます。

まとめ

これまで若年母親「個人」だけでなく「環境」を重視したエコロジカルアプローチについて述べました。若年母親は主体的に出産を選び、出産することでこれまでの家庭生活や学校生活で培えなかった「自己肯定感」を母親となることで持つことができており、母親になるという経験は、彼女たちが社会化していくきっかけとなっていました。

10 代の妊娠が「望まない妊娠」とみなされ、妊娠を予防する取り組みのみが進められているのは、若年母親が青年期に子どもを持つという、ライフサイクルが交錯し地位違反を犯す存在だからです。現在の日本では単線的なライフサイクルが主流であり、学業の中断や若年での妊娠など、一旦そのライフサイクルから外れた場合、復帰するのは困難を伴います。単線的なライフサイクルを尊重し、貧弱な社会資源を個人の行動の結果として家族に回収することは、個人のライフスタイル選択を制限し、教育ならびに雇用の機会の平等を奪うこととなるでしょう。複線径路・等至性モデルにおいて提示したように「望まない妊娠」であったとしても、出産を主体的に「選択」し、家族や夫と調整し自らの思いを貫いた若年母親に対しては、10 代で子どもを持つと決めた自らの選択が意味のあるものだったと思えるように、子どもと共に成長していく母親の時間軸に合わせたセーフティネットを構築していくことが必要です。若年母親というライフスタイルを尊重し、必要な社会資源を整備していくことは、学業を受けたいという人がどの世代においても学業を受けることができ、新卒でなくとも就労しやすい雇用環境を整えるといったような、一旦単線的なライフサイクルから外れた人々が、社会的に不利な立場から脱却する機会となると考えられます。若年母親は、こうした多様なライフスタイルのあり方を先駆的に提示する存在でもありました。

母親が若年出産を意義のあるものととらえることができるか、それは多様なライフスタイルを許容し承認することのできる、成熟した社会への道標となるでしょう。

（完）

★引用文献

阿部彩, 2008, 子どもの貧困－日本の不公平を考える, 岩波新書.

Germain, C.B., 1980, Ecologycal Social Work-Anthology of Carel B.Germain,(=小島蓉子訳, 1992, エコロジカルソーシャルワーク, カレル・ジャーメイン名論文集, 学苑社)

Jones, G and Wallace, C., 1992, Youth, Family and Citizenship (＝2002 宮本みち子, 鈴木宏訳, 若者はなぜ大人になれないのか, 第 2 版, 新評論)

広井良典, 2006, 持続可能な福祉社会 もう一つの日本の構想, ちくま新書.

本田由紀, 2009, 教育の職業的意義－若者、学校、社会をつなぐ, ちくま新書.

宮本みち子, 2004, 社会的排除と若年無業－イギリス・スウェーデンの対応, 日本労働研究雑誌, pp17-26.

宮本みち子, 2011, 若者の自立保障と包括的支援, 宮本みち子, 小杉礼子編, 二極化する若者と自立支援, 明石書店.

文部科学省, 2011, 生涯学習社会の実現に向けて高等教育機関に期待される役割について(データ編), http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/__icsFiles/afieldfile/2011/10/17/1311624_8.pdf. (最終閲覧日 2016/05/25)

内閣府, 2011, 若者の意識に関する調査(高等学校中途退学者の意識に関する調査)報告書(資料版)http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/school/shiryo.html, (最終閲覧日 2016/05/25)

津富宏＋NPO 法人青少年就労支援ネットワーク静岡, 2011, 若者就労支援「静岡方式」で行こう!!, 地域で支える就労支援ハンドブック, クリエイツかもがわ.

Willis, P. E., 1985, Learning to Labor －How working class kids get working class jobs (＝熊沢誠, 山田潤訳, ハマータウンの野郎ども, 筑摩書房, 1985).

電脳援助

浅田 英輔 Ver.15

Googleはスゴイ

　電脳援助でも何度か取り上げている、Googleのサービス。パソコンやスマホを使っている方なら、おそらく全員が恩恵を受けているのではないでしょうか。知らずに使っている場合もあるかもしれません。紹介しきれないほどのサービスを提供しているのですが、今回はそのうちのいくつかを紹介してみます。

1　Gmail

　何回も出てきている、Webメールです。無料で登録でき、ユーザーインターフェイスもとてもよい、使いやすいサービス。

・容量が大きい

　無料で使えるのにメールボックス容量は約15GBもあります。今見てみたら、私が使い始めたのは2009年1月。7年以上メインのアドレスとして使っていて、メールを削除することはほとんどありませんが、使用量は2.8GB、16%しか使っていないようです。この容量がこれからも変更なしとは言い切れませんが、メールボックスの残り容量を気にしなくてよいというのはとて

もよいです。ちなみに、職場のメールアドレスもありますが、その容量は非常に小さくて週に１回は整理しなければ送受信ができなくなってしまいます。急いでいるときに「受信できません」となるのは非常に大きなストレスとなります。しかも「容量がいっぱいです」と出たら、今書いているメールを削除しなければならないのです！おそろしい！

・どこでも使える
　パソコンはもちろん、スマホでも同じアドレスが使えます。また、ユーザーIDとパスワードさえあれば、職場でも友達のうちでも人のパソコンでもみることができます（もちろん、自分で管理していないパソコンにパスワードを入れるということは、セキュリティの問題を気にする必要があります）。ソフトをインストールするわけではなくブラウザ上で使えるので、人のパソコンの中身をいじらなくてもよいのも大きいです。職場のパソコンにソフトをインストールするのが制限されていることがありますよね。そういうときにも使えるのです。
　また、私はスマホに入っているデータをパソコンに送りたいときなどに、自分あてに添付ファイルでメールを送ったりします。もっとスマートな方法がありそうですが、とりあえずの対応としては役に立つ方法です。容量を気にしなくていいので、メモ的なものをフォルダに振り分けて自分あてメールしておく、という使い方もいいですね。

・使いやすい
　細かなアップデートを重ねてきており、非常に使いやすいです。もちろん、使い慣れているから使いやすいという部分も大きいのですが。
　まず、下書きがすぐに残るというのは助かります。特別に保存しなくても、書きかけのメールは自動で残っています。たまに下書きがたくさん残っていて困る事はありますが。
　あとは、迷惑メールの振り分けが優秀であるということ。Gmailを使っていて迷惑メールを目にする事はほとんどありません。「迷惑メールフォルダ」をみてみると、1日15通くらい迷惑メールがきていました。iPhoneでもメール通知がきますが、当然、迷惑メールがきても通知はこないし、きていることに気づかないくらいです。迷惑メールフォルダにあるメールは30日で勝手に消してくれます。今見たら583通のメールがありました。30日でこれくらいきているようです。

・アカウントはいくつでも作れる
　GMailに限ったことではないですが、用途ごとにいくつでもアカウント（メールアドレス）が持てるのもよいところです。自分の個人用のアドレスのほか、問い合わせ用だったり、団体用だったり使い分けができます。団体用のアドレスなんかだと、後任に引き継ぐのも楽になります。PTA用に１年間使うアドレスがあってもいいかもしれません。アカウントとパスワードさえ知っていれば、複数人で共有することもできます。
　繰り返しますが、アカウントやパスワードの管理には十分注意が必要です。

2　Google Chrome

　無料のWebブラウザです。

※　Webブラウザとは
　パソコンでもスマホでも、基本機能（OS）の上に、さまざまなソフトがインストールされて初めて使えるようになっています（電脳援助ver.3.0参照）。WindowsというOSにMicrosoft Wordをインストールすると、文章をきれいに作れるようになる、といった具合です。「ソフト」「ソフトウェア」「アプリケーション」「アプリ」「App」などと呼ばれるが、大まかに言えばこれらは同じものを指します。Word、Excelもそうですし、InternetExplorerもそうです。あとは筆ぐるめや、iTunesもですし、ゲームもこれに含まれます。
　また、Wordはワープロソフト、Excelは表計算ソフト、ドラクエVIIはゲームソフトとも言えます。その中のひとつのジャンルとして、Webブラウザがあります。つまり、Webブラウザは「インターネット閲覧ソフト」と同義です。ワープロソフトにWordや一太郎があるように、Webブラウザも種類があります。現在多く使われているのは、InternetExplorer、GoogleChrome、FireFoxなどです。Windows10とともにEdgeというブラウザもきましたね。その中でも、GoogleChomeは起動がはやく、動作が軽いとされています。

　以前はInternetExplorerは重くてダメという話もありましたが、今はそれほど違いが大きくないように思います。Chromeの大きな利点は、ログインして使うことによって、お気に入りなどを保存できることと、拡張機能がたくさ

んあるということです。上に書いた、Gmailのアカウントとパスワードで、自分だけのChromeが使えるのです。

　自分だけのだと何がいいか。まずはお気に入りが使えます。家でも職場でもスマホでも、同じお気に入りが使えるのです。また、拡張機能も同じものが使えます。私はパスワード管理ソフトやEvernote、pocketなどの拡張機能を使っていますが、これもいちいちインストールしなおす必要がないのが助かります。一番役に立つのは、家のパソコンを買い替えた時です。ブラウザを自分好みに設定し直す手間がないのはとても魅力的なのです。

3　Googleカレンダー

　無料のカレンダーです。予定を書き込んだりできます。

　これも同じように、家でも職場でもスマホでも同じものが見られるというのが大きい利点。職場で使っている（使わされている）予定表は、職場でしかみられないかもしれません。これであれば、スマホでも読み書きできるのです。

　そしてスゴイのはここ。私は出張などの交通手段や宿泊先をじゃらんで頼むことが多いのですが、ネットで予約すると確認メールがきたりしますよね。それを読み取って、カレンダーに追加してくれるのです！すごい！確認できたのは、予約した電車、飛行機、ホテルです。飛行機なんかは「何時発だっけ」と何回もメールを見直していたので、これが勝手に入ってくれるのはとても便利です。

　ホテルの予約とフライトが自動で登録されています。

　あとは、カレンダーというものは使い勝手はもちろん大事なのですが、いつも見るものですから見た目も結構大事です。Googleカレンダーのよいところは、これに連動するアプリがたくさん出ているところです。スマホアプリなどで「Googleカレンダー対応」などとなっている場合、見た目は別でもGoogleカレンダーにつながっているので、スマホでは別アプリ、パソコンで

はGoogleカレンダーで見ても同じ予定表になります。私はスマホではAwesomeNoteというアプリを気に入って使っています。

4　Googleフォト

写真管理サービスです。これまたいろんなものがありますが、スゴイのは容量無制限なところ。写真をいくら入れても無料です（2016年5月現在）。一枚の写真の大きさ制限はありますが、本当に高解像度が必要な写真はそれほど多くないはず。家族の写真などは、高解像度よりも「いつでもみれること」が大事だったりしますよね。

また、最近はスマホで写真をとる人も多いと思います。設定をすれば、このアプリを立ち上げるとすぐに写真を保存してくれます。保存さえされていればいい（高解像度のものがいらない）のであれば、スマホ本体の写真も簡単に消してくれます。スマホの容量が写真で圧迫されている人にはなおさらおすすめです。

これもこれまでと同じように、スマホ、パソコンで同じ写真をみることができます。

意外に楽しいのが「アシスタント」の機能。同じ日の写真を集めてアルバムを作ってくれたり、「同じ日の思い出」（例えば、4年前の今日）を表示してくれるのは楽しいです。集まった時の写真などを、リンクを教えることで共有することもできます。写真がたくさん添付されたメールって容量が大きいし、どの写真を送るか迷ったりもします。でもこの共有機能を使えば、全部送っちゃってもいいのです（正確には、送るというよりもアルバムの入り口を教える）。

5　Googleドライブ

Googleフォトと似ていますが、こちらは何のファイルでも保存可能で、容量には上限があります。そうは言っても、無料の容量は15GBもあります。写真はGoogleフォトで保存するので、それ以外のものであれば、15GBもあれ

ば結構な容量かと思います。大容量が必要な場合は有料プランも用意されています。写真はフォト、その他のドキュメントなどはドライブ、といった使い分けをすると便利です。

6　連絡先、ハングアウト

この２つは、Gmail付属的な感じではあります。Gmailの画面に表示されていますが、メールアドレスをまとめる連絡先と、登録されている人にインスタントメッセージを送ることができるハングアウトはとても便利です。

携帯電話の機種変更をして、連絡先が消えてしまって困ったことはあると思います。結構あるはずです。でもGmailをメインに使っている場合は、何の問題もありません。連絡先をバックアップしたり、移行したりする手間もなく、新しいスマホでアカウントとパスワードの設定さえすれば、すぐに前のまま使える様になるのです。

また、昨今はEメールでさえ煩わしさを感じ、LINEでのやりとりが楽になってきていますよね。でもスマホは持っているけどLINEはなんとなくやだ、という人もいるかもしれません。また、パソコンでChromeを入れてログインしている場合は、どのパソコンでもすぐにインスタントメッセージのやりとりができるようになるという点でハングアウトは優れています。

7　Googleマップ

地図はいろいろな場面で使っていると思います。普通に地図として使えるほか、ナビとしても優秀ですし、場所を示すのにリンクを貼ることもできます。

青森県庁

ここにいるよ、と教えるときにも使えます。

出発地と到着地の距離も調べることもできます。

さらに。

エクセルで住所と名称のデータファイルがあると、自分だけのマップを作ることができます。これは、青森県のオストメイトマップです。この機能、意外に便利なのです！これを、自分の

iPhoneのホーム画面に置くこともできるので、ワンタッチでアクセスすることができるのです。

　おいしいレストランリストを作ってもいいかもしれません。

8　その他様々なWebサービスの登録

　世の中にはいろいろなWebサービスがあり、そこではいつも「登録」が求められます。何をするにも「IDとパスワードを設定せよ」と言われますよね。また、メールアドレスの登録を求められることも多いですが、そういうときに「FacebookのIDでログイン」とか「Googleアカウントでログイン」というのが表示されるのをみたことはないでしょうか。いちいちメールアドレスを入れなくとも、Googleアカウントをそのかわりにできるのです。例えば、YouTube(これもGoogleのサービスのひとつだが）はGoogleアカウントでログインすることで、お気に入りや履歴を一元管理でき、便利に使えるようになっている。Googleアカウントでログインする機能がなくとも、Gmailで登録すると管理が楽になる。また、新規サービスなど、いわゆる「怪しい」ものについては、いつも使っているアカウントではなく「テスト用アカウント」を使うということもできる。

◯なぜ無料なのか

　これだけ広く使われているということは、Googleは非常に大量のデータを持っているということになります。データというのは、メールアドレスだけでなく、年齢、性別、住んでいるところ、趣味嗜好、どこに行く人なのか、どういう予定を入れる人なのかといったもろもろのデータです。その分量は想像もつきません。今の世の中では、大量のデータはそれだけで価値があります。それに加えて、Googleはそのデータの解析に非常に力を入れています。つまり、大量のデータがあり、それを活かした広告が打てるということなのです。効果的な広告は、企業にとって大変に魅力的な媒体です。その上、webページ、動画などいろいろな方法が使えるのです。

◯危険性はないのか

・クラウドの危険

ほとんどのものが「クラウドストレージ」を使用しています。大雑把にいうと、様々な情報がインターネット上に保存されるということです。詳しい技術はわかりませんが、「世界のどこかにあるGoogleの巨大HDDセンターに、あなたの情報が大量に保存されている」ということです。もちろん、セキュリティには万全が期されていますし、誰でもアクセスできるわけではありません。上記のように、Googleは広告収入で成り立っていますので、セキュリティにはかなり気を使っていると思います。凄腕のハッカーに「あなた」がピンポイントで狙われたらダメでしょうが、簡単に流出することは考えにくいです。もし情報流出が起きるとしたら、担当者のパソコンが盗まれるとかそういった物理的な形かと思います。とは言っても、様々なデータが自分の手元ではないところで管理されるということですし、絶対はありません。

・一元化している危険

また、機能的にセキュリティの問題がなくとも、これだけ一元化したサービスを使うということは、一つのIDとパスワードを盗られると、全ての情報をみることができるということでもあります。クレジットカード情報なども入っていたりすると、さらに危険は高まります。

そう考えると、危険がないとは言えません。「管理するのが誰なのか」といった違いはあるでしょうけど、むしろマイナンバーなんかよりもよっぽど危ない気もします。ただ、本当にただの感覚的なものですが、セキュリティ面としては、Googleのほうが信用できる気さえします。

◯Goolgeロゴについて

余談ですが、今回の記事を作るにあたり、紹介したサービスのアイコンを入れたいと思いまして、例によって規約を調べてみました。「Google Documentation & Suppot」に書いてあります。「Google のアイコンやロゴは、導入にあたって組織内向けに作成した資料で使用してください。」だそうです。つまり、一般向けに使ってはいけない。ただし、トップページと検索結果ページは、いくつかの注意事項はありますが、使っても良いようです。（よく調べずに画像検索画面を使っていました。あぶない）

◯統合的Webアプリケーション

WebメールもWebストレージも、地図にしても画像アプリにしても、他にも便利なサービスはたくさんあります。別のサービスのほうがよい点もいくつもあります。ただ、全てが連動しているものはほかにありません。全てをメールに送ることができ、共有でき、保存できるという点がすぐれているといえます。さらに、使っている人が多いということは、同じツールで共有しやすいということです。また、パソコンでもスマホでも、他の人のパソコンでも同じものが使えるというのはとても大きい利点です。

また、これらがWeb上にあるので、自分のパソコンにはほとんどデータがありません。私の家のパソコンには「外付けハードディスク」をつないでいて、そこにデータのほとんどを入れているので、パソコンの再インストールをするときも、データの退避はほとんど必要ありません。MicrosoftOfficeなどのインストールしているソフトを入れ直す手間はかかりますが、大事なデータも、Webブラウザの設定も、いじる必要はなくもとの環境にすることができます。

インストール作業をせずにWeb上で使えるものを「Webサービス」「Webアプリケーション」と呼んだりしますが、Googleのサービスは最強の統合Webアプリケーションといえるでしょう。今回紹介したサービスはほんの一部で、きちんと使えばさらに楽しい世界が開けることでしょう。

どう使うにしろ、自分がラクできるように、自分が使ってて楽しめるように使いたいですね。

LET'S　Google！

疑問・感想は dennouenzyo@gmail.com まで!

講演会＆ライブな日々⑥

古川　秀明

日本には「保護司制度」というものがある。

保護観察という刑事政策の一翼を民間の篤志家である保護司が無給で担うという制度だ。

保護司法の第１条には、「保護司は、社会奉仕の精神をもつて、犯罪をした者の改善及び更生を助けるとともに、犯罪の予防のため世論の啓発に努め、もつて地域社会の浄化をはかり、個人及び公共の福祉に寄与することを、その使命とする」。とある。

この使命を果たすため、保護司は、具体的には次のような諸活動に従事している。

１　保護観察

犯罪や非行を犯した人に定期的に会って、守るべき事柄の指導を行い、生活する上での助言、就労支援などを行う。

２　生活環境の調整

少年院や刑務所から出た人が社会復帰する援助を行う。

釈放後の帰住予定地の調査、引受人との話合い等を行い、必要な受け入れ態勢を整える。

３　犯罪予防活動

犯罪や非行を未然に防ぐとともに、罪を犯した人の更生について理解を深めるために、世論の啓発や地域社会の浄化に努めるもの。講演会、シンポジウム、ワークショップ、スポーツ大会等様々な活動が展開されている。

さて、このように社会貢献に寄与する保護司だが、誰でもなれるわけではない。

保護司になるためには、保護司法に基づき、次の条件を備えていることが必要となる

1　人格及び行動について、社会的信望を有すること
2　職務の遂行に必要な熱意及び時間的余裕を有すること
3　生活が安定していること
4　健康で活動力を有していること

保護司の委嘱手続は、各都道府県にある保護観察所の長が、候補者を保護司選考会に諮問して、その意見を聴いた後、法務大臣に推薦し、その者のうちから法務大臣が委嘱するという手続によって行われる。

保護司の任期は 2 年だが、再任は妨げられない。

このように、保護司になるには、なかなか高いハードルがある。

しかも、保護司の収入はゼロ。あくまでもボランティア活動なのだ。

今、日本で約五万人の保護司が活躍している。

日夜活躍している保護司の人達にスポットライトが当たることはあまりない。

芸能人や政治家のようにマスコミやメディアを賑わすこともない。

だいたい、保護司の存在すら知らない人だって少なからず存在するだろう。

誰にほめられることもなく、ちやほやされるでもなく、お金をもらうでもなく、ただ黙々と社会貢献に励む。

私のような底の浅い人間にはとても真似ができない。

真似はできないが、保護司の人と関わることは結構ある。

スクールカウンセラーをしていると、保護観察の付いた少年達と出会う機会が多いからだ。

「保護司のおっちゃん」

中学３年生の男子生徒がいた。

両親は幼い時に離婚して、妹と二人、母の下で育てられた。

小学校５年の時に母親が再婚し、新しい父親と同居し始めた。

ところが、この父親とそりがあわず、グレ出した。

窃盗や暴力事件を繰り返し、１号観察を付けられた。

中学三年の時に私と相談室で話すようになった。

初めての面接の時に、彼が最初に私に言った言葉は「俺、保護観付いてんねん。そやし、今日保護司のおっさんに会いにいかなあかんにゃ。ダルイわ」だった。

彼との面接は月に二度。

面接の度に、彼は保護司のおっさんの悪口を言い続けた。

「わけわからん」「うっとおしい」「鼻毛伸びとる」「役に立たん」「バカボンのパパみたいなやっちゃ」

そんな彼だったが、だんだんと保護司のおっさんに対する語り口が変わってきた。

「けっこうおもろいで」「なかなかええとこもあるで」「ネクタイ嫌いなんやて」

そのうちに、「保護司のおっさん」という呼び方が、「保護司のおっちゃん」に変わって行った。

その辺りから、授業に出席するようになり、非行事件はすっかり無くなった。
彼曰く「悪いことしそうになったら、保護司のおっちゃんの顔が浮かぶようになったんや。なんでやろうなぁ・・・」

彼と保護司の間で、いつもどんな話し合いがなされていたのかは知らない。

ただ、一度だけその保護司の方とお会いして話をすることがあった。

ひと目見て、失礼ながら笑いそうになった。

確かに鼻毛が伸びていて、バカボンのパパにそっくりだった。

私は心のなかで、お願いだから「これでいいのだ」と言わないでくれと祈った。

もしそれを言われると、笑いが止まらなくなりそうだから・・・。

彼も同席していたのだが、父親でもなく、教師でもなく、警察官でもなく、カウンセラーでもないおじさんと彼は、なんとも言えない、いい雰囲気だった。

彼を更生に導いた大きな要因に、この保護司のおっちゃんの存在があったのは間違いないと思った。

別れ際に私は「どうして保護司になろうと思われたのですか？」と聞いてみた。

「いやぁ、知り合いに頼まれましてね。いやいや引き受けたのですよ」

謙遜でも嘘でもなさそうだった。

すかさず彼が「なんや、ええかげんやなぁおっちゃん。ワハハハ〜」と突っ込みを入れて笑った。

「ほんまやなぁ、ワハハハハ〜」と保護司のおっちゃんも笑った。

こんな素敵な援助者に誰もスポットライトを当てない。

いや、当てないままの方がいいのかも知れない。

本当に力のある、役に立つ援助者というのは、このようにスポットの当たらない、目立たない人なのだろう。

心の底からかっこいいと思った私は、「保護司のおっちゃん」という歌を作った。

目立たない保護司の仕事を目立たせる歌が、一曲くらいあってもいいじゃないか。

あちこちの保護司会で歌わせてもらっているが、自分で作って自分で気に入っている。

養育里親

～もうひとつの家族～

13

坂口　伊都

節目、節目

新しい家族を迎えて暮らしていく意味を少しずつ感じ始めているような気がしています。期待、戸惑い、不安、イライラ、そしてつながっていく瞬間を感じる時。一言では言い表せない日常を送っているのでしょう。

新年度を迎え、学校のクラスも変わり、担任の先生も校長先生も変わり、児童相談所の担当ワーカーも変わりました。仕方がないことですが、この子が我が家に暮らしの場を変える際、いろいろな方が関り、心配し、尽力していただいたので、そのメンバーでなくなることに不安を覚えます。まだ委託になって、1年経過していないのだから、この子のことを理解している支援者達と、もう暫く一緒に支えていきたかったです。新しい担当者と信頼関係を作っていくには時間がかかりますが、養育里親ケースの我が家が児童相談所内でどのように引き継ぎをされ、担当ワーカーとこれからどれぐらいの頻度で顔を合わせていけるかわかりません。また、新たな関係が築ければと思います。

昨年の夏、里親委託のための準備がいろいろ行われました。この子は、療育手帳を所持しているので委託後、特別支援学級か特別支援学校へ通うか悩みました。地域によってそれぞれ特色が違うので、前に通っていたからという理由で選ばない方がいいと児童養護施設から通っていた担当教員の方が助言を下さり、児童相談所のワーカー、児童養護施設の担当職員、養育里親の三者で支援学級と支援学校を見学させていただきました。その場に教育委員会の先生も同行して下さり、特別支援学級に体験入学をする

ことになりました。

この子は、何か自分の周りで変化が起きているのを感じながら、担当職員に連れられて来て、体験入学に参加しました。体験入学の内容は、給食と昼休み､そして1時間授業の参加でした。自己紹介の時、坂口が出てこなかったりしましたが、先生が間に入り、辻褄を合わせてくれました。

支援学級の2年上の子が､うちの子に興味津々で声をかけてくれ､「○○くん、こっちだよ、一緒に行こう」と手を引いて、グランドに走っていきました。その姿を見ながら、大人達は「大丈夫そうだね」と胸をなでおろしました。体験入学の最後に校長室に招かれ、校長先生と懇談しました。校長先生が､「待っているからね」とこの子に声をかけてくれ、それがとても嬉しかったのを覚えています。里親として、この子をわかろうとしてくれる人がいることは、何よりも心強いことでした。

児童養護施設の担当の先生は、以前に集団で登校した時、他の子と喧嘩になったことがあったそうで、ちゃんと集団登校できるかなと心配だと話されていました。

登校初日､「もう行った方がいいかな」と落ち着きません。見知らぬ子ども達に囲まれ、帽子を深くかぶって神妙な様子でした。学校に着くと体験入学の時に誘ってくれた子が、うちの子の名前を憶えていてくれて、一緒に行こうと声をかけてくれました。私は 1 週間ほど、登校班の後ろに付き添って様子を見ていましたが､「もう大丈夫だよね」と話し、一人で登校班に参加していきました。最初の頃は、ドギマギしながら家を出て、行き渋ることもなく登校してくれました。

新しい家、家族、学校、友達。この子にとっては、戸惑うことばかりだったと思います。ただ、毎日をこなすことで精一杯だったのでしょう。

放課後は、学童保育ではなく、障害児サービスの放課後等デイサービスを週 3 回利用しています。ここの地域の上限が週 3 回と説明を受けました。初年度は、年度途中からの利用だったので、空いている曜日がなく、2か所の事業所を1日ずつ通っていました。どちらの事業所も、心よく受け入れをしてくれていましたが、片方の事業者はお迎えに行かなければならず、お迎えの時間帯に行くことが難しかったため、今年度は送迎がある事業所の方にお願いしました。今は週 3 回通えているのですが、希望曜日とは若干違い、なかなか思うように利用するのは難しいと感じています。

年度末に事業者の方とこの子を中心に向き合って、この子のいい所と苦手な所を話し合いました。私が「家でも、○○しよと言ってすぐに動けないですが、しばらく待っているとごそごそやり始めます」と伝えると､「事業所でも、○○しないと言う時があるので、その時は、いいよ、ずっと何もしないで過ごしてねと言うと、しばらくしてから、やっぱやるわと言って動いていますよ」と教えていただきました。この子が社会に出た時、少しでも周りにいる人とつながる方法を身につけていって欲しいと思っていると話すと、後日、個別支援計画の中に､「今何をする時間なのかを丁寧に言葉や視覚で伝えていく」と記載されていました。家庭でも事業所でもこの子の社会性を伸ばそうと同じ方向を向けるのは、本当にありがたいことです。

新しい春がやってきて、人の別れと出会いを経験しています。この子を中心に支援者達が、また一緒に知っていこうとできればいいですが、それがどのような形になっていくのかはわかりません。里親もどのように関係機関と連携を取っていくと潤滑がよくなるのか方法を見つけていこうと思います。

家族関係

委託から 8 か月が経ち、冷静に子どもとその周辺を見られるようになってきたように思います。この子にとって、私達家族とのそれぞれの関係性を考えています。

前回、里母とこの子が対立をした事柄を書きましたが、喧嘩をしても一緒の家で毎日暮らしていく中で、気まずい時間が続いたり、話し合いをして仲直りをしたり、一緒に出かけたり、冗談を言い合いながら笑いあったり、家族の関係はいろいろな形に変化しながら、続くものだと肌で感じ始めているのかも知れません。この子は、何か気まずいことがあると話題を変えて何事もなかったかのように振る舞おうとするのですが、それが通用しないということは身に染みてきているようです。

この子と家族の現段階での関係ですが、まず高校 2 年生の里兄は、思春期まっしぐらで自分のことで忙しく、この子だけでなく家族と距離を取ろうとしています。この子と出会った最初の頃は、一緒に出かけたりしていましたが、今は友人関係で染まっているようなので、この子を含めて家族との関りが希薄になっています。この子にとって里兄は、家にいたら何となく怖い存在のようです。里兄が、里親会の夏のバーベキューに参加した時、子ども達の面倒を引き受け、虫取りに励んでいたので、里親会の皆さんから絶賛されていました。「何て、いい子なのだ」と言ってもらったことが夢のようです。今年のバーベキューは、一緒に来てくれないと思います。親としての心配が絶えない時期です。

次に中学 3 年の里姉。受験生と思春期で、日によって感情の起伏があります。やさしい時は、宿題を見てもらったり、一緒にバトミントンしたり、鉢植えをしたりしています。ただ、機嫌が悪くなると怒りっぽくなり、この子の返答の仕方にイライラを募らせるようで、行動を正すように言葉で攻撃します。その中に、「何でできないの」「もう、ストレスたまる」という言葉も含まれ、その時期にあたると、この子も「お姉ちゃん嫌い」と口にします。やれやれと思いながら様子を見守っていくと、姉のやさしい時期が戻ってきて、何事もなかったかのように過ごしています。この二人の関係、大丈夫かなぁとヤキモキしていましたが、子どもの強さを見せつけられました。里姉も家族より、友人を優先させながら、絶妙なタイミングでこの子の相手をしてくれています。

里父は、この子には、なくてはならない存在です。家にいる時は、金魚のふん状態。パパと一緒にいたくてたまらないようです。里父がいない時は、一人で入浴していますが、パパとお風呂に入りたい、甘えたい、かまって欲しいという気持ちが伝わってきます。里父からも叱られることが増えてきていますが、この子にとって大事な人なのだと伝わってきます。

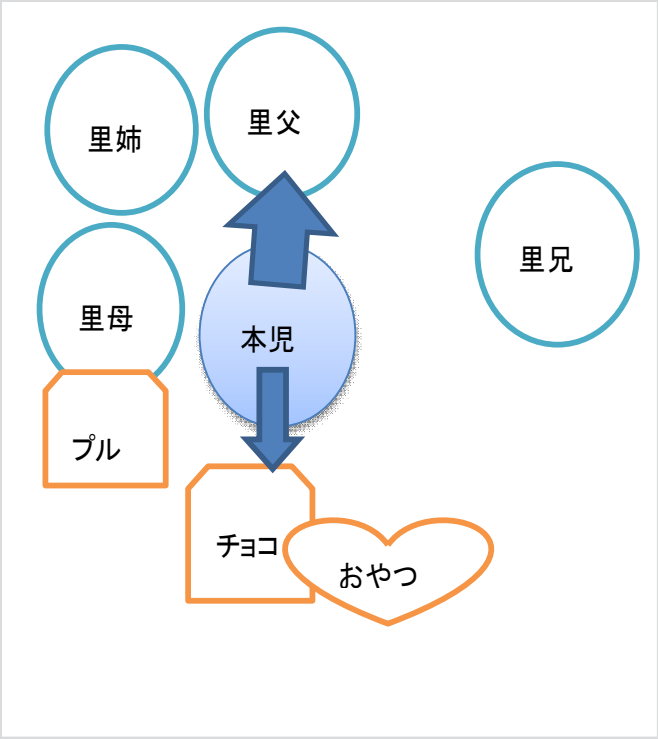
我が家には犬が 2 匹いるのですが、チョコの方はあまり吠えませんし、されるがままのタイプです。この子は犬を抱きたくてたまらないので、捕まえに行って離さないようにつかみます。その様子が乱暴で、犬の方のストレスは大丈夫かなと心配です。チョコは、食いしん坊なのでおやつをくれる人が大好きです。この子は、おやつでチョコの気を引こうとしています。

もう一匹の犬のプル。こちらは、甘えん坊でチョコを誰かが撫でていると、焼きもちをやいて吠えます。散歩の時も他の犬を見つけるとよく吠え、気に入らない時や嫌な時は唸るので、この子の手に負えていません。だからでしょうか、「チョコちゃんはかわいいけど、プルは嫌なやつ」と言ったりして、わざとチョコとプルを差別するような行動を見せます。ストレス度は構われることが少ない分、マシかも知れませんが、この子に対する警戒心はなかなかのもので

す。

最後は、里母の私。里母の存在は、この子には、わかりにくいかも知れません。怒ると怖いけど、一緒にいる時間は一番長い。寝る時、一人にされるのが嫌で、何も言わず同じ部屋に寝るまで付き合っていますが、それにこの子が気がついているかどうかわかりません。自分のことは、正直よくわかりませんね。

この子から見ると、里父とチョコは安定して好きと思える存在。里母、里姉、プルは関係性がコロコロ変わる存在。兄は希薄な存在なのだろうと思います。



家族の関係を図にしてみました。チョコは誰よりも食べ物に反応します。プルは、里母に甘えにきます。里姉は、父母の間に自分の位置を確保しながら、どちらにも甘えたり拗ねたりしています。この子の周りを取り囲むように家族がいますが、この子が構ってもらいに行きやすいのは、里父とチョコです。この一人と一匹の共通点は何だろうと考えると「忍耐強さ」が浮かびます。里母と里姉、プルの共通点は、この子が反抗的な態度を見せると、感情が顔に出やすいところでしょうか。この子にしてみれば、プルが吠えたり、唸ることと、里母や里姉の怒りの顔つきになることは、わかりやすく自分を拒否されていると感じるのでしょう。里母として反省すべき点だと感じますが、頭で理解しているつもりでも身体が反応してしまう私の弱点です。特に犬を乱暴に扱われると、犬を守ってやりたい気持ちがムクムクと沸き上がり、犬も私に助けを求めてくるのがわかるので余計に感情を揺さぶられます。家族からこの子に犬をすぐに抱き上げないと伝えていますが、それでも温もりのある生き物ですから抱き上げたくなるのだと思います。

私は、犬を指さしながら「ほら、怖がっているよ。尻尾見てごらん、丸まっているよ」「見て見て、足が震えているよ」「眠いよって言っているよ」と、できるだけ犬の気持ちを言葉にしています。「抱いてもいいけど、捕まえていたら駄目だねぇ。手を放してもチョコがそこにいるなら、一緒にいたいと思っているよ」「やさしくしたから、嬉しいって言っているよ」「尻尾振って、嬉しいって」「遊ぼうって、言っているよ」と伝え続けていると、「今、何て言っている？」「見て、僕に甘えているよ」「リラックスしている？」と自分から言い出すようになりました。

一緒に暮らし始めてから、無意識にお互いに自分の歯車を合わせる作業をしてきたように思います。何回もお互いにすり合わせをし、失敗を繰り返し、徐々に馴染んでいくのでしょう。

娘がこの子の態度にイライラし、この子も里姉を嫌がっていた時期、里姉の方は、この子だけでなく、他にも上手くいかないと感じることがいろいろあったのだと思います。そのイライラを自分の中に抱えながら、里父の言うことは聞くのに、自分にはふてぶてしい態度を取ることに腹を立て、目の前で自分の父親に甘えて絡

んでいく姿にも刺激を受け、娘が父にくっついていくことが増えました。姉と弟の父親の取り合いです。娘も意識してやっているわけではないでしょうが、面白い現象です。

この子が里父について回っているので、夫にしんどくなっていないか尋ねました。夫も、最初の頃は、全く時も構わずにくっついてくるこの子にうっとおしさを感じることが多かったようですが、最近は甘える時と自分でいられる時のメリハリが出来てきているように感じていて、今はそれほどしんどいと思わないそうです。この子にも夫にも成長を感じました。日常生活は、過ごしていかないとならない現実です。私達家族を周りで見ている方に大変だねと声をかけていただくことがありますが、本人たちは、暮らしていくしか道はないのです。お互いの歯車が噛合わないより、噛合うような努力をする方がいいですよね。

挨拶から

この子と家族とのリズムが作られていく中で、この子のいい所もよくない所もいっぱい出しています。この子は、家にお客さんが来ると落ち着かなくなり、いつもより行動が大袈裟になります。特に初対面の人が来るとどう振る舞ったらいいかわからなくなるようです。この春で児童相談所の担当ワーカーが変わり、挨拶に訪問してくれた時、この子の態度は、ソワソワからどんどん悪態になっていき、全く言うことを聞けなくなりました。

家庭訪問が終わってから、「初めての人が来て、緊張するのはわかるけど、やっていいことと悪いことがあるよね」という話をして、まずは挨拶をしっかりしようとこの子と話し合いました。

この子は、学校に登校する時「いってらっしゃい」とよく言っていました。こんにちはを「こんちくわ」、おはようを「おはようさんま」、ただいまを「お帰り」という言い方だったので、人との関係を作っていくのに挨拶は大事だと話しました。

約束してから初めての日、無言で帰宅しました。私が「お帰り」と言うと、「・・・・」。再度「お帰り」と言うと、今度は口の中で「〇×△§」、もう一度「お帰り」と言うと、意を決したように「ただいまぁ」と出たので、「いい挨拶だね」と伝えました。まだまだ挨拶はすんなりとは出てきませんが、こういうことを繰り返しています。娘も、壊れたレコードのように「お帰り」「お帰り」と言ってくれています。

後、何か言われたら「はい」と返事ができるといいのですが、これはとても難しいようです。「あっそう」と「はいはい」になってしまいます。

最近、ある出来事がありました。それは、特別支援学級の担任の先生が、高熱を出して何日間か学校を休み、その間の宿題がなかったのですが、「先生が休んでも、音読だけはしよう」と里父とこの子と約束していました。なので、次の日に「音読だけやってしまい」と私が言うと、この子が「何言ってんの。宿題ないし」と言い返します。「父ちゃんと先生がお休みの間でも音読だけするって約束してたでしょう」「あれは、パソコンのゲームやるからだけだもん」と言うので、夫に電話をしてこの子に話をしてもらいました。既に私とこの子のやり取りは、喧嘩口調になっていたので、この子は音読を里姉に聞いてもらい、音読をしたことを私に伝えてきません。今回のことは、この子の知的な部分からくる誤解があったのだろうと思いますが、私の腹立たしさは続いています。何が腹立たしいかと言うと、里父の言うことは聞けて、私の言うことは聞こうとしないという部分に私が反応していました。本当に大人気ない私です。

この日は、夫が夜勤で不在だったので、いつ

もなら寝室でこの子と私と二人で寝るのですが、「お母ちゃんの言うことを聞きたくないなら、そんな人と一緒に寝たくないでしょう。どうぞ、自分の部屋のベッドで寝て下さい」と言って、布団を運びました。この子も、意地っ張りですから嫌とは言い出しません。「ふーん」と言っています。大人気ない私は「おやすみ」と言って部屋を出ていきました。その日は、久しぶりに自分のベッドで眠りました。

翌日、お風呂から出てきて、「ねぇ、今日もあっちの部屋で寝るの？」とこの子が聞いてきたので、「言うこと聞きたくない人と一緒に寝なくてもいいでしょう」と返すと「えー」と言っています。

里母　「ねぇ、同じこと言っているのに父ちゃんの時は言うこと聞いて、母ちゃんの時は言うこと聞かなかったよねぇ。その時、母ちゃんはどう感じると思う？」

この子「うーん、いや」

里母　「そうだよ。いやだったよ」

この子「じゃぁ、明日から言うこと聞く」

里母　「じゃぁ、今日はあちらで寝て下さい」

この子「あー、今日から言うこと聞く」

里母　「朝、言うこと聞かなかったしぃ」

この子「うーん、今から言うこと聞く」

里母　「今度、言うこと聞かなかったら、もう一緒に寝ないしね。お布団、持っておいで」

以前と違うのは、この子が交渉する間、私の上に乗ってきて甘えたそぶりを見せることでした。大人気ない私なので、そんな風にされると気が緩み、甘くなります。その後の「早く寝なさいよ」には、嬉しくてふざけていて言うことを聞きません。「もう、言うこと聞いてないし」と言いながら、穏やかな時間が流れます。最後は、「もう寝る時間」とピシャと里母に言われましたが、やり取り上手になってきているように感じます。

この子は里父には、叱られても面と向かって反抗しません。この人を怒らせたら、大変なことになると思っているのでしょうか。里母に対しては、まず反抗してみるという感じなので、いい風に考えれば、私にはそんな面も出せるのだろうと解釈することにしました。

生活の中には、様々な衝突が必ずあります。もっと上手に回避ができるのかも知れませんが、衝突しても修復できる関係を積み重ねていければと思っています。里父と里母は、似ているようでタイプが違うのでしょう。人だから、強みもあれば弱みもあります。どちらも大切にできる関係になっていきたいものです。

周辺からの記憶 11

～2013 年度　むつ・多賀城・宮古～

村本邦子（立命館大学）

買ったばかりの『16 歳の語り部』(雁部那由多・津田穂乃果・相澤朱音著、ポプラ社、2016)を読みながら、被災地熊本へ向かった。帯には、「16 歳の今しか、伝えられない言葉がある。東日本大震災から 5 年。あの日、小学 5 年生だった子どもたちが見据える 3.11 後の未来」というコピーがある。3 人の 16 歳が被災とその後の体験を語った記録だが、大人として恥ずかしくなるような深い洞察に満ちた子どもたちの眼差しを体感した。阪神淡路大震災から 15 年経って初めて語られた子どもたちの声をテーマにした『その街のこども』という映画があったが、今回、5 年で子どもたちの言葉が私たちの耳に届けられたという事実に、日本社会にもある意味で進歩があったと言えるのかもしれないと思った。

熊本では、十年来おつきあいをしている支援者たちを訪ね、それぞれの被災状況や支援現場の話を聞いた。知り合いをつてに、被災者した方々のご自宅を見せてもらったり、避難所の生活を見せてもらったりもした。阪神淡路大震災を経験し、東日本大震災後の東北に通うなかで、自分自身が知らず知らずのうちに身につけている知恵があることに気づいた。また、一般化された知恵がうまく活かされている例、知恵があったはずなのに受け継がれていない例、逆にマイナスに働いている例を見た。たとえば、東日本大震災後に発案された段ボールベッドというのがある。もともと仕切りもダンボールで、ある避難所は、それを使用していたが、別の避難所では、仕切りにカーテンを採用していた。

対人援助に関わる知恵というものもある。それをわかりやすく体系化したうえで、トップダウンに下ろすのでなく、それぞれが自分の状況に合わせ工夫して展開できるボトムアップの発想が求められるのだと思う。東北へ通うなかで学ばせてもらってきたことを九州にもつなげていきたい。まずは、16 歳の語り部たちの声を熊本に届けたいと思う。

◀熊本駅構内おてもやん通り（地下通路）には宇土張り子が展示されている。作者の坂本紀美子さんは長年の大切な相談員仲間だったが、突然逝ってしまわれた。通るたびに虎にご挨拶するのだが、今回、被災された方のお宅で、偶然宇土張り子と出会った。すべては延々とつながっていくのだ。

2013年9月　むつ

＜準備＞

新しい年度が始まると、むつからスケジュールと内容の確認メールが入る。今年は、これまで中心に動いてくれていた杉浦さんが移動になり、担当が変わるという。新しい窓口は、昨年、新人職員としてプロジェクトに参加してくれていた若手男性だ。院生と同い年ということで話がはずんでいた。杉浦さんも非公式にバックアップしてくれるというし、まあ何とかなるだろう。現地では、実行委員会が予定どおり開催され、こまめに報告が届く。

今年も教員は一足早く青森に入り、フィールドワークを兼ねた夏休みの小旅行を楽しむ。そもそも温泉好きというのがあるが、現地の自然や文化に馴染むことは、人間理解に不可欠だ。今年は、岩木山で「嶽きみ」というあまりにおいしいトウモロコシに出会う。

去年に引き続き、恐山をお参りする。地元の人たちにとって、今もイタコは生きているようだ。と言っても、イタコは、お祭りの時にしかいないらしい。だんだんと、青森に「帰ってきた」という気分が高まる。

プロジェクト前夜は、打ち合わせと恒例のレセプション。漫画展は 1 週間前に始まっており、9 月 6 日（金）午後から支援者支援セミナー、お父さん応援セミナー、9 月 7 日（土）漫画トークとプログラムを実施する。これまで杉浦さん個人に頼っていたところが大きく、互いに戸惑いもあるが、あらためてセミナーの趣旨と現地の事情とのすり合わせを行う。公的機関と十年協働するということのなかに含まれる人の移動の影響を感じるとともに、たとえ人が変わっても同じようにプロジェクトを実施できるのは、システムの力あればこそだと思う。

＜むつでのプログラム＞

支援者支援セミナーは例年、中村さんと一緒にやっているが、今年は時間が短くなり、対象者層も少し変わって、60 人ほどの参加者の半分が民生委員、そこに保育所、児童館、保健師、児相スタッフが加わる形になった。4~5 人グループに分け、前半は漫画冊子のなかの「贖罪」を事例に、後半は児相から提供された精神障害を抱える母子虐待事例をもとに、グループ・ディスカッションを交えながら進行していく。

事例提供者は、地域の人たちに児相の仕

事を理解してもらいたいという希望があったことから、家族の持つ力や地域のリソースに着目し、さまざまなバックグランドを持つ地域の人々が力を合わせて困難を抱える家族を支える視点を共有できるよう議論を進めていった。

「私たちはどうしても公的支援を考えがちですが、ケースによるものの、地域の力に頼ることも相談への層を厚くすること、拡大できることを学んだ」「児童相談所の方々がプロとしてどんなに大変な仕事をしているか具体的にわかり、自分にできることは何かを考えることが大事であることを知った」「地域・近所の力も大きな力になる。応援することの大切さがよくわかった」など肯定的フィードバックを得て、とりあえずの目標は達成できたかと思う。

一方で、地域の実情に合わせた協働支援システムを構築するプロセス自体を、もっとむつの支援者たちと協働できる様式を考えていけたらと思った。

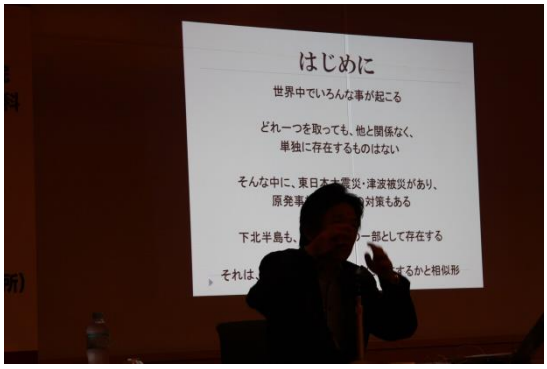
中村さんによる「お父さん応援セミナー」は、地元の学校の PTA の協力を得て、20 名の父親たちが参加してくれた。結果的に動員されての参加者が大半を占めることになったが、いかめしい顔をして入っていった男性たちが、帰りには、柔らかくにこやかな表情で出ていくのが印象的だった。

3 年目になると、漫画展のアンケートや感想ノートに「毎年、楽しみにしています」と書く人が出てきたり、偶然図書館に立ち寄ったという人から意外なメッセージを受け取ったりするようになる。たとえば、20 代男性がアンケートに書いてくれたのは次のような内容だった。「2011 年 3 月 11 日、私は大学 4 年生で、卒業式を控えていました。この震災で卒業式は中止、私はすぐに災害ボランティアの一員として 8 月まで活動しました。初めて現地に入ったとき、いつものまったりとした景色は消え失せ、この世の地獄のような惨状でした。このなかには、夫を亡くした人、逆に旦那さん以外、全員亡くなった人、子どもを亡くした人、さまざまな話を耳にし、毎日現場に入って話を聞くたびに涙していたのを思い出します。震災から 2 年、今も心を病み、悲しみに暮れる家族がたくさんいます。どうかこれからも活動を続けてください。きっと救われる人たちがいるはずです」。

阪神淡路大震災の経験から震災直後に考えたことのひとつに、被災の影響を受けた人々は時間経過とともに拡散して、その存在は見えなくなり、孤立していく傾向が生まれるということだった。だからこそ、長期的に、被災地だけでなく、あちこちに、「一緒に考えましょう」というメッセージがちりばめられている必要があると思った。い

わゆる被災地以外でも、団さんの漫画展に「東日本・家族応援プロジェクト」の看板がついていることの意味である。

この男性のような経験と思いを抱えている人々が、実は他にもたくさんいることだろう。間接的であっても、漫画展を介してこうした人々と出会えることは、お互いにとって力を得られる経験である。偶然出会った絆の向こうに、まだ出会っていないたくさんの人たちの思いが連なっているということを知ることができるからだ。



＜次年度に向けて＞

週末のプログラムには、職場を移動になった昨年のスタッフたちも顔を出してくれて、同窓会のような盛り上がりだった。

毎年、終了後に反省会をするが、みな率直で建設的である。3年目に入り、少しずつこれまで見えにくかった双方の文化の違いも理解するようになった。むつと京都、公的機関と私立大学という違いもあるだろう。たとえば、私たちにとってはやや堅苦しいレセプションがプロジェクトの継続にどんなふうに必要なのかとか、動員という形で参加者が集められることへの違和感も、先方の熱意の表れであるというような類のことである。「むつの人は引っ込み思案で、一人で行こうとなかなか思わない。動員であっても、とにかく来て貰わなければ何も始まらない。来て貰ったら良い内容なのだから、渋々であっても、まずは、一人でも多くの人たちに足を運んでもらうようにするのが自分たちの責任だと考えている」と言うのである。

最後には、担当者が涙したことにみな驚いたが、温かい拍手とともに、充実感と一体感を得て、今年のプロジェクトを無事終了することができた。

2013年10月　多賀城

＜準備＞

昨年度は、仙台市と多賀城市と１日ずつプロジェクトを実施したが、仙台はボランティアもイベントも多く、また移動してのプロジェクトでは慌ただしいこともあり、今回から多賀城に絞って開催することにした。昨年お世話になった上山真知子さん（山形大学）が声をかけてくれて、多賀城図書館で漫画展ができることになる。しかも１ヵ月間だ。

また、今年から研究科に来た増田梨花さんがこれまでやってきた被災地での絵本とジャズのコラボのイベントをプロジェクトの一環としてやりたいということで、企画がさらに拡がった。こちらは図書館での開催が難しいので、文化センターを借りることにする。

＜フィールドワーク＞

私は一足早く現地入りし、昨年のプロジェクトを共催してくれた「おおぞら保育園」を訪ねた。ちょうど、昨年、話題になっていた園庭がわりのデッキ工事中で、子どもたちは散歩に出るところだった。園長の黒川恵子さんによると、仮の園舎であるトレーラーハウスから正式な園舎に移り、認可を得るための準備を始めているとのことである。相変わらずのバイタリティに驚嘆させられるが、お話を聴くうちに、それが、前を向いて着実に歩みを重ねてこられた一人の女性であり経営者でもある黒川さんの自然な道なのだと納得させられる。被災によって急に別の人が現われるのではなく、それまで生きてきた人が被災の影響を受けて大きく前進するのだ。話をしながらも、子どもたちへの対応や近隣の人々とのやり取りを眼にするにつけ、納得は深まる。昼食を御一緒し、国府跡や多賀城の港を案内してもらう。「被災前は保育園から車に分乗して港に来ていたものだが、ずっと来れなかったんです。こんなふうになったんだ･･･」とつぶやいておられる。

その後、上山真知子さんを訪ねる。被災後の状況や活動についても聞かせてもらうが、「レジリエンスは、まず自分の身辺から」とおっしゃったのが印象的だった。上山さんは沿岸部で育ったので、防災は十二分にしてあって、自分に余裕があったためにいろいろなことができたという。その意識の高さと寛容さには我が身を恥じるしかない。外からの支援がどんなふうに迷惑になったり役に立ったりするかについても話してくれたが、やはり、地域の人々が中心になって立ち上がるということが重要なのだと思う。3 年目を迎えた支援者たちの疲弊についても考えさせられる。

翌日午後の空き時間には、塩釜から東松島へ行ってみる。知人が、自分の経験を語りながら、現地を案内してくれた。友人の家があったあたりも今や果てしなく広がる野原で、すすきやコスモスが咲き乱れ、墓石だけが残っている。お寺も住職さんも流されてしまったそうだ。新しい墓に花や供え物があるものもあれば、ひっくり返ったままの墓もある。

近くには大きなトレーラーやトラックが出入りし、プレハブが並んでいる。おそらくたくさんの人たちが動員されて復興作業にかかっているのだろう。鉄筋を組んでいる作業員に何をしているのか尋ねてみても、ベルトコンベヤーになるということしかわからないという返事だった。

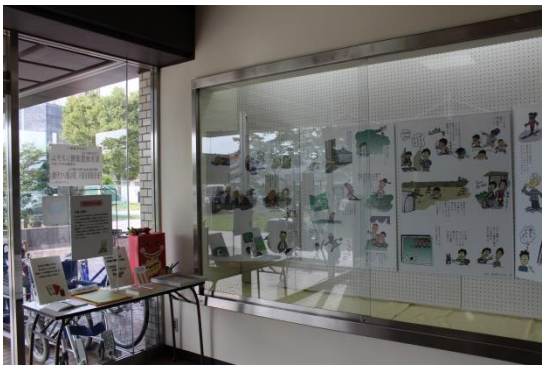
少し陸地に入ると、1 階はがらんどうで 2 階に人が暮らしている様子がうかがえる家がある。わずかながら、海岸近くに建てられた新しい家もある。水が入って避難者たちが亡くなったという小学校も解体工事に入っており、立ち入り禁止だった。

復興の陰で、大きな喪失を抱えたままの人たちが取り残され、ますます見えにくくなっていくのだろう。具体的なエピソードを聞きながら、以前、ここにたくさんの人々の生活があり、それが、人々の夢と一緒にすべて消えてしまったということに思いを巡らす。「このへんの人を捕まえれば、そんな話はみんないくらでも持っているのよ」と知人が言う。

＜多賀城でのプログラム＞

10 月 5 日（土）午前は、多賀城図書館で、団さんの漫画トーク。漫画パネルは図書館の入り口から階段に添ってきれいに並べられ、読みながら自然に 2 階の会場へと導かれていく。図書館の方々が工夫しながら大切に展示してくださっていることが感じられる。福島からビーンズ福島の中鉢さんと村上さんも駆けつけてくれた。図書館長と立ち話をするが、前は土木・水道課にいたとのこと、表面的には復興しているが、むしろ下、つまり下水がまだダメなのだという。また、水に浸かった人と浸からなかった人とでの差が大きいとも言う。バックグランドが違うと目のつけ方が違っていて、興味深い。

夜は支援者交流会。集まった方々のそれぞれの近況を共有するなかで、現地の支援者たちが被災後、どんなふうに支援を続けてきたのか、立場上、個人的なことは後回しにしなければならないことも少なくなく、そんななかで頑張ってこられたことも少し具体的に理解することができた。何も力になれないことを申し訳なく感じるが、それでも、私たちが継続的に来ることを喜んでくれていることが伝わってきて、ありがたいと思う。私たちにはこの経験を何かにつなげていく責任があると思う。



6日（日）午前は、多賀城文化センターにて増田さんの企画。文化センターにはたくさんのポスターが貼られ、カラオケ大会に大勢の高齢者が集まっていて、賑やかで楽しそうだった。残念ながら参加者は多くなかったが、来てくださった方々には喜んでもらえたと思う。

昨年・今年と、私たちは、たまたまこの避難所の様子を聞き知っているが、もしも何も知らなければ、2年前にここが避難所で、当時は大変な状況にあったということなど思いも及ばないことだろう。こんなふうに復興は作られていくのだ。見えないからと言って、ないわけではない。多賀城にできたご縁に感謝しつつ、来年はどんな形で発展させていけるか工夫が必要だ。

2013年11月　宮古

＜遠野から大船渡へ＞

1年目は遠野、2年目は遠野と大船渡でプロジェクトを開催した。もとより同じ土地に十年間通い続けることを希望していたが、なかなか継続的に共催してもらえそうなところが見つからず、立命館大学として多層に取り組みを展開している宮古で可能性を探してみることになった。とは言え、「また来ますね！」と言って別れた人々の顔を思い浮かべると心苦しく、個人的に1日早く現地へ行って、遠野や大船渡の街の様子を見て回ることにした。

花巻空港でレンタカーを借り、まず宮沢賢治記念館に寄ってみる。賢治は津波の年に生まれ、戦争と関東大震災を経て、津波の年に37歳で死んだことを知った。厳しい時代と美しい自然のなかであの豊かな思想が育まれたことを感じる。

遠野は、紅葉が美しい季節。田んぼでは、時折、農作業をしている老人たちの姿を見かけるが、街中に人影はない。沿岸部へのボランティアが全国から波のように押し寄せていた一昨年とはうって変わって、のんびりと静かで平和な日常に戻っているように

見えた。遠野は、この夏、『3.11 東日本大震災：遠野市後方支援活動検証記録誌』を発行している。3.11 が少し過去になったということなのだろう。それでも、仮設住宅はまだひとつ残っているそうだ。

一昨年の会場に立ち寄ってみるが、遠野博物館は休館で、蔵の道ミュージアムも閉まっている。伝承園とかっぱ渕を通り過ぎ、五百羅漢とデンデラ野へ足を延ばしてみる。五百羅漢は、江戸時代、度重なる飢餓で餓死者が続出し、その弔いのために、大慈寺の義山和尚が花崗岩に大小約 500 の阿諛修羅漢像を刻印したもの。

デンデラ野は、遠野物語の話者・佐々木喜善の生家の裏手に広がる。60 歳になると村人たちはここに捨てられ、自給自足の生活をしながら死を迎えたのだそうだ。近くにダンノハナと呼ばれる墓地があって、現世と来世の間の地と考えられていた。人里離れたところにあるわけでなく、まだ元気な老人たちは、昼間は村に降りてきて農作業を手伝っていたと説明があった。姥捨て山ともちょっと違うようだ。遠野物語にも感じられるが、このあたりの死生観は興味深い。

遠野から釜石を通って大船渡に出たが、小学生や中学生が集まって、楽しげに下校中だった。ほとんどの子たちが大変な体験を持っていることだろう。昨年の会場だったカメリアホールまで行ってみる。「心を奮い立たせて頑張ろう」のスローガンはなくなっていて、残る 7 ヶ所の仮設住宅の地図が貼ってあった。1 階の寄せ書きはそのまま、むしろ増えている。

隣の盛駅へ行ってみると、4 月 3 日に三陸鉄道南リアス線吉浜駅までが復旧したということで、待合室はにぎやかだった。2011 年 3 月 11 日、ここにも津波は押し寄せ、10 月に駅舎を利用して「ふれあい待合室」が営業開始した。昨年、80 冊ほど漫画冊子を置かせてもらい、その後、駅舎は改装されたが、3 冊だけ大切そうにラックに立てられていた。

昨年泊まった大船渡プラザホテルの改装も終わり、街中には新しい門構えの食事処が並ぶ。街は少しずつ活気を取り戻しつつあるように見えた。主要道路は復旧が進み、前より便利になっている。現実には、地盤沈下のかさ上げ、区画整理地域の土地交渉、二重ローン、人口減少、高齢化と難しい課題が残っている。こうして格差は拡がっていくのだろう。あちこちに、「津波浸水地ここまで」の標識が設置されている。

＜宮古へ＞

翌朝、羅須地人協会（県立農業高校）に寄り、賢治が晩年暮らした家や火鉢を囲む教室用の部屋を見学した。黒板とオルガン。「賢治先生の家」というサインがあちこちにあり、賢治が人々に慕われている様子が伝わってくる。

レンタカーを返して、プロジェクト一行と合流し、ジャンボタクシーで宮古へ向かった。宮古は、三陸リアス式海岸の北端にある。震度 5 で、津波被害が大きかった。気象庁の推定による津波の高さは 7.3m、避難対象者は 5,227 世帯 12,843 人とされている。

宮古に着くと、さっそく、会場となる「おでんせプラザ」で漫画展の設営をする。市役所から駅まで繋がる道の途中に中央商店街にある建物だ。この辺りも津波が押し寄せたところで、ところどころに空き地があり、草が茂っていた。新しい家や修理中の家もあった。今年、研究科に新任でやってきた鵜野祐介さんがプロジェクトメンバーに加わってくれたので、皆でにぎやかに、わいわいがやがやと工夫しながら設営。自分たちで一から設営したのは初めてだった。なかなか悪くない。後は人が来て

くれるかどうかだ。

設営が終わったので、夕方、希望者でタクシーを乗り合わせて、景勝地として有名な浄土ヶ浜へ行ってみる。台風の影響で大木が倒れ、サイドウォークが通行止めになっている。だんだん暗くなってきて、どうやって帰ったらいいのだろうと心細くなっていたところに、たまたまバスが来てくれたので、バスに飛び乗って駅前まで戻る。

JR 宮古駅と三陸鉄道宮古駅が隣り合わせに並んでいる。三陸鉄道の駅舎には、全国各地から宮古を訪れた人々の寄せ書きを集めたボードがあり、「頑張れ」、「負けんなよ」、「一人じゃないよ。みんな一緒だよ」といった応援メッセージがたくさんあった。ホームにある列車を覗いていると、駅員が 2 人出てきて、「どうぞ」と暖かく声をかけてくれ、説明してくれる。「怪傑ぞろり」を描いた 2 車両の列車が止まっていた。「手をつなごうプロジェクト」というのをやっているそうだ。「あまちゃん」ブームで三陸鉄道は大人気だそうで、「皆さんの応援で復旧できて」と二人とも眼を潤ませていた。ここまでくるのに、いったいどれほどの道のりを越えてこられたのだろうか。三陸鉄道に対する誇りが伝わってくる。後で名刺を見ると、総務部長と旅客サービス部運転課長だった。

JR 駅の待合室には、「おでんせ　みやこ」という冊子があった。宮古市の小学六年生が宮古市社会福祉協議会の協力のもと作成したもので、宮古の観光や特産物の情報とともに津波が発生した時の避難ルートや避難場所が書かれていた。裏面には「五つの提言」として「一つ　地震が来たら、迷わず高台へにげるべし!!」、「二つ　命を優先し、何

があっても戻らぬべし!!」、「三つ　助け合い、人とのつながりを大切にするべし!!」、「四つ　万一に備え、防災グッズを準備しておくべし!!」、「五つ　未来に向けて、一歩一歩、進むべし!!」と書かれていた。小学生たちが被災者にインタビューしてまとめたものという。

6 時半から駅前キャトル 2F の FM826 宮古ハーバーラジオに団さんと清武くんが出演することになっている。宣伝になるといい。

その後、海鮮丼を食べて、タクシーで 30 分ほど山奥に入ったところにある宿にチェックイン。信じられないが、そんなところしか宿がなかったのだ。宮古市内は宿が少なく、宿泊所がいつも問題なのだという。

＜宮古でのプログラム＞

11 月 2 日午前、今回、協力頂いた社会福祉協議会を訪れ、宮古の状況について話を伺う。社協の前にはプレハブのボランティアセンターがあって、中をのぞくと立命館のうちわがあった。プロジェクトのメンバーは、ボランティアの一人と話したらしいが、「立命館の学生たちとは一緒にやっていて、いつもよくやってくれる」と言ってもらったらしい。嬉しく感じるとともに、大きな組織の強みだと思う。

宮古では、支援者の連絡協議会が組織されており、支援ボランティア（個人が多く、保健師や傾聴ボランティア、薬局の健康・食事相談など）と相談機関（公的機関が中心、警察、市役所、福祉、民生委員など）から成る。1〜2ヵ月に1度集まるが、学校や子育て支援、女性支援の関係の動きは見えていないという。15名の生活支援相談員が、宮古の仮設を回っている。話を聞いても解決できないことがほとんどで、怒りをぶつけられることも少なくないが、それで発散できるならと思うようにしている。訪問して扉を開けてもらえなくても、チラシに一筆メッセージを入れたり、季節ごとに花の写真を入れたりしている。相談員同士でよく話すので、メンタルな問題はなく定着がいいということだった。

外部からの支援が何かをするきっかけになればいいが、地元で NPO が立ち上がる気配はなく、経済基盤がなくて商売も立ち上がらない。「先が見えない。来年のことはまったくわからない」。できるだけ外部からの支援の希望は受け入れるように努めているが、今はもう支援が欲しいという気持ちはないということだった。こんなふうに時間を割いてもらうこと自体、負担をかけているということだろう。困難ななか支援者同士が支え合って、工夫しながら活動されていることに頭が下がる。

午後のプログラムを行う仮設住宅の集会所に移動。おばあさんたち6人が外のベンチで待っている。プロジェクトのメンバーが田んぼの中の観音堂で知り合って声をかけたという。地元の方々で、仮設の人たちとは交流がなく、集会所やイベントは仮設の人たちのためのものだからと遠慮しているらしかった。鵜野さんによる「歌と遊びのワークショップ」を始めたところで、子どもたち4人が入ってくる。その後2人。おばあさんたちと関われたらと近くに誘ったが、どちらにも遠慮とはにかみがあるようで、二手に分かれたままだった。それでも、子どもたちが加わったことで、おばあさんたちの表情が変わったように思う。みなで手遊びや歌を楽しんで終えた。

次のプログラムは、私が準備した「アートで遊ぼう」で、タッチドローイングへ誘うが、おばあさんたちは帰り、子どもたちが参加してくれる。1 時間は楽しげにやっていたが、途中で外遊びに行った子どもたちもあった。終了後、外のベンチで子どもたちを見守りながら、一緒に時間をすごす。少しずつ状況が見えてくるが、子どもたちは、仮設に暮らす子、仮設の前にある新しい大きな家に暮らす子（別の場所で被災）、地元の子らが混じっているらしい。大人たちは、地元と仮設の交流がないと言っていたが、子どもたちは立場に関わらず、固く結束しているようだ。そのうちボールが植木にあたって、叱られてしまう。仕方なく、子どもたちは集会所戻ってゲームを始めた。「走って 30 分」かかる学校か、もっと遠い公園まで行かなければ遊び場はないということで、なかなか厳しい状況での結束だと思った。それでも、こうして結束できることが子どもたちの力であることは間違いない。「また来てね！」と言ってくれた子どもに、「また会えるといいね！」と返しながら、悲しくなった。ポスターを見て、楽しみにしていたと言ってくれた子どもだった。

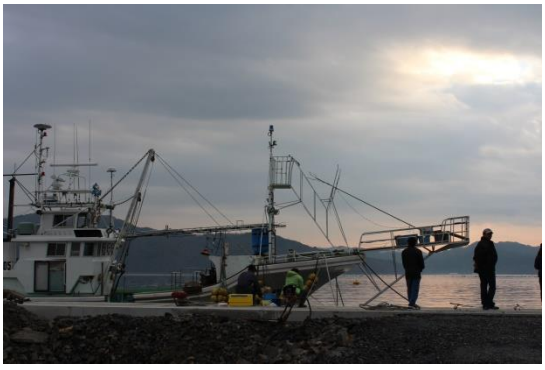
漫画展をやっている「おでんせ」に戻ると、昨日のラジオを聞いて知ったという知人のスクールカウンセラーが来てくれる。久しぶりに出会ったが、今は宮古の住人になって働いているのだという。一緒に夕飯を食べ、学校の状況を聞く。社協では学校関係の状況がわからないということだったが、そこをつなげられるといいのかなと思った。駅前に戻り、タクシーで宿へ。不便なことをのぞけば、自然のなかの素敵な場所で、その夜、私たちは、満天の星と大きな流れ星を見た。

翌朝、「おでんせ」へ。漫画トークの設営をしてから、周辺を歩いてみる。港では男性たちが釣りをしていた。かわいいハゼが釣れるそうだ。愛想の良い男性もいたし、硬い表情の男性もいた。

「おでんせ」は、町の寄り合い場のようなものらしく、近所の人たちが立ち寄って話していくが、漫画展を見るという感じでもなく、顔見知りが一緒になると立ち話をしている。漫画トークには近所の商店街の年配の方々がきてくれた。場の構成も面白く、漫画パネルに囲まれて漫画トークがあるのも悪くないなと思った。

終了後はパネルの撤収作業と後片付けをして、近所の魚市場に寄り、大槌町を通って花巻空港へ向かった。大槌町役場は間もな

く取り壊されるという。来年はどんなふうになっているのだろう。花巻に着く頃にはすっかり夜になっていて、銀河鉄道のメガネ橋が美しくライトアップされていた。



つづく

病児保育奮闘記

(10)

子どもサポート H&K
大石　仁美

箱庭の効用

私は 20 年ほど前に、知人から箱庭のおもちゃを譲り受けて以来、旅先などで使えそうなものを見つけては、少しずつ買い足してきました。箱は家具屋さんに特注し、箱の下は引き出しの整理ダンスにして、中を小分け出来るようにしています。

我が家のプレイルームにおいていて、蓋をして普段は文具を置いたり、花瓶を置いたり、来客時には茶器をおいたりと便利に使っています。

学校勤務していた時に、当時の学校カンセラーに少し手ほどきを受けた程度の全くの素人ですが、無口な私には性に合っているようで、(六口でしょとからかう人もいるようですが) 咄嗟に適切な言葉が出てこない、語彙の少ない私にとって、感覚的であるにしても、この上なく心に響くコミュニケイションの手段になっているのです。

子どもの相談では、私と同じように自分の心の内を思うように話せない子どもの心を覗き見る方法として箱庭をつかっています。心理の専門家ではないので分析など出来ませんが、またしてはいけないと思いますが、それは本当にストレートに届く会話として私の心に入ってくるのです。

私が箱庭を使う目的は、そこに表現された世界を見ることで、子どもと親に寄り添えるヒントが見つかるからです。

何が起きているの？

どうしてこうなっているの？

なぜこんなにしんどいの？

親から話を聞いた後に、日を改めて子どもに箱庭をしてもらいます。その箱庭をあとで親と一緒に眺めるのです。事実をとらえて現実を知る。それはある意味とても辛い作業です。そうして子どもの心に触れた時、その叫びは、細く鋭い刃になって大人の心を貫きます。その痛みをグッとこらえて受け止められるかどうか、泣きながら受け止められた親は前向きに歩み始め、子どもは救われます。でも、子どもの心が分かったからといって、親が子供を受け入れるとは限りません。頭で理解しているように見えても心が受け入れない。私が出来るのはここまでで、そのような親に対しては、引き続き児相などの専門家にお願いするしかあり

ません。
現実を受け止められない親は、専門家のｱﾄﾞﾊﾞｲｽも、自分にとって都合のいいことしか頭に入らないことが多いようですので、そうなるともう親子で傷つけあいながら、転がって生きていくより仕方がないのだろうと思います。さみしいですが、それもまた一つの人生。そう割り切ることにしています。

病児保育と子育て相談

病児保育を始めた当初から、子育て相談は二本柱の一つでした。実際一人の子どもにたっぷり時間を取って向き合う時間がありました。児童養護施設の子ども達の性教育を担当していましたので、傷ついた子供が、自分の傷を癒すのにどんな行動で表現するのか、まざまざと見せつけられることが多く、それは鈍麻した私の感性を揺さぶるのに十分でした。子どもの行動の意味を、大人に正しく伝えたい！大人に分かってもらいたい！

子育て相談を始めたのは、親のしんどさを汲み取るというよりも、子どものしんどさ、辛さを親に伝えたい、つまり子どもの側に軸足をおいての子育て相談でした。病児保育施設に「子どもサポート」という名をつけたのも、そういう意味があってのことでした。

T 君のお母さんから電話で依頼があったのは丁度二年前のことです。知人で、不登校の小学三年生をもつお母さんの話を聞いてもらえないかというものでした。母親仲間で地域活動をしているそうですが、トラブルが多く浮いているのが気の毒で、どうしてあげたらいいのか気をもんでいるというのです。実は、同じようにT君も小学三年生の時に不登校気味で、相談にのったことがあり、その時のことを思い出して電話してこられたように思います。(T君は現在高校三年生。大学受験にむけて猛勉強中。) T君の経過は後ほど述べることにして、依頼のあったY君とお母さんについてここに記してみようと思います。

Y君の箱庭（初回）

Y 君のお母さんの話では、彼は一歳半検診の時要注意といわれ、二歳の時自閉症スペクトラムと診断されたそうです。その後児相でフォローしてもらっているようですが、子育てがしんどくて、夫との不仲もあり、腹立たしい気持ちでイライラする毎日。親友だと思っていた幼馴染でさえ、陰口を言っていたとわかり、正直、人は内心どう思っているか分からないと思うと、友達づきあいも億劫になりがち。約束していても、気が重く、ドタキャンすることもあったりして、どうしても浮いてしまうらしいのです。夫との離婚も考えていて、手に職をつけようと専門学校に通ったりもしていましたが、人間関係でつまずいてばかり。実家もガタガタして落ち着かず、あまり力になってくれそうもない。以前から人にどう見られているか気になるほうで、相談員に週一回のペースで話を聞いてもらっているけれど、解決の糸口が見つからないとポロポロと涙をこぼされました。

このお母さんの話を聞いていて思ったのは、誰とも信頼関係を築けていないということです。親

友だと思っていた幼なじみとは、幼稚園から短大までずっと一緒だったそうですが、どこの短大ですか？と尋ねると、態度が急にかたくなになり、「それは言えません。人に言えるような学校ではありませんから」という答え。びっくりしました。人に言えない学校、そこに籍を置いていた「自分」って一体何なのでしょう。彼女のしんどさの原点が垣間見えたようで、悲しみと虚しさでいっぱいになりました。日本の教育の歪みが透けて見えたからです。

自分のことが好きではない、自信が持てないというお母さん。次回からはお母さんとＹ君、二人の良いとこ探しに時間を使おうと決めました。

上の写真はＹ君が初めてきた日に作った箱庭です。Ｙ 君はかなり多動で、一般のマンションとかなり様子が違うことが不思議らしく(コーポラティブなので)部屋の中をうろうろ探索してからお茶を一杯飲んで、気持ちが落ち着いたところで箱庭に取りかかりました。

よく気が付き、よくしゃべり、態度が大きいかと思えば、反対にどこかおどおどしたところの見られる子でした。

「もっと置こうかなぁ。賑やかな方がいいもの。」賑やかなのが好きなのね。「だって淋しいのはイヤだから」そう言いながら自動車を道いっぱいに並べ、建物の上には奇をてらったように目立つミッキーやピエロなどを並べました。それは「僕を見て！」と言っているようでした。柵の囲いの中には動物たちをたくさん並べました。どの動物もみな同じ方向を向いていて、人も同じです。ほぼ等間隔に横並びで、向き合っていません。喧騒の中で、孤独感がひしひしと伝わってくるようです。私は彼のようなタイプの子は、人とかかわらなくても、マイペースで淋しくないのだと思っていました。でも違っていました。どう関わったらいいのか分からなくて、淋しかったのです。また子どもから教えてもらいました。“思い込みを捨て耳を澄ますこと”分からないことは本人に聞けばいいのだと。あ～楽しかった！またやりたい。達成感があった。と言って帰って行ったＹ君でした。

期待と不安

Ｙ 君のお母さんは月一回のペースで通ってこられました。毎週相談所に通っているのに、進展しないことの苛立ち。学校では、なんとか別室登校できるようになったけれど、一人で課題をこなしているだけなので、勉強が遅れるというあせりがあるということでした。医者には、「そろそろフリースクールも検討してみては」とアドバイスを貰ったようですが、資料をもらっても見学にも行っていない様子。理由をたずねると、「そこは遊び中心のような気がするので。一度見学に行くと行かなきゃならないようになってしまうのでは、そんな気がして動けません。」という答えでした。

「子どもの成長の土台は遊びですから、楽しく遊べることが一番。勉強はそのあとだと思いますよ。」すると、お母さんから意外な言葉がとびだしました。「うちの子、知能指数が高いのです。せっかく頭の良い子に生まれているのに、勉強をさせないともったいない。」

「子育てをしんどいと思い、腹立たしく思い、時に捨ててしまいたいとさえ思うのに頑張っているのは、この子は頭のいい特別な子だと思うことで納得しているからです。」

おーぅ　なんという誤解。知能指数なるものの罪深さ！お母さんに希望を持たせようと伝えたことが、この母子を縛っているなんて。

お母さんの劣等感が、この子を特別な子（IT 産業でトップを走る人のような）に育て上げることで、優越感に変わる。あのすごい人のお母さんという優越感！そんな幻想を持たせてしまったことが、相談員さんや学校の対応に不満を募らせる原因になっているように思いました

お母さんの悩みは学習だけではありません。子どもの行動を制御出来ないこともその一つでした。ゲームに熱中している子を止められない。暴れて母親の腹をなぐる。飼い猫をいじめる等。そしてまるで奴隷のように母である自分をこき使うというのです。「ん？？　具体的に話してください。」「たとえば朝食の卵を目玉焼きにしたとします。するとこんなの食べたくないから卵焼きに作り直してというのです。」「で、あなたはどうされるんですか？」「仕方がないので作り直します。」「なぜ？」「そうしないと好き勝手に自分で作るのです。」「それはダメなのですか？」「後片付けが大変なのです。」

どうもこのお母さんの話を聞いていると、どっと疲れてしまいます。架空の世界に向かって何も持たずに旅をしているような感じです。子育ての方針があるのかないのか分からない。で、こちらも具体的に提案することにしました。「それは自立へのチヤンスじゃないですか。そんな時は子どもに作ってもらいましょうよ。上手くできたら褒める。上手くできなくても、やろうとしたことを褒める。片付けは一緒にしましょう。手伝ってくれてありがとう。助かった、うれしいと伝えましょう。」

こんなふうにお母さんの話をききながら、具体的に褒め方のコツを話し、同時にお母さんをも褒めるよう心掛けました。

「今までかなりしんどい思いをされたでしょう。よく頑張って良い子に育てましたね。」「お母さんは正直な方ですね。」「感性が豊かですね。」「そんなふうに自分の言葉で気持ちを伝えられるなんて、良いですね。」等、褒められた経験がないというお母さんにとっては、褒められることが自己肯定感をとりもどす一つのプロセスだと思います。確かにプライドはもっておられる。それが歪まずに自然に表現できたらどんなにいいでしょう。

「人に助言されても、実行しないことが多いです。やらされているような気がしてしんどくなるのです。」と言っていたお母さん。たぶん、こちらがいくら提案しても、実行はしないよと言っているのでしょう。それでも自分が褒められることは悪い気がしないらしく、積極的に通ってみえました。息子への対応については実行しなかったかもしれませんが、それもいいと思っています。母親自身のなかに自分を愛しく思う気持ちが湧いてきたら、きっと何かが変わるはずです。

Y 君の箱庭（7 か月後）

この箱庭は、以前行ったことがある田舎の風景を作ってみようと言いながら、短時間で完成させたものです。彼が一番力を入れていたのは川でした。ボートを浮かべ、魚を泳がせ、水鳥をあそばせ、そして、土手に草らしきものと苔むした石を置きました。そして、しきりに「確かにあったはずなのになぁ」と呟きながら、おもちゃ箱をかきまわし、「あった！！」と嬉しそうにブロックの一片を置きました。橋が架かったのです。なんだか嬉しくなりました。私は後ろで見守りながら、そうしてくれることを願っていたからです。

「できた？」「うん、落ち着く」

Y 君は、緊張を解き崩す術を、自分なりに見つけているようでした。

せながら実践している偉大なママなのです。

Y 君を紹介してくれた T 君のママですが、今では子育てのしんどいママたちの相談相手になっているようです。T 君は私学の特進クラスに在籍している高校生。運動部に所属していても成績はキープしているそうなので、たいしたものです。

「えっ？なにかしたかって？なにもしないこと。宿題忘れるのは当たり前。忘れ物は毎日。紙に書こうが、しるしをつけようが効果なし。持っていけるよう玄関に出しておいても持っていくのを忘れます。電気つけても消しません。消さずに寝て一晩中ついていても、電気代が高くつくのは許容範囲。洋服脱いだら、セミの抜け殻状態で残ってます。それがこの子なんだと思って、おもしろがって楽しみます。長時間みているとストレスがたまるので、家にいる時間が少なくて済むようどんどん外で運動してもらってます。」

T 君ママの、ちょっと変わった子からこれは大変という気づきは小 3 の時まつ毛、まゆ毛を全部抜いてしまったことからでした。皆と同じようにすることを求められる、それがこの子にとって大きなストレスになっていると感じたママは、自分から医師に診断書を書いてもらいに行ったのです。他の子と同じようには出来ないということを学校側に分かってもらうために。診断名をつけてもらったことで、席を離れて動き回ったり、国語の時間に絵を描いていても許されるようになり自由度の大きい小学校生活を送ったようです。そして中学、高校へと無事進学。なによりも母親がストレスをためないこと。楽をすることを考える。余計なことをしない。**出来ないことを求めない**。良いところだけを見て**ほめて育てる**。そして今も、これからも私の**愛しい息子**であることに変わりはありません。

これですね。大切なこと。T 君ママは簡単そうで実は一番難しいことを、自然体で我を浮き沈みさ

ラホヤ村通信

（８）

高垣愉佳

我ら海の民

不動産屋兼大学教授のエレーナさんに誘われてギリシャ料理屋へ行った時の事。「サーフィンはやるの？」とエレーナが話を切り出した。「サーフィンは色々道具を買いそろえないといけないからやってないけど、サーフボードは買って、月に 2 回以上はビーチに行ってるよ。」と答えると、「二人とも泳げるんだぁ～。」と驚くので、「まぁ。そんなに上手じゃないけどね。」と答えた。「どれくらい泳げるの？」と聞くので、「う～ん、２～３００メートルくらいかな？」と答えた所で、エレーナのフォークの動きが止まった。視線を感じたので隣のテーブルに目をやると隣のテーブルの家族も全員驚いたようにこちらを見ている。「２～３００メートルって、どこでそんなに泳ぎを習ったの？」とエレーナ。「学校の体育の時間だよ。日本の学校にはほとんどどこでもプールがあって、夏は泳ぎを習うんだよ。だから、多分ほとんどの日本人がこれくらいは泳げると思うよ。私たちが特に泳ぎが上手いというわけではないよ。」と言うと、エレーナは信じられないという顔で顔を左右に振っていた。先ほどから視線を感じる隣のテーブルの家族はと言うと、「口、空いてますよ！」と言いそうになるくらい驚いた顔をしている。彼らのリアクションにこちらが驚いてしまった。皆が泳げるというのは日本以外ではそれほど驚くような事なのだという事を初めて知った。そういえば、アメリカの学校を見ていてもプールの無い学校がたくさんあった。日本は四方を海に囲まれた海洋国だ。だから体育のカリキュラムにもれなく水泳が組み込まれているのだろうという事を初めて理解した。数学や何やら難しい事も生きて行く上で必要だが、よく考えてみれば泳ぐという技術は非常時に役に立つし、まだ飛行機や電車がメインの移動手段ではなく、海や川を船で移動した時代にはなおのこと身につけておく必要のあるものだったのだろう。我ら海の民、水泳万歳だ。

医療に大切なもの

知人が勤めている病院を見学させてもらう機会に恵まれた。日本で言えば日赤にもひけを取らない程の大きな病院だった。

その日はプロの大道芸人がボランティアで病室を回る日だったため、大道芸人さんに同行させてもらった。ベッド上から動けない程の状態の方の部屋一つ一つを回って、ボールを使った芸やちょっとしたマジックとプチトークをして回られる。

当日は患者さんが一名行方不明になるというハプニングがあったため、当初予定されていた看護師さん達とのディスカッションの予定が無くなったのは残念だった。見学させてもらった病棟の設備自体は、正直に言うと日本の大病院の方が最新の設備を備えていた。ただし、ディスポーサル製品と精密医療機器を除いて。日本の病院は不必要な部分まで常に最新にする事に専念しているのかもしれないと思った。案内してくれた人は、「数年前にトヨタの改善システムを導入してから、とても仕事の効率が良くなった。今では『現場』という日本語を聞けばみんな意味が分かるようになったのよ。何かハプニングが起こるとみんな let's go to the Genba!って言って走って行くようになったわ。」と笑っていた。

病院で働く医療従事者、特にナースは圧倒的にフィリピンからの移民が多いという事だった。フィリピンは地震や台風で大きな被害を受ける事がよくある。そのような時、病院はいち早くフィリピン政府に多額の資金援助をするらしい。なぜなら、母国が天災に見舞われた事で職員が心を痛めすぎるような事があれば、患者さん達に良いケアを提供する事が出来なくなるから。このように職員を気遣う事で、回り回って病院のケアの質を高めると考えているからだという事だった。

医療に大切なものは何なのか？それはやはり人ではないか。どんなに高性能な医療機器も使うのは人であり、データを解釈するのも人であり、それを伝え、また治療を決心して受ける相手もやはり人である。

そんな事を考えながら、フリースペースで患者さんのご家族に折り紙を教えながら話したり、初めて手にするハープを鳴らしてみたりした。このハープは音楽セラピーで使用している物だという事だった。知人の紹介とはいえ、英語が堪能では無い外国人の見学訪問を快く受け入れ、見学に際して相当な自由を与えられた事に感謝しつつ驚きながら。日本で病院を見学したとして、どのようなものになるだろうか。恐らく、置いてあるハープを手にした瞬間に、お叱りを受けるのではないだろうかと思う。

病院内のフリースペースで

名刺交換

日本で何かの集まりがあり、人と出会った時、まずは名刺交換から始まる事が多い。日本の大学やハローワークなどでは名刺の受け渡し方などというマナー講座まで開かれている位だ。では、日本以外ではどうなのか？というと、日本以外の人達も名刺は持っている。ただ、違う点は、彼らは出会ってすぐに名刺を渡してお互いの所属や肩書を確認してから話を始めるという道筋は取らない。彼らが名刺を出すのは別れ際だ。アメリカ等での集まりやパーティーの多くは立食式だ。適当にその辺に居る人や話してみたいなという気になった人とちょっと話をする所から始まる。名前と出身地くらいは伝えるが、いきなり所属や肩書などの話から入る事はあまり無い。試しに、日本

式にまず名刺を渡して所属と肩書から自己紹介をしてみれば分かるが、その時点で相手は興味を失って会話からフェードアウトして行く事が多い。幸いな事に、私には所属も肩書も無かった。なので、自己紹介しようにも「日本から来て、今はサンディエゴに住んでるユカです。」以外に紹介のしようが無かった。日本の集まりやパーティーでこのような紹介の仕方をすれば、おそらく「よく分からない、ちょっと変わった怪しげな人」と認識されて敬遠されるのではないかという気がするが、幸いな事にこれが向こうのやり方には合っていたようで、興味を持ってもらう事が出来、大抵はその後の会話がスムーズに進んだ。そして、別れ際に「今日は楽しかったよ。うちの国に来る時にはいつでも連絡してね。ご飯をごちそうするよ。」と名刺をもらう事も何度かあった。中にはもらった名刺を見てびっくりぽん！な肩書の方もおられた。初めに名刺をもらっていたら、自分とは関係無い方だという偏見をもって接して、恐らく話しもしなかっただろうと思う。名刺の使い方の違いを通して人と人が出会うとはどういう事かを考えさせられた。

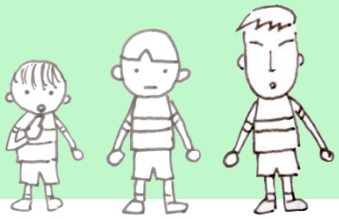
立食形式のパーティーの様子

教材にも漂う空気

A:I want to apologize to you.
私あんたに謝りたいねん。
B:What for?
なにを？
A:You must have been very angry with me yesterday.
あんた昨日私にめっちゃ怒ってたやろ？
B:I don't understand.Why should I have been angry with you?
分からんわ。何で私があんたに怒らなあかんの？
A:Don't you remember?We had planned to see a movie yesterday,but I completely forgot!
あんた覚えてないの？私ら昨日映画見に行こうって計画してたやん、せやけど私完全に忘れててん！
B:Don't worry about it.Actually,I owe you an apology.
そのことは気にせんでええよ。実際私もあんたに謝らなあかんし。
A:You do? Why?
あんたが？何で？
B:I couldn't have seen a movie with you anyway.I had to take care of my little sister yesterday,and I completely forgot to tell you.
私どっちにしてもあんたと映画見に行かれへんかってん。昨日、私の妹の面倒みなあかんくてな、で、私あんたに言うの完全に忘れてん。
A:That's okay.May be we can see a movie some other time.
そら良かった。ほなまた別の時に私ら映画見に行けるやん。

関西出身の私の頭の中では、全ての英語が瞬時に関西弁のニュアンスで理解されていくので、このような訳になる。でも、この教材がコミカルに感じられるのは、私の訳が関西弁訳だからだけではないような気がしてならない。日本の教育の中で使用される英語の教材は、内容自体が極めて真面目な事が多いように思う。読んだ後にくすっと笑ってしまうような楽しみがある方が、何語を学習するのであっても楽しいような気がするのだが。しかし、教材から漂って来る、この少しのいい加減さと妙なプラス思考。この空気感は狙って教材に組み込まれたものだとは思われない。これは、確かにアメリカで感じたものと同じだった。

知的発達障害の家族の日々7



大谷　多加志

キャッチアンドリリース?

何事にも、限度があります。親切も度を過ぎると鬱陶しく感じるように、一般的には良いことでも、限度を超えると害になります。弟の場合も、色々なことの区切りや限度が難しかったような気がします。このことを感じたエピソードの１つが、「夏休みのセミ捕り」です。

小学校高学年の頃、弟は一人でセミを捕まえられるようになりました。以前は狙ったところに網を振り下ろせなかったり、そもそもセミがうまく見つけられなかったりしました。そのことを思うと、たいした成長でした。本人も手応えがあったようで、朝から出かけていっては、次々とセミを捕まえていました。

ある日、弟が帰ってきた時、虫かごの中は文字通り隙間なくセミでいっぱいでした。かごがいっぱいになるまで、やめ時がわからなかったようです。満足気な弟の顔と、苦し気に悶えるセミの鳴き声が、なんとも対照的でした。“放してあげたら・・・”と声をかけてみると一応そのつもりではあったようで、しばらく眺めて悦に入った後、縁側に座って１匹ずつ放していました。

呪いのような、断末魔のようなセミの声・・・

異変は、その夜に起きました。

セミの鳴き声が聞こえ、ふと目が覚めました。セミの鳴き声はちょっとやそっとのものではない、大合唱です。時計を見ると、夜中の 1 時。もちろん真っ暗で、セミが一斉に鳴き出すような時間ではありません。両親や、近所の家の人も数人、起き出してきました。

鳴き声は、我が家の庭から聞こえていました。あり得ない時間帯、あり得ない音量のセミの合唱を、両親と近所の人と一緒に呆然と眺めていました。

事の次第はこうです。弟は縁側からセミを放していましたが、かごにすし詰めにされ、疲弊しきったセミたちはろくに飛び立つこともできず、庭の木にかろうじて止まったり、そのまま地面に落ちているようなものもいました。そうして、かごいっぱいのセミが、我が家の猫の額ほどの庭に集まることになりました。そのセミたちがようやくすし詰めのダメージから回復し、生命力を振り絞って鳴き始めたのが、ちょうど夜中のことだったのでしょう。

事情を知らない人が首を捻る中、近所の人も巻き込んだこの騒動の原因が我が家にあるという、思い当たった真相を言ってもいいのもどうかと悩みつつ、大音量の中、平気で眠り続ける弟を恨めしく睨み付けていました。

振り返ると、このような限度のなさや加減の難しさという問題は、弟の生活の中にずっとあったように思います。家の外では合わせ過ぎて疲れたり、反動で家ではまったく欲求の押さえがきかなかったりもしていました。色々なことの「適度」の大切さを感じています。

対人支援点描（５）

「Café de Monk in えりも」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

1.Café de Monk との出会い

「Café de Monk in えりも」の活動を立ち上げた曹洞宗法光寺の佐野俊也住職との出会いは、私が障害（精神）福祉の現場である前職を辞めることを決意し、以前より兼務していた幼稚園の園長業務へ軸足を移そうとする中でのことだった。ある時、幼稚園の副園長より、佐野住職さんが牧師である私を訪ねてきたという伝言があった。主旨としては、Café de Monk という活動をえりも町で始めるので仏教関係者（僧侶）だけではなく、キリスト教会の牧師さん、神社の神主さんにも協力していただきたいということであった。（ちなみに、佐野住職さん、そのご子息（若住職さん）は、教会付属の私が延長をしている幼稚園の卒園生である。副園長は教会員であるが家は、法光寺の檀家となっている。前職の浦河べてるの家の佐々木実理事長はクリスチャンであるが、実家が法光寺の檀家でもある関係で今も檀家となっている。日本的な状況かもしれないが、違いよりも共有しているものを受け止めあうおおらかさがあって、とても関係が良い。）

Café de Monk の活動自体は、僧侶や牧師が協力して被災地で移動喫茶と傾聴ボランティアの活動を行っているという“業界の”ニュースで伝え聞いていた。2015 年に名古屋で開催された日本キリスト教社会福祉学会大会に参加した際にも、金城学院大学名誉理事長となっていた柏木哲夫先生からの紹介でも話を伺い、「なかなか意欲的で良い活動をしているなぁ。」と感心して聞いていたぐらいであった。自分にとって Café de Monk の活動は遠い話であったといえる。

その Café de Monk の活動がえりも町でも始めるので、牧師で、幼稚園の園長をしていて、障害福祉事業所で勤める心理士であるという理由でお声をかけていただいたのだった。

しかも、意外なことは、これまで地域の精神保健活動で連携をとっていた浦河ひがし町診療所の川村敏明医師、高田大志 SW らが東北に視察に行って Café de Monk の活動を知り、感銘を受け、日高東部 3 町（浦河町・様似町・えりも町）でも同様の活動を始めたいと感じ、東北で Café de Monk の活動を始めた曹洞宗通大寺の金田諦應住職から佐野俊也住職につながり、佐野住職から私のところへも声がかかったという点であった。

私にとって、重要なのは、普段から親しく連携を取り合っている医療関係者から福祉関係者の私につながっていったのではなく、医療関係者がそうではない領域の必要性を感じ佐野住職につながりを求めたことであり、宗教関係者ということで私にもお声をかけていただいたということにある。

2. 支援の専門化と脱専門化

医療関係者の医療、福祉関係者の福祉は、それぞれ高い専門性と活動の場所がある。同時に、その枠組みの中でしか活動できない。

人間や社会の営みの医療化、福祉化という関係の中でしか捉えられなくなってしまう専門化という弊害が生じている。たとえば、医療現場にあって出会う非支援者は患者であり、その患者の治療という視点から支援が組み立てられる。福祉現場においては、福祉サービスの利用者とその支援の枠組みが基本となる。医療も福祉も、それぞれ医療という中心点から、福祉という中心点から外へ向かって放射状に意識が向けられていく。地域支援というモノの見方であったとしても、基本的に、そして教科書のようなものにおいても、そのような見方で解説がなされ、制度においても医療は医療、福祉は福祉にのっとって展開がなされている。また、そこには、その領域分野の専門家が配置され、活動する。このこと自体は、けっして特別なことではない。

だが、地域にあって当事者（患者・利用者など）を中心に観点を移した途端、医療者の医療的支援、福祉家の福祉的支援は自らの専門性と領域が活動を制限させるものとなるように思う。当たり前のことであるが、患者となった人間はいても、患者という人間はいない。一人の人間のすべてを患者という括りで治療し、支援するということはできない。地域という社会についても、すべて医療と福祉関係で構成されるということはないのである。当然、医療や福祉の及ばないところがでてくる。たとえば、医療や福祉が老年期、看取りまで領域を広げたとしても、焼き場へお見送りをする直後の死後、さらにその後の死後まで医療や福祉の専門とするのだろうか。天国に極上の個室とベットを用意できたとしても、誰も差額を徴収することも、払うこともできはしない。こうした点を自覚すればこそ、わきまえのある専門家は他に協力を求め、橋渡しをするなどを必要とする。

だが、医療中心（至上）主義、福祉中心（至上）主義の発想に染まりすぎるとインフォーマルな人々は、非専門家として、そこではボランティア、素人という位置づけの立場におかれる傾向があるのではないか。個人的な体験であるが、私自身が臨床心理士の資格を取るきっかけとなったのが、医療関係者との間で牧師（もしくは宗教家）は連携の相手とはみなされなかった経験がある。前回の話題にも通じるところがあるが、国家資格や社会的に認められた民間資格がないと専門性が認められない現実がある。控えめに、私が逆の立場であったならば、一応、相手が何者か慎重になるだろう。だが、問題は別のところにある。ある専門領域と専門家が自らの立ち位置を中心に据え、外へ向かって放射状にモノを見る世界の外側に遠いほど、部外者となり、専門外の者と見なされるところに問題がある。

だが、何を基準として専門家、非専門家とされるのだろうか。社会構成主義の観点を援用すれば、誰もがそれぞれの立場の専門家であり、それ以外の他者の立場は非専門家であるといえる。ルネサンス期の天才レオナルド・ダ・ヴィンチのようなマルチに才能を発揮した人物でもなければ、何をやらせても玄人はだしの専門家は滅多にいない。少なくとも私はお会いしたことがない。「あの人は天才だ。」と名指しされる先生方でさえも、ある分野のことに秀でた人物であった。つまるところ、ある領域の最高度の専門家であったわけで、ダ・ヴィンチのような人物であるという意味で「天才」とは呼ばれていなかった。したがって、他の領域の専門家から見たら、（敬意は払われるかもしれないが）その最高度の

専門家もたちまち非専門家という立場となってしまう。それは、専門外の領域や社会においても立場が確立されている政治家、弁護士、医師などの職業に携わる者が「〇〇先生」と敬意を払われていたとしても同様である。たとえば、個人的な思いとして医師に敬意と信頼は置いても、採血は看護師にしてもらいたい。その方面の専門家として看護師の方が技術ある感じがするからである。医師を「〇〇先生」と敬称したとしても、全領域に専門性が発揮されるわけではない。専門家は、その領域についての専門家に過ぎないし、本来の活動範囲も、その枠組みにとどまる限り、専門領域内の活動でしかない。

こうしたことから、連携が活き、地域社会の多種多彩な人々と何かをするために、専門家は専門化した各領域至上主義から脱専門化に降りていくことが必要であると思う。

1. 終わりに～プシケー＝魂＝精神＝心理の連続性

それゆえ、Café de Monk in えりもの活動のきっかけと、私自身が関係するようになった経緯は、脱専門化の動きとして大変興味深く感じている。

先に個人的な体験を述べたが、宗教家という微妙な専門家は、どこに持ち場があるのだろうか。精神医学を意味するサイキアトリー、精神療法と心理療法を意味するサイコセラピー、心理学のサイコロジーのサイコ(Psycho)は皆、ギリシャ語の魂を意味するプシケーに由来する。そのプシケーの世話をするということが宗教家や哲学者の専門であった。こうした指摘は、語源や歴史の話になるのかもしれない。現代では、ドイツなど国教会がある国以外では、あまり宗教者の専門性が認められないのかもしれない。特に精神もしくは心理を診る/看ることにおいては､元々本家である宗教家も専門的なトレーニングや科学的な深化を遂げていない。生きた化石となっている。半面、精神や心理の専門家が精神もしくは心理的な支援に取り組んだとしても総合的な意味でプシケーを診る/看るのかというと、自覚的に専門外というのではないか。

だが、本来、魂＝精神＝心理という連続したものの間に空白があるとしたならば、どうすることが良いのだろうか。

医師や心理士が宗教家になればよいのか、それとも宗教家が医師や心理士になればよいのか。一部、両方にまたがる人物がいたとしても例外であるだろうし、誰もがマルチな専門性を発揮するダ・ヴィンチにはなれはしない。各分野の専門性が高度になっている現代であればなおさら無理な話ではないだろうか。

そこで、私たちは専門性を持ちつつできることは、脱専門化を図りながら互いの専門性が発揮できるように、自らの専門外の専門家らと連携していくことに鍵があるのではないだろうか。

特に、えりも町のように専門的な医療機関もなく、福祉事業所もない中での活動は、専門家からすれば非専門家と見なされる地元の人々の協力が必要となる。そして、その活動の場は、医療の出先機関でもなく、福祉事業に特化するのではなく、脱専門化された活動の場が形成される必要があるように思う。

Café de Monk in えりもの活動がどこに行きつくのか、未だ計り知れないが、一つの試みとして可能性を感じている。

「あ！萌え」の構造：序論

（5）

応用人間科学研究科　齋藤清二

17.「カップ焼きそば現象」の第 3 の様相――ハルカの入れたお茶

さて今回はいよいよ、前回の予告通り、「カップ焼きそば現象」の第 3 の例示である「ハルカの入れたお茶」事件について考察してみよう。何度も繰り返しているように、「カップ焼きそば現象」とは、アニメ「みなみけおかえり」において、南家の三女千秋（以下チアキ）によって提唱された（哲学的）仮説である。ハルカ（南春香）は、チアキの姉（三姉妹の長女）で高校 2 年生。ハルカは南家では、母親的な役割を担っているが、周囲の男性へのモテ度ではナンバー1である。さすがの天才少女チアキもハルカには頭が上がらない。

さて、問題のシーンを、できる限り正確に描写してみたい。元旦、南家を訪れたタケル（おじさんと呼ばれているが実は従兄）が、チアキとトウマやクマのふじおかに悩みを聞いてもらったりして時間を潰しているところに、ハルカとカナ（2 女）が初詣から帰ってくる。ぐちぐちと愚痴をチアキとトウマに語り続けていたタケルに、ハルカは「今、新茶入れますね」と笑顔で声をかけ、「新茶」と書かれた茶筒から急須にお茶の葉をいれ、湯飲みに注いだいっぱいのお茶を差し出す。それに喜んだタケルは、一口飲んで、「ありがとうハルカちゃん。やっぱり新茶はいいね」と、笑顔を見せる。チアキとトウマは顔を見合わせながら、「さすがはハルカ姉様、あの面倒で繊細なタケルを一発で元気づけた」「お茶入れただけだぞ」と感心する。ところが、そこへカナがトイ

レから戻ってきて、「あーあ、ハルカ、間違っているよ、それは古いお茶だよ」と指摘する。慌てて茶筒を確認したハルカは恥ずかしさに頬を染めるが、タケルも同時に顔を赤らめる。それを観ていたチアキとトウマは口を揃えて、「カップ焼きそば現象！」と連呼する。

さて、上記の「ハルカの入れたお茶事件」では、いったいどこが「カップ焼きそば現象」なのだろうか。単純に考えると、「ハルカの入れたお茶」は、実は新茶ではないのに、ハルカとタケルによって、新茶だと信じ込まれていたということから、「お茶」と「新茶」の関係が「焼きそば」と「カップ焼きそば」の関係であると考えるのが自然である。しかし、よく考えてみると、実はこの事件には、新茶は一度も登場していない。実際に登場しているお茶は一種類だけで、それはそもそも新茶ではない。ただ単に複数の当事者によって、新茶だと信じ込まれていただけである。今回の事件で最も重要なポイントは、本来「新茶」ではない「ただのお茶」が、新茶と同じ効果を発揮したということである。ということは、言語的な見かけ上の「相似」とは裏腹に、ここで「焼きそば」と「カップ焼きそば」の関係と同等の関係にあるのは、「お茶」と「ハルカの入れた（特別の）お茶」の関係であるという考え方がなりたつ。そこで生じた「タケルを元気にさせた影響力」は、見かけ上、「新茶の効果」だと信じ込まれていたが、実は「新茶」ではなく、「ハルカが入れた」という部分に由来していたということになる。その効果に対して、最初は「新茶だから」という説明が共有されていたが、カナの登場によって、その説明は間違っていたということが明らかになったのである。

そう考えると、ここでは、二組のカップ焼きそば現象が重なって生じていたとも言える。第一のカップ焼きそば現象は「お茶」と「新茶」であり、第二のそれは「お茶」と「ハルカの入れたお茶」である。そして、この二つのカップ焼きそば現象同士が、「同じものではないが、異なるものでもない」という「カップ焼きそば現象」を満たす関係を形成している。かなり、頭がごちゃごちゃしてくる状況ではあるが、そこに単に「勘違い」が生じていたということだけであれば、とりたててチアキとトウマが「カップ焼きそば現象」を連呼するほどの重要性はない。そうではなくて、「説明如何に拘わらずそこに明らかな癒やしの効果が生じている」ということが重要なのではないだろうか。つまり、「似たもの」は「区別できない効果」をもたらすのである。

ここで起こっている現象は、実は医療現場などで頻繁に生じている「プラセボ＝偽薬効果」と言われるものに近いと思われる。次節では、「カップ焼きそば現象」に付随して起こると思われる「プラセボ効果」について、考察の対象を広げてみたい。

18.「カップ焼きそば現象」と「プラセボ効果」

唐突な話題の転換で恐縮だが、読者のみなさんは、オペラ鑑賞に興味をお持ちだろうか。ドニゼッティの『愛の妙薬』という、比較的知られたオペラがある。ドニゼッティは、ロッシーニ、ベルリーニなどと並んで、イタリア・

ベルカント・オペラを代表する作曲家である。この作品は基本的には、オペラ・ブッファ（喜劇）の伝統に属するのだが、魅力的な美しい曲がちりばめられており、その登場人物のキャラクターもストーリーも、単純な喜劇とは言えない、叙情に満ちたロマン主義的な要素をもっている。最近では、一流歌劇場でのライブ上演のＤＶＤが、比較的手頃な価格で手に入るので、家庭でも手軽に楽しめる。ここで私が紹介したいのは、音楽の話と言うより、ストーリーに関する話なのだが、要するにこのお話は、医療で言うところの「プラセボ（偽薬）」のお話なのである。しばらくおつきあい願いたい。

ｉ）主観が変わると関係が変わる

『愛の妙薬』の主人公ネモリーノは、純朴な田舎の青年である。彼は、裕福な農場の娘で、奔放で勝気な性格の美人アディーナに一途にほれているのだが、相手にされない。「君のためなら死ねる」などと、『愛と誠』に登場する石清水（いわしみず）のようなせりふを臆面もなく口にするのだが、アディーナに、「一人の人にしか恋できないなんて病気よ」と、軽く一蹴される。ただし、アディーナは、一途に自分を想ってくれるネモリーノに好意を持っていないわけではない。しかし「いつもグズグズため息ばかりついている」ネモリーノを、うっとおしいと感じており、いつも冷たくあしらっている。

そこへ、博士で医者を名乗るペテン師のドゥルカマーラが登場する。彼いわく、「私の薬を飲めば、万病全て治り、老人は若返り、不美人は美人になる」。普通であれば「そんな馬鹿な」と思うのだが、村人達は素朴にそれを信じて、我先にと薬を買う。このオペラは200年ほど前の作品だが、この「万病に効く薬」というものは、「健康食品」とか「ミラクルエンザイム」とか「アンチエイジング・サプリメント」とか「ビタミンＣ大量療法」とかに姿を変えて、全て現代にしっかりと生き残っている。いや現代のほうが、「科学という装い」が強化されているだけ、悪質かもしれない。

正直で純朴で、文字通りに物事を信じる「字義主義者」であるネモリーノは、ペテン師のドゥルカマーラをすっかり信用して、アディーナの愛を勝ち取るために「愛の妙薬」を買うことにする。ここでちょっと面白いのは、「惚れ薬」とは、相手に飲ませて効果を発揮すると考える方が普通だと思うのだが、ここでは、「自分が飲む」ことによって「相手に惚れさせる」効果を発揮するということになっている。ペテン師のドウルカマーラでさえも「こんなまぬけはみたことがない」とびっくりするほどのネモリーノは、有り金を全部はたいてその「偽薬」を買って、さっそく飲んでしまうのであるが、「その効果が出現するのは、まる一日後」だと言い含められる。しかもその「偽薬」は実は安葡萄酒なので、それを飲んだネモリーノは「うーん確かに効いてきたぞ、身体中に力がみなぎるようだ」と効果を益々信じてしまう（要す

るに酔っぱらったのだが）。この辺りは、現実においてプラセボ（偽薬）効果が発揮されるプロセスを非常にうまく表現している。プラセボとは、「自分（主観）を変容させる薬」なのである。だから、「何かが変わったという感じ」はプラセボ効果を著しく増強させる。それが「何が変わったのか」はとりあえず関係がない。そしてプラセボの効果が発揮されるためには、「文字通りにそれを信じている」ことが必要なのである。

おもしろいことに、一日後にはかならずアディーナの方から自分を愛するようになる、と信じているネモリーノの態度からは、いつものおどおどした自信の無さが消え、アディーナからみると、今までにはない自信に満ちた落ち着いた態度に映る。これはアディーナを混乱させ、それまでのネモリーノとアディーナとの関係は明らかに変化し始める。

ii）関係が変わると状況が変わる

「一日後に妙薬の効き目が発現すれば、あこがれのアディーナは、必ず自分に恋をする」という、根拠無き確信を固く抱いたネモリーノは、今までとはうって変わって、落ち着いた冷静な態度でアディーナに接するようになる。すると、これまで、自分に対して一途な関心を抱いていたはずのネモリーノの変わりように、アディーナの方が揺さぶられることになる。両者の「関係」が変化して来たのだ。

余談だが、優秀で能力の高い女性の中には、「自分に惚れるような男性に惚れることはできない」という心的態度をもっている人がいるように思われる。つまり、相手が自分に好意を示せば自分は醒めてしまい、相手が自分に無関心であればあるほど、自分は相手に関心を持ってしまうのである。当然のことながら、このようなパターンの関係は、ハッピーエンドになることは、理屈上はないはずである。アディーナもおそらくその一人なのだが、そのうまくいくはずのないパターンが、「愛の妙薬」のもたらしたパラドクスによって、変化するのである。

そこで、ネモリーノが自分に関心を示してくれないことに腹をたてたアディーナは、強引で自信家の軍人であるベルコーレのプロポーズを、ネモリーノへのあてつけのために受け入れてしまうという暴挙に出る。結婚式はその日のうちに行われることになり、ここまで泰然自若としていたネモリーノは、大いにあわてることになる。「今日中に結婚されてしまっては、妙薬の効き目が間に合わない！」

ここから、ストーリーは急速に展開する。絶望したネモリーノは再びペテン師のドゥルカマーラに「なんとかしてください！」と泣きつく。ドゥルカマーラは、抜け目なく「妙薬をもう一本飲めば効き目が早まる」と言う。無一文のネモリーノは、恋敵のベルコーレ軍曹から、軍隊への入隊を条件に契約金を手に入れ、再び「妙薬」を手に入れる。しかし、軍隊の出発は１日後なので、もしアディーナの愛を手に入

れても、１日後には分かれなければならず、兵隊になれば戦死するかもしれない。

ここでネモリーノは、「一日でもアディーナの愛を得ることができるのなら死んでもかまわない」と再び、「石清水的態度」を明瞭にする。このあたりから、この歌劇の「ロマン派」的性格が、明瞭に発揮されるようになる。

iii）愛の本質の二つの側面

この歌劇は、基本的にはばかげた喜劇的なストーリーなのだが、実は人間の愛の本質に関わる深いテーマに触れる部分がある。ここでは先入観にとらわれず、少し私なりに解釈してみたい。

第一幕の、まだネモリーノが妙薬を手に入れる前の、アディーナとの二重唱「ちょっと、アディーナさん」では、とても深遠な「愛の哲学」が歌われている。

アディーナは歌う。

「一人の人しか恋せないなんて病気よ。私は毎日新しい恋をするの。そうすれば楽しいわ」

ネモリーノが答える。

「毎日違う人に恋するなんて僕にはできない。僕は一人の人を恋する」

アディーナは続ける。

「そよ風に聞いてご覧なさい。『なぜあちらこちらへと吹くのか？』と。そうしたらこう答えるでしょう『それは生まれつきだからよ』と」

常に一つにとどまるところなく、変幻自在に変化する妖精、それがアディーナである。しかし、ネモリーノはこう切りかえす。

「小川に聞いてご覧なさい。『なぜ自分が生まれた山から流れ出すのか？』と。生まれたところから流れ出せば、必ず海に飲み込まれて消えてしまうというのに」

これはなかなか鋭い返答だ。とてもお馬鹿さんの返答とは思えない。ネモリーノは続ける。

「小川はこう答えるだろう。『見えない力が私を導くのだ』と」

これは、愛のもう一つの本質を的確に言い表している。愛の志向性は、決してあらがえない強制力として人間には感じられる。それに対して、「なぜ？」と問うことは無意味だ。それは見えない力に導かれているのだ。アディーナとネモリーノの愛の哲学は、ここでは交差することはない。それは愛の相容れない二つの側面である。一方は変幻自在でとどまることを知らず、自由奔放。もう一つは盲目的な意志と欲望に支配されており、いささかの自由もない。しかしそこには、避けられない運命を受け入れる崇高さがある。この愛の二つの性質は、相容れないものであるが、この相反するもの同士が、まさに互いに相手を必要としているのである。常に変化し続ける現象と、どうしようもない強制力をもつ「志向性（欲望・関心とも表現される）」は、互いに互いを求め合う。この両者が、同じものではないが、異なるものでもなく、実は一つのものである（不一不異）ということが、おそらくは、愛の原理である。

その相容れないものが、ドラマの第２幕では結ばれるのだ。そのためには、「偽薬＝愛の妙薬」が必要なのだ。愛の妙薬は、エリシール・ダモール、すなわち、愛のエリクサー（魔法の万能薬＝錬金術の賢者の石）なのである。

ⅳ）偽りの状況は真実を生み出し得るか？

最愛の人アディーナが、恋敵のベルコーレ軍曹と今日中に結婚すると聞かされたネモリーノは、軍隊に入隊契約をしてお金を手に入れ、「愛の妙薬＝実は単なる葡萄酒」を、ペテン師のドゥルカマーラから手に入れる。ところが、事態は、ネモリーノ自身も主要な他の登場人物も知らないところで展開する。少し離れた町に住んでいるネモリーノの伯父が病気で死んで、莫大な遺産をネモリーノに残したという情報が、小間物屋を通じて村娘達に伝わり、彼女らは、今や村の名士となったネモリーノとお金目当てに結婚しようとして、ネモリーノの周りに群がる。

追加の薬を飲んだばかりのネモリーノは、葡萄酒で酔っぱらっている上に、周りの村娘達の変わりように唖然とするが、すぐに「これは、愛の妙薬がいよいよ効果を発揮し始めたのだ」と情況を解釈して納得する。そこへ、事情をしらないアディーナとドゥルカマーラがやってきて、村娘達にもてまくっているネモリーノを見て仰天する。

ここで傑作なのは、ペテン師ドゥルカマーラの反応である。彼は、自分の売った薬がインチキ薬であるのを誰よりもよく知っているのに、ネモリーノに群がる娘達をみて、「これは、オレが売った薬が本当に効いたのに違いない」とあっさり信じ込んでしまうのだ。こういうことは、実は医療でもしばしば起こる（内緒だが）。あまり効くはずがないと思う治療を、患者さんに試してみると劇的に効くときがあり、そうすると医師は、自分の治療が本当は正しかったのだ、と信じ込んでしまうのである。慣れない漢方薬などを初めて使った時などによくこういうことが起こる。

アディーナは、ネモリーノが、自分の愛を得るために、軍隊に入隊して（つまり命を捨てる覚悟で）、愛の妙薬を手に入れたということを知って、それまで馬鹿にしていたネモリーノの崇高な愛情を知り、「自分はなんというひどい仕打ちをしてきたのだろう」と深く反省する。

さてここからが、アディーナの本領発揮である。ネモリーノが、全ての女性に愛される力を薬によって得てしまったと信じ込んだアディーナは、「あなたもこの薬を飲めば、全てが解決する」と売り込もうとするドゥルカマーラに、毅然としてこう答える。

「先生のお薬は本当に効果があるということを私は知っています。でも私にはこの薬は必要ないのです。私は薬よりももっと良く効くものをもっています。それは、私のまなざしであり、私のほほえみであり、私の愛撫であり、私そのものです。私自身こそが『愛の妙薬』なのです。だから私にはこの薬

は必要ありません。ネモリーノは必ず私を愛するでしょう」

これを聞いたドゥルカマーラはアディーナの態度に舌を巻いて、「確かにあなた自身が『愛の妙薬』だ。あなたのほうがワシより一枚上手だわい」と素直に負けを認める。

結局のところ、この後の話はとんとんとんと進んで、ネモリーノは有名な「人知れぬ涙」のアリアを歌い、その後、「今こそ、『愛の妙薬』は真実のものになるわ。私はあなたを愛しています。私はあなたを幸せにしたいのです」と告白するアディーナを、ひっしと抱きしめて、めでたしめでたしとなるのである。

…このお話は色々な意味でとても良くできていると思う。

最近問題になっている、「病気の押し売り＝disease mongering」とか、「医療化＝medicalization」とかいう問題と関連付けて考えても、200年も前のこのオペラは多くのことを教えてくれる。「異性にもてない」という問題が薬で治るのならば、「異性にもてない」ということは「病気だ」ということになってしまう。だから、「愛の妙薬」を売り歩くというということは、ある意味では「病気を発明している」ということになる。もちろん、このような「病気の発明」を受け入れる一般市民には、それなりの理由があり、それ自体を非難することはできない。

しかし、愛が得られないことも、愛に苦しむことも、「薬で治すようなものではなく、それは『私』と『あなた』と二人を包む関係性の問題なのだ」ということを見抜いたアディーナの知恵こそが、問題の本質を明瞭に示しているのだ。しかし、同時に彼女には、薬の魔力を無邪気に信ずるネモリーノという相方が必要なのだ。

しかし、めでたしめでたしのネモリーノ君だが、勘違いまくりの結果オーライで、果たしてこのあとどういう運命をたどったのだろうか。ちょっと心配なところではある。

カップ焼きそば現象の考察から，突如としてプラセボ効果の話となり、ある意味では、萌えと恋愛という本題に戻ってきたとも言えるが、果たしてこの序論はいつまで続くのであろうか？　次回にご期待。

海の向こうにでて見れば

（４）すまい探し

石田 佳子

海外で暮らし始める時、最初に頭を悩ませるのは、住まいを決めることだろうと思います。言葉も商習慣も違う土地勘のない場所で、大事な契約をするのですから、不安や戸惑いが生じることでしょう。そこで今回は、数年前に私がマレーシアで体験した住まい探しについて振り返ります。また、当時はただ不可解でしかなかったけれど数年暮らす間に「あれはこういう理由だったのだろう」と推測できるようになった事柄については、（※　）の内に付記します。

溢れる情報

一番楽なのは、知人のツテを頼ることでしょう。しかし、「失敗も良い経験になるから、なるべく自力でやってみよう！」と考えた私たち夫婦の住まい探しは、日本に住んでいる時から始まりました。インターネットの専用サイト（英語版）を使って広範囲に情報を集めたのです。まず、①コンドミニアム（日本の高層マンションにあたる；以下コンド）の賃貸物件であること、②公共交通機関を利用しやすい場所にあることを前提条件として、手当たり次第に家賃相場と周辺環境（徒歩圏内にどんな施設や店があるかなど）を調べました。次に、物件ごとの条件（広さ・価格・間取り、築年数など）を比較して候補となる地域を絞り込み、そこの物件を扱っている仲介業者とメールでやり取りを重ね、現地に到着したら効率的に内覧して回れるよう予定を組みました。

（※ただし、メールでの問い合わせには返事がない場合の方が多く、返事が来たのは６件中１件位です。当時は理由がわからず、「マレーシアの業者は仕事をする気がないんかーい？」と訝しみましたが、今思うと不動産市場が短期間で流動すること、会社に所属しない個人の業者が多いことから、外国に住み入居が数か月先という―すぐ契約に結びつかない―顧客には、時間やエネルギーを割きたくなかったのかもしれません。）

また、クアラルンプールには引退後にロングステイしている日本人がたくさん住んでいて、自宅訪問や情報提供の要請に快く応じてくれるため、現地の情報を得ることについては、大船に乗ったつもりでいました。そのため、現地へ行って実際に住まい探しを始めるまでは、「せいぜい一

週間もあれば決まるのではないか？」と安易に考えていたのです。

現地へ行って現実を知る

しかし、いざ現地で住まいを探し始めると、予想外の問題に次々と遭遇しました。まずは日本からメールで希望を伝えておいた複数の仲介業者と会って次々と物件を見せてもらいました（2 日間で 14 件）。しかし、案内されたのは希望と異なる地域にある物件や予算オーバーの物件ばかりです。どの業者も一向に悪びれる様子もなく、「〇〇地域のコンドを見せて欲しい」と頼んでも「あの辺は治安が悪いから辞めた方が良い。▽▽地域にするべきだ」などと言うのでした。

（※後になって、〇〇地域の治安は決して悪くないこと、仲介業者には得意な地域や顧客層があって守備範囲以外の物件は持っていないことがわかりました。同業者間で物件を融通し合うことは可能ですが、手間がかかる上に手数料が減ってしまうので、そうしたくなかったのでしょう。だから、顧客の要望に合った物件を探す代わりに、顧客の要望を変えさせる努力をするのです。ありていに言ってしまえば、顧客のニーズより業者の都合を優先している訳で、『お客様は神様』といった対応を理想とする日本人の感覚とは 180 度違います。日本の業者対応に慣れた顧客の目には、不誠実な対応のように映りますが、マレーシアの業者対応に慣れてしまうと、相応の対価を支払わなくとも手厚いサービスを期待する日本人顧客の側に問題があるようにも感じます。この辺りの感覚のずれが、『日本の常識は世界の非常識』と言われる所以なのかもしれません。海外では、高額の手数料を支払う場合は別として、労を厭わず丁寧に対応してくれる業者は稀な存在でそのような業者と出会えたら非常にラッキーなのだと考えるべきでした。）

街の作りが日本と違う

街を歩き回ると、驚くような発見ばかりでした。車社会のクアラルンプールでは、道路の作り方に歩行者への配慮が欠けているため、地図上は近く見えても歩くと遠い（車が多くて道路を渡れないため迂回しないと辿り着けない）、舗道がなくて車道の端を歩かなければならない、通路に 2,3 メートル幅の深い穴が空きっぱなしになっているなど、不便で危険な道が随所にありました。また、治安や雰囲気や衛生状態などの居住環境については、普通の日本人の感覚では耐えられないほど劣悪な地域もあるため、実際に歩き回って自分の目・耳・鼻・直感を総動員して『感じ取る』ことが不可欠だと思いました。

住みやすさが人によって違う

クアラルンプールで暮らしている日本人退職者（MM２H ビザ保持者）の多くが、（マレーシアでは購入も維持も割高な）自家用車を持ち、日本人の多い地域やコンドに住んで、日本人同士の交流（ゴルフやテニスや麻雀など、日本人会のサークル活動）を楽しんでいました。一方、私たち夫婦は車を持たずに公共交通機関を使って移動し、ゴルフやテニスより街歩きや外食を楽しもうと考えていました。つまり、ロングステイの意味や目的―価値観やライフスタイル―が違うた

めに、求める生活の仕方や気になるところ、“住みやすい”と感じるところが違っていたのです。

（※今考えると、一概に“現地の情報”と言ってもどんな立場から発信されているかによって、違う内容になるのは当たり前でした。しかし、当初は多くの情報を得られることに満足してしまい、その意味―自分たちにとってどうか？―にまで考えが及びませんでした。また、日本人居住者らの暮らしぶりを知るにつれて、「日本人コミュニティと深く関わることには、メリットもデメリットもある」と考えるようになりました。海外在住日本人社会の問題については、回を改めて書くつもりです。）

いい加減な情報と業者の対応

結論から言うと、私たちの住まい探しは難航し、約一ヶ月間にわたる悪戦苦闘の連続となりました。具体的には、安ホテルを転々としながら、昼間は物件や周辺地域を見て歩き、人に会って話を聴き、口コミや貼り紙から情報を集めました。夜はホテルに戻ってネットや新聞・雑誌から情報を集め、候補となる業者や家主に片っ端から SMS を送り電話をかけて内覧の約束を取り付けました。そこまでしても、内覧にこぎ着けるまでは一苦労で、第一希望のコンドについては 50 件以上に問い合わせて数件の空き物件しかないことを知る（募集広告を出していてもその物件を扱っていない業者が多かった）、広告掲載日に朝イチで電話を入れても「もう無い」と言われる（他の物件へ誘導するための釣り広告だった）、「明日見せる。時間は後で連絡する」と言われて待っていると連絡がない（何か不都合が生じたか、やる気が失せた？）といったことが当然の如くありました。

また、なんとか内覧の約束を取り付けても、待ち合わせの場所に業者が来ない（すっぽかされて連絡がつかなくなる）、家具付きと謳っているのに家具はおろか台所もない（広告が嘘だった）、夜遅く見に行って翌朝「借りたい」と電話を入れても「もう決まったから高い方の部屋にしたら？」と言われる（そんなバカな？）、業者が鍵を間違えて持参したため内覧できず、お詫びに朝食をご馳走になる（･･･？）といった珍事にも見舞われました。

（※そもそも、ネット情報や仲介業者は玉石混交と言うべきでしょう。特にネット情報には誇大広告や釣り広告が含まれているため、実在の物件や業者や条件が出ているとは限りません。また、マレーシアでは「日本人は金持ち。あるいは交渉下手」と見られているため、通常より高い料金―所謂“日本人価格”―をふっかけたり、最初から高い料金を設定して値引きに応じるふりをして安く見せたりする業者もいることがわかりました。）

それでも、日本のように標準的な設備が備わっている物件ばかりではなく、内装がどうなっているか（壊れている箇所はないか、風呂/シャワーや台所があるか、家具や電化製品はつくか）、仲介業者がつくか（節約のため家主が自ら交渉する場合もある）などについて、同じコンド内でも

ユニットによって条件が異なるため、内覧（確認）しなければ賃貸（契約）もできないのです。結局、私たちは約一ヶ月の間に 54 人の仲介業者または家主と連絡を取り合い、10 組の仲介業者または家主と会い、33 件の物件を内覧しました。

見る目を養う他にない

最終的には、希望通りのコンドに入居することができ、現在も満足して住んでいます。今思うと、情報量の多さに幻惑され、振り回されて、その意味や質を見分けることのために時間とエネルギーを費やした住まい探しでした。途中で「これでは砂漠で針を探すようなものだ」と嘆いたりもしましたが、問題は「多くの役に立たない情報の中に、僅かながらも貴重な情報が紛れ込んでいた」ことです。「良い物件や業者や家主と出会えるかどうかは、運次第」と言う人もいるかもしれませんが、その運をつかむ―良い情報を見極める―ためには、実際に足を運んで多くの物件を見て回り、多くの業者や家主と会って『真偽を見分ける目を養う』ことが、必要だったに違いありません。

清武システムズ

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

～シーズン１「SM クラブの受付」～

エピソード５：「快楽」と「逸脱」そして日常への関心

しすてむ❤口きよたけ

前回、無店舗型は現在出せないようなことを書いていましたが、「店舗型」の間違いです！

僕の弱点なのですが、何とな～く過ごし、見直しをしない。しかも、基礎がなってないので、かつ、見直しをするけど、おっちょこちょい。それらが、見直しをしていないかのよう他者に映る。またやってしまった～と思うけど、うん。これが私の最大だった！ゴメンナサイ！でも、こういう人も結構大事だと思わない？人に恵まれているな～って思うことにつながっているんです～。言い訳なんですけどね。

ちょっと、どこか一般的な感覚とズレているように思われることもあるようです。

これって実は、マガジンを書き始めて改めて意識したことです。そして、もう一度言います！このズレを大事にしたい。でも、ちょっとズレっぱなしも如何なものかと思っている次第です。

性風俗に関することを書くなら、それについてリサーチをしたり、書くための枠組みを決める。ですが、そのあたりも甘い。ま～こんなもんで、いいかな？と思ったりしてしまい、「専門性」の低さを問うたりもしています。言い換えると、このくらいでいいかな～というのが「専門性」が欠けている。

だが、僕のポジションは、何の専門家でもない。かといって、そういう曖昧さの位置から体感することは往々にして需要だと思っています。でも、根拠なし！！ここの専門性を高めたらよろしいのかしら？

しかし、「SM クラブの受付」シーズンは、割と「やり過ごし」について書いていることに気づいている最中です。彼女たち、そして僕の「やり過ごし」これって、僕が何らかを通し、やり過ごしが難しい世の中になっていると思っているからなのでしょう。

もしかすると、何かに拘らないが故に、たまたま知ること、知らないが故の驚き、そこからの気付きが「専門性」に影響を与えているのではないか…（僕が言うと、言

い訳っぽいですけどね)、そんなことも、僕の頭の中には遮っている最中です。

僕が、SM クラブの受付に辿りついたことを振り返ると、気づかされていく、知ろうとする、それ自体があらゆる現場で大事なことなのかもしれません。でも、一定の分野を土台とすれば、そこから開かれていくこともあります。僕の周りはそうした人が多い。僕は前者のタイプだし、その特性を活かそうと奮闘していますが、後者になれず悔しくも思っています。そんな奴が綴っていると思ってお目を通しいただけたら幸い！

さぁそれでは行きましょう！！今回のエピソードは、ようやく「受付」らしくなってきた、しすてむきよたけを綴ります！嘘です！！

その予定でしたが、2008 年に出版された、鹿島茂著の「S と M」を読んだ時の僕について綴ることにしました。ということで、受付らしくなってきた僕は次号に回します。

今回のラインアップは、**「1. 文化と社会への関心」、「2. 禁断に値するセックス観念」、「3. 変容の機微」、「4. 異なる視点と解釈」、「5. 変態になることも意識したい」、「6. 場によって成される相互成長」、「7. M 嬢ってスーパーS！？」、「8. SM と日本文化」、「9.エロは一様ではない」、「10. 日常生活へ」**と細切れだけど、区切りいい！です。

1. 文化と社会への関心

『S と M』を読んだ。率直な感想は、性的嗜好という意味の SM が、歴史や文化が切り離さられるものではない印象だった。確か著者である鹿島は、SM の起源について、西洋についてはキリスト教や家畜文化をあげ、鞭を取り上げていた。苦痛を伴うことで神に出会うことも書かれていたと思う。

キリスト教の一部を抜粋すれば、解釈可能で「忍耐は品性を品性は知性を生む」とあるので、僕は、試練は神に会うまでの通過点の一つであると解釈をした。

一方日本は、キリスト教圏ではないため、上記意味合いからは、キリスト文化と同一の解釈がないようだ。共通の解釈信念ではないことも含まれていたと思う。

鹿島は、こうした文脈から、西洋圏と日本における SM が異なることを述べていた。日本は、身体的な屈辱と、のちの快楽よりも精神的、さらに言うと、「羞恥」にあると書かれていた気がする。

これらから僕は、SM は文化的行為を表現している、もしくは、再現している行為と位置付けられることが可能だと感じたのだった。人の欲望は、歴史的背景を持った現在、そして文化として当たり前に認識している羞恥心が、現れていると言ってもいいのではないだろうか。SM から現代社会を映し出す行為のようにも感じたのだった。著書には、「SM は逸脱を楽しむもの」と記載されていたと思う。

2. 禁断に値するセックス観念

僕は、宗教、とりわけキリスト教を切り口とした章に見入っていた。著者が、文学研究者であるため、文学的な要素が多く書かれてあるからかもしれない。もしくは、読むことで僕は、日本が、共通の宗教基盤にないことへ、関心を引き寄せられていたのかもしれない。

ヨーロッパにおける SM の始まりは、キリスト教を主軸に考えるならば「逸脱」という行為として生まれたことが書かれていた。キリスト教文化におけるセックスは、繁殖と快楽と切り分けて考えている、と位置付けられていたような気がする。それらを示す言葉として、「禁欲」と示されていた。

僕は、禁ずることがあるがゆえに栄える、人のお遊び、著書の言葉を借りると「快楽」そして「逸脱」も生まれるのだろうと思った。キリスト教文化は、人の欲望を禁じ、神に従うことで神の体験をするということとなるのだろう。言い換えれば、「快楽」という人の欲望そのものが、「逸脱」という位置付けとなる。

3. 組織変容の機微

読みながら、自身の体験が想起されていた。2000 年に差し掛かるくらいの頃、あるプロテスタント系の教会に行き、そこで性に関する出来事に直面した。これまで通っていたクリスチャン家族が、来られなくなった出来事だった。

僕は、寛容に受け入れるような場所のイメージを教会に抱いていたのだが、そうではない印象を受けた。

ことの発端は、高校生である娘が妊娠をしたということだった。

当時高校生だった僕は、「そういう、状況であっても過ごせる場所があってもいいのではないのか？」、「迫害的な行為ではないか？」、「一方、何か組織として守るために、その家族を入れないという見方もできる。となると、それは世の中に様々な人がいるという本質を阻害してはいないだろうか」と思った。そんな話しを両親に話した（これについて、両親と対話はなされなかったと思うが、問題とされたら居られなくなるということについて彼らも問いを持っていたようだった）。

当時の僕は、物事が常に一定であることはなく、社会やそこに暮らす人が変われば、社会や組織は変わり続ける。それは一体、どんな契機により変わるのだろうか、そして、なぜ変わらないのだろうかと思っていたのだと思う。

僕が、高校生の時に経験をした教会での出来事は、教会は性に関心を持つという、人の欲求にフォーカスがあてられていたのだろう。そして、その欲とは、神が禁ずることとされ、「逸脱」として捉えられたのではないだろうか。

数年後、大学生になった僕は、当時出会った教会の人と再会をした。妊娠した彼女はどうなったのか、あの時なぜ受け入れることをしなかったのかと尋ねた。

彼女とばったり駅で再会したことがあり、3 人のお母さんになっていたそうだ。それ

を聞いて、何かほっとした。高校生で妊娠をし、これまで所属していたコミュニティにいられなくなった。

この経験は、自身が悪いことをしたという体験に変わる可能性を秘めていたと思う。しかし、そうではなく、そこからまた子どもに恵まれ元気に母として過ごしている姿は、想像でしかないが、さまざまな人やコミュニティに支えられるような、彼女だったのだろうと思った。支えは一つだけではないということであろう。

組織では関わることはできないが、個々人であれば関われる。もしかすると、こうした個々の出会いは、組織が変わる緒なのかもしれないと思った。

2016 年の今、性に関して寛容な教会も増えてきているようだ。僕が知る教会は、数少ないいくつかだ。宗派によっても、性に対する受け入れ方は様々なのだと思う。教会も社会に影響を受け体制を変えつつあるように思う。キリスト教といえども、宗派も細分化されていることからも考えられるだろう。また、新しい宗派を受け入れる、神というものが無い国、日本の特徴的な柔軟さなのかもしれない。

4. 異なる視点と解釈

著書を読みながら、自身の体験を思い出すと同時に、「SM クラブ」へ関心を持った。SM が「逸脱」である行為であるにもかかわらず、SM として位置付けられ、行為を可能としている場と感じたからだった。

「快楽」と「逸脱」は、キリスト教文化から、いや現代社会においても、社会的不適合な者であるとか、オーバーに言えば、精神な病と位置付けられる。

SM は、性的倒錯という言葉を用いた、異常な状態として示される行為と認識されることもある。SM のイメージで言うなら、鞭を使うプレイや圧迫、羞恥を伴うプレイであり、それを好むということは、異常な様相と解釈される。時にパラフェリア（性的倒錯）と言われ、精神医学では精神障害、パラフェリア障害群とされている。つまり、時代や文化によって、個人が持つ嗜好への判断基準は変わるのである。

SM クラブに来る人たちは、その場で疾患者として扱われることがないので、疾患に関する水準はどこに行くか、居るかにもよる。欲望は、社会が創り、それを表出可能な場も人が創る。さらに、人はＳとＭという個々人の関係性を創り出す機会にもなるのだと思った。

それは、上司や部下といった上下関係においても同様になのかもしれない。実際、プレイでそのようなシチュエーションを展開されることもある。プレイといった現場があることで創出させる。現実にある関係性からプレイになるのだから、関係の設定があった方が、場に馴染みやすいのも人の特性なのかもしれない。逆に言えば、関係性がわからないと、人とかかわりにくい人たちも社会にはいるということにもなる。

しかし、そこには社会的課題も含まれていると思った。とりわけ、上下関係で言えば、パワハラやセクハラ問題とされている。

しかし、あえて欲して「SM クラブ」にやってくる人はいる。性的嗜好であるが、問題とされること、ある種不道徳さを欲する人がいるのだと思った。それは、あくまでもプレイであるから、許される行為、いわば、秩序がたもられている中で表出される行為なのだと思ったのだ。

不道徳とされるSM嗜好の人は、「変態」と位置付けられる。SM クラブの HP にも「変態を受け入れる店」というようなことが、書いてあった。僕は、性癖に軸を置き考えてみた。ノーマルと言われる性的行為があるが故にアブノーマルがあるため、ノーマルでなければ「変態」。いわば、一般的ではない、とか、多くの人とは異なるという範囲は生まれないということでもあろう。

5. 変態になることも意識したい

自分が、どれだけノーマルかはわからないが、ノーマルであるならば、想像的なこともできず、クリエイターでもない、つまらない思考の持ち主なのではないだろうかと思った。言い換えれば、SM にいる人たちは、一般的なことをそれなりに熟知し、新しい展開をもたらせる思考を持っているのでは？と思ったのだった。また、いろいろなお客さんに接客をするキャストたちは、自分がどこに居るのか、相手がどのような状況で、今何を求めているのかを察し、呈示できる人たちであるようにも思った。

著書には、最初に言い始めたみうらじゅんさん（僕、この人のこと詳しく知らないけど憧れる人）の言葉が載っていた。S は「サービスのS」。

この意味は、著書に書いてあったことを詳細に覚えていないので、著書である鹿島さんにもみうらじゅんさんにも大変失礼なのだが、S はマゾの理想を叶えるための相手になるので、自分の欲望だけを相手に押し付けるだけの者ではない。相手が欲しいと思う、その先を憶測し与えていく、提供者であるようだ。

もう少し視野を広げると「逸脱」という現実では叶えられることのないことを、M が要求することで S が与えていき、SM が成立されていくと推測した。M がいるから S が成立するので、S は勤勉にさせられるかのように感じた。その「逸脱」を可能とする場が SM の現場となる。この意味で、解釈をすると「S はサービスの S」だと思った。

だが、正直なところ、「サービスのS」がSM のS なのか？という問いが生まれた。「SM クラブ」から考えると一概に断言することはできないのではないと思ったのだ。

場から見ると、そこにはM嬢もいるので、彼女たちもサービス提供者なのである。M嬢は満足を得るために受け身であるわけではない気がしたのだ。自分が望むS男がいつでも来るわけではないのだから。

客であるS男性は、自分の欲求を求め、店を利用し、嬢を選ぶ。全ての客がM嬢に満足してもらうことを望んでいるわけでもないだろう。M 嬢が、客の欲求に反応できるかどうかがサービスとなる。だから、SMのSはサービスのSと受け入れきれないよ

うな感情が残ったのだ。

6. 場によって成される相互成長

しかし、明確なのは、プレイというのは、相互了解なしでは行われない。それを示すのは、客もキャスト（S もＭも）も嗜好を呈示し合うこと。これらにより、サービスが創られると想像するに至った。

時系列通りに綴りたいのだが、上述したことで思い出した現場話があったからここでちょい出ししたい。著書を手にした１年後くらいに、責任者であるルーブル・ガガがと話した内容だ。

「ハタチそこらの女王が、調子に乗ってる場合じゃないんだよ。M 男はな、あいつらよりも SM 歴が長いんだよ！生まれた時からＭ男だったらそうやと思わないか？」、「まー生まれた時からかは知らんけど、確かにそうや。M 男がいるから、女王様になれるわけだし、その人たちの欲求に出会うから、技術も身につくわけで、教えてもらうことは多いだろうね。」、「そうでしょ。私の若い頃とか、もっと時間もお金も費やして勉強した。」、「まー。それぞれモチベーションは違うから、ちょっと待っとき。女の子らも試行錯誤してるんやろから。風俗全体の業界からしても客層も昔とはちゃうやろしね。ま、俺帰るわー」

7. M 嬢ってスーパーS！？

僕は、サービスとは何かという、自身の根本的な関心が引き立てられた。SM クラブがあるから理想が叶うわけではないと思い、「サービス」ありきでサービスがあるのではなく、相互作用により生まれるものだと思った。相互に了解し、誘発し合っていくもの。このことについて、著書では、「二元論」で語られるものではなく、交わることを通して SM は生まれるものだとだと書かれていた。

しかし、僕はモヤモヤした思いが残っていた。SM クラブには M 嬢もいるので、M 嬢は「サービス」の何であるのかと問いを残したままだった。つまり、「サービスの S」だと断言できないと葛藤していたのだ。だが、サービスが何かという問いと M 嬢に対して、明確に断言できるような言葉は出てこなかった。

8. SM と日本文化

著書の文章を残している記録が手元に残っていた。「日本人というのは、西洋人と違って、苦痛を介して神に出会うということではなくて、自由の拘束を介して共同幻想に至る」という文章だった。確か、日本には神がいないから、何のための苦痛か憶測ができないため、拘束されることで自由を奪うことを自ら選ぶという話だったと思う。

そこで、僕は「緊縛」が浮かんだ。緊縛は日本の文化である。江戸時代、罪人を拘束するために手錠のようにして縄を使っていた。しかし、ガチガチに身動きが取れないようにするものではなかった。うっ血しないように、そして、逃げるという自由をさせないように縛るので、ギリギリの拘束

をしていたのだ。

余白がある自由の奪い方のように思った。さらに、誰が何を、どのようなシチュエーションでするのか、互いにその状況を、何と認識するかによって、SM であるのか、牢獄に入れられたのか、変わるのだろう。

9. エロは一様ではない

雅さんが話していた、男性が書いた本だから、本当の SM とは何か違うというニュアンスはわからなくはなかった。僕がこの本を読んで曖昧に残っている箇所でもある。「エロ」という言葉。

上述してきた内容から見ていくと、SM は「エロ」から始まったものではない。著書でも、「セックス」と「SM」はイコールではないと述べていたと思う。

いつも同じプレイが起きるわけがない。S がどうである M がどうであるということは、興味深いのだが、現場ではそこは後付けなのかもしれない。「エロ客」も実際にいた。SM が何であるかは、相互に認識が変容する瞬間があるのではないだろうか。

一方視点を変えて、女性目線での SM は、男性が思うものとは異なるのかもしれない。性風俗であるから、すでに「エロ」が伴われる。キャストたちは、エロとそうではない行為の両方の間にいるように感じたのだった。

10. 日常生活へ

M の願望を、すべて叶えるとなれば、M に操られるばかり。それでは、創造は起こらない。そこには、新しくある程度の決まりが生まれる。ゆえに、「快楽」や「逸脱」は、人が相互にクリエイトしているからこそ生まれるものでもあるように思う。一方、創造は、それなりに今自分が欲していることが、社会から派生しているとも考えられる。

僕の想像にしか過ぎないが、「快楽」や「逸脱」について、執拗に意識せずとも過ごしている日常生活もあるということなのだろう。

誰からも連絡きませんが、絶賛解禁中！

『清武システムズ限定コース解禁!!〜トーク about 熟女コース〜』

綴り人/しすてむ・きよたけ

動いて、頼って、甘えるファシリテーター。

清武システムズという看板を引っさげ、活動中。

しすてむ・きよたけは、アイディアや意見ではなく具体的な変化のための装置です。「何か変化を求めているが、手立てがわからない。」そんな時にぜひ導入を！

【連絡先】

info@kiyotakesystems.net

ツイキャスでラジオ始めました。その名も「カッテに喋らNight！」。カッテに喋りたい人、カッテに聞いて過ごしたい人募集中。

Twitter アカウント@SystemKiyo です。

今のところ不定期ながらに、水曜日の 22:00〜行っています。清武システムズHP に録音のリンクを貼る予定です。

S・V 羅針盤のない航海

川﨑　二三彦

【1】前史

児童福祉法改正

2016 年 3 月 29 日、第 190 回国会に提出された「児童福祉法等の一部を改正する法律案」は、5 月 27 日、全会一致で可決・成立した。

本改正案は、考えようによっては、児童福祉法の無数の改正経過の中でも最も大きな改正と言えるかも知れない。というのは、戦後直後の 1947 年に法律が制定されて以後約 70 年にして初めて、その基本理念に手が加えられたからである。たとえば、それまで第 1 条第 2 項に据えられていた「すべて児童は、云々」という内容が第 1 条 1 項に移され、次のように改められた。

「全て児童は、児童の権利に関する条約の精神にのっとり、適切に養育されること、その生活を保障されること、愛され、保護されること、その心身の健やかな成長及び発達並びにその自立が図られることその他の福祉を等しく保障される権利を有する」

これは現行条文の、「すべて児童は、ひとしくその生活を保障され、愛護されなければならない」と比較すれば明らかなように、児童を、保護される存在から権利の主体者として位置づけようとしたものであり、価値観の大きな転換がなされていると言ってよいだろう。

今回の法律案では、その他にも種々の改正が加えられている。その中で、本連載に関係する部分を挙げれば、これまで記載のなかった「指導及び教育を行う児童福祉司」、すなわち児童福祉司スーパーバイザーの設置や、児童福祉司の研修義務化などが盛り込まれている。具体的には、次のように規定された。

「他の児童福祉司が前項の職務を行うため必要な専門的技術に関する指導及び教育を行う児童福祉司は、児童福祉司としておおむね 5 年以上勤務した者でなければならない」（第 13 条第 5 項）

「児童福祉司は、厚生労働大臣が定める基準に適合する研修を受けなければならない」（第 13 条第 8 項）

＊

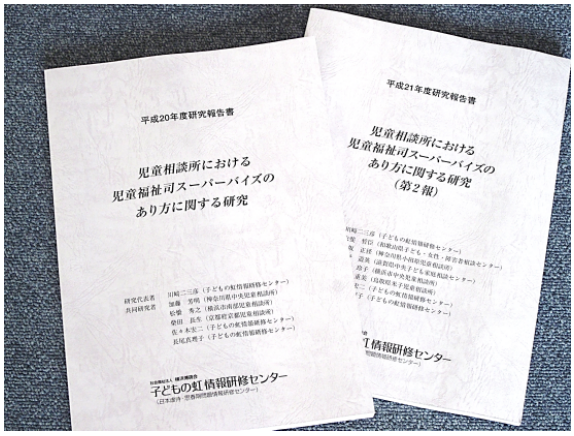
考えてみれば、私が児童福祉司として業務を行っていた時代、法律的には児童福祉司スーパーバイザーの存在は明記されておらず、児童福祉司に対して研修を義務づけていたわけでもない。

では、その時代に、私はどのようにして児童福祉司の道を歩んだのか。

今回は、相談判定課長として業務に就く以前の児童福祉司活動を振り返ると同時に、私の課長時代のスーパーバイズを理解する一助となることも狙いの一つとして、この時代を概観することとした。

なお、この点を示す方法として、子どもの虹情報研修センターにおける「児童相談所における児童福祉司スーパーバイズのあり方に関する研究」（平成 20 年度研究報告書）から引用、抜粋することにした。

本研究は、私が研究代表者となって取り組んだものだが、児童相談所で経験を積んだ共同研究者が、各自の児童福祉司経験、及びス



ーパーバイズ経験を語っており、その際、私もその一人として、当時のことを振り返って話している。

「なんだ、オリジナル原稿じゃないのか」

という誹りは甘んじて受けることとして、私自身のスーパーバイザー前史を過不足なく語るにはうってつけのものと思い、以下に示すことにした。

1. 相談係長兼児童福祉司の時代

私は、心理判定員（児童心理司）を 14 年経験した後、1989 年（平成元年）に児童福祉司になりました。実はその時、「京都府宇治児童相談所相談判定課相談係長に補する」「児童福祉司を命ずる」という２つの辞令を貰ったんですね。当時の組織図を図１として示しましたので、それをご覧ください。

私の場合、相談係長といってもスーパーバイザーなのかどうか、微妙なところがありました。というのも、第一に相談係長自体が新設ポストだったために、具体的な業務があまり明確ではなかったということがあります。第二に、私自身が児童福祉司を兼務していたわけですので、児童相談所経験は長いと言っても、まずは新米児童福祉司として業務を覚えなければなりませんでしたから。正直に言って、心理判定員として 10 年以上児童相談所にいたにもかかわらず、児童福祉司の仕事についてはあまりにも知らなかったという実感がありました。この２つの側面から見て、実質的にはスーパーバイザーの業務を行い得ない状況があったわけです。

（１）当時の宇治児童相談所の組織体制

スーパーバイズ体験を語る前に、まずは当時の宇治児童相談所の状況を説明します。宇治児相は京都府南部に位置し、管内に学研都市を抱えている地域です。北は京都市に接していますし、南部地域は大阪に通勤する人たちのベッドタウンにもなっています。人口の急増地域で、この当時の所管人口は約 50 万程度。今は 55 ～ 56 万ですかね。京都市内にあった「中央児童相談所」を分割し、新たに宇治の地に児童相談所を新設したのが昭和 62 年（1987 年）のことです。京都府の３つの児童相談所の中で相談係長（兼児童福祉司）は管轄人口が最も多く、宇治が中央児相と位置づけられました。

さて、私が相談係長として赴任したのは、新設されて３年目のことでした。当初は係制もなく、課長の下には、直接児童福祉司や心理判定員が属する形になっていたのですが、先ほど申しましたように、この時初めて相談係と判定指導係が置かれ、私が初代の相談係長になったわけです。ただし、いずれの係も増員されたわけではありません。それまで５名いた児童福祉司のうち１名を係長にしただけです。当時の相談係は、図１にありますように、係長を含めて児童福祉司が５名と受付相談員の合計６名、判定指導係は係長を含めて心理判定員３名という体制でした。

任用形態ですが、心理は全員が心理職採用の専門職。児童福祉司の場合はやや複雑な状況がありました。一時期、京都府でも福祉専門職採用が行われていたのですが、この当時はそのような採用はなく、現在も行われていません。そのため児童福祉司の中には、福祉専門職の方もいれば､行政職の人もいました。また、府立の児童養護施設や知的障害児施設

で指導員などを経験していた人が、施設の事業団委託化などに伴って児童相談所の児童福祉司となる場合もありました。私の場合は心理から児童福祉司に回されたわけです。それぞれの経験を生かしながら、児童福祉司としての集団を形作っていたように思います。なお児童福祉司は、この当時は全員が係長級の位置づけとなっていました。

次に、当時の相談判定課長について説明します。最初の課長は、児童相談所の経験も豊富な心理職の方でした。宇治児相が新設されたときに赴任されたので、私が係長になったとき、この方は課長職３年目を迎えていました。ただし翌年には転勤されました。したがって、私にしてみれば１年だけのお付き合いということになります。もうちょっといて欲しかったんですけれど、やむを得ません。

次に来られた方は純粋に行政職の方でした。課長というのは、やはり行政組織のポストの一つなんでしょうね。本庁から異動してこられたんです。ここで不思議だったのは、行政職ならば通常は２～３年程度で転勤するにもかかわらず、この方は、いろいろ事情があったのでしょうが、都合８年間ずっと課長を務められました。私は宇治児相に９年いたので、仕えた課長は結局この２人だけです。

課長との関係については、また後でお話することとして、一時保護所の体制についても触れておきます。京都府の児相は３か所とも一時保護所を併設しています。ただしスタッフは、当時各所とも３人だけでした。児童指導員、保母（保育士)、調理師です。ということは、休日や夜間の当直スタッフがいません。そこで私たち相談関係の職員を含めて、ほぼ全職員が交代で、夜間・休日の当直を行っていました。宿直は男性職員、休日昼間の日直は女子職員という形でした。なかなか大変なんですが、当時は今と違って、常に子どもを保護しているというわけではなく、保護児童がいないときも結構あったので、何とかやれていたのです。

（２）スーパーバイジーとしての経験

①先輩児童福祉司

さて、まずは新任児童福祉司として、どういう指導を受けたのかということからお話することにします。正直言って、しっかり指導を受けたという実感はありません。児童福祉司１年目とはいえ、児相経験で言えば、先輩児童福祉司よりも私のほうが長いですし、まがりなりにも相談係長ですから、組織的には私が上司になります。ですから、折に触れていろいろ尋ねたり教えてもらいはしましたが、先輩たちも、基本的には私の進め方についてあれこれ言うことはなかったと思います。

②課長

次に課長です。最初の課長は、前にも言いましたように課長歴３年目だったんですけれど、児相も新設３年目ですから、児相運営全般について考え、力を集中しなければならなかったと思います。私が赴任した年度の後半からは、新たに電話相談事業なども立ち上げましたから、そうしたことも含めて奔走していました。加えてこの課長は、いくつかのケースを心理職の立場で直接担当していたんです。私がやっていた困難ケースも心理判定員として面接などをされていた。とはいえ課長でもありますから、立場は微妙になりますよね。担当心理判定員ではあるけれど、課長というポジションを意識して動かなければいけない。そういうことが影響していたのかどうかはわかりませんが、私の場合、日常業務については任されている感じがありました。もちろん、ポイントは適宜報告し、相談もしていたと思いますが……。

次に２番目の課長との関係について。先ほども説明しましたように、この方は行政職でしたから、臨床のことについては本当にタッ

チしなかった。ある意味では一つの見識だったかも知れません。自分があれこれ口出しするのは、むしろ問題だというふうに思っておられたのではないでしょうか。だから、具体的なケースワークの進め方などに関しては、ほとんど相談しなかった。ただし、法律的なことに関しては詳しかったので、いろいろ教えてもらいました。私が今でも覚えているのは、「児童福祉法第 27 条の２」といった言い方についてです。それまで「27 条の２」と「27 条第２項」なんかの違いがよくわからなかった。心理をやっている時には関心もなかったですから、条文を見ただけで何となく頭が痛くなる状態でした。「27 条の２っていうのは、一つの独立した条文と考えたほうがいいんだよ」と言われて、それで条文の番号の付け方がわかったような気がしました。そういうことは、あれこれ教えてもらえたんです。だけど、実際のケースの中身に関して、ああだこうだっていうことは、ほとんどありませんでした。

では、私はどのようにして児童福祉司業務を行ったのかと言いますと、ある意味では非常に自由にさせてもらいました。相談係長ですから他の児童福祉司も一目置くしかないですし、課長は行政職の人。私自身が何かを思いついたとすると、それが結構承認されました。自分の思うことを、めいっぱいやらせてもらったという実感があります。

③児童相談所運営指針

じゃぁ困ったとき、分からなかった時にはどうするのか。何しろ宇治児相は、児童相談所自体の歴史も浅く、課長も行政職の人で、児童福祉司経験もないまま引き受けた相談係長ですから、依拠できるものがありません。頼りにするものと言えば、結局は「児童相談所運営指針」ですよね。運がよかったのかどうかはわかりませんが、「児童相談所執務提要」から「児童相談所運営指針」に変わったのが 1990 年（平成２年）３月で、私にすれば相談係長１年目の終わりです。厚生省は運営指針を完成させるために、全国の児童相談所に案を示して意見を求めたりしていましたから、私たちはこの運営指針案を読み、議論し、意見を述べました。そういう経験があって、中身についても比較的理解し、深めていたものですから、やはりこれを頼りにするという気持ちが強くなったのだと思います。

そしてもう１冊が「児童福祉法の解説」（時事通信社）です。当時の児童福祉司は、全員がこの本を自分の机上に立てていました。とにかくそれを見ながら業務を行っていく。簡単に言えば独習というのでしょうか。常に「児童相談所運営指針」や「児童福祉法の解説」を見ながら、後は児童福祉司の中で議論をし、ケースワークを行っていたと思います。

④外部の専門家― 法律相談など

もう一つ。先にも申しましたように、私が児童福祉司として赴任した年に新規事業として電話相談が始まったのですが、あわせて児相を支える専門相談スタッフを配置していただきました。弁護士や児童精神科医、家族療法の専門家などが外部スタッフとして協力してくれたのですが、それを受けて定例の法律相談会を始めたんです。

最初は弁護士に相談することなんてあるのかというレベルだったんですが、やり始めると、親権の問題その他、分からないことや今まで十分検討してこなかったことがいっぱい出されるようになりました。具体的には、３か所すべての児相から児童福祉司が弁護士事務所に出向きます。相談は１か所から出しますが、他の２か所の児童福祉司も、それを勉強するわけです。定刻１時間前、弁護士事務所の向いの喫茶店に集まって、「これはこういう結論になるだろう」と予想します。その上で弁護士から回答をもらうのですが、全然違う回答が出てくるんですね、これが。ずい

ぶん勉強になりました。

私は、宇治児相の、つまり中央児相の相談係長だったので、この事務を担当し、法律相談会にはずっと出ていました。その後虐待相談が急増し、法的な対応も強く求められるような時代に入っていきましたが、私自身にとってもこの相談会が大きく役だったと思います。

そのほか、児童精神科医をスーパーバイザーにして、宇治児相内で月１回程度スーパービジョンの場を設けていました。家族療法の専門家によるスーパービジョンも同様に実施しましたが、こちらはむしろ心理判定員が中心になって運営されていたかと思います。

⑤ピアビジョン― 京都府児童福祉司会議

その他で重要だったのは、「京都府児童福祉司会議」です。当時は年３回開催されていました。児童福祉司 14 人全員と課長３人の合計 17 人が一同に会して１泊２日で行います。内容については、各児相の児童福祉司からプランナーを選出し、そこですべてのプログラムを決めていました。ですから内容はすべて現場に任されていたといっていいと思います。

私はこの場に、困難を感じた事例だとか、苦労した事例を何本も提出して検討してもらいました。言うなればピアビジョンです。年に３回、１泊２日で実施するので、これはと思う事例は大体議論してもらったのではないかと思います。もちろんそのためには自分でまとめたりもしなければいけませんし、いろんな意味で力をつけることができたと思います。

ただこの児童福祉司会議も、次第に年３回実施することが難しくなり、さらに宿泊での会議も不可能になっていきました。児童福祉司としてのアイデンティティを確立したり、困難なフィールドで日夜苦労している児童福祉司が本当に支え合い、研鑽していくためには、こうした宿泊研修は重要だと思うんですけれどもね。その点は、ちょっと残念な気持ちがあります。

⑥チームワーク― 心理司との協働

具体的なケースの運びについては、何といっても担当の心理判定員と議論することが多かったと思います。とはいえ、心理判定員にもベテランから新人までいろんな人がいましたから、チームを組むメンバーによって、動きがかなり違いました。心理判定員に十分な説明もしないまま、ともすれば一人で対応してしまうような事例も、中にはありました。困難事例であるか否かにかかわらず、自分の納得のできるケースワークというのは、児童福祉司と心理判定員とが対等に協力し合った事例ですよね。当時判定指導係長だった柴田所長と組んで一緒に携わったケースは、そういうものだったと思います。ただ、児童心理司と児童福祉司とがどのようにチームを組めばいいのかということは、まだよくわかっていません。その点は今回のテーマからそれるのでこれ以上触れませんが、児相にとっては依然として一つの大きなテーマではないでしょうか。

⑦学びの場― ケース会議

最後に申し上げるのは、受理判定援助方針会議、いわゆるケース会議です。当時は受理判定処遇会議と言っていました。これは最終的に方針を決める場ですから、やはり他のミーティングとかカンファレンスなどの議論とはどこか違いがありました。どこが違うのかと問われてもうまく説明できないのですが、ともかく、議論したいケースはとことん議論していたと思います。私は知らないんですけど､宇治児相が新設された頃のケース会議は、週１回定例で行われるのですが、朝から始まって夜７時頃までやっていたんじゃないですかね。とにかく終わらないんですよ。だって

スタンダードがないから、一から全て議論していかなきゃならない。ですので、かなり大変だったと思います。私が異動してからも、５時をまわることは珍しくなかった。ただ、多忙になるにしたがい、終了時刻に見当をつけて面接や出張を組んでいる職員が増えていって、会議の終わり頃になると歯が抜けるように参加者が減ってしまうといったこともありました。それはともかく、会議で議論するというのが、やはり一番の学びの場だったかな、という気はしています。

（３）スーパーバイザーとしての経験

次に、スーパーバイザーとしての経験についてお話いたします。ただし、最初はそれどころではありませんでした。まずは私自身が児童福祉司の仕事を覚えなきゃいけなかったので。担当地域は２市３町で人口約 12 万５千人。しかも困難ケースが多いかなり大変な地域でした。要するに、「おまえは困難地域をやれ」ということだったと思います。ですから、他の人の面倒を見るなんてことは、そもそも無理だったんです。結局のところ、１年目は指導もあまり受けなかったし、他の児童福祉司に対しても指導など何もしなかった、１人で地域を這いずり回るように児童福祉司活動をしていたと思います。

①ケース会議

とはいえ、先にも言いましたように、ケース会議はやはり真剣勝負という感じだったので、会議の際には、提出されたケースに対して積極的に口を出していたと思います。ただしそれは相談係長だったからというよりも、長く児相にいた者として、それまでから習慣のようにして発言していたことの延長だったと思います。

もちろん、私自身の担当ケースも提出しなければなりません。私は、方針を決めるための提案だけでなく、援助方針に迷ったときなどに「今後の方向性について議論してほしい」とか、一時保護を決める前に「一時保護方向で進めることを承認してほしい」といった提案をして、ケースワーク活動の方向を確認してもらう。そんな形でケース会議を利用しました。そういうやり方などは、他の方も見ていて真似したと思います。ある児童福祉司が、「そういう提出の方法もあるんだ」と感想を漏らしていたのを覚えていますから。直接スーパーバイズするというより、モデルを示すやり方です。もちろんそれを意識してやったわけではないのですが……。

ところで、宇治児相のケース会議は、受理したケース全てを会議に提出するルールになっています。それを全職員が参加して議論し、決定するのです。現在では職員数も増え、ケース数も多くなって実態にそぐわない面も出てきていますが、当時はこの形がベストと考えられていました。もちろん全ケースを提出するといっても、簡単なものから複雑なもの、困難なものまでさまざまですので、まずは児童福祉司がその日に提出するケースと提案の内容を一覧表にしてリストアップします。そして助言指導などはその一覧表だけで決定し、議論が必要と思われるものについては、別途「会議討論資料」を用意します。

私は、それまでから使われていた討論資料の修正バージョンを作りました。今はＩＴ化に伴って使われなくなっているようですが、２号、３号、４号を提案する場合、またそれらの措置を解除する場合、それから継続指導や一時保護を決定する時は、ルールとして必ずこの討論資料を作成して提出してほしいとお願いしました。資料を作成することで、まずは自身でケースの中身を整理し、また会議参加者が理解できる提案をすることにもなります。新人の児童福祉司などは、自分の提案がなかなか会議で認めてもらえないと嘆いていましたが、やはり会議は重要だったと思います。

資料作成に関して、私が一つこだわったことがあります。というのは、たとえば「この人の状況はかくかくしかじかですので終結したいと思います」といった提案がされるんですが、その中身が具体的にはいつのことか、あるいはどうやって確認したのかといったことがあいまいなことがあるんです。突っ込んで確認すると、実は数か月前のことであったり、単に電話で聞いただけで、実態はよくわからなかったりする。これでは駄目だと思いました。そこで、ケースを提出する際には、（１）子どもやその家族の状況についての情報、（２）具体的にいつ面接し、いつ訪問したのかといったケースワーク活動の状況、以上２つが記載されていることが必要だとお願いしました。これによって、ケースとケースワークの両方を可視化したかったのです。

②京都府児童福祉司会議

京都府児童福祉司会議について、今度はスーパーバイザーの立場　で考えてみたいと思います。何しろ京都府の全児童福祉司が参加しているわけですから、ここでは結構いろんな決めごとをしました。もちろん、児童福祉司だけで決められないようなこともありますが、それらは児童福祉司会議で議論しておいて、別途開かれる京都府３児相課長係長会議などで決定するようにしました。それでも児童福祉司会議では、ケースワーク上のこと、たとえば「触法通告の呼び出しはこうしましょう」といったことなど、いろいろと決めていたと思います。

児童福祉司会議では、事例検討が行われ、外部講師による研修や児童福祉司が自ら講師となっての演習などが企画され、実務の統一も図られました。児童福祉司が深く話し込むことのできる場であり、児童福祉司それぞれの成長が促されたと、私は感じています。会議の運営主体は児童福祉司であり、私は中央児相の相談係長という立場でしたので、企画について意見を出したり、実務上の整理などに関しても､かなり発言してきたと思います。課長も参加していたのですが、課長はむしろお招きした方という感じでした。

③新任児童福祉司研修

さて､１年ごとに人事異動がありますよね。私を含めて５人の児童福祉司のうち、毎年１人か２人が転勤し、新しい人が入ってくるようになります。そうすると、新人の児童福祉司をどのように迎え入れるのかということが課題となってきます。

私が最初にしたのは､ごく簡単なものですが、宇治児相における児童福祉司活動のマニュアルをつくることでした。お恥ずかしい話ですが、実はそれまでは担当地域のケースを前任者が引き継ぐだけで、新人に対して実務の一般的なことなどをまとまって伝えるということは行われていませんでした。ですから、困ったことがあれば、その都度周りの先輩福祉司に尋ねていたのではないでしょうか。私自身のことを考えても、児相経験が長かったこともあってか、児童福祉司業務についての研修は受けていません。

しかし初めて児相を経験する人もいるわけですから、ケースを引き継ぐだけではあまりにも心細い。そうした児童福祉司業務についてのレクチャーは、やはり係長の仕事かなと思って、少しずつマニュアルを作っていきました。ところがそれは､「児童福祉司の業務について（案)」です。いつまでたっても、そして結局は最後まで（案）の文字が残ってしまいました。これを毎年少しずつ更新、修正しては、新人児童福祉司に対して､「児童福祉司の仕事はこうですよ」と伝えました。

しかし、これだけでは不十分です。今申したのは、あくまでも児童福祉司業務の概要の域を出ていませんから。そこでもう一つ新たに考えたのが､「新人児童福祉司研修」です。それまで新人に対しては、外部機関が行う長

期研修に参加できるよう配慮していました。研修の時間帯は夜間が多かったので、夜６時半ぐらいからの研修に 10 回とか 20 回通うわけです。けれど、講座内容も児童福祉司の業務とは少し違うし、必ずしも実践的とは言えない。そのため業務が多忙になってくると、ついつい欠席しがちとなる。予算もないし、じゃあ自分たちで計画しようということになったわけです。京都府全体の新人福祉司を対象にしたのですが、当時は児童福祉司全員でも 14 名でしたから、新人は毎年数人程度です。この人たちに対して、年間で５日のプログラムを組んで実施しました。講師は基本的には課長や係長、それにベテラン児童福祉司です。実務的なことが多かったと思いますが、「蘊蓄うんちく」というコーナーを設けて、ベテラン児童福祉司に自由に語ってもらうような企画も立てました。また、私たち自身が保護者の協力を得てインテーク面接をビデオに録画し、それを新人に見てもらうようなこともしました。新人児童福祉司にもインテーク面接のビデオを撮ってもらい、最後の研修会では、今度はそれを見ながら面接の進め方などについてふり返ったりもしました。家族療法などが活発な時期だったので、面接をビデオに撮るというのは、それほど敷居が高くはなかった。これはかなり勉強になったのではないでしょうか。

④日常的なスーパーバイズ

ところで、肝心の日常業務に関するスーパーバイズについてです。これについては、課長と係長の役割が最後まであまり明確ではなかったように思います。先ほど申しましたように、相談係長のほとんどの期間、課長は行政職の人でした。「ちょっと相談したい」と言われてあれこれ協議したことは無数にありますが、児童福祉司が課長に相談している場面も、当然ありました。ただし、誰がどのようなときに、どちらに相談を持ちかけているのかは、私にはよくわかりませんでした。

その他として挙げておいたほうがいいと思うものに、相談係のミーティングがあります。私自身は、これにかなりのエネルギーを費やして毎週行っていました。その週の各自の動き、ケースの動きだけでなく研修の報告や新しい情報などを報告してもらって係全員で共有し、予定の確認をする程度ですが、時には困った事例についての相談が出されて議論したり、児童福祉司全体でアドバイスをしたりしていました。他の福祉司からも気軽に意見がもらえる場でした。ミーティングに課長は参加しませんでしたので、児童福祉司相互の腹蔵のない話し合いができたのではないかと思います。

なお、ケースの進行管理ということに関しては、この時代は、私はたぶん何もしていなかったと思います。何と言っても私自身が地域を受け持ってかなりの数をかかえていましたから、他の児童福祉司のケース管理にまではとても手が回らなかったですし、正直言って自分の業務だと認識していませんでした。もちろん自分の担当ケースについては、時々全ての児童記録票を別室に運び、独自に作成した担当ケース一覧表とにらめっこしながら、チェックしていましたけれど。

以上が宇治児相相談係長時代のことです。

本研究では、この後、相談判定課長時代のことについて、かいつまんで話していくのだけれど、それについては、次号以下で、より詳しく述べていくつもりである。

序
これまでの連載
＊題名を　click すると本文へジャンプします。

精神科医の思うこと

松村　奈奈子

★はじめに

精神科医になって 20 年をちょっぴり超えました。

中学生の頃から夢はずっと精神科医でした。ヘンテコな中学生だったと思います。

だから、やっと医師になった研修医の頃は無我夢中で、先輩に怒られても怒られても毎日なんだかワクワクしながら仕事していました。

もちろんずっとワクワクは続いていたのですが、１０年も総合病院に勤務して毎日朝から晩までたくさんの患者さんに対応しているうちに、疲れてへろへろになっちゃいました。

そこで、結婚をきっかけに少し余裕のある勤務形態に変え、自分の時間もできて、今は違った意味で充実した毎日です。

仕事をはじめて２０年、たくさんの人とお会いしてきました。

この仕事に就かなければ聞けなかった話を聞き、一緒に考える体験をしました。

ふと立ち止まるといつも、この仕事に就けてよかったなぁとしみじみ思います。

もちろん、人との出会いの中には“しんどいな”と思う出会いや話もあります。

でも多くはしばらくたって振り返ると、それはそれで経験として積み重なっている気がします。

そんな人との体験を通して感じた事を、ぽつりぽつりと書いてみたくなったので、これからお付き合いお願いします。

★なんでだろう？と思うこと

先日、小学校からの幼なじみと話していて私の幼い頃の話題になり盛り上がりました。

“あんたは、なんで？が多かったな”と幼なじみが言いだし、“そうそう、ほんと自分でもそう思ってたわ”と、私も返しました。

何かにつけて理由がわからないと前にすすめない感じは持っていたので、“なんで？”“どうして？”が多いのは自分でも意識はしていました。

ところが、続けて“あんたは特に人の行動や考えに対するなんで？多かったな”と言われて、少々びっくりしました。そうか、幼なじみが意識するくらい、子どもの頃から私の“なんで？”は人の行動や考えにむいていたのか・・・と自分でも驚かされました。

でも、この“なんで？”が精神科医になりたい・・・と思った最初の一歩だと思います。

もし自然現象や数式を見て“なんで？”と思う子どもだったら、科学者や数学者になりたかったかもしれません。

この子どもの頃からの“なんで？”は、仕事ではなくてはならないものになっています。

診察室では私の頭の中では“なんで？”“どうして？”が繰り返されて、

“どうして精神科を受診しようと？”から始まり、

“なんでこの人はしんどくなったんだろう？”

“なんでこの人は周りとうまくやれないんだろう？”と思いながら質問を重ねます。

診察はこれまでの事を聞きながら、“これからどう変化していったらいいんだろう？”と一緒に考えていく作業です。

もちろん、人の考えや思いは簡単にはわかりません。

でも、一緒に試行錯誤していく作業が治療なのではないかと、私は思っています。

ただ、この“なんで？”のせいで、しんどい頃もありました。

とにかく“なんで朝礼ではみんなで前にならえをせなあかんの？”“なんで担任もまじめに聞いてない校長先生の話を聞かなあかんの？”などなど、小学校や中学校の頃はわけのわからないルールに答えの出ない“なんで？”がいっぱいで、学校生活はあんまり楽しくはなかったです。前出の幼なじみには“まあまあ”とたしなめられた記憶があります。

子どもの頃は、友達と放課後何をして遊ぼうか、今日のテレビ番組は何を見ようか・・・が楽しみの中心でした。

大学になって、やっとひとつひとつの事に答えのある生活となり、学校生活はすごく楽し

かったです。教授はほとんどの“なんで？”に答えてくれますし、納得のいかないことはしなくてもすみました。

実はこんな私に似た“なんで？”だらけの子どもに診察室で何人か会った事があります。
たいがいは、登校しぶり…な感じで、友達もいて将来の夢なんかはしっかり話せます。学校がつまんない、なんだか楽しめない、ちょっぴり生意気な事を言ったりする子ども達です。昔の私にあったような、懐かしい感じを覚えました。
あるお母さんが“子どもが学校が楽しくないって言うんです。変なんです”と受診された時は“私もあんまり楽しくなかったもんで・・・なんとなしに通ってましたし”と。

学校に行くことは大切な事です。ただ、友だちと楽しく遊べてたら、学校自体は必ずしも楽しくなくていいんじゃないかな？
全員が楽しめる場所は、なかなか存在しません。
大人は仕事も趣味も選んで（仕事はなかなか選びにくい事もありますが…)、友達も気の合う仲間と過ごします。
大人に近づくにつれて選択肢が増えていくのが本当に嬉しかったです。高校も大学も、選ばせてくれた両親には感謝しています。
診察室に来る子ども達が、大人になって人生を楽しく生きられるように、私は応援したいと思っています。

おくのほそみち

～　リハビリテーションのこと　～

理学療法士
奥野　景子

白木さんは、満面の笑みを浮かべながら平行棒にひょいっとまたがった。そして、それを全身を使ってガシャガチャと揺らした。私は、彼が落ちないように注意しながら「危ないからやめて下さいッ！」と、ピシャリ。ぞろぞろと男性セラピストが集まってくる。それがすごく、嫌だった。

彼は、脳卒中を発症して軽度の運動麻痺と高次脳機能障害を呈した人だった。大柄な彼がこのような振る舞いをするたびに、私は自分の戸惑いを隠すことに必死だった。当時の私は、幻想の「リハビリテーション」と理想の「理学療法士」でガチガチになっていた。

これは、私がまだ新人だった頃の出来事である。今思い返すと‘ダメなことをしているなんてわかってる’そんな声が彼の背後から聴こえてきそうな気がする。彼が満面の笑みを浮かべていたのは、ただそうすることしか出来なかっただけなのかもしれない。と、今なら思えてくる。

私は、理学療法士としてリハビリテーションに携わっています。皆さんは、リハビリテーションという言葉を聞いて何をイメージしますか？運動や訓練、頑張って取り組む何かをイメージする人もいるのではないでしょうか？

私は今年の 4 月に理学療法士 8 年目になりました。でも、リハビリテーションが何かを明確に答えることが出来ません。数年前の私であれば、明確な何かを提示することが出来たと思います。でも、今の私にはそれが出来ません。今回は、それに通じる以下のことについて書いていこうと思います。

1. リハビリテーションにこだわる理由
2. 既存のリハビリテーション
3. 実際のリハビリテーション
4. リハビリテーションの着地点

1.　リハビリテーションにこだわる理由

それは、リハビリテーションを仕事にしているからです（今後の展開によっては、この一文自体が文章として成立しない可能性もありますが…）。理学療法士としてリハビリテーションに携わり、お金をもらって生活をしているにもかかわらず、自分がやっていることが何なのかを言えないというのは、なんだかとても申し訳ない。出来るのであれば、自分がやっている、自分が大切だと思っているリハビリテーションについて自分なりの何かを見つけたいと思っています。

今の私が胸を張って言えることは「リハビリテーションのことは、まだよくわかりません。でも、これについて考えることは、とても大切なことだと思います」ということです。おそらく、リハビリテーションについて考えることを通して、少し大袈裟ではありますが、私が生きる上で大切なことが見えてくるのではないかと思っています。私が今まで生きてきた中で消化しきれていないことを違う角度から見られるようになるのではないかと思っています。ただ、答え合わせをしたい訳でも、答え探しをしたい訳でもありません。答えがあると思っていないと言えば嘘になりますが、答えを見つけること以上に大切なことがそこにはあると思っています。

2.　既存のリハビリテーション

始めに書きましたが、リハビリテーションという言葉を聞いて運動や訓練をイメージする人も少なくないと思います。ここでは、それに「ちょっと待った！！」をかけたいと思います。

一般的に、リハビリテーションは、病気や事故などで障害された身体機能や能力を回復させる為の訓練と認識されていることがありますが、それはリハビリテーションのごく一部でしかなく、見方によってはごく一部にもなり得ないとも言えます。リハビリテーション（Rehabilitation）は、habilis（適した）というラテン語が由来のhabilitareという動詞にre（再び）という接頭辞があわさって出来た言葉と言われています。従来、この言葉は、中世において領主や協会から破門された者が許されて復権することを意味して用いられ、‘人間であることの権利、尊厳が何らかの理由で否定され、人間社会からはじき出された者が復権すること’を意味していました。その後、この言葉は医療においても用いられるようになり、時代と共に様々な定義が与えられてきました。その代表的な定義として世界保健機関（World Health Organization；以下、WHO）が1981年に発表した「リハビリは、障害者を訓練してその環境に適応させるだけでなく、障害者の直接的環境および社会全体を介して、彼らの社会的統合を容易にすることを目的とする。障害者自身、その家族、そして彼らの住む地域社会は、リハビリに関係する諸種サービスの計画と実施に関与しなければならない」が挙げられます。また、リハビリテーションの理念として、人間らしく生きる為の権利を意味する‘全人間的復権’が掲げられることも少なくありません。

以上のことを踏まえると、リハビリテーションは訓練などを意味するものではなく、一つの概念だと言えると思います。しかし、上述してきたことから「リハビリテーションとは？」という質問に対する明確な答えは見つからず、その本質はほとんど見えてきません。WHO の定義では、リハビリテーションの対象として障害者が挙げられていますが、近年ではリハビリテーションという言葉が介護予防の分野でも用いられるようになり、その対象は拡大してきています。また、根本的に‘しょうがい’というものに関しても現在までに様々な分野で議論されており（表記方法も含めて）、確立した概念や定義の形成に至っていないように思われます。さらに、理念として挙げられる全人間的復権に関しては、そもそも人間は生物学、社会学、哲学など様々な視点が輻輳的に重なり合って存在しているものであり、人間をどのように定義するかによってもその意味が変わってくるように思います。

「じゃあ、結局リハビリテーションってなんなんだ！？」という疑問が浮かび上がってきますが、その疑問に明確に答えることが出来ない、明確な答えが未だないにも関わらず、その答えがあるかのごとくそれが独り歩きしていることに危うさを感じています。そして「リハビリテーションとは何か？」ということに対する議論がなされていないこと自体がその危うさを助長しているようにも思っています。

3. 実際のリハビリテーション

私が理学療法士として携わるリハビリテーションの現場では、当たり前のことですが色々なことが起きます。そりゃそうです。色々な人がいて、色々な状況があって、色々なものや人、社会との関係性がそこにはあるからです。

そして、そこで行なわれること、私が行なうことは運動や訓練と言われるようなことだけではありません。雑談をしたり、ちょっとしたセクハラを受けそうになったり、お説教をされたり、諭されたことに対して少し抵抗してみたり、小ボケを挟んでみたり、思春期の男の子とはどういうものかを語ってみたり、車のエンジンの構造を教えてもらったり、お花見をしたり、冷蔵庫の食材の賞味期限チェックをしたり、足の指の間になぜか挟まっていた枝豆を気が付かれないように取ったり、自分のことを相談してみたり……。実際に書いてみると色々なことをやっているなと自分でもびっくりです。

「いやいや、ちょっと…こんなことがリハビリじゃないでしょ？」と呆れた声が聞こえてきそうですが、これは実際に私がリハビリテーションという枠の中（枠があるのかどうかもわかりませんが…）で行なっている、行なってきたことのごく一部です。これだけではありませんが、私のリハビリテーションの中にはこれらのことが含まれています。これらのことがリハビリテーションとして正しいかどうかはわかりませんが、間違っていないんじゃないかと思っています。私は、実際のリハビリテーションには、おそらく上述したような行為が含まれていると感じています。

4.　リハビリテーションの着地点

話はやや飛躍しますが、今のところ「リハビリテーションとは何か？」という疑問に対する私なりの答えは「生きることそのもの」ということにしています。急になんだ！？と思われるかもしれませんが、これは始めに述べた概念と実際に自分が行なっているリハビリテーションの二方面から浮き上がってきたものです。これもまた、正しいのかどうかはわかりません。ただ、間違ってはいないと思っています。正しい何かなんてないと思っている一方で、自分なりの唯一無二の答えを見つけたいと思っている自分もいます。どこかに着地させるのではなく、自分なりの着地点を探すこと、それを創ろうとすることを楽しみ、大切にしたいなと思っています。

～　終わりに　～

「リハビリテーションって何なん？」「えっ？答えはあるの？ないの？」「結局、何を言いたかったの！？」などなど。色々な声が飛んできそうですが、もしそうであれば私は大満足です。ないものをあるように思って進んでしまうくらいなら、一回立ち止まってみるのも悪くないと思っています。でも、ずっと立ち止まってもいられないので、ぐるぐるしながらとりあえず進んでみようと思います。

次回は「リハビリテーションが行なわれる場」について書きたいと思います。少しずつ、言葉にしていけたらなと思います。

参考文献

砂原茂一（1980）『リハビリテーション』岩波書店, p. 58
上好昭孝（2014）『医学生・コメディカルのための手引書 リハビリテーション概論 改訂　第3 版』（上好昭孝, 田島文博編）永井書店, p. 16

多文化共生と心理臨床

ガヴィニオ　重利子

欧州では、このたびのシリア危機などを受け、難民や移民の問題がこれまで以上に議論されるようになった。私が暮らすこの街も国際機関が多く存在することから、移民の数は全体人口の半分近くにのぼる。住民の国籍は実に多彩で、息子達が通う地元の公立学校でも、クラスメートは一人一人違う国籍と言っても過言ではない。新学期にはそれぞれの児童が自分の国の紹介や国旗の絵を模造紙に作成し、それを教室に貼り出すということが恒例になっている。

そんなこの国で、先日ある学校で起こった事件が報じられた。「宗教上の理由により先生との握手を数名の生徒が拒否」というものだった。こちらの学校では一日の終わり、先生が教室の出入り口に立ち、生徒一人一人と握手をしてさようならをする習慣がある。日本でいうところの「起立、礼、さようなら」と同じ役割を持つのだろう。子ども達は列をなして、先生と握手してから下校する。

この握手について、宗教上の理由から異性の手を握ることができないと、数名の生徒が拒否をした。そして学校は、これを認めた。が、である・・・。その後の続報で、この子ども達が申請していたこの国の国籍取得について、国が保留を決めたことが判ったのだ。これは差別か？それとも妥当な判断か？地元紙は議論を投げかけた。「外国人として暮らすなら良い」けど、「私たちの一員としては認めないよ」とも理解できるその判断が、様々な議論を呼んだようだった。（この原稿の提出日、新聞はこの学校が位置する州が握手を拒む生徒の親に対する罰金の支払いを条例化したというニュースを報じた。なんだかとっても悲しい展開。）

欧州にいると、日本とは全く違う国籍感覚に出会うことになる。見た目がアジア人であってもアジアに行ったことのないフランス人やドイツ人はたくさんいるし、親がそれぞれ違う国籍を有するため、生まれたときから複数の国籍を持つ人も珍しくない。我が子

を含め、家で話す言語や暮らす風習と外でのそれが異なる子どもも多く、国籍はともすれば「選ぶもの」であり、その個人のアイデンティティーとは必ずしも直結しない印象を受けることが少なくない。

そんな中で読んだこの記事に、国籍って一体なんなのだろう？多文化共生ってどういうことを指すんだろう？と改めて考えさせられた。

それぞれの国には、それぞれの文化や伝統、常識が存在し、それらは長い時間をかけて培われてきたその国の人格のようなものだ。それらが混ざり合うとき、そこには摩擦が生じる。「認め合う」「共存する」とは、響きは良いけれど実際には決して易しくないように思う。

先日も、英国のテレビ局でやっていた「警察２４時」みたいなのを見ていたら、ある商店の移民女性が借金の滞納により監査と商品の没収を受けるシーンがあった。警察官は、何度も滞納の経緯と裁判所からの通達書類を提示し説明するも、この女性は激しく叫び続け、全く納得しない。仕方なく他の警官の援護を受けて始まった没収作業。それを見て女性はカメラに向かって「あいつは、このドレスを持ち去って自分の嫁とか友達にあげるつもりなのよ！」と言い放った。警官は困惑顔。それでももくもくと作業を続けた結果、挙句に女性はこの警官に殴りかかり、とうとう逮捕となってしまう。

身近でも、先日路面電車を待っていたらある移民と見られる女性が自分の乗り遅れた電車が止まってくれないことに腹を立て、ドアを強打し出した。さんざん叩いても去っていってしまう電車の運転手に向かって、彼女は「なんか食べろ！！」と叫んだ。一瞬、なんのことか分からずキョトン。聞き間違えかなと思ったけれど、彼女は確かに手を口にやりながら（食べるジェスチャーをしながら）そう叫んだのだった。

いずれの場合も、警官や電車の運転士は、両腕をあげ（まさにお手上げのポーズ）怒りの混じった呆れを表現していた。多文化環境においては、こういう体験をある特定の人種や国籍を持つ人たちと繰り返す中で、差別や偏見が「真実味をもって」広がっていくのだろうことが、実感される場面だった。

私には、その二つの場面を見ていてひろがる想像がいくつかあった。警察とのやりとりでは、もしかすると彼女の生まれ育った国では、警察などの権威は汚職にまみれているのが常であり、彼らが自分たちの生活を脅かすような行動に出たときには、全力で抵抗し（叫びまくり）守りぬかなくてはならないのかもしれない。そして、そういう場所で

は警官は本当に没収したものを家族や友人に分配するということが平気で起こるのかもしれない。

路面電車を張り倒していた女性も、祖国では食べるものが十分にないという状況が貧しさを表す指標となっており、「何か食べろ！」つまり「お前には何も食べるものがないんだろう！」というのが相手を罵倒するセリフとして成立するのではないかと想像してみたりした。

いずれにしても、そこで起こった出来事の背景にある常識（前提）の違いが、結果として大変分かりづらいコミュニケーションを生んでいたように見える。そこにあったかもしれない前提について、さまざま勝手な想像をしながら、私はそれが普段自分が臨床活動の中でやっていることにとても近いことに気がついた。聴かされる話や状況の中から、その人にとっての前提や物語を想像してみること。見えていたであろう景色に自由に思いを馳せてみること。

さまざまな困難を抱えながらも多文化共生を続けてきた欧州。そこで繰り広げられる移民議論を見ていると、異質なものを理解しようとすることの難しさや複雑さに、人がどう立ち向かうのかを見せられているように感じることがある。ある人は、「博愛でもって全てを受け入れるのが当然」といった理想主義を掲げ、日常の細かな困難については見ない（話さない）という態度をとる。またある人は、「移民はうんざりだ」と扉を閉ざし、あらゆる社会問題を移民のせいだと断じたりする。

思えばこのような反応の数々は、心理援助に携わる私たちが面接室で幾度となく出会ってきたことのように思う。家族関係、友人関係、あるいは自分自身との関係において「異質なもの（それまで意識していなかったこと）との出会い」を体験する来談者からは、実にさまざまな反応が引き出される。そこには恐怖もあれば拒絶もあり、結果としての他罰もあれば、理想化もある。それは援助者の側にもまた、仕事に対するスタンスの違いとして存在しているように思う。来談者を「守られるべき弱者」とし、博愛的な関わりをすることこそが支援であると考える人もあれば、相手を「病者」として見ることで密かに自分を守ろうとする人もいるだろう。

とはいえ、ほとんどの援助者に共通するのは実際の面接の中では来談者の話に耳を傾け、彼らの世界を知ろうと努めることだろう。彼らの持つ常識（前提）を、生きてきた歴史を、そこから見える景色を、理解しようと努力する。ときに自身の感情を大きく揺さぶられながらも、相手を断じたり目を閉ざしたりしてしまいそうになる自分を確かに感じながらも、来談者の真実に一歩ずつ近づこうとする作業。

異文化との出会いにおいて、心理援助に見られるこのような態度は、有益なものになりうるのではないかと考えるようになった。相手に対して起こる嫌悪や驚きや困惑を、否定したり無かったことにしたりしてしまうのではなく、それらに興味を持ち、相手の生きる景色に思いを馳せてみること。そして、その理解を相手と共有してみること。地道ながら、地味ながら、私たちはそれが相手への深く確かな理解を生む道であることを実感してきたのではないだろうか。そしてこの道はまさに、多文化共生に不可欠な他者理解への鍵とも、なりうるのかもしれない。

これからも益々進む国際化やグローバライゼーションの中で、心理臨床の持つ意味や価値は、社会全体にとっても大変有用で示唆的なものになるように思えてきた。

父の看取りと、私への最期の宿題「今から、ここから」

ソーシャルワーカー

馬渡　徳子

父を看取ったその日から、私は、腕時計を左手から右手に変えました。
父の口癖の「逆に」が、今後の私への宿題「遺言」のように思えたからです。

認知症を発症してからの四年半、父の口癖は、ずっと「逆に」でした。父の発言や行動が、きっと周囲の人々に度々否定されることが増えていたのでしょう。葬儀の日まで、「父は、こうして自分の尊厳を、必死で保とうとしているのかな」と、私は思い込んでいました。そのため、介護に疲れて、へとへとになっている母に、「病気なんだから、もう少しこんな風に、、、」といった、娘としてではなく、専門職としての不適切な助言？を、ついうっかりと度々返していました。新幹線に乗り換える在来線の約一時間の間に、ついさっき別れた母から「あぁあ、えらそうに。ソーシャルワーカーだか何だか知らんけど、専門家じゃなくて、近くに住む普通の娘の方が良かった。超忙しいくせに、高い交通費使って、もう、毎月帰ってこなくていいから。お姑さんにも申し訳ない。」と、くどくどと泣かれたことも。「しまった。全く母のありのままの思いに共感できていない」と、素直に自分を省みる一方で、毎月「介護の練習に行っといで」と気持ち良く見送ってくれる夫と義父母や、介護休暇をずっと継続させてくれている職場の部下たちにも申し訳なくて、情けなくて、帰りの新幹線で、涙がぽろぽろとこぼれて仕方がなかったことも、何度もありました。

いっそのこと介護に専念しようと、三年目に突入した 2014 年春に、退職願も

申し出ました。しかし、上司に「管理者たる者こそが、率先して介護休暇を最期まで取り続けるという『労働者としての権利を行使する姿』を見せて、部下を育てなさい。『ソーシャルワーカーらしく』、社会資源も沢山使って、きっと乗り切れると思うよ。綱領に、そう書いてあるでしょう。私は、そういう姿を後輩に見せていこうとするあなたを、応援したい。」と励まされ、最期まで、毎月実家に通い続け、働き続けることを貫き通すことができました。私は、このような上司と後輩、組織を、心から誇りに思っています。

葬儀の日、弔問の方々から「昔から『逆に』という言葉が口癖だった。それは、『認知を変えてみたら』という意味。それで、硬直していた課題の展開が変わった場面が沢山あった。本当に感謝しています。」との言葉を戴きました。

実家は、かつて生活困難な複数の家族に、貸間をしていました。食事時になると突然現れる新しい同居人さんたちに、「あっ、また、おかずが減る」と子どもらしくぶすっとした顔を思わずしていた自分を、今でも覚えています。その方々から、「あなた方のご両親に、幾度かの生活の危機を助けてもらいました。窮地をしのぎ、ようやく次の目途が立ち、貸間を出るときに、お餞別に添えて『大丈夫。前を見て。不幸な出来事だったけど、「逆に」過去が無駄になることは何もない。』とお声かけ戴きました。」との内容のお手紙も戴き、「えっ、『逆に』は、昔から？　ああ、そういうことだったのか」と、ようやく合点がいったのです。

この「『逆に』と認知を変えて、違う見立てに出会ってみる」という発想の転換は、ふりかえると、正に「認知症の人と家族の会」の皆さんより学んだことでもありました。どんな場面にこの発想を活かすことができたのか、心よりの御礼の気持ちを込めて、「当事者団体の持つ力」と、そして「家族システム論を学び続けてきた効果」についても、四回に分けて、ご報告申し上げたいと存じます。

2010 年の秋、母から「父の変化」を伝える連絡を受けました。翌年の夏に、初孫の結婚式に参列することを、本当に楽しみにしていた父。「警察と救急車のお世話」になることが増えたというのです。同居の孫に、発達障害があり、目が離せないので、母はお先真っ暗になっていました。生涯の 40 年以上を、諸外国に単身赴任していた父は、ジェントルマンで、いつもニコニコと穏やかで、70 台半ばで会社の役職を完全に引退してからは、地域活動やボランティア活動を精力的に行い、きっかけは障がいのある孫のためでしたが、地元でもいち早く「子ども見守り隊」を結成していました。そんな父が、段々と人が変わったように性格が鋭く、攻撃的になっていったのです。一日三回の大量の内服薬が、気にはなりましたが、父と同い年ぐらいのかかりつけ医がいて、母も気兼ねなく様子の変化を詳しく伝えながら、父も機嫌よくお付き合いをしていました。

そこで、とりあえず、翌年の春まで、地域包括支援センターの保健師さんに

「父のエコマップ（人や機関との関係性の構造図）」を手渡し、ご近所さんで親切な方、派出所の警察官(親戚)、取引銀行・農協・郵便局、コンビニの店長さん、民生委員さんに、「さりげない見守りと母への変化のご報告」をお願いし、同じく県外にいる弟夫婦と、毎月一回ずつ帰省して様子を観る事にしました。 帰省中には、やがてデイサービスに通う予行演習ができるように、私たちも、地域交流会(地域サロン)に参加して、改めて顔なじみの関係を作れるようにしました。弟夫婦と、今度はどんな小洒落たお土産にするかと競い合い（笑）、地域の老人会の皆さんが毎月喜んでくださり、父が誇らしげな顔をするので、これまた帰省の楽しみの一つとなりました。父は、後に、いつも自分を保護してくれる派出所とコンビニのレジ横に、「私と友人の共著本」を、せっせと飾るようになりました。どんなルートで手に取られたのでしょうか。一通だけ特別支援学校の教員さんから、「あなたは、私の親の教え子です。進行の早い難病と闘っていますが、生きていて良かったと、本当に喜んでおります。」とのお手紙を戴き、早速、帰省中に、先生の元へ、お見舞いとお礼に訪ねさせて戴きました。本当に、びっくりポンでした。

この頃より、私は当事者の一人として、また私が担当させて戴いている家族の方と共に、「認知症の人と家族の会」の例会に、時々参加していました。その時に、参加者の皆さんや事務局の方々から、「絶対に専門職からは発想できない当事者ならではの対処法、沢山のヒント」を戴き、折に触れ、それをあれこれと一つ一つ試していくことができました。

その年は、2011 年。東日本大震災の年でした。迷子になったり、コンビニの商品を拝借したり、気を失って大怪我をして倒れて搬送されたりといったエピソードが相次ぎました。洋服やら、食料品、日用品を沢山買い込んで、二階の父の二部屋は、物でいっぱいになっていきました。例会で、「母が、『警察官の親戚が多いのに、恥ずかしい』と泣くの」と愚痴をこぼすと、「あら、警察官が親戚で良かったじゃない」と、さらっと返され、「本当だ。これって、『逆に』強みじゃん。」と元気が出ました。毎月、帰省すると、必ず父の行動範囲の変化を確認するために、父と散歩をしていました。その時に、お寺の和尚さんから、「お父さんがね、私が東日本大震災の翌日に寺の黒板に『生きているだけで、大体オッケー。BY マギー司郎』と書いたその日から、時々綺麗な花を生けて下さるようになりました。登下校の子どもたちに向けたメッセージを、意識的に書いていたのですが、残念ながら反応がなかった。けれど、花が生けられるようになってから、子どもたちも、たまに花を生けてくれるようになった。今は、『徘徊とは言わずに、自由な外廻り』って言うんですよね。いいねえ。フーテンの寅さんみたいで。幸せを運ぶんだなあ。」という話を聴かせていただきました。私は、それから自分の担当させていただく利用者さんのケアプランには、「自由な外廻り」

と表現するようにしています。

また、父がせっせと溜め込んでいた二階の「お宝」が、『逆に』地域のお役に立てる機会もありました。2014 年の夏、実家も床上浸水しました。町に一軒ずつしかないコンビニとスーパーも浸かりました。父と障がいのある孫には、避難所生活は無理だろうなと心配で駆けつけた時、「ああ、今こそ地域にお返しができる」と思いつき、父がせっせと二階に溜め込んだ「高カロリーの栄養補助飲料」や日用品を、ご近所さんに、父と一緒に配ることができました。父は、そ地域の役職時代を思い出したのか、とてもニコニコと嬉しそうでした。

この日、担当のケアマネジャーさんより、「父と障がいのある孫の二人を、ショートステイに」とのご提案を戴きましたが、丁重にお断り致しました。実は、毎年恒例の私の勤務先での、「認知症の人の理解と対応についての学習会」の企画に、偶然前日に、県の支部長さんをお招きしていました。そのお話の中で、「どんなに認知症状が進んでも、何もできなくなった人のように接しないで。昔培った能力は、意外と発揮できるんですよ。真面目なので、二つ以上のことはできませんが、一つのことは集中力がありすぎるくらいできます。疲れに気付けないので、頃合をみて止めても欲しいのですが(笑)、どうか、生活史をしっかり聴いて、身につけた能力を、活かせる場面を意識的に作って欲しい。」との言葉が思い浮かんだのです。「ああ、ここで活かさなきゃ」と思い、父にはコツコツと水に浸かった本などを、しっかりと紐で縛り付ける役割をお願いしました。父から、子どもの頃に、上手な荷物の縛り方を教えてもらった記憶があったのです。正解でした。一緒に駆けつけてくれた私の夫や弟夫婦が、目を見張るほどでした。早速、このいきさつを支部長さんに、ご報告申し上げました。

改めて、「支援され続ける人をつくるのが、本当の支援ではない」と、自分の実践をも、素直に振り返る機会となりました。

次回は、「素敵な先生たちとの出逢いと、新たなつながりをつくる」に、続く

東成区の昭和・思い出ほろほろメモ

絵と文　白鳳短期大学非常勤講師（マンガ家）柳たかを

サバイバル

日本画家の父は、長屋の四畳半の自室で早朝に起き、玉露を飲み、絵を描き、夕食前に手酌で一合の日本酒を楽しむ人だった。

僕は将来マンガ家になると決めていたが、父から「マンガ家なんか！」と非難めいた小言を言われたことがない。

絵筆1本で家族を養わねばならないと考える父は（実際は母が働きに出て家計を助けていた）、生活のための商品絵を“パン絵”と呼び、展覧会へ出品する出品画と区別していた。

出品画は大作（300 号）で、絵の具・銀箔・金箔など材料費がバカにならない。

制作中は“パン絵”を休むので、結局母の稼ぎが頼りだった。

父は戦後 10 年間、ベビーブーム世代の子供が使うランドセル・筆箱など学用品にイラストを描く内職をした。

忙しくて手伝いを数人雇うほどだったが、大量の商品に同じ絵を延々と描き続ける単調な仕事は父には無理だったようだ。

悩んだすえに画家復帰を賭け、所属団体（青龍社）の戦後第一回展に出す 300 号を制作し始めた昭和 33 年春、9歳の僕が大病で寝込んでしまった。

生活と作品制作、そして大病する子供、幸い展覧会には入選でき、僕も高価なペニシリンのおかげで命拾いした。

こうしたいともがけるあいだは、恰好わるくても少しずつ前進できる。

もがき続ければ道は徐々に開けていくのではないだろうか。

そんな思いでいた時期に描いたのが今回の連載です。

やぶにらみ日記

New! 東成区の昭和(30)

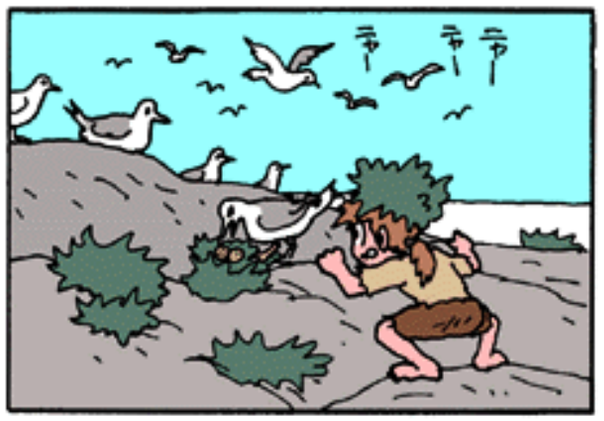
New! 東成区の昭和(29)

やぶにらみ日記

New! 東成区の昭和(31)

やぶにらみ日記

New! 東成区の昭和(32)



やぶにらみ日記

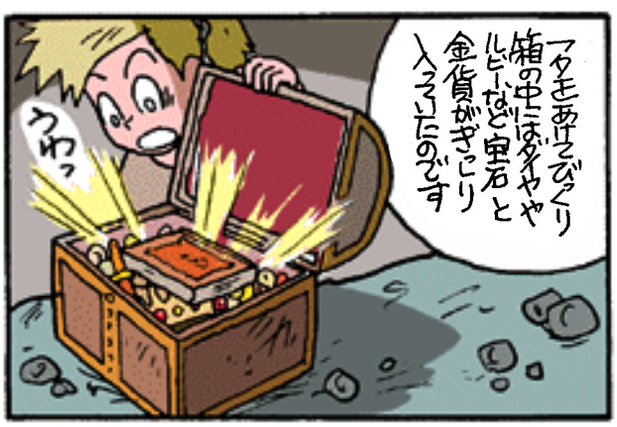
New! 東成区の昭和(34)

New! 東成区の昭和(33)

やぶにらみ日記

New！東成区の昭和(36)

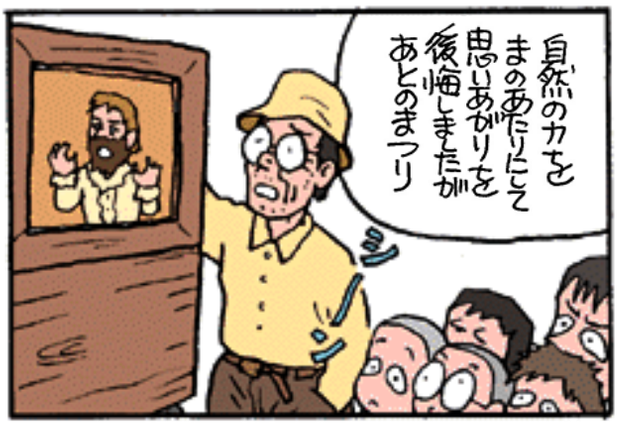
New！東成区の昭和(35)



やぶにらみ日記

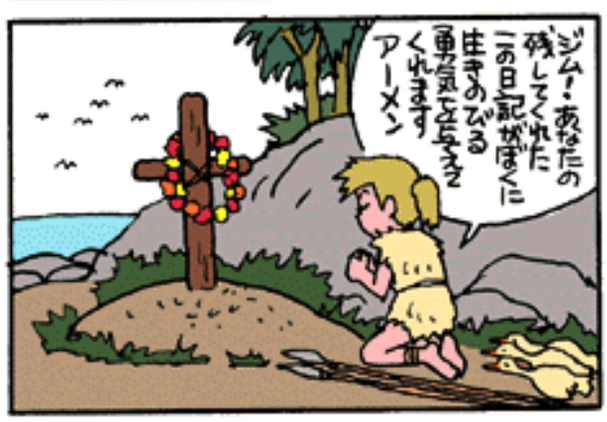
New！東成区の昭和(38)

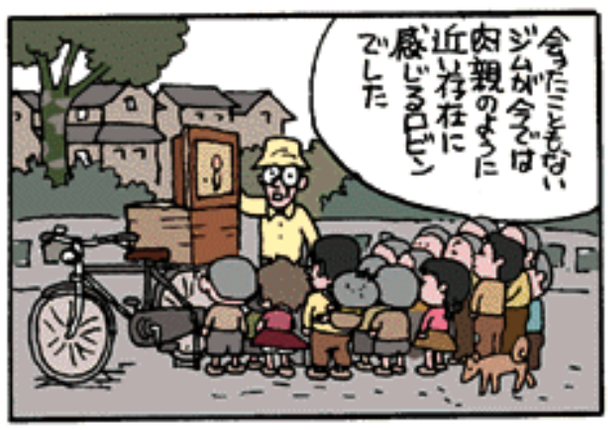
New！東成区の昭和(37)



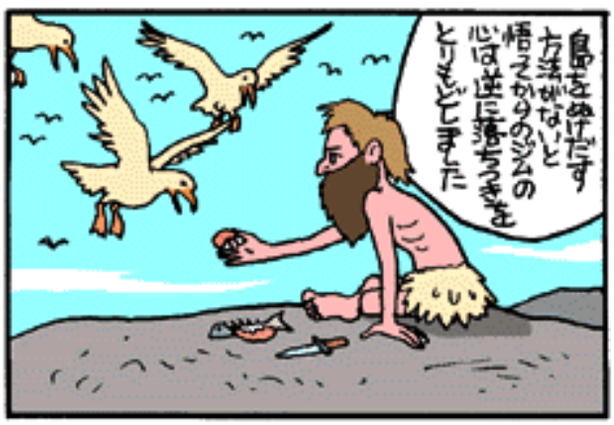
やぶにらみ日記

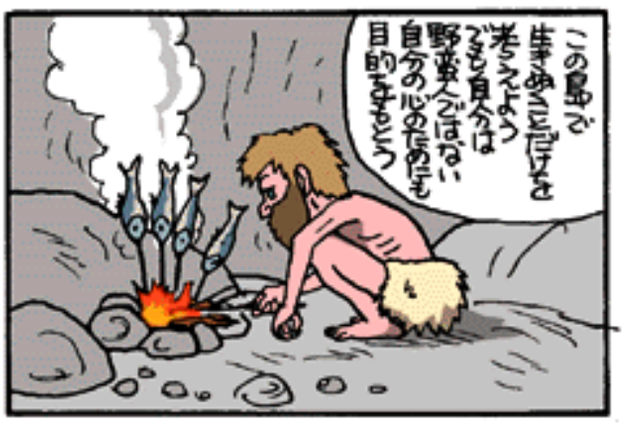
東成区の昭和(40)





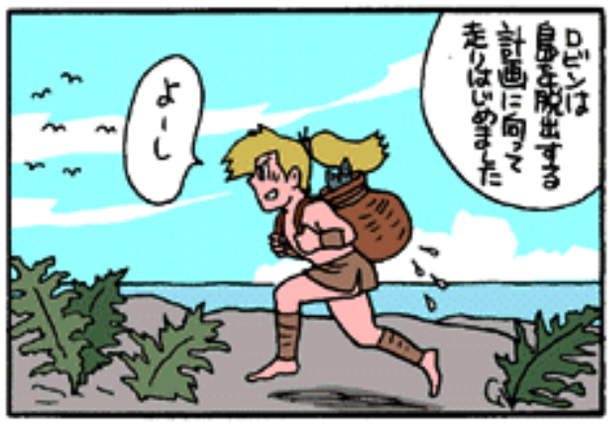
New! 東成区の昭和(39)

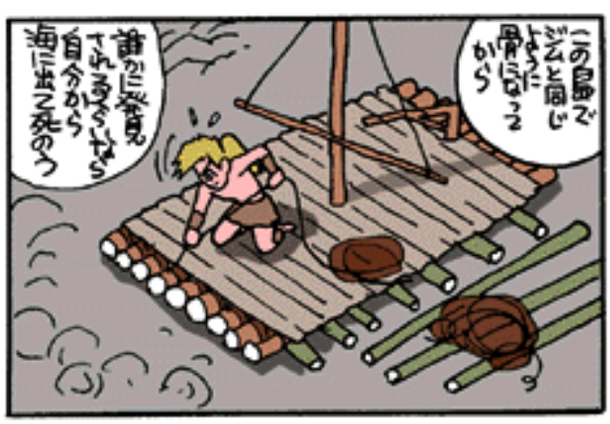


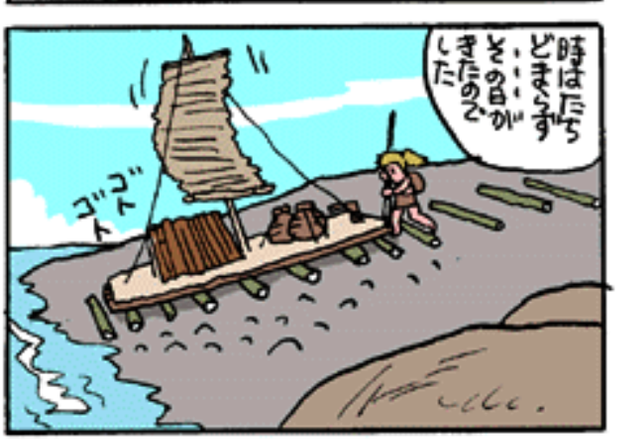


やぶにらみ日記

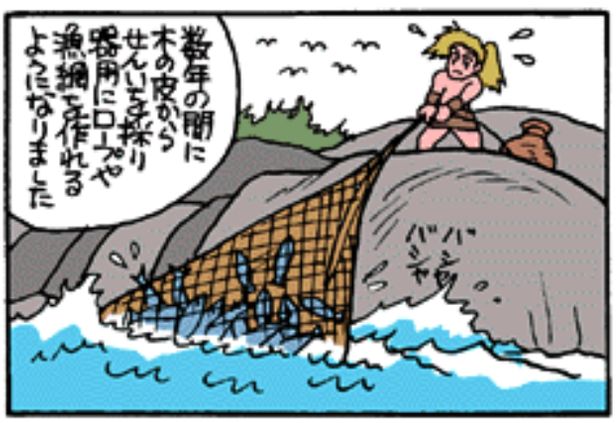
東成区の昭和(42)







東成区の昭和(41)



編集後記

編集長（ダン　シロウ）

第25号（第七巻　第一号）が予定通り発行です。今号から目次が2頁になりました。1頁に収めるのが窮屈になってしまったからです。現在、256 頁。さぁ、これでドンドン執筆者が増えても余裕です。七年目に入って、ますます元気に拡大してゆくことを願いつつ、次の区切り 50 号を目指します。

その時私は、75才を越えていることになります。やれる間は続けたいと思いますが、永遠は何事にもないので、編集者の次世代育てもスケジュールの内と考えて千葉編集員、大谷編集員の二人に尽力して貰っています。

いつも執筆してくださる方々には、季刊というペースの思いがけない早さを実感しておられるだろうなぁと気遣いながら、感謝に堪えません。

マガジンからの発信が、どんな役割を果たしているのか、一口では言えませんし、決めつけたくもありません。時と共に、その意味が世の中に伝搬していっていることを、私は疑いなく信じています。様々な分野での人の営みを、短いニュース、情報としてではなく、じっくり書き込んだ記録として世の中に提示し、残し続けていきます。

まだ今は、何処かで起きていることを文字に記録しているニュアンスが強いでしょう。しかしやがてこのマガジン自体が、この時代の出来事そのものになってゆくのではないかと思っています。

今号から又、複数の新規執筆者が登場です。読者の皆さんも、ご自分のフィールドの記録者として、参加を検討されてはいかがですか？

編集員（チバ　アキオ）

10年以上かかわっている職場が大きな節目を迎えた。重要ポストの職員配置が代わったのである。世代交代ともいえるが、少なくとも私が今まで思っていたような世代交代ではないように感じている。現在、現場の日々のマネージメントをしているのは20代女性。そして、そのマネージメントのもとに動いているのが40代～60代のスタッフである。

これを可能にするのは「イジワル心」の払拭・打破である。自分がした苦労を他の人がしないのは腹が立つ！だから、私が苦労をさせてやる！まだ若いんだから私がしたような苦労を君がするのは当たり前だ！というような心の動きである。

こういったイジワル心を自分が持たないためには工夫がいるように感じている。イヤイヤしていること、我慢をしていることを自分が自分自身に増やさないという注意である。成長のためにも、仕事をしていくためにも、全くのゼロにはできないだろう。しかし、そういう気持ちが自分の中にどのくらいあるのかを知っておくこと、このことには敏感でいるよう心掛けている。

現在、真ん中のポストを若い世代が担っている状況で、若い世代ががんばっているから自分たちも頑張ろう！若い子の役に立とう！自分も真ん中の苦労を知っているから、だからこそ足を引っ張らないようにしよう！という職場の雰囲気がある。職場を長期的にみてきた境遇のものからすると、この緩やかな良循環は、なかなか起こせることではない。多分私が一番骨身にしみて、わかっていることではないかと思う。

良循環は継続させる、この時には現状維持というのも、大切な選択になってくる状況である。とはいえ、あらゆる側面が良循環であるわけはなく、同じ土俵の隣りの幕では大切な「ゲーム」を同時に行っている。その時にはあらゆる事象を駆使し用いますよ。そんなことを感じながらの編集作業であった。

編集員（オオタニ　タカシ）

今号から新連載 4 本がスタートします。その中の1本の執筆者ガヴィニオ重利子さんはスイスからの執筆です。対人援助学マガジンでは、今までででも遠く海外から連載して下さっている方が複数おられます。浅野貴博さんの「Journey to my Ph.D.」はイギリスから、石田良子さんの「海の向こうを見てみ

れば」はマレーシアのクアラルンプールでの執筆でした。遠く海外からでもメールに原稿を添付すれば、届くまでの手間も時間も、国内と何ら変わらない。これも Web マガジンの力です。ガヴィニオさんは、一時期同じ職場で同僚として働いた方。縁あって、10 数年を経てまた同じ舞台でご一緒できることを幸いに思っています。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８

ランブラス二条御幸町４０２　仕事場 D・A・N

対人援助学マガジン

通巻25号

第7巻　第一号

２０１６年６月１５日発行

http://humanservices.jp/

第26号は2016年9月15日

発刊の予定です。

原稿締切2016年8月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今日記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数（ずっと・・・というのもありです。多くの方達が連載 7 年目を迎えています）を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。まだ登場していない、対人援助領域からの参加を求めます。

対人援助学会事務局

〒603-5877　京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021　大阪市中央区大手通 2-4-1

リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

映画「陽のあたる場所」（１９５１）は、青春ドラマとして、苦く哀しい物語だ。石川達三著「青春の蹉跌」はこの映画の原作「アメリカの悲劇」の翻案小説らしい。日本映画「青春の蹉跌」も苦しい作品だった。

貧困からの脱出を望み、チャンスをつかみかけたとき、邪魔になる過去。妊娠したと訴え、追ってくる彼女を、男はボートに誘う。

私はこの映画のことを、家族療法学会誌の連載「連想映画館」に書いたことがある。イラストはその時使用したものに彩色したものだ。

いま又、貧困が時代の話題に上る。そうなると、こんな青年期の出来事も復活してくるのではないかと思ってしまう。

2016/05/25　団士郎

対人援助学会第 8 回年次大会（＆第 7 回ヒューマンサービス研究会）（素案）

大会テーマ　「**人間の尊厳と対人援助**」

9 月 24 日（土）

1　理事会　11:30~12:20　大教室（昼食をとりながら開催）

2　基調講演　12:30~14:00　講堂
東京大学名誉教授　村上陽一郎　「人間の尊厳と対人援助」（12:35~13:35）
村上陽一郎氏へのインタビュー（インタビュアー：本学・臼井正樹）（13:35~14:00）

3　研究報告　14:10~15:50（20 分×5 報告：2 教室使用予定）（1 教室は対人援助学会として使用し、もう 1 教室はヒューマンサービス研究会として使用。発表数が多い場合は、さらに教室を用意。）

4　企画ワークショップ 1（2 教室使用）
企画ワークショップ①　16:00~17:20
企画ワークショップ②　16:00~17:20

5　会務総会　17:30~17:50　大教室

6　懇親会　18:00~19:00　食堂 2 階

9 月 25 日（日）

1　ポスター発表　9:00~10:00（多目的実習室 B（A406））

2　企画ワークショップ 2（2 教室使用）
企画ワークショップ③　10:10~11:40
企画ワークショップ④　10:10~11:40

3　理事会企画シンポジウム　12:30~14:30（大教室使用）

4　閉会（理事会企画シンポジウムに引き続いて閉会）

（注）

① 9月24日（土）の基調講演、懇親会はヒューマンサービス研究会としてのプログラムとする。ただし、対人援助学会のメンバーも参加可能なプログラムとして整理する。(「基調講演」は、保健福祉大学としての公開講座を兼ねる予定)

② 9月24日の理事会については、参加者に対し昼食を用意。

③ 9月24日の研究報告は、ヒューマンサービス研究会、対人援助学会の関係者全体で10本を予定。報告数が想定と異なる場合には、使用教室数、時間帯等を修正。

④ 9月24日の懇親会は、一人2000円会費を想定。

⑤ 9月25日のポスター発表については、1時間で設定。ポスター発表が多く、前年と同様に1時間30分で設定する場合は、以降のプログラムを30分後へ移行。

⑥ 企画ワークショップは､24日2本､25日2本の計4本を想定｡本数が多くなる場合は、会場を追加するか、その後のプログラムを繰り下げることとする。

⑦ 対人援助学会の参加受付は、研究報告以降の参加者に対して行う。

上記のような枠組みで開催案内を行い、研究報告者、ポスター発表者、企画ワークショップ参加者を募り、第8回年年次大会の準備をスタートさせることとしたい。

神奈川県立保健福祉大学　臼井正樹